

無限の世界と交錯する 世界

黒矢

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

インフィニット・デンドログラムのアニメ化にテンション上がった作者が好き勝手書いた中短編集です。

お納めください。

※この小説は小説家になろう、で掲載中の「Infinite Dendrogram」を原作とした二次創作小説です。

※誤字脱字、ミスなどを発見した場合、指摘してくださると幸いです。

※この小説には嘘予告が含まれます。

※この小説にはクロスオーバーが含まれます。

※この小説には嘘予告が含まれます。

※この小説にはクロスオーバーが含まれます。

※この小説には多くの捏造設定と原作改変要素が含まれる予定です。ご了承ください。

※それでは、どうぞよろしくお願いします。

※この小説は一部、作者がノベルアッププラス、並びにツイッターで投稿した作品と重複する話があります。

現時点のクロスオーバー先

× 「SCP | foundation」

× 「シヤングリラ・フロンティア」くソゲーハンター、神ゲーに挑まんとす」

× 「勇者互助組合 交流型掲示板」

目次

SCP—10106—JP 無限の系統

樹

SCP—10106—JP 無限の系

統樹

1—1、||……? 34

セキュリティクリアランスを提示して

ください 55

Superior Calculat

ion Pioneer 81

海、それは■の縄張り 94

あるいは不幸中の幸い 107

突発的危機誘発性遊戯 125

友達が多い方がよいよねというお話

143

《物皆遍く供贄の輩》 160

——“不屈”—— 185

セキュリティクリアランスを 204

—— 204

【精神赫鳥 エゴ・フレイドー】／【腫

智肉輪 アルコーン・セプテム】

221

「データ削除済み」 245

無限の世界の備忘録

エアバードの場合／天に声は届かな

い 266

	アルファの場合／それでも僕は世界に 臨む	289	語・序章：前編	505
	来栖恋也の場合／燃え上がる様な		ザ・キングの場合／とある異邦人の物	
	―・FBI Mの場合／大焦熱地獄		語・序章：中編	520
318			ザ・キングの場合／とある異邦人の物	
	セイレンの場合／彼の流儀	349	語・序章：後編	539
	シファイル・ワルツの場合／空をこの手 に	381	ザ・キングの場合／彼は《 ■ ■ ■ 》	577
419	李縁の場合／とある【聖騎士】の戦い		前編	
	アイの場合／私の形・前編	461	ザ・キングの場合／彼は《 ■ ■ ■ 》	609
	アイの場合／私の形・後編	483	後編	
	ザ・キングの場合／とある異邦人の物		コールの場合／天は二物を与える：前 編	633
			コールの場合／天は二物を与える：後 編	652

アウエラ・フランソワーズの場合／書を
を開き、頁を捲り、物語を読もう

678

御剣刹那の場合／嗚呼修羅道

689

無限の世界と交錯する世界

狼剣誅す緑の害竜

713

退役勇者板「かがくのちからってす

げー！」

746

退役勇者板「かがくのちからってす

げー！」：後半

782

SCP-10106-JP 無限の系統樹

SCP-10106-JP 無限の系統樹

アイテム番号： SCP-10106-JP

オブジェクトクラス： Euclid

特別收容プロトコル： 全世界に広範に周知されてしまっている為、SCP-10106-JPは完全に收容できない状態にあります。

SCP-10106-JPの收容とSCP-10106-JP-B群の活動遅延の為にプロトコル“F5”を用いて財団所属の人工知能群によってハッキングを行ない、SCP-10106-JPの存在するデータサーバーの特定と攻撃の試みを行ってください。このプロトコルは破棄されました。

財団の極秘機密の漏洩に繋がる可能性が高い為、SCP-10106-JPに関する試みはすべて財団のインターネットとは完全に切り離された方法で行われます。

また、後述する報告書を除き財団の所有するあらゆるインターネットにおいてSCP-10106-JPに関する言及を禁じます。

この報告文書は財団所定の書式に従った手書きの報告書と研究主任が管理するスタ

ンドアロンデスクトップパソコン内にのみ保存してください。

更に、SCP—10106—JPの担当職員は以後、他のSCPと財団の所有するあらゆるインターネットとの接触が禁じられます。

SCP—10106—JP—Aに接続し、SCP—10106—JP—Cを創出した担当職員は以後、他のSCPと財団の所有するあらゆるインターネットとの接触が禁じられます。

SCP—10106—JPの担当職員は最低でも毎週一度はSCP—10106—JP—A内部に関する手書きによる報告書を提出する事を義務付けられています。

SCP—10106—JPの完全な収容と更なる異常特性の解明の為に過去にレベル3以上のセキュリティクリアランスを保有していた経歴のないレベル2以下のセキュリティクリアランスによる担当職員が割り当てられ、財団に関するあらゆる情報と切り離されたインターネットを通じて仮想世界没入デバイスを用いてSCP—10106—JP—A内部の探索が続けられます。

また、SCP—10106—JPで発生する“イベント”の確認の為、常に最低5名の担当職員がSCP—10106—JP—A内部に配置されます。

SCP—10106—JPの実験に使用されたDクラス職員はSCP—10106

—JPCに関する財団職員による定期的な観察を受けなければならない為、SCP-10106—JPの完全な収容まで終了措置が延期されます。

レベル3以上のセキュリティクリアランスを保有する財団職員がSCP-10106—JPAに接続する事は財団の重要機密漏洩の危険がある為原則として許可される事はありません。

レベル3以上のセキュリティクリアランスを保有する財団職員がSCP-10106—JPAに接続する場合は担当職員3名以上の承認を得る事が義務付けられます。

また、オブジェクト出現時の一般利用者の混乱を最小限にする為にカバーストーリー「時代を先取りし過ぎたゲーム」を適用しています。

カバーストーリーの適用は財団に関するあらゆる情報から切り離されたインターネットを通じて人工知能群によって行われます。

更に、SCP-10106—JPA内での「イベント」の進行に合わせて研究主任の指示によってプロトコルの制定を行い、長期的にSCP-10106—JPAより一般利用者を遠ざけてください。

説明： SCP—10106—JPは一般に??????.
 インロールプレイングゲームとそれを取り巻く事象群です。???????

このダイブ型オンラインロールプレイングゲームの総体である仮想現実SCP—10106—JP—Aと定義され、指定の仮想世界没入デバイスによりSCP—10106—JP—Aに接続されます。

仮想世界没入デバイスは現在異常特性は確認されていませんが後述するSCP—10106—JP—B群による異常特性により作成された可能性が否定できない為、現在も調査を続けています。

SCP—10106—JP—A内部は時空間異常とそれを含む認識異常が発生している仮想現実です。

仮想現実としての評価は現行のあらゆる企業が開発している仮想現実と比べても高く、そのリアリティに違和感を感じる事はありません。

ただし、この仮想現実に関する評価は現行の開発されている仮想現実と連続性がある物であり、財団所有の人工知能でシミュレートしてみた所、限定的ではあるものの再現が可能だった事から異常特性とは認められません。

SCP—10106—JP—A内部で生じる時空間異常は、SCP—10106—JP—Aに存在する利用者が未知の手法で時間認識が拡張され、基底現実における時間感

覚の3倍の時間を体感します。

また、仮想世界没入デバイスに搭載されている機能を用いる事でSCP-10106-JP-A内部の動画記録を基底現実に出力する事が可能ですが、この際時間認識の拡張は発生しません。

SCP-10106-JP-A内部で生じる認識異常は、後述するSCP-10106-JP-2群によって引き起こされます。

SCP-10106-JP-Aに存在する利用者がSCP-10106-JP-B群に与えられた選択肢から選ぶ形式を取り、未知の手法で利用者ので視覚と痛覚、そして聴覚の認識が改変されます。

この際、視覚の選択肢は“現実描写” “CG描写” “アニメーション描写”の三択であり、担当職員から“CG描写”と“アニメーション描写”を選んだ際、極僅かではあるが他の感覚との差異が報告されています。

担当職員はこの視覚の認識改変の暴露を避ける為に実験の際を除いて必ず“現実描写”を選択してください。

また、SCP-10106-JP-A内部で利用者が発言するあらゆる言語は未知の言語に置き換わります。

この未知の言語を利用者は違和感なく理解する事ができる様になります。

研究班の解説の結果、この言語の解説は完了しています。別紙の資料10106—JP—σを参照してください。

現在、このSCP—10106—JP—Aに対する接続に対するあらゆる制限は機能していない状態にあります。

SCP—10106—JP—Bは、SCP—10106—JP—Aを管理運営していると見られている人工知能群の総称です。

その所属と起源は不明ですが、財団の既知の人工知能と比較しても非常に高いパフォーマンスを有しており、場合によっては人間的な思考も可能である事が確認されています。

現在SCP—10106—JP—B群と接触し、唯一帰還した財団所有の人工知能によつて15体まで確認が取れています（SCP—10106—JP—B—01→15とします）。以下に特徴を表記します。

01:???.???.???.???.を名乗る人型の存在。SCP—10106—JPの開発責任者を自称している男性の存在。

全世界にSCP—10106—JPに関する広告を行った存在であるが、現実世界に

において身体的特徴の一致する人物は発見されていない。

02:10代後半の女性に見える人型の存在。口調や性格は穏やかな物の様に感じられる。また、対話の中でSCP-10106-JP-A内部での痛覚異常を引き起こしていると自称している。

03:卵の殻に似た楕円形の半透明な膜に覆われた10代後半の女性に見える人型の存在。SCP-10106-JP-Cを管理していると自称している。

04:20代の女性に見える人型の存在。その身体には所々動物の物と思われる特徴が伺える。

05:白衣を纏った30代の男性に見える人型の存在。SCP-10106-JP-B-04と同様に身体に動物の物と思われる特徴がある。

06:浮遊する球体が四つ連なった形状をした存在。人工知能であるからか、形状と対話・感覚能力に不備はない様に感じられる。

07:20代の男性に見える人型の存在。收容記録10106-05において、SCP-10106-JP-B群との交渉の際に率先して対話が行われた個体の一体である。

08:喪服を着た20代の女性に見える人型の存在。常に何らかの処理を並行して行っているらしく、会話は断続的。対話の中でSCP-10106-JP-A内部での

視覚異常を引き起こしている事を自称している。

09：目測で1mを越える巨大な齧菌類に見える存在。一般的な体系と比べて肥満体系である様に見える。

10：奇妙な色彩の紳士服を着た20代の男性に見える人型の存在。言葉を伸ばす独特なイントネーションを用いる。

11：質量が可変（最大質量不明）な円柱型をした存在。SCP-10106-JP-B群の中で最も機械的かつ攻撃的な存在であり、SCP-10106-JP-B群との対話の際はSCP-10106-JP-B-11は除外されました。

また、収容記録10106-01504において財団の部隊を攻撃したのがこの個体であると他のSCP-10106-JP-B群による発言がありますが、その際の記録はすべて喪失している為詳細は不明です。

12：眼鏡を掛けた10代前半の男性に見える人型の存在。基本的に常にSCP-10106-JP-B-13と行動を共にしており、双子の兄妹であると自称している。

13：サイズの合っていないヘッドホンをした10代前半の女性に見える人型の存在。常にSCP-10106-JP-B-12と行動を共にしており、間延びした口調をしている。

14：服を着た二足歩行をする兔に見える存在。対話の中でSCP-10106-J

P-A内部での時空間異常を引き起こしている事を自称している。

15: 服を着た二足歩行をする猫に見える存在。收容記録10106-05において、SCP-10106-JP-B群との交渉の際に率先して対話が行われた個体の一体である。

各存在は人工知能でありながら各々が確かな自意識と自己同一性を保有していると考えられます。

詳細に記述されている様にそれぞれが得意とする分野を違えているらしく、またSCP-10106-JP-B群が協力し連携し合う事で能力を更に向上させているのではないかという事が指摘されています。

SCP-10106-JP-B群は基本的に利用者が最初にSCP-10106-JP-Aに接続した際に行われる“チュートリアル”の場面のみ出現が確認されています。

この際、基本的に利用者一人につき一体のSCP-10106-JP-BがついてSCP-10106-JP-Aの説明とSCP-10106-JP-A内部で利用者が使用するキャラクターの作成や視覚改変の有無が問われます。

この“チュートリアル”の際に出現するSCP-10106-JP-BはSCP-10106-JP-B-02とSCP-10106-JP-B-12と15の

みとなります。

また、この時SCP—10106—JP—B—15が出現する確率は60%を越えている為、その選出には何らかの恣意的な理由があると考えられています。

SCP—10106—JP—B群は基本的にはSCP—10106—JP—A内部で活動しています。しかし、外部からSCP—10106—JP—Aに対してハッキングやサイバーテロを含んだ電子的攻撃がされた時、SCP—10106—JP—B—1が外部のインターネットに出現し、「削除済み」。

また、SCP—10106—JP—B—15を代表としたSCP—10106—JP—B群がインターネット上のSCP—10106—JPに関する言及を閲覧しているという発言がなされ、後にそれが確認されています（収容記録10106—05参照）。

SCP—10106—JP—Cは、仮想現実であるSCP—10106—JP—A内部で創出・生成される未知のオブジェクトです。

“チュートリアル”の際にSCP—10106—JP—Bの一体から利用者へ移讓が為され、SCP—10106—JP—A内部で利用者に寄生する形で存在しています。

移讓が為されてから“チュートリアル”を完了し、実際に創出されるまでSCP—1

0106-JP-A内部の時間で数十分から最大168時間程度の時間が必要です。

SCP-10106-JPの利用者一人につき一つ生成され、利用者のパーソナリティによってSCP-10106-JP-A内部での形状や能力が決定されます。

その性質から現在のSCP-10106-JP-Cの総数は概算で約??個だと考えられています。

この際の形状は大きく分けて五種類、細かく分けて八種類存在すると見られていて、この形状次第ではSCP-10106-JP-Cとの対話を主とした意思疎通すら可能です。詳細は別紙の資料10106-JP-εを参照してください。

SCP-10106-JP-Cの異常特性はこの利用者のパーソナリティを未知の手段により読み取る事と人工知能の枠を超えた意思疎通が可能な新たな知性の創出にあります。

意思疎通が可能なSCP-10106-JP-C個体にインタビューを行なった結果、SCP-10106-JP-C個体は未知の手段によって該当する利用者のパーソナリティを把握する為に利用者の記憶を参照しているという事が判明しました。

この記憶の把握はSCP-10106-JP-Cが創出されてからも有効ですが、記憶処理が行われた記憶の確認は不可能であるという事が確認されています。

以下は当該オブジェクトに関する記録の抜粋となります。

収容記録 10106-01

名称：収容記録 10106-01-1

概要：SCP-10106-JP、及びSCP-10106-JP-Aは20??/7/15に全世界のメディアやネットワークに一切の露出がないまま発売の発表がなされた事で財団の注目を引きました。

即座に財団の情報処理班によって情報の特定と隠蔽が開始されましたが、試みは失敗に終わりました。

その報を受け、初期収容の為財団のエージェントによるSCP-10106-JP-Aとの接続及び探査がなされ、その異常特性が把握された事でオブジェクト認定を受けるに至りました。

収容記録 10106-02

名称：収容記録 10106-02-1

概要：20??/07/15の13:30頃、初期収容（収容記録 10106-01）の失敗を受け、既に一般に広まっている危険を鑑みて機動部隊きー5（“電網部隊”）と

財団が所有する人工知能群によるサイバー攻撃を含んだ強硬的手段による收容が試みられました。

しかし、財団部隊からのサイバー攻撃が始まった瞬間、人工知能群よりインターネット上にSCP-10106-JP-Bが出現したとの報告（おそらく、SCP-10106-JP-11であると考えられる）される。

直後、人工知能群は「検閲済み」。同時に機動部隊きー5の使用していた財団所有のデータサーバが？破壊される事態を招きました。

收容記録10106-05

名称：收容記録10106-05-04 インタビュー記録10106-02-04

概要：20??/07/15の17:00頃に行われたSCP-10106-JP-B

群との対話

対象：SCP-10106-JP-B-02とSCP-10106-JP-B-12と15

インタビュー：エージェント・??

付記：收容記録10106-05-01 インタビュー記録10106-02-01
から続くインタビュー。

財団により可能な限りのSCP-10106-JP-B群との会話を要請され、

”

「チュートリアル」の場で対話が行われている。

SCP—10106—JP—B群は収容には非協力的ではあるものの、友好的な態度を示している。

エージェント：??：それでは、どうしてもSCP……
 ????????
 ????????
 の自発的な収容は認められないという事でしょうか？

SCP—10106—JP—B—07：はい、申し訳なく思いますがその通りです。私達にも果たさなければならぬ事があります。

エージェント：??：分かりました。ありがとうございます……それでは、その果たさなければならぬ事、という事についてお聞きしてもよろしいでしょうか？

SCP—10106—JP—B—15：あー、ごめんねー。流石に詳細は教えられないかなー。でも、〈マスター〉(※1)の現実での生命は決して危険な目にはあわせない事は保障するよ。それは間違いない。

(※1 SCP—10106—JP—A内部での利用者の名称です)

エージェント：??：詳細ではなくとも、簡略な物でも結構です。それにしても、後遺症は全くないのですか？ この技術は現世代の技術と比べても非常に高い物の様に感じられます。

SCP—10106—JP—B—15：あ、ごめん。生命には間違いなく危険はない

筈だけれど、精神については……リアル過ぎる事による現実的な影響がある事は否定できないかな。

それと、簡単な目的か、うーん（SCP-10106-JP-B-15の後方、SCP-10106-JP-B群よりも更に後方に視線を投げかける）

そうだね。とりあえず今の目的は問題なく……を運営進行していく事で間違いない筈だよ。

エージェント……それはつまり、
 ???????
 ???????
 を運営する事で其方に何らかの得がある、という事でしょうか？

SCP-10106-JP-B-07：申し訳ありません。この件に関しては現時点ではそれ以上は言う事はできません。

SCP-10106-JP-B-15（ふ）めんねー。へマスターとしてこの世界に来てくれたら絶対歓迎するからー。

エージェント……いえ、返答ありがとうございます。

事案記録10106-02

名称：事案記録10106-02 実験記録10106E-03

概要：SCP-10106-JP-Cの異常特性が財団に確認されました。

実験の為にD-100059がSCP-10106-JP-A内に接続した所、創出されたSCP-10106-JP-Cの特性や能力に二週間前にD-100059が実験に参加したSCP-10106-JPを色濃く想起させる特性を持つに至りました。

この後に更に実験を重ね、SCP-10106-JP-Cに利用者の記憶を参照する異常特性が存在する事が判明しました。

実験記録抜粋

名称：実験記録10106C-03

概要：“チュートリアル”の際、キャラクターを作る際に人型以外のキャラクターを作成し、SCP-10106-JPを利用する。

目的：SCP-10106-JP-Aの仮想現実としての評価の為。また、現実とは全く違う身体を動かす際の機能評価。

対象：D-100073

結果：D-100073は茶色の毛並みの一般的な柴犬の様に見えるキャラクターを作成した。

しかし、“チュートリアル”を終えてキャラクターの身体を操る事は困難だった。

“チュートリアル”を終えた直後は柴犬のキャラクターで四足歩行で歩行する事すら覚えない様子だった。

だが、実験の経過を観察していた財団職員と共にSCP—10106—JP—A内部で6時間の訓練を行った結果、歩行する事は可能になった。

身体能力はゲーム上のステータスの域を出ない。嗅覚の発達についても曖昧な結果しか得られていない。

追記：柴犬のキャラクターを作成する際、“チュートリアル”の担当をしていたSCP—10106—JP—B—15より、その身体ではおそらくまともに動かすのは難しいだろうという旨の進言がされていたようだ。

どうやら、SCP—10106—JP—Bには承知の事態だった様子。

メモ：概ね予想通りの結果。今後の訓練次第では十全に走り回る事も可能だろう。

これがオブジェクトでなければ良い訓練場にできるのかもしれないのですが……

気になったのは嗅覚に関する結果。これは生態的な特徴は完全には再現できていない可能性が高いのか？

名称：実験記録10106C—08

概要：“チュートリアル”を終えてSCP—10106—JP—Cを創出した直後のDクラス職員を現実世界に戻し、即座にBクラス記憶処理を行う。

目的：利用者のパーソナリティによって形作られると宣言されているSCP—10106—JP—Cに対して記憶処理剤は有効か評価する為。

対象：D—100085

結果：D—100085はSCP—10106—JP—A内部に4時間滞在し、SCP—10106—JP—Cを無事創出させた直後現実世界に帰還。

記憶処理は問題なく行われ、D—100085のSCP—10106—JPに関わった以降の記憶が完全に除去されたのを確認した。

しかし、再度D—100085をSCP—10106—JP—Aに接続してみた所、D—100085が創出したSCP—10106—JP—C個体は創出されていた状態だった。

幸運にも創出されたSCP—10106—JP—C個体は意思疎通が図れる状態だった為、インタビューしてみた所非常に混乱している様子だった。

SCP—10106—JP—C個体はいつ自分が創出されたのか、その経緯について完全に忘却している様子だった。

しかし、自身がSCP—10106—JP—Cである事とD—100085が自身を創出した者である事はしっかりと認識している様子だった。

メモ：興味深い結果。どうやらSCP—10106—JP—C個体は自身であるSC

P—10106—JP—Cに関する根源的記憶を有していると予測される。

また、D—100085との関わりからやはりSCP—10106—JP—C个体とそれを創出した利用者とは何らかの繋がりが生まれるというのは確定的である。

名称：実験記録10106C—09

概要：「チュートリアル」を終えてSCP—10106—JP—Cを創出する前にDクラス職員を現実世界に戻し、即座にBクラス記憶処理を行う。

目的：創出される以前のSCP—10106—JP—Cに対する記憶処理の効果の確認実験。

対象：D—100090

結果：「編集済み」

追記：この件を受けて特別收容プロトコルが一部改訂されました。

メモ：あまり気分は良くないですね。

名称：実験記録10106C—13

概要：「チュートリアル」の際、キャラクターを作る際に人型以外のキャラクターを作成し、SCP—10106—JPを利用する。

目的：SCP—10106—JP—Aの仮想現実としての評価の為。

対象：エージェント・カナヘビ

結果：エージェント・カナヘビは非常に小型のニホントカゲに見えるキャラクターを作成した。

身体 の操作や感覚器官に關しても現実の身体と相違ないという結果が得られた。

エージェント・カナヘビはSCP—10106—JP—Cを創出する前に現実世界へ帰還し、実験の記録を行った後に自発的にBクラス記憶処理を行った。

追記：実験記録10106C—03の再調査。プロトコル改訂により実験の許可が下りた。

メモ：実験記録10106C—03で嗅覚が上手く働かなかつたのはおそらく現実世界の身体とは余りにも感覚が異なっていた為と考えられる。

再度試すのは不可能であるが、人型のキャラクターを作成していたら逆にまともに動けなくなっていたのだろう。

中々に懐かしくも面白い体験やったけどもう出来ないし記憶もできないんやな、残念や。
—エージェント・カナヘビ

名称：実験記録10106E—02

概要：創出されるSCP—10106—JP—C個体の特性を調査する。

目的：パーソナリティを参照し生成されるとされているSCP—10106—JP—Cの詳細を把握する。

対象：D—100051。D—100051は殺人の容疑で逮捕され、Dクラスとなつた経歴を持つ。

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは【殺人鋭刃 ジャック・ザ・リッパ—^{アーク文}】

器物型のSCP—10106—JP—Cであり、形状は刃が歪曲した片刃の短剣。

SCP—10106—JP—A内部での特性は“人”を対象に攻撃した時、非常に効果を発揮する物だった。

メモ：Dクラス職員による初めてのSCP—10106—JP—C個体の創出。

その特性もD—100051の経歴や嗜好と合致する物であった。

今後問題がなければ創出されたSCP—10106—JP—C個体の記録を継続する。

以後実験記録10106Eの記録報告は省略された物とする。

名称：実験記録10106E—04

対象：??? 研究員

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは【破戒剣 シヴァ】

アームズ
器物型にして男性型アポストルのSCP—10106—JP—Cであり、男性型の際はスーツ姿の白髪アポストルの長髪を纏めた10代前半の少年の姿となり、器物型の際は黒色の刀身に幾何学模様の入った両手剣の姿。

その特性は攻撃力の増加と破壊不能対象の破壊。

また、実験開始後に互いに意思疎通を図れるSCP—10106—JP—Cが創出された初めての例。

メモ：インタビューにより、SCP—10106—JP—C、及びSCP—10106—JP—B群は利用者の記憶を読み取れる可能性が浮上しました。

「削除済み」

以後はプロトコルの再制定が行われました。特別收容プロトコルを熟読した後には実験を行います。

名称：実験記録10106E—11

対象：A—
????

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは「噴獣神 フンババ」

ガドナー
魔物型のSCP—10106—JP—Cであり、創出時点で3mを越える体躯を持つた巨大な偶蹄目の動物の姿。

その特性は非常に強力な吐息による攻撃でした。

メモ：異常特性を持つ対象がSCP—10106—JP—Cを創出させた場合は本人の有する異常特性を想起させるSCP—10106—JP—Cとなる可能性が高いだろう。

しかし、だからと言って創出されたSCP—10106—JP—C個体はその利用者に異常特性の起源に関する記憶が定かではない場合はそれを把握する為の材料には成り得ないと考えられる。

以後の異常特性を保持した存在を対象とした実験は研究主任との協議の下に行う様に周知してください。 —??? 研究主任

名称：実験記録10106E—16

対象：エージェント・??。エージェント・??はかつて機動部隊る—9（“蚊遣り火”）に所属していた経歴を持つ。

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは「絶滅光銃 ブリューナク」
器物型のSCP—10106—JP—Cであり、形状は真白の狙撃銃。

光線が発射される銃であり、命中精度、射撃速度は非常に優秀。SCP—10106—JP—A内部の動物タイプのモンスターに特に有効であるとの結果が出た。

有効なモンスターの種類がドラゴンタイプに変更された。理由は調査中。

名称：実験記録10106E—25

対象：D—100060

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは「爆速淑女 ターボ」

モリオン

メイプル

乗騎型にして女性型のSCP—10106—JP—Cであり、女性型の際は古めか

しい着物を着た黒髪の10代前半の少女の姿となり、乗騎型の際は特徴のない黒色を基調とした小型車。

その特性は非常に速い速度で走行する事が可能であり、更に敵対者に自身よりも速い対象が居る場合は必ずその対象よりも速く走行が可能になる特性を持つ。

メモ：まさか、都市伝説のター「検閲済み」

名称：実験記録10106E—32

対象：エージェント：??。エージェント：??はかつて機動部隊イオター8（カ 星守）に所属していた経歴を持つ。

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは「天象基 ギャラクシア・コスモ」

キヤッスル

建物理型のSCP—10106—JP—Cであり、形状は落ち着いた景観の小屋であ

り、内部は疑似的なプラネタリウムとなっている。

その特性はSCP—10106—JP—Aにおける能力強化とステータスの自動回復、そして外敵に対する自動反撃となっている。

一般的な建物理型のSCP—10106—JP—Cと比べ、耐久度はかなり低い様だ。

名称：実験記録10106E—40

対象：D—100085

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは「悪虐獣 アンリマユ」

魔物型のSCP—10106—JP—Cであり、詳細不明な黒い霞を纏った四足獣。

その特性は敵対した対象が「最も恐ろしいと思っっている」ものに変身する能力。

また、このSCP—10106—JP—C個体は意思を持つ魔物型のSCP—10106—JP—Cであるというのに関わらず、敵対こそしないものの利用者であり創出者であるD—100085との円滑な意思疎通が不可能な様子。

メモ：基となるパーソナリティの想起が困難な珍しい例。

D—100085本人は財団に対する恐怖心から来るものだと主張している。

SCP—「編集済み」と似た特性だというのはただの偶然だろうか？

名称：実験記録10106E—68

対象：?? 研究助手

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは「無明乙女 アヴィドゥーヤ」

空間型にして女性型のSCP—10106—JP—Cであり、女性型の際の容姿は概

ね「消照闇子」の物と同一でした。

その特性は暗所を起点と終点にした空間跳躍です。また、空間跳躍攻撃も可能です。

メモ：??、お前本物だよ……

名称：実験記録10106E-72

対象：D-100099。D-100099は轢殺による殺人の容疑で逮捕され、Dクラスとなった経歴を持つ。

結果：創出されたSCP-10106-JP-Cは「軍巨神艦 ナグルファル」

乗騎型のSCP-10106-JP-Cであり、黒紫色を基調とした、悪魔の様なイメージを抱かせる外装をした機械戦艦に見える。

だが、その様な外観でありながらも戦闘能力は全くなく、その巨体と速度、また陸海自在移動による人員物資の高速・大量輸送を得手とする。

補遺1：エージェント・??による報告

先日20??年??月??日、新たにSCP-10106-JPの担当職員として配属されたエージェント・??ですが、SCP-10106-JPはまさにカバーストーリーを味わなくても自然に「時代を先取りした最先端なゲーム」でした。

私は幼少期よりゲームは好きだったので、まさに夢のゲームを味わう事ができたのは非常に嬉しいのですが、これはあくまでSCP-10106-JPの調査の為の報告です。

SCP—10106—JP—A内部は非常に広大であり、少人数の担当職員では満足な研究が難しいと考えられます。

そこで、既に全国的に人気を博しているSCP—10106—JPの研究の為に、限られた財団職員やDクラス職員だけでなく、財団職員と縁のある一般利用者を限定的にEクラス職員として雇用する事を提案いたします。

メモ：検討しておきます。ところで、ゲームの話相手が欲しかった訳ではありませんね？ —??? 研究主任

補遺2

ブライト博士の禁止リストに下記の項目が追加されました。

・ブライト博士がSCP—10106—JPに接触する事は何があろうと認められません。

・ブライト博士がSCP—10106—JP—AにあらゆるSCPを接触させる試みは何かあっても阻止されなければなりません。

・SCP—10106—JPはデスクゲームだという事を職員に流布される事は禁じられます。現時点ではSCP—10106—JPは現実世界の生命にあらゆる損傷を与える報告は為されていません。

・SCP—10106—JPの担当職員にSCP—963を接触させる事は認められません。

・財団職員以外のSCP—10106—JPの一般利用者にSCP—963を接触させる事も当然認められていません。

・SCP—10106—JPの面白さを他の職員に喧伝する事はやめてください。プロトコルの違反に繋がります。

・ブライト博士がインターネットを通じてSCP—10106—JP—B—15を挑発する事は阻止されます。相手が温厚だからと言って調子に乗らないでください。

・SCP—963はブライト博士のSCP—10106—JP—C個体ではありませんし、ブライト博士はヘマスターでもありません。貴方はそれよりも何倍もタチの悪いものです。

補遺3：05—??からの通達

SCP—10106—JP—B群は財団の収容に非協力的ですが、SCP—10106—JP全体の異常特性の一般利用者への危険性の低さやSCP—10106—JP—Aに攻撃を行わなければ総じて人類に対して友好的であります。

また、現状ではSCP—10106—JP—B群を除いた異常特性はすべてSCP—

10106—JP—A、仮想現実内に限定される現象である事と確認されている異常特性から現実世界へ何らかの異常特性が侵食する可能性は低いと考えられます。

その為、財団が保有する他のオブジェクトと比べても研究の優先度は低いと言えるでしょう。

よつて、SCP—10106—JPに対する研究の縮小の命令を下します。

私達は危険性の少ないオブジェクトに過剰な資源と人材を浪費する余裕はないので
す。

補遺4：???副研究主任の報告

SCP—10106—JP—B群には現在、共通の確固とした目的があると称しており（収容記録10106—05参照）、財団の収容を拒否し続けています。

更に、SCP—10106—JP—A及びSCP—10106—JP—B群の現実存在するデータサーバーの特定や情報処理班による追跡もその悉くが無効化されており、SCP—10106—JPは全く収容されていない状況であると言えます。

また、SCP—10106—JP—B群は人類に友好的ではありますが、彼らも意思を持つオブジェクトでありながら、現在も全国のインターネットを自由に行き来できる存在となっている事には強い危機感を覚えざるを得ません。

彼らはただの人工知能ではありません。人間と同様の思考を可能としており、何時心変わりがあるかも知れない非常に危険な存在なのです。

よって、当オブジェクトの K e t e r クラスオブジェクトとしての再分類を申請します。

補遺5：05―??からの通達

申請は却下されます。

F o o t n o t e s

SCP―10106―JP―Cは、曰く利用者のパーソナリティ、つまり記憶や経歴、個性や人格を参照して創出される物らしい。

では、それらを全く持っていない利用者がSCP―10106―JP―Cを創出する場合はどうなるのだろうか？

研究主任に相談し、研究の足掛かりにしてみるのも良いかもしれない。

— ?? 博士

• •

以下の情報はセキュリティクリアランスレベル5以上の職員にのみ開示されます。
セキュリティクリアランスを提示してください。

補遺6

事案報告が発生しました。

詳細は事案記録10106-03を参照してください。

当該オブジェクトはO5評議会による審査に掛けられ、オブジェクトクラスの再検討が予定されました。

名称：実験記録10106E-106 事案記録10106-03

対象：D—100106。D—100106には実験の為、Fクラス記憶処理を施した後に自我再調整を実施せずにSCP—10106—JP—Aへ接続させる。

結果：「削除済み」

1—1— || ……? .

□ ■ 〇 5 — 1 の提言

Secure Contain Protect
— 確保、収容、保護 —

世界には、人々には知られずにいながら、数多の不思議に満ちている。

星を破壊し尽くす程の火力を持つ篝火、意思を持ち他者に殺意を抱く無機物、無限にピザを生み出す箱、エトセトラ、エトセトラ……

どれもこれも、人智の及ばぬ尋常ではない代物オブリエクトばかりであり——見ての通り、使い様によつては容易にこの世を破壊できるモノも少なくない。

仮にそうではなくとも、その殆どが只人ではどうにもできぬ程の異常特性を有する傑物、怪物の祭典であるのだ。

それはおそらく時代が違えば“神”や“悪魔”と畏れられ、崇められ、祈りや贄を以て漸く人々が生存域を確保していた化外のモノ達だったのだろう。

——ならば、人々は測れぬ程の怪異の前に、恐れに震え、無事を祈願し、化物の気紛れに慄き許しを乞う他生きる術はないのか？

——否。断じて否である。

時は流れた。

人類は最早嘗ての様に暗闇の洞窟に囚われた哀れな盲人ではなく、この世の多くを開拓し解明し開発し、そして多くの力を得た。

その版図は世界中に広がり、森羅万象を読み解き敵を駆逐し、それらの多くの法則を理として呑み下してきた。

しかし。

しかし、それでもこの世には多くの、実に多くの不可思議が——異常存在が溢れている。

不可能と不条理を形にしたかのような異常極まる特性を有するそれらを前にして——だが、今だからこそ。

世に人々が溢れ力を得た今だからこそ——決して人間は恐怖という檻に囚われ、嘗ての轍をなぞつてはいけないのだ。

臆してはいけない。立ち向かわなければならぬ。

人々が培つてきたこの世の理を、この世の未来を守る為に――

だからこそもう一度言おう――確保、収容、保護、と。

人々は力を得た。叡智を得た。数の理を得た――

ならば、できる筈だ。

異常存在が他の者の手に落ちる前に確保し、その異常特性によつて甚大な被害を齎さぬ様収容し続け、そして異常存在のその理を、絡繰りを理解し解明するその時まで保護し続けるのだ――

容易い事ではない。簡単な事でも、単純な事でもないし――誰にでもできる事ではない。

だが、優秀なる財団職員である君達ならば。

それが為せると、信じさせて貰おう――



□ ■ “無限の系統樹”

— 2043年7月15日。

これは、その世界の、その日時……後に世界的に流行する、時代を先取りし過ぎたV



RMMORPG、〈Infinite Dendrogram〉が発表されて事で始まる物語。

そう。

発表と発売、同時に起こったそれが全く察知されていなかった事に加え——異常な程のあり得ぬ技術力で作られたオンラインゲーム。

後にSCP—10106—JPとされるゲームを巡つての物語——

「これは、一体——っ!？」

「私はシヴァ。〈エンブリオ〉、TYPE：アポストルwithアームズの「破戒剣 シヴァ」——我が主^{マスタ}の心と肉と魂から生み出されたモノ」

「私は我が主の剣となり、力となり……我が主の願うままに、全ての障害を破壊し尽くそう——今度とも、どうかよろしくお願いしよう、我が主よ」

『〈Infinite Dendrogram〉は、新世界とあなただけの——』

「はい。こちらエージェント・雛倉。新たな異常存在を発見しました！」

「機動部隊ミュー—4と機動部隊き—5の出撃要請を！ ロー—9の支援も忘れるな！」

『申請に基づき、異常存在収容とカバーストーリー流布の為——管理AI20体が活動開始します。確保、収容、保護——』

それは、財団職員達の新たな戦いの始まり。

あり得ざる異常なゲーム。容易く開かれる、あり得ざる異世界への扉。

確保、収容、保護。確保、収容、保護——だが、その扉を閉じる力は、財団にはなかった。

『O5—13がロストしました。まあアレはO5の中でも一番の新参……ミスでオブジェクトに接触するとは、不用意な奴でした』

『ふん、我等としては珍しい事でもあるまい。つい最近もO5が何人かロストしていたからな』

『だが、お陰で素晴らしい利用価値の知見を得られた。これならば、久方ぶりに——』

『——故に。研究は秘密裏に、そして迅速に行われなければならない』

『頼めるな?』——05——11、
『ザ・メールマン』——』

動き出す陰謀。巨影。

財団に潜む化外の人類が、己の渴望を表出させてまで願うその真意は——
だが、しかし。

「糞がっ!!」 またか、またへマスターなのかっ!」

「馬鹿、やめろ!」 その山は私たちが一か月かけて植生から生態系から何から何まで漸く全て調べ尽くしたんだ! だから——迷惑行為をやめろ止めろいい加減にしろや雑魚があああああ《私が記した理想像》!」

「はーん?」 お前さん、まさかMMOとかやった事ないタチい? ——マジになんなよ。これは遊戯なんだぜえ!」 天焼く魔弾オオ!!」

「ひゃっはー!」 兄貴の「インフェルノ」は流石だぜ!」 おら、燃やせ燃やせ、もつと薪をくべろお。経験値と戦利品の踊り食いだあ——!!」

「「やめろおおおお!」」

——この遊戯^{ゲーム}は收容する事能わず。即ち、そこに居るのは財団職員だけではない。

いや、むしろ財団職員やその関係者が、圧倒的少数……職員達は自分勝手に動くへマスタ―達を相手に仕事を完遂できるのか!?

それとも——己のエンブリオの導きのままに、己が願いを果たすのか!?

「ふつ、まさかこの様な所で樹廻流の使い手に見えろとはな——それもその鬨気。いくら隠そうと正体も知れるという物よ」

『……マジクマ、マジクマ？　ちよつと、リアルバレは流石に勘弁して欲しいんだクマけど。おい、聞いてる?』

「無論よ。為れば——此処はその手を以て我が言の葉を防いでみるが良い。我は財団神拳継承者が一人、テンロウ！　いぎ尋常に——!!!」

『聞いてねーじゃねーかここは天地じゃねーぞクマ―！　ぶつ飛ばすぞてめー、だく

マ―!!!』

戦い、争い、闘い——

そう、この世はVRMMORPG。他者と競い合い、ぶつかり合い、高め合う遊戯ゲームであるならば——戦闘になるのは最早必定の運命。

汝己が望む物の為に勝利を得よ——！

その先にこそ、望む物進化するは得られるのだろうから。

だが——しかし、時には仲間同士で相争い合う事もあるのが、この7つの大国に分たれた世界の定めか——

「あのすつとことつこい博士がまたログインしてきやがったぞ、どうなつてやがる!？」

「あのSCP—963の詳細は貴方も知っているでしょう!?! あれは脳機能まで完全に同一の物に変じさせるの、だから——」

「どのブライト博士からでだって変わらなずログインできる……あれがどれだけ居ると

思ってたんだ。防げる訳ねえ！」

「かくなる上は——殺せ！ 殺せデスベナレばこの世界から強制的に排除できる！ 主任に連絡しろ。レジエンダリアの全担当職員に告ぐ——」

「——ブライト博士をデスペナさせる事に成功した暁には報酬として1億リルを支払おう。皆奮って参加せよ。やり過ぎても一向に構わない」

「『ヒヤッハー！ 鼠狩りの時間だあ！ 捕らえて殺せー！！』」

だが、それが必要な犠牲だ。

そう、全ては確保、収容、保護——

これは、財団職員達による、この世界ゲームでの奮闘の物語なのだか

—もう一つ。

その物語の裏で、あるいは奥底で。
カバーストリー
表の物語とは違う、財団の戦いこそが、この物語の主軸だ。

それは、きっと多くの財団職員ですらも知らされない物語。

財団の深淵に座する者達によって紡がれる物語。

倫理に悖る、認められざる物語。

だが、それでも彼らはそれを希求せずにはいられない。

それこそが、これこそが、この世界遊戯こそが、彼らが求める頼T h a u m i e iみの綱の一つなのだから



「——それでは、此れより実験10106E—106を開始します」

『対象選定——完了。Y—909、及びクラスF記憶処理薬の精製——このオブジェクトの使用を行う場合、レベル4クリアランス使用許可を提示して下さい』

『——承認されました。これより、注入を開始します』

「……」

「よし、此処までは予定通りですね。それでは、仮想世界没入デバイスを——」

「ああ。意識が覚醒する前に行程を終えなければ意味がない。『あちら』に行く前にパーソナリティが目覚められたら実験の意味がない」

「……この実験にそれほど注意を払う価値があるのですか？ 私からすれば、上の方の道楽にしか思えません」

「……さてな。意味があるかもしれないし、ないかもしれないな。——だが」

「俺は上の意思に限らず、意味が在る物だろうと思うぞ。——あの世界に行った事のあ
る俺からすれば、だがな——」



「？」

「あちやー。財団の人達。こんな事もやってるのかー。……どうすればいいのかなー、

これって」

「……………」

「あ、うん。ごめんねー。言葉は分かる……かな？ ……そうだね。僕は君を案内するのが仕事なんだ。僕はチエシヤ、よろしくね！」

「……………っ!?!」

「うん。そうだね。何も分からないだろうね……でも、大丈夫。君はへマスター——一番自由な人達なんだから」

「……………?!」

「そう！ 君は何にだってなれるし、何だつてできるし、何だつてしても良いんだよ。それが自由つて事なんだ」

「……………♪」

「——うん。良かった。一時はどうなるかと思ったよー。それじゃ、始めようか。——」

君の^{物語}可能性を！」

「それじゃ、まずは——君の名^{フレイヤーネーム}前を聞いてもいいかな？」





□ ■ 商業都市コルタナ

商業都市コルタナ。

そこは、カルディナでも有数の大都市にして——カルディナにおける、ヘマスター達のスタート地点。

その特権を活かし、ヘマスター達の増加後は更にその繁栄を盤石の物にしていた、砂上の都市のひとつである。

商業都市の名の如く、様々な物が店に露店にと売りに出されるその都市で——しかし、そこは砂漠である以上仕方がないと言うべきか、冷を取れる物は非常に高額になるのは当然であった。

氷菓や冷水、氷魔法の「ジエム」に空調を整えるマジックアイテムに——しかし、このコルタナの中央にある巨大オアシスだけはその例外に当て嵌まるのだった。

……基本は市長の物であるそれだが、一般にも開放しないと文字通り市民からの強い反乱を招く為にある程度は格安で飲用水として開放されている。

その為、手軽で冷を取りたければオアシスに行くと言うのは「マスター」もティアンも変わらずオアシスに行くと言うのが鉄則だ。

——そして、ここにもオアシスへ霞を進める「マスター」が二人。

少女と女性、若干年が違えど共に整った（「マスター」としてはやや平凡とも言えるが）顔立ちをした二人が連れ立ってオアシスに向かっていた。

……黒紫色の不定形の霞に乗って、という異様な出で立ちだが、まあそれは「マスター」であれば特筆するような事でもないだろう。

だが、その目的はオアシスの水ではない。一応は。

それは——

「暑い、暑い、暑い、暑い——なんで待ち合わせ場所が屋内じゃなくて外屋外なんでしょうか

……？」

「仕方ないでしょう。 現場責任者 オリジンさんと 研究主 エアーハードさんからの頼みなので。 ……
 むしろ、これは命令なので、私には従う他ないですが？」

「はあ……本当に上の人は人使いが荒いですね。何せ——」

「私達に、新入りの『世話係』を頼むなんて。 ……別に、私達は最前線組でもないんです
 けどね？」

——そう。

彼女は今から『財団』の上の方の命令により——Infinite Dendrogram……このSCP-10106-JPの新たな担当職員の先達として、指導と世話を頼まれてしまっていたのだ。

その理由についてはともかく、これも正式に彼女達の上の方から——そう、財団の上層部から正式に頼まれた『任務』なのだ。

……この世界の開拓や情報収集ばかりでほぼ自由行動だった今までと比べ、何らかの意図がある任務であれば、財団職員としてもエリートである彼女達にとって否はない。

むしろ、数か月掛けて漸く何らかの動きがあるのかと思うくらいの動きの無さだったので、何らかの任務がある事自体は歓迎する事だったのだ。

だから、この遣り取りも女二人のちよつとしたじゃれ合いの様な物。

暑い事は暑いが——彼女達にとつて、この程度の苦境であれば数日どころか数か月程
度余裕で耐えられる程のエージェントや研究員であるが故に——

「あつ——あの子ですかね？」

「特徴も、名前も一致しますね。その様です。目深なフードに、マントに——」

「——フードの中に、ウツボのガードナーなんてのは、そうは居ないでしょうし」

……………まさか、自分達の仕事である“世話役”が、真実その子の世話をさせられる
事になるなどは——財団一筋でまともに男とも付き合つた事のない彼女達には知る
由もないのであつた。

「——貴女達がフォルトさんに、ラストさんですか？」

「……はい。これからお世話になります。私の名前はマスター——『マスター』です。よろしく願いますね」

「そして、この子が私のエンブリオである——」

——そう、これは何処かと何処かとは交錯した物語。

表と裏が、正が理が合が答が同じ世界で紡がれる物語の、その一端。

名も、己も、我も——何もかもを喪失していた「マスター」と、そのエンブリオの物語。

「——【夢忘空獣 アナンタシエーシャ】です。……あの、もう少し水を買って貰ってくださいませんか？」

To Be Continued……

セキュリティクリアランスを提示してください

.....
閲覧にはレベル4以上のセキュリティクリアランスが必要です。
セキュリティクリアランスを提示してください。

・ ・ ・ ・ ・
アクセス承認。

セキュリティクリアランスの認証が完了しました。

情報を開示します

アイテム番号： SCP—10106—JP

オブジェクトクラス： ?Thaumiel

特別収容プロトコル： 全世界に広範に周知されてしまっている為、SCP—10106—JPは完全に収容できない状態にあります。

現在SCP—10106—JP—B群との交渉の結果、財団との関係は友好的及び協

力的ですが、一般利用者及び要注意団体からの正常なアクセスを防ぐ事が不可能な状態にあり、またSCP—10106—JPの異常性による特異性の発露を防ぐ事が出来ない事は財団の理念としても非常に危険性が高い事を留意し、収容の“協力”を継続してください。

SCP—10106—JPは現在確認されている要注意団体（財団含む）の力の及ばない状態のままです。

確認されている財団以外の要注意団体が非正規にSCP—10106—JPとの接触が行えない様に監視及び妨害活動を継続して行ってください。

SCP—10106—JPの円滑な研究を実施する為にSCP—10106—JPに関する限定的な情報をレベル3以下のセキュリティクリアランスを保有している職員に対して流布し、SCP—10106—JP—A及びSCP—10106—JP—Cの調査を実施しなければなりません。

同様に、レベル4以上のセキュリティクリアランスを保有するSCP—10106—JP担当職員もSCP—10106—JP—Aに対する制限のない接続が許可されています。

SCP—10106—JP—Aに接続しSCP—10106—JP—Cを創出させた全ての担当職員はSCP—10106—JPの研究の為、自身の創出させたSCP—

10106—JP—Cの情報の提出が求められます。

SCP—10106—JPを他の生物型オブジェクトの収容に使用する際はレベル4以上のセキュリティクリアランスを保有する職員3名以上の承認を得た上でSCP—10106—JP—Dを該当オブジェクトの形状に合わせた改造を行った上でSCP—10106—JP—Aと接続し収容を行ってください。

SCP—10106—JPを他の生物型オブジェクトの収容に使用する際は担当主任を含むレベル4以上をのセキュリティクリアランスを保有する職員5名以上の承認を得た上で三度に渡る心理テストを実施してください。

倫理観、人類に対する敵愾心、財団に対する心象を心理テストに対する結果として把握した上で再度当該の職員によって協議し、使用する様に義務付けてください。

その際、SCP—10106—JP—Dを該当オブジェクトの形状に合わせた改造を行った上でSCP—10106—JP—Aと接続し、収容を行ってください。

その他の収容プロトコルは前述に開示されている限定情報を元に実施されます。

説明： SCP—10106—JPは一般に・??????として知られているダイブ型オンラインロールプレイングゲームとそれを取り巻く事象群です。

その概略は前述に開示されている限定情報を参照してください。

新たにSCP—10106—JP—Aへと接続できる仮想世界没入デバイスをSCP—10106—JP—Dと定義します。

材質、内部構造的には他のダイブ型ゲームに使用する仮想世界没入デバイスとの違いはありません。

このSCP—10106—JP—Dは当初は異常性を有していないと思われていた物の、研究を続けていく中その異常特性が発見され、新たにSCP—10106—JP—Dへと分類される事となりました。

SCP—10106—JP—DはSCP—10106—JP—Aへと接続する際のみ限定して他のダイブ型ゲームと接続する際とは違う挙動を見せ、解析不能な特異な電波を放出し、利用者をSCP—10106—JP—Aへと接続している事が示唆されてきました。

しかし、それはSCP—10106—JP—A及びSCP—10106—JP全体での異常性と見られていた為、SCP—10106—JP—Dによる特異性とは判断されていませんでした。

しかし、後述するSCP—10106—JP—Aの新たな特異性の判明と研究の成果によりSCP—10106—JP用に開発されたSCP—10106—JP—DはSCP—10106—JP—Aと現実世界を行き来する為の媒介としての特異な媒介と

しての役割を示している事が明らかになりました。

SCP—10106—JP—Dは他のダイブ型ゲーム用の仮想世界没入デバイスとの互換性を有し、また分解も既定の手順で行う事ができ復元する事も可能ですが、同様の素材、製法で作られた仮想世界没入デバイスではSCP—10106—JP—Aへと接続する事は出来ず、また後述する異常特性も発揮されません。

SCP—10106—JP—Dの製造を代行している製造会社も判明していませんが、製造会社への取材では有意な回答を得られず、以後の取材はO5—?の指令によつて中止される事となりました。

SCP—10106—JP—DはSCP—10106—JP—Aとの接続を行う際にその装着者の霊的実体を円滑にSCP—10106—JP—Aへと瞬時に転送する能力を示します。

霊的実体が転送された装着者は一時的に虚脱状態となり、SCP—10106—JPの利用を停止するまで如何なる刺激にも反応を示さず、その状態を維持し続けます。

しかし、装着者への現実世界による刺激はSCP—10106—JPを使用中の利用者へ通知され、必要な際には即座に利用を停止する事も可能となっている様ですが、どの様に霊的実体や装着者に対する刺激をSCP—10106—JP—A内部の利用者に転送、通知しているかは不明です。

また、更にSCP—10106—JP—Aへと接続した直後に装着者及びSCP—10106—JP—Dと装着者への接触者に対して現実性強度^値を10.00Hmに固定し、対象の現実の改変や歪曲に対して非常に高い耐性を与えている事が判明しました。これを利用した緊急時の現実改変対策装備として配備する事が検討されています。詳細は文書10106—JP—D—Ωを参照してください。

SCP—10106—JP—Aへと接続した多次元宇宙任務に従事していたエージェントによる報告、及び複数の追試によりSCP—10106—JP—Aが仮想現実ではなく、我々の住む宇宙とは別の物理法則の働く異世界である事が判明しました。

異なる物理法則についての多くは開示されている限定情報の通りですが、更にSCP—10106—JP—A内部で作成されたカント計数機により、内部ではウィンドウ上の「ステータス」の多寡や内包リソースの量によってヒューム値が増減されている事が判明しました。

しかし、これはSCP—10106—JP—A内部での正常な物理法則として機能しており、規定外の現実改変能力が発揮される事はあり得ないと結論付けられました。

また、SCP—10106—JPを使用する利用者に対する新たな異常性として、霊体的実体をSCP—10106—JP—Aへと転送し、その世界で作成された身体に霊的

実体を挿入し活動している事が確認されています。

SCP—10106—JP—Aにおける利用者の身体はSCP—10106—JP—B—02が作成した物であり、その身体に利用者の霊的実体が挿入されている間は如何なる規定外の異常特性が発揮できなくなるという事がSCP—10106—JP—B群とのインタビューで判明しています。

協議の結果、この利用者の異常特性の無効化と言う性質はSCP—10106—JP—A内部での他生物型オブジェクトの收容に際して非常に効果的であるとの見解が示されました。

O5評議会によりこの提案は承認され、以後他生物型オブジェクトの收容に使用されます。

また、新たに発見済みの異世界を同様の特殊收容サイトとして使用する為、SCP—10106—JP—B群に基幹技術の提供を求めると共にSCP—10106—JPに対する研究を継続してください。

2045/03/01時点において、他生物型オブジェクトの有効な收容が継続されており、またSCP—10106—JPが遊戯型娯楽としての側面も持っている事から当該オブジェクトの心理状態も非常に安定した状態が続いています。

以下は当該オブジェクトに関する記録の抜粋となります。

実験記録抜粋

名称：実験記録10106D-024

概要：利用中のSCP-10106-JP-Dの分解

目的：SCP-10106-JP-Dのどの部位が異常特性と関連しているかの推定。

対象：D-100512

結果：SCP-10106-JP-Dの外装を外した時点でSCP-10106-JP-Aより強制的に離脱、退去させられ現実世界に霊的実体が戻ってくる。

対象者へのインタビューにより、実験時間から逆算して使用中のSCP-10106-JP-Dに担当職員が接触した時点でSCP-10106-JP-A内部の対象者に対し通知が行われていた模様。

メモ：少なくとも外装部分や接触部にはそれを感知するセンサーの類は確認されていません。

SCP-10106-JP-Dには利用者だけでなく自身に対する刺激も同様にかの手段により感知、通知する能力を有している可能性が浮上しました。

名称：実験記録10106D—032

概要：nPDN装置によるSCP—10106—JP—Dの霊的実体の転送の阻止。

目的：SCP—10106—JP—Dの異常特性の発露の防御に関する実験を行う。

対象：D—100512

結果：SCP—10106—JP—Dを起動しSCP—10106—JP—Aへと接続する前からnPDN装置を起動し、周囲空間に存在する霊的実体の固定化を実施したが、転送の阻止は失敗。

対象は通常通りSCP—10106—JP—Aへと接続され、現実世界の身体も虚脱状態となった。

その後5度の追試により、nPDN装置によるSCP—10106—JP—Dの霊的実体の転送の阻止は不可能と結論付けられた。

名称：実験記録10106D—040

概要：複数のSCP—10106—JP—Dを同時に同一人物に使用する。

目的：推奨用途基準から離れた対象に対するSCP—10106—JP—Dの使用に関する評価。

対象：D—5182。D—5182は結合双生児である。

結果：問題なくSCP—10106—JP—Aに接続された。

D—5182は内部では各々の意思を持ち行動する事が出来、対応したSCP—10106—JP—B—15によって別々の利用者として活動する事も結合双生児として活動する事も可能だと示唆された。

担当研究員の指示により、D—5182は結合双生児として利用開始した。

追記：D—5182が創出したSCP—10106—JP—Cは〔双頭魔犬 オルトロス〕。

特異な身体的特徴は創出されるSCP—10106—JP—Cに影響を与えらるう例の一つ。

メモ：興味深い結果。二人（一人？）のSCP—10106—JP—Dの使用のタイミングは完全に同一という訳ではなく、数秒単位のズレがあったと言うのと同じ様に転送されている。

霊的実体に関する研究を進める一助にもなる研究データであると考えられる。

名称：実験記録10106D—043

概要：複数のSCP—10106—JP—Dを同時に同一人物に使用する。

目的：推奨用途基準から離れた対象に対するSCP—10106—JP—Dの使用に

関する評価。

対象：ジャック・ブライト博士

結果：脳機能が完全にブライト博士の物となったブライト博士を複数用意し、同時に SCP—10106—JP—D を使用してみた。

しかし、実験記録10106D—040の時とは違い、SCP—10106—JP—Aに転送されたのはその中で一番早くSCP—10106—JP—Dを使用したと思われる一団体だけであった。

追記：後にSCP—10106—JP—B群にインタビューを実施。SCP—10106—JP—B—02より回答を得る。

D—5182の時は別々の“魂”でありながら一つの身体を共有しているが為の処置であり、ブライト博士の場合は全くの別物である為、最も早く使用した個体が使用する事となった模様。

名称：実験記録10106D—049

概要：SCP—10106—JP—D使用中の対象の終了処置

目的：SCP—10106—JP—Aに接続している対象の現実の肉体が死亡した場合

の実験

対象：D—100824

結果：「削除済み」

收容実験記録抜粋

名称：收容実験記録10106C—105

概要：適切に收容されている事の確認、及び創出されるSCP—10106—JP—C個体の調査。

目的：收容状況の評価並びにSCP—10106—JP—Cの研究の為のデータ追加

対象：SCP—105

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは「映視械鳥 グライアイ」

ガイドナー魔物型にして空間型テリトリーのSCP—10106—JP—Cであり、機械で作られた小鳥の様な姿をしている。

その特性は一定範囲内の対象の視界を一方的に共有する事。

SCP—10106—JP—Cの進化に従い視界強奪の能力も会得した模様。

SCP—10106—JP—A内部での生活は概ね順調であるが、その言動には望郷の念が強く見られる。

財団及び人類に対する反抗的な兆候は見られない物の担当職員により毎週の心理検査が提案される。

メモ：以後SCP—10106—JPによる他生物型オブジェクトの収容実験記録10106Cの記録報告は省略された物とする。

名称：収容実験記録10106C—239

対象：SCP—239

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは「魔障魔杖 バーバ・ヤガー」^{アイテム}器物型のSCP—10106—JP—Cであり、形状は青白色の光沢を持つ宝玉が使用されたSCP—239の身の丈程もある長杖。

その特性はSCP—10106—JP—A内部での魔力リソースを使用して自身の望んだあらゆる事象を発生させる事が出来る能力を持つ。

SCP—10106—JP—A内部を我々の住む現実世界だと言う偽の知識を与え担当職員と共に行動している。

メモ：通常の素材で製造された筈のSCP—10106—JP—Dによって問題なくSCP—10106—JP—Aへと接続できた事は幸いでありながらも注意すべき懸案であると考えられます。

現状は精神状況に問題は認められず、以後もSCP—239の心理的変容を鑑みてS

SCP-10106-JPによって安穩とした生活を遅らせる事を目的としたい。

今は未だ彼女の“夢”が覚めない事を望むばかりである。

名称：收容実験記録10106C-451

対象：SCP-451

結果：創出されたSCP-10106-JP-Cは【現消会帰 ブリックヴァインケル】
テトリ空間型のSCP-10106-JP-Cであり、その範囲は自身のみ作用する特質を持つ。

その特性は自身の外界干渉能力の変容であり、任意で霊的実体に似た形態を取り物質的干渉を自他共に行えなくする能力を有している。

SCP-10106-JPによってSCP-451の異常特性を一時的に無力化する事でSCP-451との正常なコミュニケーションが可能になった事は非常に喜ばしい進歩であると考えられています。

SCP-451のインタビューの結果は“文書451-E”アナザールを参照してください。

追記：SCP-10106-JP-Cの進化により自己変容型となりました。

外界干渉能力の変容が強化され、物質的干渉変容のみならぬ複数概念干渉変容能力を会得しています。

メモ：SCP-451……いや、エージェント・M
 ????? J
 ?????のパーソナリティが本当

にSCP—451を想起させる物であったのか、それとも長年SCP—451の効果を
受け続けた結果、パーソナリティが変容していたのか、あるいはまた別なのはまだ判断
できない。

しかし、今は彼の心理的評価の為にも彼の望む通り彼にはSCP—10106—JP
—A内部での生活を続けて貰うのが一番だろう。

最早彼は孤独の業を背負う必要はなくなったのだ。旧友の復活を心より喜ぶべきで
あると考える。

名称：收容実験記録10106C—527

対象：SCP—527

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは「魚鱗海象 ピスケス」

器物型のSCP—10106—JP—Cであり、身体置換型として発現し、SCP—
527の肌を鱗に、頭部を魚類の物に変更し、そして手足に鰭が生える姿となった。

人型としての活動は全く制限なく可能であり、水中行動に対して圧倒的な適性を示し
ている。

メモ：本人は最初は面食らっていた物の、早期に自身のSCP—10106—JP—
Cに適応した。

海上国家である「グランバロア」を主に活動したいと話している。

名称：収容実験記録10106C—650—JP

対象：SCP—650—JP

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは「不遍等式 イェソド」

空間型のSCP—10106—JP—Cであり、その範囲は自身のみ作用する特質を持つ。

その特性は自身の状態^{ステータス}固定、そしてその若干の操作である。

SCP—10106—JP—B—02によって他の人間と同じ身体^{ボディ}を与えられた事を非常に感謝している。

現在には以前と変わらず財団に対して従順な態度を示しているが、SCP—10106—JP—B群に利用される可能性を鑑みてSCP—10106—JP—Aへの接続を制限するプロトコルを裁定する予定このプロトコルは破棄されました。

名称：収容実験記録10106C—905

対象：SCP—905

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは「光神御殿 ベレヌス」

建物型のSCP—10106—JP—Cであり、その形状は光り輝く巨大な城です。^{キャッスル}

その特性はSCP—10106—JP—Cに降りかかる全ての光エネルギーと熱エネルギーを吸収し蓄積する事です。

SCP—905がSCP—10106—JP—C内部に滞在している間、蓄積された光熱のエネルギーを自由に使用する事ができ、またSCP—10106—JP—C自身もそれを使用する為の媒介として機能する様になります。

メモ：人と同じ身体を持ったSCP—905の容姿についてはSCP—905の報告書に記載されています。SCP—905の報告書を参照してください。

名称：收容実験記録10106C—917

対象：SCP—917

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは「月夜狂態 ルナティック」

キャッスル建物型のSCP—10106—JP—Cであり、その形状は頂点に満月を模した飾り物を取り付けられた小さな工房です。

その特性は夜間のみ発揮される内部での生産用スキルの成果物の性能の増減。

月の周期に関連してその効果が増減され、最も効果が増幅される満月の時では「編集済み」。

最も効果が減衰される新月の時ではあらゆる生産スキルが失敗します。

なお、月の周期は現実世界ではなくSCP—10106—JP—A内部の世界の物を連動している。

メモ：このSCP—10106—JP—Cの満月時の効果を使用したい人はSCP—

10106-JP-A 内部時間で十日以上前に本人に申し立てる事とする。

これはあらゆる特例を認めない。

名称：收容実験記録10106C-1152

対象：SCP-1152

結果：創出されたSCP-10106-JP-Cは「潔白症鳴 シロドツクリ」

魔物型のSCP-10106-JP-Cであり、一般的なアライグマ種の姿に酷似した姿を持っています。

その特性は指定した対象に対する六感に作用する幻覚です。

SCP-10106-JPによってSCP-1152の異常特性が無力化され、SC

P-1152の正しい異常特性が判明しました。

詳細はSCP-1152の報告書を参照してください。

SCP-10106-JP-Aに接続しその異常特性が無力化された直後は財団職員に対して面罵を行っていましたが、現在は安定してコミュニケーションを実施できています。

SCP-10106-JP-Aとの接続を中断する事を拒否する傾向がある為、收容プロトコルは既に変更された事を伝えてください。

メモ：エージェントのMIA指定が解除されました。

痛ましい事件であったと思います。今後も同様の事が無いように財団職員一同は一層オブリエクト研究に力を入れて貰いたい。

SCP—1152の報告書に大幅な改定が行われた為、関連職員は再度SCP—1152の報告書を熟読する様に。

名称：収容実験記録10106C—1370 事案記録10106ZC—08

対象：SCP—1370

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは「破滅神帝 ハルマゲドン」

SCP—10106—JP—Cとしての詳細は不明です。系統は空間型と見られていました。

創出され他職員のSCP—10106—JP—Cによって名前を確認した直後に周囲一帯に不可逆的で甚大な被害を齎しました。

また、それにも関わらずSCP—1370はSCP—10106—JP—Aに接続したままであり、付近に対応できる職員も居なかった事もありO5評議会命令によりSCP—1370が無力化される事態となりました。

本件は事案記録10106ZCとして記録され、SCP—10106—JPの特別収容プロトコルが変更される事となりました。

担当職員はそれを留意し、再度SCP—10106—JPの報告書を熟読してください

い。

メモ：SCP-1370をSCP-10106-JPで收容するに際しての承認を与えた職員は降格処分される事となりました。

現時点でSCP-10106-JPは替えの効かない有用な特殊收容施設として機能しています。

妄りにこれを害する事はO5評議会命令によって禁じられています。今一度担当職員らはその意味を考えてください。

名称：收容実験記録10106C-2599

対象：SCP-2599

結果：創出されたSCP-10106-JP-Cは「機知応能 アポローン」空間型のSCP-10106-JP-Cであり、その範囲は自身のみに作用する特質を持つ。

その特性は自身が就いている職能の内、メインジョブとして指定しているジョブ以外の系統のジョブの性能を大幅に強化すると言う物です。

SCP-10106-JP-A内部では他のオブジェクト同様にSCP-2599の異常特性は無効化される為、担当職員はそれに留意してSCP-2599と接触してください。

SCP—2599は命令に対する精神的な衝動が無いこの状態でも同行者に対して一般的な範疇で従順であり、SCP—10106—JP—A内部では通常の少女の様に振る舞っています。

名称：事案記録10106ZC—57

対象：SCP—3477

結果：SCP—10106—JP—A内部で新たなSCP—3477個体が発見されました。

SCP—3477—46に指定された個体はSCP—10106—JP—A内部では「生竜王 ドラグサヴァイブ」の名を持ち活動していました。

しかし、SCP—10106—JP—A内部時間でSCP—10106—JP発見時から758年前に黄河帝国の黄龍人外に自発的に収容されて以来、黄龍人外の作成した収容房内部で生存しており、その収容房も黄河帝国の皇族所有の物であった為発見が遅れました。

現在には有志の担当職員の尽力により黄河帝国の皇族より奪取し、奪取した担当職員とは無関係の職員に移譲し隠し通し収容を続けています。

黄龍人外の製造した収容房を介在していてもコミュニケーションは可能であった為、インタビュウを実施した所、SCP-3477-46は公的に死亡したとされる事件で死亡し、その直後にSCP-10106-JP-Aの世界に記憶を保持した上でドラゴンとして生誕したと証言されています。

その異常特性はドラゴンとしての非常に高い身体能力及びに破壊耐性。再生能力。そして非常に高い危険察知能力と状況適応進化能力です。

メモ：SCP-3477-20の存在によって転生し得る可能性は存じていたがまさか異世界転生までしているとは思わなかった。

他にも異世界に転移／転生しているSCP-3477個体が発見される可能性を考え、多次元宇宙任務に従事する職員らに詳細を通達する事とする。

しかし、保有する異常特性がSCP-682の特性に非常に酷似しているのは見逃せない点だ。

他のSCP-3477個体にはその様な兆候は見られていない為ある種の偶然である可能性は高いが、それにしても嫌な相手を思い出させる物だ。

アレが不老にして不死としてのハイエンドの一つと言うのは少なからずともアレを知っている財団職員としては理解できなくはないが。

補遺7：??? 研究員の報告

SCP-10106-JP-Cの判断する“パーソナリティ”には本人に内在する要素だけでなく、他オブジェクトの異常特性による変容も大きな要素と成り得る事は今までの実験記録からも判明していました。

しかしながら、実際にSCP-10106-JP-Cによって発揮される能力特性が現実世界で変容を与えているオブジェクトの物と比べて明らかに小規模な物が大多数であるのは、偏にその結果を發揮する為の“リソース”が足りていない事が原因であると推測されます。

これは担当職員らのSCP-10106-JP-Cの進化によるリソースの増大、及びに被爆したオブジェクトの詳細によつてはほぼ完全な影響の再現を可能としていた事からも読み取れます。

で、あるならば個々のSCP-10106-JP-Cが更に進化しリソースを増大していく事でいずれ致命的な能力特性を持つオブジェクトを再現したSCP-10106-JP-Cが現れ、それがSCP-10106-JPによる異常特性の無力化を無効化した上で我々の住む世界に飛来する可能性があるのではないだろうか。

それは新たに危険なオブジェクトを我々の手で作成してしまう事と変わりなく、我々

の持つ理念とは真つ向から反対している様に考えられます。

SCP—10106—JPを特殊な収容サイトとして使用する試みは現状は良い結果を齎している事は事実ではありますが、それは新たな危険を作りだす事を許容する程の事ではないと考えられます。

よつて、当オブジェクトの収容サイトとしての使用の停止及びオブジェクトクラス分類の再検討、そして封じ込めの許可の検討を申請いたします。

補遺8：05—？からの通達

申請は却下されます。

SCP—10106—JP—Cが進化によるリソース増大を経てSCP—10106—JP—B—02及びSCP—10106—JP—B—03の管理を脱する事が出来る様になる可能性は極めて低いと結論付けられています。

SCP—10106—JPを用いる事による他生物型オブジェクト群の収容プロトコルの簡略化により得ている恩恵を鑑みて貰いたい。

勿論、SCP—10106—JPを発見する前と同じ状態に戻るだけであり、致命的な破綻が待っているという訳ではないと言うのはその通りだ。

だが、その簡略化により節約された事で現時点で各種オブジェクトの研究や搜索に注

ぎ込む事が出来るリソースが非常に多大な物になり、そして確かな成果を上げていると言うのもまた事実なのだ。

我々は未だ全能の力も無限のリソースも保有していない人間であり、使えるリソースは限られているのだ。

君は優秀な研究員だ。きつと理解してくれる事を願う。

Superior Calculation Pioneer

□ ■ 商業都市コルタナ

『Shyeeaaaaaa.....』

「あの、聞き忘れていたのですが……今は何方に向かっているのでしょうか？」

「あれ、言っていないませんでしたか？ まあとりあえずは——私達の拠点へ行くんですよ。落ち着いて話するのも其方の方が良いでしょう？」

商業都市コルタナ——その上空を三人を乗せた霞——フォルトの（エンブリオ）である【隔世理想 ファンタジア】が行く。

この三人……任務や命令により合流した三人、ベテラン二名と何も知らぬ新米一名はフォルトの言葉通り、とりあえずの待ち合わせと合流を果たした後、兎にも角にもまず場所は移す事を優先したのだ。

元よりあのオアシスで待ち合わせしていたのも新米であり、精神的にも消極的な子供に等しいマスターでも分かりやすい場所であるとして彼女らの上司が決めただけの事。顔合わせが済めばより相応しい場所へ場を移すのも当然なのであった。

だが、それも尋常な移動法でなければそれもまた物知らぬ白痴の子であるマスターからすればとても目新しく新鮮な物。

黒紫色の霧靄……正しく「幻想」の名を背負いし「エンブリオ」、【ファンタジア】。

ある程度知っている相手が見れば「筋斗雲型のチャリオッツかな？」と合点が行くその様相も、「ファンタジーらしさ」漂わせる色彩と相まつてもとても珍しく素晴らしい物に見えてしまうのだった。

「フォルトさん。これ、これは何ですか？ 雲……じゃないですよ？ 乗って、動いています……不思議ですねっ！」

「え？ うん、まあこれが私の「エンブリオ」だからね——って、「エンブリオ」の事くらいは分かる、わよね？」

「す……いふしぎなものの源！」
ふあんだじー的さむしんぐ

——誰だこの子を説明したの……え、いやまさか私達の仕事なのこれは……？

まさかのマスターの容態に顔を見合わせて戦慄する二人。

だが……今更拒否などできよう筈がない。それ以前に、多少不出来な子の教育をする程度、財団での今までの業務を考えれば欠伸が出るほどに簡単な任務だ。

尤も、それはそれで不服がない訳ではないがそれは兎も角——

「マスターさんは「エンブリオ」に興味がおありですか？ ならば都合が良いかもしれま

せんね」

「はい！……えーと、それはどういう事でしょうか？」

「簡単な話ですよ。今私達が向かっている拠点——私達の組織が運営しているクランには、個性的な〈エンブリオ〉を持った方が沢山居ますからね」

「本当ですか？。それは楽しみですね！」

「……あのあの、ラストさん？ 私の「ファンタジア」をあれ奇々怪々の魑魅魍魎らと一緒にして欲しくありませんですけれど……」

そう、今から彼女達が向かうのは彼女らの所属している組織——財団に所属しているSCP—10106—JPの担当職員達のみが所属する特異なクラン。

本人達の適性や要望、あるいは情報収集や任務によって他の大型クランの大概に潜入しているのとも違う——財団職員のみが集う、唯一のクラン。

SCP—10106—JPの研究主任やそれに近い者達が立ち上げ運営し、そして他の各所へ向かわせる為の一時の止まり木でありながらカルディナのクランランキングにも名を連ねる謎の強豪クラン。

活動内容も構成〈マスター〉も外部からはまるで不透明。カルディナの議会からの干渉すら跳ね除ける異常の城塞——

ならば、それを構成する〈マスター〉達の〈エンブリオ〉は、そうであるからこそ他

の多くの一般〈マスター〉から見ても「異常」な物が多い。

その〈エンブリオ〉の特性——異常特性の由来が何であるのかという事はさておき、それは内部の〈マスター〉であるフォルトから見ても確かに比較的個性溢れる物ばかりだと言うのは事実であった。

「自覚していないのかもしれないけれど貴女の『ファンタジア』は紛れもなく普通ではないのよ。非実体存在であるのになんで平然と人を運べるのかは考えた事はないのかしら?」

「ラストさんの『タルタロス』と比べたら全く普通の乗騎チャリオッツ型の〈エンブリオ〉ですけどお!? 一般人確殺じやないですかあれ……」

「沢山の〈エンブリオ〉…………い、あ、あのつ。この子アナンタシエーシヤの仲間も居るでしょうか!?」

「………ある意味では居るわね」

「やったあ!」

『Syqyeeeeeeuuaa!』

——まあちよつと変な魔物型なら普通に複数居るから間違つてはいない筈よね。

——魔物型以上に魔物モンスターっぽい人も居ますけどね。普通に複数。

——……最初にトツプツに話を通しておけば襲われない、と良いなあ……

——あの二人は二人で逆にへエンブリオンがとても凄いアイテムボックスとても凄い通信魔法でしかないから、この子のお気に召すかどうか分かりませんがね。

未知なる不思議との出会いに胸を膨らませるマスターに対して小声で作戦会議を行う子女二名。

正直に言つて、不安だ。不安しかない。それ程までに彼女達が属しているクランは——
——カオス混沌なのだから。

だが、もはや賽は投げられた。どの道マスターの「アナンタシエーシャ」の為にグラ
ンバロアへ歩を向けるにしても準備は必要なのだ。

特にまだジヨブにすら就いていないマスターの準備は……まだ砂漠を超える為の基礎能力すらないのだから。

故に、暫くはあそこへ、あのクランへ滞在するしかないのだ。あの伏魔殿に——

「あ、見えてきたわよ。あれが私達のクラン——あ、クランオーナーオリジンさんが外出してる」

「丁度良いですね。先に挨拶して行きましょうか」

「はい、分かりました——」

まるで複数の建物が融合したかの様な珍妙なデザインの屋敷(?)の前に「ファンタ

「ジア」は降り立ち。

そしてその建物——克蘭ハウスを利用している魑魅魍魎達の長である老人の前に立つ。

——ここから。

〈エンブリオ〉も使っていないのに、一等不可思議な気配を醸し出すその老人の姿を見て……ここから、マスターの本格的な冒険が——物語が始まるのだと直感して。

「オリジンさん、外に出てるなんてどうしたんですか。私達狙われているっていう自覚ありますかー?」

「はっはっは。こうして風を受けながら日光浴なんて現実では久しくしてなかったからね。君たちもどうか、健康は大事だよ?」

「私達に健康とか何の冗談ですか。しかもこの世界ならデスペナになれば元通りですし……」

「まあまあ、それは置いておいて——はい、頼まれていたマスターさんです。この子の世話をするという事で——暫くこの子も克蘭に厄介させていただく事になるかと」

「うむ。承知した——諸々、よろしく頼んだぞ」

「了解!」

「さて、では……最初くらいは多少案内させて貰おうか——ようこそ克蘭

「Superior Calculation Pioneer」へ。歓迎するよ。マスター君——」



そして、始まりたるは数奇な「マスター」、マスターの新たなる仲間達との出会い——
——ではなく。

マスターに齎されるのは、多くの先達共からの洗礼だった!!

「ふおっふおっふお。久方ぶりの新人はまためんこいのう！　ちよつと拷問させて貰つても良いかね？」

「ほう、新鮮な新入りとは——折角だし味見させて貰おうかな！」

「新しいフレンズ!?　フレンズ登録しよフレンズ登録しよフレンズ登録しよ——」

「はいはいこの子の教育に悪いから消えてくださいね——エンドレス・ジ・ニクワガ《万 永 死》」

「「ぐぎやああああああ——!!!」」

「ひえっ……」

異常。異端。異形。異彩。異才。異質——そこは、常とは「異」なる者達の万魔殿。

されどそこは決して気が休まらぬ場所なだけではない。

味方となり得る者も、興味深い楽しい異なる物を持つ者も大勢居るびつくり箱の様な場所でもあり——

「おい。何か人が少ないだが……誰か俺の身体の材料「オリハルコン」余ってる奴居ないかー？」

「フォルトさん、ラストさん。金属人間ですよ、金属人間！ あれもへエンブリオなんですかっ!？」

「そうですよ。あの人は厳密には真鍮人間のブラスさんですね。実に難儀な人です……ちなみに、先程すれ違つた女性は気付かなかつたかもしれないですが陶磁器人間だつたのですよ」

「とうじき……何だかとても凄そうですねっ！」

「擲揄つといて何もなしとは薄情な奴ばっかりだ……!!」

「いや、そもそも私達物理型じゃないんで金属とか普通に持つてないですし……」

そんなクラン、へSuperior Calculation Pioneerでマスターがやらねばならない事。

それは砂漠越えの準備——即ち、よりあえずレベリン強くなる事に他ならないのだつた!

幸いにも規模も大きなこのクランであればその為の準備は容易く達成できるである

う。

勿論、戦闘が専門外である世話役二人に代わり師匠となる者もまた、多い——

「知恵を得たい？ 良かろう良かろう！ 数多の世界を旅しその全てをこの頭の中に収めてきたこの【賢人】^{セイジン}、Drブラックウッドに任せておきたまえ！」

「ほう、迷惑にならない程度に力が欲しいか……瞳を見れば分かるさ。伝承者には届かずとも俺もまた師範として認められし者——貴様には才がありそうだ。促成で授けてやろう——『財団神拳』を!!」

「はい。どうかよろしくお願いしますっ！」

あまりにもリアルでありながら、遊戯^{ゲーム}としての特性を色濃く表すこの世界において、強さと言うのは何をするにしても重要な物だから。

何をするにも、あるいははしないのも、全ては力があつてこそ選べる強者の摂理。

ならば、そんな世界に何も知らずやってきたマスターでさえもその摂理から逃れられる訳はない——故、求めるのだ。力を。

それも、固有スキルが命中すれば実質的に相手を無力化できる【アナンタシエーシャ】

が居れば簡単な事——

「……え、当たれば勝利ことういうモノつてへエンブリオなら割と良くあるんですか……?」

「そう多くはないけど、まあそこそこあるよね? 当たれば終わり、発動したら終わり、範囲に捉えられたら終わりと言う類は……条件こそある物ばかりだけど」

「ちなみに、私の〔タルタロス〕もその部類ですね。私の場合、条件も射撃、トリガー接触、範囲と各種取り揃えてますが」

「がーん……っ!」

例え身近に上位互換が居ようと、負けるなマスター!

〈Infinite Dendrogram〉は、〈エンブリオ〉は無限の可能性をへマスター達に与える物。

【アナンタシェーシャ】も未だ下級の〈エンブリオ〉。共に進化していく事できつとオンラインワンの力がその身に備わるのだから——

「ギガント・ゴーレム」……全く、厄介な物を持ち出してきましたね……つ」

「私達じゃちよつと相性が悪過ぎます。一旦撤退して相性の良い人を——」

「——待ってください。あれは……私が倒して見せます！」

「な……【アナンタシエーシャ】も相性が悪い筈では——」

力を着ける為の日々。繰り返し続けた実験に、蓄積されたりソース。

己の個パーソナリティ性の結実、へエンブリオの進化による新たなる力が今——

「共振ばーんち！」

「あの子に余計な事教えやがったのは何処のどいつですかあ!!?」

……きつと、その内。

明かされる日が来るだろう………

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
………

海、それは■の縄張り

■グランバロア——管理外海域

海。

母なる海。偉大なりし大海原。

それは此処、現実リアルをほぼ完全に模倣しているとされているへ Infinite D
endrogramでも変わらず、その雄大なる姿を晒し続けている。

あるいは……現実以上の威容を余人に見せつけながら。

ただ一国が管理するにはあまりにも手が足りなすぎる程に広大なその面積。

現実には居ない、あり得ない程に巨大な、そして強大なモンスタ非人間範疇生物ー達。

グランバロアの本船から離れた海域や深海にはそれにも増して異質な特殊能力を持つ海の怪物達が屯して——そして、地上とは比べ物にならない程多くの増外の怪物へ UBM が我が物顔で闊歩する。

そして何より、海の化身とも言われる「海竜王 ドラグストリーム」の存在も——

……これは、そんな海での物語のとある一節。
そう、海を縄張りとする■との戦いの話である——



——許さない。

——認めない。

——絶対に、許してなるものか——
!!

我々は、一つの……たった一つの目的の為だけに心血を注いできたのだ。

他の何事にも目をくれず、ただ真摯にそれだけの為は今此処に居る。

力を付けて、技を磨き、道具の力も神秘の力も利用して。

遍く犠牲を許容し自らの損得など考えもせず只管に実直にそれを実行してきたのだ。

この大海に浮かぶ国家グランバロアで。そして、他の国々でも変わらずに。

この世界の海に、そして固有スキルによつて海に限らずともその生息圏を広げていたそれを同志達と共にクランを作り上げ遍く塵殺にしてきたのだ！

一遍の曇りもない我らの理念の元、確実に、絶対に——

天地に居た対人に特化した業を扱う【殺刃鮫 カーナイデス】は屍山血河を築きながら討伐し。

ドライブ皇国の暴走した巨大機械だった【機器鋼鮫 メガロシャーク】は解体し部品の一つ一つを丹念に殴打し。

黄河が信仰していた【鮫竜王 ドラグシャーク】とレジエンダリアの一部族に信仰されていた【天海神鮫 アクイラ】も構わず滅殺し。

アルター王国を襲撃した九種の攻撃方法と八種の耐性を持つ【九頭鮫王 レギンバオラ】は我らが数の前に斃れ。

カルディナで出た砂の海を泳ぐ「砂含鱗鮫　ザボアガレイス」には苦勞させられたが、我らの鮫に特化した「エンブリオ」の前には敵はなく。

勿論、本拠地であるグランバロアでも数多の敵を屠ってきた。

仲間と共に力を付けて、そしてその成果も上々の出来であり、我らの行いを止められるモノなど誰も居ないと慢心していた。

この世界において目的を完遂するのも時間の問題だと……そう思っていた。

——彼奴等に獲物を横取りされ、あまつさえあの様な物を見せ付けられる、その時
で——

許せない、認めない。

彼奴等を、決して逃してなるものか——

我らの理念の元に——鮫は絶滅するまで殴らなければならぬ!!!!

それが我ら——〈The Shark Punching Center〉の至上目的。

それ以外に勘案すべき事は何もないし——故にこそ、絶対的に彼奴等とは敵対する運命と相成った。

さあ、我らが総力を持つて殴りに行こう——戦争を始めよう。

標的は——【暴虐小鮫 エクサロドン】。

そしてその所有者シフィール・ワルツ及び彼奴を庇い立てするへマリッ・ダイバーズ。相手が不死身のへマスターで？ しかもへUBMの特典武器であり再生するから意味がない？

そんな世の摂理常識等知った事か——我らの掲げる名は、目的はただ一つ。

——鮫を殴り続ける者であるのだから——！！



「うみつ。うーみー！　これが海なんですネっ!？」

「そう、此処がこの世界の“海”。そしてあれが海上国家グランバロア本船、【グランバロア号】なのよっ!」

「まあ、私達が世話になるのはもう少し離れた場所にある所ですけどね」

『Shy e a a a a a a a a a a a a a a a a!!』

「おおおー……クライスさん、これが例の!？」

「如何にも——我らの技術の粋も集めて作られた特殊船、【マリンモール号】だ！　我はともかく、私の仲間達はすんごいからなマジで」

「海のオブジェクトの収容の危険度と難易度を鑑みれば、まあそうなりますよね」

「別に卑下らんでも良いだろうが……それは兎も角。此処——へマリン・ダイバーズへは一般のへマスターへも相当数加入しているから、そっちの話をする時は周りに注意してくれよな」

「はーいっ!」

カルディナでの修行も、身支度も終え、マスター擁する一同はその行く先を海上国家グランバロアに定める。

見渡す限りの海、海、海、海——「アナンタシエーシャ」もご機嫌でその身を浸し、そして「マスター」達も一息吐きその身を休ませる為にとあるクランに身を寄せる。そのクランの名は——「マリンドライブ」。主に「エンブリオ」の力による深海活動を専門とする精鋭クラン。

財団職員も複数在籍しているその特殊クランであるが、今はどうやら暗雲が——？

「クソっ！ また奴らの——「The Shark Punching Center」の襲撃だ——ッ!!」

「皆、応戦を頼む！ 海賊クランなんかになんかに負けてたまるかよ——！」

「戦闘用意！ 皆「潜水服」の準備は出来た!? ——仲間シフィールちゃん間をあんな奴らに渡せる訳ないのよねっ！」

「《夢忘の吐息》——っ！」「《風よ、来い》」「《私ハ全テ飲ミ込ム嵐也》」「《冥魔の輩》——

「行けい！」

「そうだ。今のが前に話した海賊クラン、鯨殴りの野郎共だ。日に日にエスカレートして来ていてな……どんな形でもいいから今は戦力が必要なんだ。頼む、一緒に戦つてくれないか？」

「シフィール、良い娘。……デキレバ、助ケタイ」

「絶滅危惧指定種のモンスターの根絶に、鯨人系統の亜人種及び鯨系統の従属モンスターに対する無差別殺傷事件多数……むしろ、良く今までこれで監獄に送られてないですわね……」

「手口の巧妙さと偏に実力、だな。あいつらもあいつらで俺らと同等以上に尖った奴らばかりだからな」

襲撃してくる海賊クランとの戦い、応戦、迎撃——慣れぬ戦いの日々。

周囲への被害の為に国の船から離れた場所での戦いは果たして吉と出るか凶と出るか。

そして、総ての怨念が無夢に還る。

名も過去も何もかも失っていたマスターの……初の大金星。

その世界の大衆に、ただのへマスターではない、マスターの名が初めて刻まれた事件だった——

「……え、海水に固有夢スキルの残滓が混ざって周囲のテイアンにも被害が出てたって？」
「準指名手配扱いになってますね……これは、河岸を変える必要があります」

あるいは不幸中の幸い

□■皇都郊外・〈叡智の三角〉本拠地

〔機械王〕



ラインハルト
L ・ ドライフ

〈叡智の三角〉。

それは、つい最近^{ここ数年}現れたドライフの〈マスター〉の一部が中心となって作られたとある克蘭だ。

——そして、その短期間でこのドライフという国にとって無くてはならない程の技術と実力、人材を築いた超大型克蘭にして——ドライフ皇国克蘭ランキングの堂々たる一位の座に就いた特別な克蘭でもある。

まず特筆すべきはその技術力——機械技術を信奉するこのドライフと調和する、あちら側の機械技術に傾倒した者達。

それが、〈マスター〉となってこちら側の機械技術と見事噛み合わせたもの——と言うのが彼らを表す上で最も適切だろう。

特に、彼らが作り上げた人型機動兵器、〈マジンギア〉の中でも正式採用機の後継と相成りその名を世に刻んだ「マーシャルII」の製造、量産はそれだけで難易度：10のク

エスト複数に匹敵する程の偉業だ。

今となつては皇国全土に「マーシャルⅡ」の量産、配備が行き届き、寒村を襲うモンスター達の被害は劇的に改善されてきており、あるいは各地を治める貴族達よりも感謝されている事もある程だ。

勿論、モンスターの被害が減つてきているのは「マーシャルⅡ」のお陰だけではなく、他にも多くの人々を救わんとする「マスター」の意思あつての賜物であるが——やはり、自分達の力でモンスターに対処できる様になつたという事は今の国民達にとつては大きな意味があるという事だろうか。

そして、そんな「叡智の三角」の彼らの特筆すべき点とはただ「マーシャルⅡ」を作つた様なこの世界に非ざる技術力だけではなく——彼らが「マスター」であるが所以の「エンブリオ」も挙げるべきだろう。

勿論、彼らの精神性を鑑みても多くは機械製造に関連する「エンブリオ」であるのは事実であるが……知らぬ者は驚くかもしれないが、現時点での「マーシャルⅡ」の量産製造の過程においては——「マスター」が持つ最大の力の源である「エンブリオ」は一切使われていないのだ。

だが、それもある意味当然だ。

何せ——量産型。

たった一人の〈ヘマスター〉の、〈エンブリオ〉の助力を失くした程度で生産ができなくなる程度のものであれば、「マーシャルII」はそう呼ばれてはいないのだから。

不定期にあちら側の世界に行く〈ヘマスター〉が関わるのであれば尚の事だ。

勿論、量産に当たってより効率よく製造を進める為の力を持った〈エンブリオ〉を用いて効率化はしているが……それがなくても効率が悪くなるだけで製造が不可能になるなんて事はない。

当然、ティアンだけであつても製造、量産できるようになつているからこそ彼らの偉業がより映えるのだが——それはさておき。

では、そんな彼らの他の〈エンブリオ〉は一体何に使われているのか？

——決まつている。所属している〈ヘマスター〉達自身の……そして、克蘭自体の強化だ。

克蘭ハウスの魔改造化、〈エンブリオ〉を用いた克蘭メンバー限定の門外不出の固有スキルで作られた機械群にTYPE：ガードナーやチャリオッツでの従属された機械の〈エンブリオ〉も。

オーナーの〈エンブリオ〉の様に素材から特殊なものを作るのもあれば、完成形の機械に後付けで更に強化改良を付与できる物まで種々様々。

量産型には行われぬ多くの秘儀を抱える〈叡智の三角〉は確かに、生産面だけでなく総合的にもドライブ皇国のトップクランであるのだ——



「なるほど。つまり殿下はそんな私達にいつもと違う依頼をしに来たと——まあ、私達と殿下の仲で詳しい、謹んでその依頼クエスト、お請けしたいと思えますよ」

「それは有り難い。私としても、護衛能力という点で言えば此処が皇国で最も堅牢だと思っていたからね」

「……………ふむ？」

〈叡智の三角〉本拠地。

そこで、ドライブ皇国の皇族たる私、ラインハルトが〈叡智の三角〉オーナーを含む〈マスター〉陣と対話していたのは、偏にその依頼の為だった。

前述の通りに、今回の依頼……とある人物を匿ってもらう護衛依頼において、ここ以上に適した場所はなかったから。

そして、皇族の中でも「機械王」である私が少なからずこのクランと縁を結んでいる

為、話を通し易いだろうと判断されたから——そうグスタフ皇子が判断し、私に仲介を頼まれたからであつた。

……そう。この依頼、今回の護衛任務はドライブ皇国の最高権力、皇族肝煎りの極秘任務だ。

現在、このドライブ皇国は緩やかに——とすら言えない程に重大な危機を迎えている。

一手間違えれば滅亡が確定しかねない程の国難。一般市民達や、国民とよく関わっているへマスター達ですら薄らとその予感を感じている程の重大事に、災厄に……直面し掛けている。

その災厄の名は——飢餓。

歴史上、幾つもの国が滅ぶ原因ともなつたそれに……七大国家と呼ばれるこのドライブ皇国も陥り掛けていたのだった。

確かに、元より皇国の大地は農業に適さず、食料自給率は高い物ではなかつた……が、それでもある程度は作物も育てられたし、隣国や友好国からの輸入もあり、贅沢できる者はそう多くはなかつた物の安定はしていたのだ。

しかし……ここ数年、へマスターが多数現れ始めるその少し前から、その均衡は崩れつつあつた。

今まではある程度は作物を育てられた大地で作物が育たなくなり、そして隣国、商業国家であるカルデイナはそれを知ってか知らずか食料の輸出を大幅に絞り始めた。

——食糧難の始まりである。

まだ、国にはある程度の備蓄はある。

しかし、当然ながらそれは日に日に減っていく、そして補給の見込みは今の所、ない。王国は友好国の危機に無関心であり、カルデイナは更に輸出を絞り、もはや殆ど食料を輸出しなくなった。

国民達や配下の貴族達にも節約する様に他の皇族達が触れを出しているが……先の見えない制限にまだ目には見えなくとも、不満が溜まっていくのが肌で感じ取れる程。

いつ決壊するか、あるいは決壊する前に限界を迎えて飢餓で絶望の内に死ぬのか——

——そんな事は、曲りなりにも皇族の一人として放置できるものではない。

それ故に——

「護衛、というのは……護送、じゃない様だねえ。つまりは——」

「そうです。此処で、安全な場所で匿い続けて貰いたいのです。……もし良ければ、クランに入れて保護して貰えればより良いのですが」

「ああ、先触れの手紙はそういう事ですか。まあ、最近また新人も増えたと構わないけど

も——しかし……その子ですよねえ？」

「……お願いできるでしょうか？」

「無理とは言わないけどねえ……」

話は続き。

依頼の段になり、オーナーであるフランクリンが私を——否、私の後ろに無言で控えていた少女を見て言う。

……彼女の言いたい事は分かる。それはもう痛い程に。

年齢の程は私や、私の妹と同じくらいだろうか。

〈マスター〉の初期装備である布の服のみを纏い、それ以外何も身に着けず、空虚な瞳で彼方を見つめ続けて口を開いているだけの——白痴の〈マスター〉の少女。

特務兵が偶然見つけ、保護してきた——民の希望になりえる存在。

それが彼女——トースターであった。

尤も、彼女は〈マスター〉の中でも殊更特殊な存在ではあるが。

その理由は——

「それで、彼女は」——パンが焼けました」

フランクリンが話そうとしたその直後。

何の脈絡もなくトースターがそう言い、微かな光に包まれた。

そして——次の瞬間、彼女の眼前に抱える程の肉塊が生成され、それを受け止めて——無言で私達の方にその空虚な視線を向けてくるのであった。

……そう、彼女の〈エンブリオ〉の能力は——

「パンじゃないじゃない……じゃなくて、食物の生産。それも、半自動つて所かねえ？

良くこんな〈マスター〉見つけられたもんだ」

「ええ、全くです。……見ての通り、色々と問題があるかと思われませんが、やはり〈マスター〉の世話をするなら〈マスター〉に依頼するのが筋かと。——頼まれてくれるでしようか」

「皇国のクランとして、それを見てから放り出す程薄情なつもりはないんだけどねえ。

……それに」

そこで一区切りし、背後の——〈叡智の三角〉の広間、クランメンバー達が屯しているであろうそこに僅かに視線を遣り——呟いた。

「その子も、最近入った新人と何となく気が合う様な気がするからねえ。——木を隠すなら森の中作戦と行こうじゃないかあ！」



……何故かテンション高めめに快諾するフランクリンの姿を前に、私はどうか無事で
あつてくれと祈る事しかできなかつた………

「——君達の近隣で適当なクランを当たったが、君達的能力や活動様式からも鑑みて——王国、皇国の〈Wiki編纂部〉あるいは〈バビロニア戦闘団〉〈叡智の三角〉等が妥当だろう。どれであつても既に加わっている職員を通して加入させられるが、どうする?」

「Wikiのクランと戦闘メインと生産メインですか……どうしますか、マスターさん、フォルトさん」

「私は何処でも——」

「私は〈叡智の三角〉に一票かなー! これ以上この子に戦闘寄りにさせたくないしつ」

「……………なるほど。一理ありますね」

「……………君達も中々苦勞しているのだな」

「元はと言えばエアードさんとオラクルさんの頼みですけどね……………」

「あ、決まっただんですね。ところでところで、ドライブ皇国の、〈叡智の三角〉……………
どういう所なんでしょうかつ!」

「まあマスターさんはそこからですよ。そうですね、その二つであれば、表すのに一言で十分ですよ」

「——機械の国。そして、それに相応しき克蘭ランキング一位の機械の克蘭よ——」

紆余曲折の末、三人の珍道中の次なる宿木は——ドライブ皇国克蘭ランキング一位、〈叡智の三角〉と決定された。

この世界における最先端技術を持つ国家、そしてその中でも設備も、技術も、資材も人材も、あらゆる面でトップたる、即ちこの世界において一番の技術力を持つ克蘭、それが〈叡智の三角〉。

ならば、そこに所属している者達は紛れもなく最高のエリート達に違いない——

——と言うのは、大きな間違いであったと彼女達が気付くのにそう時間は掛からなかった！

「何故分からんのだ!?」 ロボ物にだって——お色気要因は必要なのだと! 魅力的なロボットに搭乗するのは魅力的な登場人物! どちらも欠かす事は認められんのだ!」

「お前こそ分かっていない! どう考えても一番の主役はロボットなんだ! ならば彼はロボのおマケ! 付属品! リソースを注ぎ込むべき所を間違えてんじやねえ!」

「くそっ! 実際に書くのは僕だからって好き勝手言いやがって——だが、どつちの主張も分かる、分かってしまう! 僕はどうしたらいいんだフォルトさん——!」

「——ロボ異世界転移無双地球舐めんなファンタジー系とかどうですかね?」

「「邪道だああ——!!!」」

「ラストさん《メ^取デ^想イ^想テ^想ーシ^想ョン》は済んだ!? こつちに魔^M力、満^Pタンまでお願い!」

「ああああああアームパーツの生産が追い付かない! クールタイム、クールタイムはまだ明けないのー!?!」

「《メ^取デ^想イ^想テ^想ーシ^想ョン》終わりました、MP補充始めます。……どれだけ仕事を引つ張つて来てるんですか、ここのオーナーはっ」

「あつはっはー！ 今作れば作るだけお金と経験値と信頼とクエストポイントが稼げるボーナスステージだからねー——はい【MP回復ポーション】あるだけ買い込んで来たよー！ もうひと踏ん張りだよー！」

「もうひと踏ん張りそれもう五回は聞いたんですけど!？」

奇人、変人、趣味人、異人——正にそこは万魔殿のお膝元。パンデモニウム

常人が常人のままできる事などできないのか、あるいは類は友を呼んでいるのか。だが、それも致し方ないのだろう。

ドライブ皇国のトップ克蘭であり、技術屋の望んだ楽園であり——そして、へSupport Calculation Pioneerを除外せば最も多くの財団職員が紛れ込んでいる克蘭でもあるのだから——!!

「特殊新規兵装開発部門……ね。良く言い包めたものですね」

「これでも皇国用の兵装だって確り開発しているのだよ? ——このSCP—1010 6—JP内での実験の隠れ蓑にもしている、というだけで」

『大規模な実験は流石に出来ないので、カSuperiorルCalculationテイPioneerナの本部に依頼しているんですけどね』

「フフフ、ゆくゆくはウチの部門から【マーシャルⅢ】を——」

「……あれ、目的逆転していませんか？」

『……財団職員には……〈叡智の三角〉では良くあるコト』

「ジェラルドの野郎を新作のテスト機に乗せやがったのは何処のどいつだあ!？」

「えっ、あの人もテスターの【高位操縦士】だと聞いていたんですけど……」

「ああ、新人のティアンの子は知らないのね! あれは操縦させちやいけ……ない操縦士なんですよっ!」

「止せ、やめろー!! 折角作り上げた機体が——」

『確か今回は耐久試験でしたね、了解! 《超オ々々パ々ロ々ド過駆動》!!』

「「ぐわああああああ——!!!」」

だが、そんな中で、新人へマスターへであるマスターは新たな友を得る。

その名はトースター——奇しくも似たような境遇である、白痴の〈マスター〉だった

「かれーぱん」

「へえ、そうなんですか？」

「ほつとさんど」

「ふむふむ、なるほどー……」

「めろんぱん！」

「うん、ありがとうございます！」

「そういう訳でオーナーさん、トースターさんはMPやSP、HPをコストにすればもつと食料が出せるから私も鍛えて欲しいって言ってましたよーっ」

『Shyrrrrrrrrrrrrrrrrrr!』

「なんで翻訳できるんだろうねえこの子は……」

共に異常特性に晒された者同士、何処か人並み外れてしまった者同士。

悲しいかな、この技術クランにおいて特に目立った仕事がない者同士——行動を共にする事が増え、そして仲良くなるのも時間の問題であつた。

そして——遠からず知る事となる。

その仲良くなつた彼女が狙われていると言う事も——

「相手は所属不明——という事になっている暗殺者達、いずれも凄腕だよお？ それも、ウチの防備を抜けて来られると言うなら尚の事の、ね」

「相手が強いと言うのは、戦わない理由には、なりません……！」

「——良い啖呵だねえ！ 宜しい、それじゃ頼んだよ。可愛い護衛さん——」

そしてマスターは、物知らぬが故に当然の如く——戦いの中に身を置く事を決断する。

未熟で幼いマスターの、無知故のその決断が、何を齎すのかも無自覚なままに。

「クランハウスの防壁が抜けられた！ あいつ、元特務兵の——サイバーアサツシンだ

！」

「《アサシナイト》——！！」

「かつサンド——!?」

「トースターさんは、私達が守って見せます。行きます——！！」

『Shrrrrruaaaaa——！！』

——こんな境遇の己を、他と変わらず見つめ接してくれた友を守る為に。

新たな居場所を、今度こそ守る為に——マスターは三度戦いの壇上に登る。

己の力の餌食となる贄を探し求めて——

「共振ー、遠当てえー！！」

「馬鹿な、その歩法はぐべらあッ！」

「マスター——ッ！」

……二人の教育虚しく。

暴力に完全に目覚めてしまったマスターの明日はどちらだ——!!

To Be Continued………

突発的危機誘発性遊戯

□ ■ ドライブ王国最北西 〈巖冬山脈〉近郊雪原——

「あははははは——♪ 雪よ雪、大雪よー!!」

雪、雪、雪雪雪——

辺り一面に降りしきる雪景色、銀世界。〈巖冬山脈〉より漏れ出る冷氣によりシステム的には〈巖冬山脈〉の敷地ではない一般フィールドにまで真つ白な雪原となつてしまつていた荒野を、二人の〈マスター〉が進んでいた。

辺りには二人の他に人間は誰も居ない。

——当然の事だ。此処は〈巖冬山脈〉の正面玄関から逸れた人里離れた遠隔地。

〈巖冬山脈〉に程近いこの場所は常人が対策もなしに足を踏み入れられる程穏やかな環境ではなく、亜竜級以上のモンスタ非人間編織生物ーが当然の様に複数種群棲している極限地帯。

勿論、この環境故にここで採れる素材などもあるが……そこに住まうマスターも含め全てが〈巖冬山脈〉の劣化版。

それでいて実際に〈厳冬山脈〉へ行く者からすれば道から外れ寄る価値すらない場所。その上、その中間の難易度を狙う者からしても環境が苛烈に過ぎてリスクとリターンが全く見合っていないと言う、狩場としての旨味すらない場所だった。

「おい嬢ちゃん、はしやぐのは構わねえんだが流石に声は落とさねえか？ 俺らの声で雪崩がーなんて事はないだろうが、それでもモンスターの一匹や二匹呼び寄せちまうだろうよ」

「へーきよへーきー！ 誰が私達を害せるものですかー！」

そんな極限地帯であつても少女は変わらずはしやぎ続け、それを咎める壮年も一応口だけ注意はしても、重ねて注意するつもりもないのか少女の言葉に肩を竦めるだけに留め、黙つて後をついていく。

——何故なら、実際にこの二人の〈マスター〉にとつて、この環境も、そして周囲で二人を囲んでいる数多のモンスターも、全く脅威ではないのだから。

故に、この遊行は所詮ただの散歩。

ちよつと気分が向いたから少し遠出して歩きに出かけたと言う、ただそれだけでこんな所まで来た魔人達——それがこの二人なのであつた。

少女の〈ハマスター〉。名を芽愛。

典型的な黒髪に黒瞳を好奇心に輝かせてはしやぎ回る童の〈ハマスター〉。

もう一人は壮年の〈ハマスター〉。名をMr. MJ。

少女の行動に洗面を作りながらも行動を共にする、赤髪茶眼の筋骨隆々なエージェントの〈ハマスター〉。

容姿も、思考も、年齢も、何もかもが違い、そして現実^{リアル}においても何らかの接点がある訳でもなくそもそも国籍からして違う二人。

壮年が少女の護衛という訳でもない——しかしそれでも、対等な、同等な存在としてこの世界で付き合ってきた二人には大きな……複数の共通点があった。

——〈エンブリオ〉？

然り、その通りだ。

二人はほぼ能力特性が同じである〈エンブリオ〉を持ち、それ故にこの状況をまるで意に介していないというのは全くその通りであった。

この〈Infinite Dendrogram〉ではままある関係性であり、故にこそこの二人を知る多くの者はそれで納得するだろう。

——だが、違う。

実際に二人が共通し、共感し、そして諸共に行動しているのは——その一つ前の段階だ。

それは……その様な、ほぼ同じ能力特性を持つ〈エンブリオ〉を創出させるに至った、そのパーソナリティ。

二人の根源にある物——そこにこそ、非常に強い共通点があつたからだ。

あるいは、そこに関わる“組織”——財団と、そしてオブジェクト。

そう。二人は、ある意味で真逆にして非常に似通つたオブジェクト——その者なのであつただから。

少女、芽愛——否、SCP—060—JPと呼ばれていた者。

壮年、Mr. MJ——否、SCP—451と呼ばれていた者。

共に、実際に二人は存在していたにも関わらず、現実に存在できなかった者。

しかし——この世界、〈Infinite Dendrogram〉、SCP—10106—JPと財団の技術と知識によつてこの世界で常人としての生を手に入れた二人は——当然の如く、そういう〈エンブリオ〉を創出した。

銘を「現消会帰 ブリッククヴェインケル」、「幽玄幽鬼 グウエイ」。

共に——「世界からの消失」に特化した固有スキルを持つ〈エンブリオ〉を創出した二人は、TYPEも違う全く別の〈エンブリオ〉であるにも関わらず同類であるからか、何故だか消失した互いにも干渉が可能な不可思議な特性を有していた。

故にに基本的に二人はペアを組んでこの世界で暮らす事と相成っているのだった。

それも、元来優秀な財団エージェントであるMr. MJと、年を経ても成長しない少女であった芽愛の関係性からすれば妥当なペアなのであった。

今はMr. MJが主となり、ドライブ皇国の〈叡智の三角〉戦闘斑兼実験パイロットとしての役職を賜りながらも二人の一般へマスター〉として普通にこの世界を楽しんでいるのだが——

「——ほら、奴さんが五月蠅いってよ?」

「えー? これ以上声小さくしたら吹雪で何も聞こえなくなるよー!」

二人のそんな事情を知らないモンスター達は、久しぶりにこの地へやってきた獲物達を前に、とつくのとうに抑えが効かなくなっていたらしい。

どうやらこの一帯の縄張りの主らしき大型の魔獣が群れを成して二人に近付き——

白雪に紛れて逃げる隙間もない程に包围を完成させてしまっていた。

一体一体が最低でも亜竜級以上、リーダー格は純竜級に届く程のステータスを持ち、サイズは人間よりも大きい程の大型獣が数十体。

本来であれば冷気による弱体化が掛かる事も鑑みれば超級職も持たない人間ティアンであれば複数パーティを揃えたとしても絶死の状況。

だが――

『GYARUOOOOOOOOOOOOOOON――!!!』

「――《アイメンション・リープ》」

「――《電霊変異》」

獣達の突撃と同時に……へエンブリオの固有スキルの行使。

それだけで二人の存在が世界から消え去った。

あらゆる干渉も、感知能力も意味を為さぬ完全なる消失。

本来そこに居る筈であっても触れる事すら叶わず……二人を狙っていた獣達で互いにぶつかり合う無為を晒す。

突然消失し、気配も匂いも何もかもなくなった二人にまるで化かされたかの様に互い

を見やる事しかできない……

だが、それで当然なのだ。それこそが特化された二人の〈エンブリオ〉の力なのだから。

そして、その様子を消えた筈の二人も、それを見てしてやったりと笑っている事だろう。



だが。

（——いったーいっ！ 何処っ、此処何処なのー!?!）

（受け止めてやっただろう。落ち着け。——そして此処は……）

獣たちの襲撃を回避した直後。

二人は——地下に落ちていた。

……本来であれば、あり得ない事だ。

二人が行使できるこの世界からの消失だって、確かにその概念的には非常に強力な物であり、あらゆる物に優越する事象の様に思えるが……実際はこの世界に在る全てと干渉できなくなる訳ではない。

その最たるものが、地面だ。

元より空気と干渉はできなくなっているのに、地面とも干渉できなくなってしまうえば、そもそもその場から動く事すら不可能となる。

勿論、重力と言った法則などにも干渉されるがままなのであるが……その為、本来であればこの様に地面を透過して地下に落ちる、と言った事はあり得ない筈なのであつ

た。

——そこが本当に地面だったのであれば、の話だが。

(……なるほど、此れは中々に大発見かもしれないな)

芽愛を宥めすかしながらMr. MJが見た物は。

明らかに自然物ではない加工された形跡の残る床面と壁面、そして前後に伸びる長く長く続く通路——この時代、誰も足を踏み入れた事がないであろう未踏の〈遺跡〉だった——





新たに見つかりたるは未知なる〈遺跡〉。

果たしてその存在に興奮しない者が〈叡智の三角〉に居るだろうか？ —— 否！
居る訳がないのであった！

当然の様に彼らは即座に〈遺跡〉探索のチームを編成し、何者にも先んじてその〈遺跡〉へと足を踏み入れる事になるが……これもまた当然ながら、そのメンバーは一癖も二癖もある者達ばかり ——

「ようーしこれで完全に決まったねえ、点呼するよ——探索班隊長パーティリーダー兼責任者の【大教授】フランクリンだよ。解析なら任せてねえ！」

「斥候役兼戦闘班の【疾風操縦士】AR・I・CAだよ！ 危険察知（ガチ）ならアタシにお任せ！」

「斥候役兼戦闘班その二の【獣戦鬼】のマスターです。未踏の〈遺跡〉なんて、わくわくしますね……！」

「技師兼雑務役の【高位技師】ぶーらんたんだ。いやー流石にテンション上がるなあ！」
「技師兼雑務役の【賢者】ハグルマです。より多くの実りを持ち帰れるよう全力を尽くしましょう」

「案内役兼戦闘班の【大銃士】MJだ。……なあオーナー？ 本当にこの人選で大丈夫なんだよな……？」

「第二班バックアップに班長やトースターちゃん達も控えて貰ってるからこれがベストなんだよお。大丈夫だ問題ない、ってね。それじゃ、未知なる〈遺跡〉へレッツラゴウ——ツ!!」

ベストなメンバー。万全な体制！

蓄積されたこの世界の技術の知識に現実世界の技術の知識。それも、その双方の最高峰を備えた〈叡智の三角〉遺跡探索メンバーに不可能はない——

——かの様に思われていたが、現実はそう甘くはない！

「ヒューー！ デストラップとデストラップと、そこにもデストラップとこの先にもデストラップの盛り合わせだよ！」

「ようしMJを前方に投げて様子見しよつか！ 罠があるなら先に何かあるかもしれないしねー！」

「鬼かお前ら!?!」

「あれー。足が勝手に後ろに——」

「あつ！ BGMだと思ったら《望郷》ノスタルジイの呪歌だなこれ！ 今すぐ耳を塞げえーい！」

「ほう、これは面白い偽装ですね。オーナー、ベルドルベル氏の助力を仰げば我がクランにもこれ以上の物を導入できるのではないでしょうか？」

「良い提案だねえ！ メモに書いておくよお」

「言ってる場合かー!?!」

罨、罨。罨罨罨罨——〈遺跡〉内部に数多張り巡らされる、侵入者を拒む罨の数々。それらを叡智溢れる技術力や戦力を以て踏破していく彼らは——次第にこの〈遺跡〉の秘密に近付いて行く。

「探査魔法が通じない……!? 違う、ここはまだ深部ですらない——ただの前段だったんだー!」

「積層式の隠蔽結界、か。どうやら此処を作った人はよっぽどの臆病者みたいだねえ?」

「罨があれだけあったのに、守護者のモンスターの一部もなし……って言うのは、おかしいよねえ?」

「生命の気配が全くありません。これは、まさか——」

「——計測、完了しました。今この時にも、確かに我々から僅かずつHPやSP、MPが吸収^{ドレイン}されて居る様です」

「……あの不格好な兵器庫に作り掛けのお人形^{人型兵器}。なるほど、此処は——」

「過去、〃化身〃とやらから逃げ隠れしながら作られた兵器開発室の一つ、という所だねえ。まあ、こうやって放棄されている所を見るに上手く行ったかは察せられるけども、ね」

「……いえ、どうやらそれだけではないようです、オーナー。ここは——」

「——いけない、罨だッ！ 退——嘘、隔壁ッ!?」

時間か、進行度か、あるいはそれ以外の何かか——けたたましく鳴り響く警報音と共に突如として〈遺跡〉はその様相を大きく変える。

兵器工廠から——侵入者の〃化身〃を逃さず抹殺する為の逃れられぬ牢獄へと。

「此処で話していても吸収は止まりませんっ。ともかく前へ——探索を続行しましょうっ」

「通信は……駄目かあ。仕方ない。取得物はMJに預けてる。一足先に班長達の所に戻っというて。……私達がデスペナになったら後はよろしく頼むからねえ」

「ああ、任された——」

「先程見つけた見取り図からして……もうあの大扉の先の工廠以外は探索を終えましたね」

「あはははは。こんなあからさまにボス戦ですよなんて主張する展開ある!?!」

「私達の戦いはこれからだ——!」

——されども彼らも伝説に謳われし不死不滅の超人、〈マスター〉。

死など恐れるに足らず——更に〈遺跡〉を進み、進み、進み——ついにはその最深部へと辿り着く!

「あれは——ミルキイ・アジター【白水晶之戦導者】、まさかジュバの【黄水晶】の同型機か!?!」

「パワードスーツ型……【マーシャル】の類型だね! いや、原型って言った方がいいの

かな？」

「穴が開く程設計図も機体も見て参考にさせて貰ったよねえ。いやあ懐かしいよねえ？」

「同感だ——あれが最初にして最後の守護者でなければの話だが」

「『——二、ルイジシタハンノウをケンチ。シンニユウシヤヲ——ハイジヨシマス』」

「オーナーは、見えていますよね？ ——中の人の事」

「——勿論。私は【大教授】だよ？ 全てお見通しだとも」

「強い強いッ！ これは、同情してあげる余裕なんかないよねっ！」

「勿論です。元より——手加減するつもりなんてありません！」

「私は——死にたくないんですからッ!!」

——激突。

かつての名匠が残した遺産と今を生きる名匠達の戦いのその結末は。
そして、皇国トッププ克蘭の成果は果たして——!!

「はい皆ちゆうもーく！ ウチで保護して此れから仲間になる【魔キング・オブ・イリーガルギア機王】でクマムシの亜人のラッツ君だよお！」

「コンゴトモヨロシク！」

「な ん で ！ ？」

……ともあれ。

そうして、未踏の〈遺跡〉探索は、大成功で終わったのであった——！

To Be Continued……

友達が多い方が良いよねというお話

□■皇都郊外・〈叡智の三角〉本拠地 ギガ・プロフェッサ「大教授」Mr. フランクリン
11月某日。

皇国克蘭ランキング一位、〈叡智の三角〉。

その本拠地——克蘭ハウスは皇国の首都ヴァンデル Heim の郊外の広大な土地を使つて建てられた巨大な研究設備兼工廠だ。

周囲にも多くの空き地を抱え、新兵器の試験やTYPE・キャッスルの〈マスター〉のメンバーが円滑に利用できる様何重にも配慮されている。

内部には部門別に分けられた複数の研究室が立ち並び、更に広間や会議室、談話室に娯楽室、各種資材が収められた「アイテムボックス」が敷き詰められた倉庫に食堂、事務室まで多種多様な居室が設けられている。

各々の施設の規模も機能性も非常に高く、流石は克蘭ランキングのトップランカーの克蘭ハウスだと感心される事も少なくない。

……尤も、最初から此処まで立派な克蘭ハウスだった訳ではないのだが、それはさておき。

そんな御立派な〈叡智の三角〉のクランハウスであるが、当然ではあるが内部には居住施設も存在する。

テイアンのサポートメンバーの為に、リアルの時間もこっちの時間も気にせず作業を止めない様なクランメンバー達の為に、そして、クランオーナーやサブオーナーと言ったクランの中でも重要な位置を占める者達専用の個室も設けられている。

この大きなクランを纏める責任ある立場にして、多くの機密情報を扱う者であるが故に——かどうかはともかく。

その〈叡智の三角〉の個室の一つ——クランオーナー、Mr. フランクリンは自らの私室で数多の紙の資料、そして自筆のノートを見比べ唸っていた。

「これとこれとこれを組み合わせれば……行けるかしらね？ 本来であればオカルトを持ち込むのなんてナンセンスだけでも、まあ皆の頼みなら仕方ないよねえ」

彼が見ていた資料は以前作成した「歌うエンジン」の資料、皇国の〈Wiki編纂部〉からそれと比較する為に高値を払って取り寄せた天地の絡繰り人形やレジエンドリアの精霊人形に関する資料、そして死霊術に関連する資料——だけではなく。

——今まで数多の依頼クエストをこなした上で得た信頼によって皇国の上の方から借り受け

た極秘の資料……先々期文明時代の動力炉に関する資料。

……元より、この資料を手に入れるのはクラン、〈叡智の三角〉としても当初より抱いていた夢だった。

ロス失トわテクれノたロ技ジー術。しかしそうであっても〈マスター〉の〈エンブリオ〉や現実世界の技術を併せればそれを再現する事ができる可能性はあると考えたからだ。

当時の限られた情報だけでも、もし動力炉を作成する事ができればできる事は無限に広がっていく——そう思っていたからだ。

しかし……やつとの思いで実際に得られた動力炉に関する資料は穴開きばかり——ではなく。

今の時代の技術者達ではテイアンであろうと〈マスター〉であろうと全く理解できないブラックボックスの部分が多量にあったのだ。

可能な限りの解説と出来得る限りの再現を試みても……実験は失敗に終わった。

非常に重要な部品が足りないかのように……まるで起動する事もなく、クランの皆と、ついでに皇国のお偉いさん方と一緒に肩を落としたものだ。

その後何度かの追試を経て、現時点では再現は不可能だと結論付けられてこの資料も仕舞われておいたのだが——

「いやあ、やつぱりこれを思い付くのは間違ひなく変態でしょう——精神的エネルギーをリソース的観点から見てそれを動力にしよう、だなんて」

——怨念動力構想。

仮称としてそう銘打たれたそれは、魔力に代わる動力を用いる事で機体の効率化、自動化、半永久機関化等が可能なのではないかと言う論旨の文章だ。

——そして、それを発展させた機体の開発研究を行う許可を求める嘆願書だった。

死霊術師系統が扱う魂より発せられる負の精神的エネルギー。

死霊術師系統はそれを爆薬にしたり物理エネルギーに変換したりする事が可能であり……それを応用する事で機械の動力にする事も可能であろう、という事はフランクリンも理解できた。

……しかし、その上でその難易度が非常に高いであろう事も。

マジンギア——〈魔法と齒車〉。

その名前が示す通り、ドライブ王国で主に使用される機械技術や〈叡智の三角〉が使うそれらと「魔法」と言うのは不可分な存在だ。

動力を魔力で補っている以上それも当然の事だろう。

それ故にこの〈叡智の三角〉に所属している彼らは当然魔法に関しても熟知しており、

その上でこの魔法と言う存在の奥深さに関しても重々承知なのであった。

機械技術系以外の魔法系統のジョブに就いている者も珍しくない。

そんなクランのオーナーであり、本人も「大教授」という研究専門の超級職に就いているMr. フランクリンはその最たる者だ。

だからこそ、技術的な問題、魔法的な問題、怨念と言う存在の持つ特質からなる問題
e t c e t c ——この構想を実現させる為には多くの問題点がある事が予想出来てしま
まう。

勿論、彼の想像が全てではなく、幸運にもやり遂げられる可能性も無きにしも非ずだ
が……それでも、知識があり、常識的に考えればその可能性が低い事は火を見るよりも
明らかだった。

——常識的に考えれば。

「ふふふ、へマスター」は常識の外にある存在だ——なんて言ったのは何処の誰だったっ
けねえ」

無限の可能性を謳う〈マスター〉の可能性の卵——〈エンブリオ〉。

それを以て常識を覆す事が出来る程の超人であるからこそその、〈マスター〉だと嘯く者も居る程に。

そう——出来るのだ。適した〈エンブリオ〉があれば。

その構想が抱える多くの問題を解決できる〈エンブリオ〉さえあれば……解決できるのだ！

だが、悲しいかな。〈叡智の三角〉は技術屋達のクラン。

怨念に関する物、怨念や、或いは精神を制御できる類の〈エンブリオ〉を持つ〈マスター〉は所属している訳がないのだった——たった一人を、除いては。

「——オーナー？ 戦闘班のマスター、只今参上しました。何か御用でしょうか……？」
「待っていたよお。入ってきて頂戴」

そして、今しがた呼び出したのが、その要の〈マスター〉——マスターだ。

世にも珍しい無垢なる記憶喪失の〈マスター〉——と、云う事になつている、そこそこ前に入ってきた、このクランでは特異な〈エンブリオ〉と経歴、そして戦法を有する

戦闘班の中でも上位の成績を持つ優秀な子。

——そう、精神に関する「エンブリオン」を持ち、その上で怨念に関連する特典武器、「囚獄胎海 デイヴァーボース」を所持する、実にこの計画にぴったりな子なのであった！

「ふふ、ふふふふふふふふ——」

「あの、オーナー。笑い声が少し所じやなく怖いんですけどっ」

この子が居れば……完成するだろう。

勿論、この子の協力があつたとしてもその道は生半可な物ではない。他にも幾つもの障害や問題が待ち受けているのだ。

だが、彼はかの嘆願をしてきた者達を——このクランの皆を信じていた。

——そういう方向のこのプロジェクトには、間違いなく必要以上に全力を尽くしてくれるのだと。

「なあに、君には少しばかり協力して貰いたいだけさあ。そう、この——」

そこまで言って切り、そしてマスターの前に一枚の紙を差し出した。

そこに書いてあるのは前述の通りの怨念動力構想。

——と云う仮称ではなく。

「愛と勇気を糧として動くスーパー★ロボットのテストパイロット兼正式パイロット第一号にねえ！」

そう、仮に怨念負の精神エネルギーや負の想念を動力と出来るのならば——愛正の精神エネルギーや勇気や希望を動力に出来ない道理があるだろうか？

否、ない!! ある筈がない!!!

——先にも言った通り、それは決して容易い事ではないし、短い道程でもない。

数多の失敗が、幾つもの障害が彼ら、彼女らを襲い掛かるだろう。

しかし——しかし、彼らは決してその様な事では諦めない。

何故なら、スーパーロボットそれは全ロボマニア（筆者調べ）の夢、希望——諦められる訳がない——

この物語は、きつと、多分、おそらく……後に世界に覇を唱えし傑作となる機体の物語、その序章である——



「どういふ事なんです——
!!??」

そして始まる新機体を巡る開発者達の闘いの日々。
その障害は多く、パイロット候補のマスターの前に立ち塞がる――

「【心神】^{ザ・ハート}? 確かに条件は満たしていましたが……あの、私のビルドは――」

「そう、正の精神エネルギーを制御するのに必要になるだろうからねえ。ああ、それと此れ等、以前から待望されてた奴隷の【獣戦鬼】と【高位技師】と【高位操縦士】とそこそこ強かつたらしいカンストのティアン達と――新鮮でもない生贄だよお!」

「わあい。頑張りますー!」

新たな超級職^{ジョブ}、新たな力を手に、彼らは進む。

しかし――彼らに待ち受ける問題とはこの計画だけの事ではなかった!

「【三極竜 グローリア】を模した機体? このオーバースペックに動力炉付きで作っていいのか!」

「待て、今月だけでもうメンバー専用機を4機分予定が入ってるんだぞ!! 明らかに時間も機材も人員も足りない!」

「うおおおおどれれも造りたい、造りたいぞ――!!」

迫る納期！ 増える仕事！ 足りぬ身体！

遅々として進まぬ作業に、時には非技術職まで動員して仕事をこなす日々。

「小麦色〜！」「ふっ、馬鹿め……格好良い機体と言ったら↑黒色↑に決まっておろうが！」

「ええっ?!」 紅白色が主人公の証じゃないのかい?!」「朱く塗らねえのか?!」

「待って待って待って、機能的には保護色が一番だつて」「派手にするならやっぱり虹色でしよー!」

「何を騒いでいるのかと思えば……一番の色はメタリックシルバーだつて何で分からないのかねえ!」

「オーナーが裏切りやがったー!」「ふあっ〇!」クソ紛らわしい名前してやがる癖にッ!」

「これがオーナー特権と言う物だあねえ……つて今理不尽に怒られなかったあ!」

「あの一、注文は『グロリア』と同じ黄金色なんですけど……皆さん、聞いてます?」

踊る会議、不和が齎す暗雲。

しかし、そんな状況でも彼らは決して前に進むのを止めはしなかった！

『むむむ。精神エネルギーの扱いは繊細に過ぎます……既存の素材じゃ動線ラインには物足りないかと』

「マナタイトでも足りないのですか?! それならもう、後は……」

「ぱんどーろー!」

「なるほど、今現在国から卸されている『アムニール』を少量拝借すれば——」

「ちよおい! 特殊素材なら『パンデモニウム』で作るから流石にそれはやめて欲しいけどねえ!」

「マスターさんの戦法を考えれば既存の武装よりはこの……グランバロア産の『水鉄砲』なんか良いんじゃないかしら」

「とりあえず白兵格闘用に操作性を重点——機体に乗っててもあの拳法って使えるんですかね?」

「勿論——使えますともつ。財団神拳に不可能はありませんっ」

「基本は中近距離の個人戦闘型がメインになるな……楽しくなってきたな!」

完成に近づく新たな機体。

ならば後はパイロットを万全にするのみ。

——皇国内乱。皇国全体を揺るがす一大トラブルに見舞われながらも、それは共に頂きへと近付いて行く——

『【機械王】の子飼いもこの程度かあ！——な、にいい!?!』

「近付きすぎでしょう。《グラス・ハート精神掌握》」

「——
《ア
ナ
ン
タ
シ
エ
ー
シ
ャ》——
『ごちそうさまでした』」

「サスガニクセンシテシマッタナ……マスター、ソチラハ？」

小型の「マーシャルⅡ」……否、超改良型「マーシャル」。

白兵戦兼特殊用途機体。「心神」の力で制御された正の精神エネルギーを動力として駆動する夢の機体。

【透明なる心クリアー・メモリー】が誕生したのだった！

素であつても純竜級に近い能力値を^{ステータス}発揮できるその性能に、かの「ヘエンブリオ」、【アナンタシエーシャ】の固有スキルを利用した複数の特殊兵装。

勿論その強度も通常の「マーシャル」とは一線を画す物であり、更に「叡智の三角」の他メンバーの「ヘエンブリオ」の強化も受けし特殊機体。

……AR・I・CAがクランを脱退した事もあり、きつとこの機体とそのパイロットであるマスターはこれからの「叡智の三角」の戦闘斑の主力として活躍していくだろうと、誰もが想像したのだった――





そして、その想像は——実現する。

この後、直ぐに。

そう、皇国内乱が終息したその直ぐ後に——

「皇国の未来の為、私達の未来の為に——我が国はアルター王国に対し宣戦布告致します」

「——戦争を、始めましょう——」

T o B e C o n t i n u e d

《物皆遍く供贄の輩》



——来る2045年1月某日。

後に“第一次騎鋼戦争”と名付けられた戦争が始まる——



「——アルター王国国王、エルドル・ゼオ・アルターだ。皆の者、現在このアルター王国には未曾有の脅威が迫っている……そう。言うまでもなく、隣国、ドライブ皇国からの宣戦布告だ。

事前に告知していた通り、此れより〈戦争結界〉が起動し、かの国の者がこの国を侵略しに来るであろう。貴公らも知つての通り、これほど大規模な戦となるのは建国より且つて無い程であり、そして相手の強大さもまた然りだ。それは今まで隣人であつた我々が一番良く理解している事だ。

ドライブ王国の機械技術、そして所属し、参戦してくるであろう〈ハマスター〉の力も——最大の脅威となるだろう。

だが、だからこそ——皆の者、我が国、*“騎士の国”*の誉れ高き戦士達よ、今こそこの国難に奮い立つのだ！ 我々が開祖、戦乱の世を切り拓きこのアルター王国を興した初代アズライト様にも劣らぬ勇士達ばかりであると、証明して見せようぞ！

勿論、私も貴公らと共に我らの国を、そして愛すべき民達を守る為に立ち上がるつもりだ。

——だが、私の様に戦争で戦うばかりが愛する者を守る為の力ではない。この戦争に参戦する者も、そうでない者も。どうか各々のやり方で己の愛する者を守る様、尽力して欲しい。

………それでは、征くとうしよう——総員、出撃——ツ!!!



「——ドライブ皇国皇王、インベリアル・マシン「機 皇」のラインハルトです。皆さん。ついにこの時がやってきました。まずはこの戦争への参戦を深く感謝します。貴方方の行動と貢献には確かな褒賞と誠意で報いさせて頂くとしましょう。

しかし今は、目の前の戦争の話をさせて貰います。始めに、皇族として、そして皇王としての不足を恥じるばかりですが——現在、我が国は亡国への道を進み始めています。その事を謝罪させて頂きます。

深刻な不作からなる飢饉で国が餓えているにも関わらず、皆さんを導かねばならない筈の我々皇族に貴族は内乱に明け暮れ国を更に疲弊させ、結局抜本的な解決を図る事が出来ませんでした。更には、それに乗じて他国からの食糧の輸出も止められ——ええ、態々言われなくても皆さんご存知でしょうが、既に我が国の食糧難は最早独力ではどうにもならない所まで来てしまいました。

……勿論、私が皇王になつてから行つてきた通り、これからも皆さんに可能な限りの食糧支援を行つていくつもりではありませんが、残念ながら私共の力ではその総てを救う事はできません。

——故に、この様な手段を取らせていただきました。

かの国、アルター王国は我が国との友好国でありながら友好国、同盟国として当然応じるべき要請を跳ね除け、そして百余年続いた同盟の絆を断ち切り反故にし、そして存亡の危機にある我が国への食糧支援を打ち切りました。

且つての友好国、そして今では敵国——各々思う所がある者も居るでしょう。しかし、皇国がこの国難の前に生き残る道は、これ以外にありません。

皇王として、そしてこの戦争を始めた者として、私はこの後如何なる批判をも受ける覚悟があります。

しかし……それは、この皇国に、皇国の民に、我々に未来があつてこそその事。その為に、未来を掴む為に、私達の持てる“力”を以て敵国を……アルター王国を撃滅してください。これは皇王としての命令です——！」



両国元首の演説の下、出撃する戦力達、今までのモンスターとの戦いとは違う、人との生存を掛けた「戦争」の火蓋が切つて落とされる。

騎士が、兵士が、従属モンスター騎馬が、機械が、そして「マスター」が——戦う為に、殺し合う為に、相手の命を未来を奪う為に——その歩を進めるのを、民達は見ている事しかできない。

「やつぱり始まつちまつたか、畜生……!」

「ねえー。皇国つて仲良しの国じゃなかったのー!?!」

「……うん、そうだったんだよ。少し前まではね——」

「考えたくもないが、これで負けたら皇国も崖っぷち——いや、もう現時点で崖っぷちか」

「トースターちゃんやキングさんを始めとして食糧生産系の「エンブリオ」は居ても……皇国全体の必要量からすれば焼け石に水、ままならない物ですね」

「ぐらんぱーにゅー?」

戦えぬ民達の葛藤を他所に——様々な思惑の下に、無慈悲に戦端が開かれる。
ドライフ皇國
 侵略者から国を守る為に。
食糧危機
 存亡の危機から国を生き残らせる為に。

——と言う表向きの理由、駒へ向けた理由の外にも。

彼ら——駒の指し手達の、深慮遠謀の贊として……………

「ふ、流石に〈超級〉……準インフィニットクラスの数に此処まで差があれば勝機は厳しそうだ……クリスタル、その時は』

『承知しています。そちらも手抜かりなく』

「ついに第一回目の戦争が始まったか。これで一人でも〈超級〉が増えれば幸いなのだが」

「そうだねー。……逆境の王国か、それとも背水の皇国か。どちらも可能性はあり得ると思うけどー、さて——」

「此処で負ければ全て御破算です。ベヘモット、レヴィアタン、お願いします——」
『You ^任 got ^て it!』

「もう少しで始まりますね。それでは——」

「ああ、行って来るよ。綺麗に横槍を決めてしまおうじゃないか」

「ああ。特別な指示は何も必要ない。そのまま両国でぶつかって貰ってくれ。——私達としても、あちらに相乗りするのが最も都合が良いからな」

“化身”に連なる者の力を図る為に。

大目標の前の小目標——〈超級〉への覚醒を促す為に。

国を、友を、そして世界を守る為に——

様々な目的を持って戦争の影で蠢く指し手達に、その思惑に……駒達は気付く筈もなく。

只管に自分達の国を守る為に死力を尽くす——

『が、「ガイスト」の中に猫がつ!? くつ、これは——』

「チイツー! 雑魚は下がつてろ!」

「《無彩無消無形猫》——!」

「獲物がこんなに集まってくれて嬉しいなあ! 何処まで行けるか——

《熱力学第七法則》ウ——!!」

「いけない、皆散れえ——!!」

圧倒的多数対圧倒的多数。自由を謡う〈Infinite Dendrogram〉でも類を見ない程の大規模戦闘——だからこそ、その中で最も活躍するのは広域制圧型と広域殲滅型に他ならない。

繰り返される必殺スキルの応酬、その最中で磨り潰されていく数多の雑兵達。

そして、壮絶な広域型同士の潰し合い——その渦中であつても戦い続ける個人戦闘型達。

……あるいは、因縁の対決。

「——貴様の様な奴まで使っているとはな。王国は破落戸でも構わず徴用する無法者の国だつたかな？」

「ハッ。ただの義理人情だよ。——超級職ジヨブだけ奪つて出奔したテメエと一緒にするなよ」

「」

「」

「消え失せろ」

「テメエがなア！」

「《確定エされた数理クスの神劍リ》——ッ」

「《超越ケの輪冠ル》——!!」

激突し、激化して行く戦い。

しかし——それも始めの内だけ。

何故なら……そもそもその戦力〈マスター〉の総数が違い過ぎる。

その数が、実力が、違い過ぎるからだ。

故に、その結末は確定している。

本来の流れとの多少の差異があつた所で……その結末は変わらない。

だが、変わるものがあるとするば——

「——『アナタシエーシヤ』とは、『永遠』や『無際限』を象徴とする千の頭もつ蛇王^{ナヘガ}の事だ。海、あるいは氷を司ると言われているが——忘却に関連する逸話など、欠



片もありはしない。ならば、あの〈エンブリオ〉の能力特性は何処から来たんだ——？」
——とある職員〈マスター〉の疑問



それは揺蕩い、微睡んでいた。

遙かなる深海にその身を浸して——近付く者の全てを喰らって生き永らえていた。

他の生物の様に、その身体の肉片一つ残らず貪り食う——などと言う、勿体ない事はしない。

それが喰らうのはその肉だけに非ず……その者の魂、心、精神——記憶。そういった

他の者では容易く手を出せない内面のリソースをもそれは己が獲物としていたのだつた。

それこそ触れるだけで、その心を喰らい尽くす——ばかりか、その体液、そして体液が漏出し染み出た近隣の海水に浸るだけでその影響が現れる程。

その体躯も、その能力も、余人では全く抵抗出来ない程の大怪物あるいは大神威なのであった。

……そう、後に「無際限」——即ち、『無限』を象徴とする名を付けられる程の——

……それは、とある人間達が、自らの体液を利用していると言う事にも当然気付いていた。

生贄の人員を寄越し、漏出した体液を拝借し、そして加工し己らの都合の良い様に使っているのだ。

——なんと都合が良い者達か。

定期的に獲物を差し出し出してくれるだけではなく、己の体液を加工しそれを使用している——即ち体液を通して更にそれに餌を、リソースを供給し続ける行為に他ならないのだから。

それは己の体液を、能力を介してでも変わらず喰らい尽くす怪物——巢食う化物だつ

たのだから。

巢食われた獲物達の記憶や魂、その他精神的な諸々を己の腹の中に溜め込み賞味しているのだ。

とある報告書を見てもそれは分かる通り。……それは、喰らい尽くした獲物の記憶や感情、魂と言ったその人をたらしめる物を……パーソナリティを喰らい、そしてそれを引き出す事すら可能とする超常なのだ。

だが、それを理解して尚人間達は——財団職員はそれを利用するのを止めはしない。世界の秩序を守る為、円滑に任務を遂行する為に——かの怪物の体液から作られる記憶処理剤は何物にも代え難い利便性を有しているから。

それを知ってか知らずか、そんな状況が続く日常にそれも満足していた。

そんな時だった。

自らの力が全身を浸透した獲物人間を通して——自らの端末端末が生まれた事を察知したのは——



戦争の最中。

数多の命が散り行く戦場で。——数多の獲物が集うその場所です。

その「エンブリオ」は……マスターという媒介を経て顕現せし怪異の端末は喉を鳴らす。

数多のモンスター非人間範疇生物にとってそうである様に、それにとっても、ティアンと言う存在は最上の餌なのだ。

それも、これ程の数、その質超級職ともなれば……内包するリソースは膨大な物となるだろう。

「ダイヴァーボース」に内包されていた遙か過去の「海神」ジ・オーシャンや「冒険王」キング・オブ・アドベンチャーの様

に怨念となり擦り切れた干物の様な存在でもなく。

同調者——マスターによって制御された《夢忘の一滴》でほんの上澄みしか味わえなかった「キング・オブ・イリーガルギア魔機王」の時とも違う。

——先日喰らい尽くした「ダマスク・ドレイパー神装操縦士」の様な……マスターの完全なる敵対者、即ち獲物である。

「待ち切れませんか？ ……そうですね。私もです。この世界から離れたくはないですけども——ええ、それでもこの戦争は頑張りたいですね」

『Ssyururuuuuu……!!』
「折角の獲物、折角の晴れ舞台。……此処で無様に負けたりなんかしたら皆に顔向けできませんね？」

『SyraAaaaaa——!!』
「はい、出し惜しみは無しです。——行きましょう 《アナンタシエーションヤ物皆遍く供贄の輩》——！」

迸る暴威の食欲獣欲に、芽生えた我欲が動き出す。

そして——

【——超級進化シーケンスを開始します】



「……馬鹿な」

「団長、あれが何か知っているのですか!？」

【聖騎士】達が……そして、ナイト・オブ・セレスティアル【天 騎 士】が戦場を掛ける。

同胞の兵達を数多喰らった悪魔軍団を突破し、その召喚者である【魔將軍】を打倒し、これ以上の被害を防ぐ為に乾坤一擲の突撃を行っていた。

しかし——遙か前方、数千を越える悪魔軍団の斜め後方。

他の【マーシャルII】とは少し相溶の違えたへマジンギアへの直上に出現したそれに、【聖騎士】達は——そして何より、【天騎士】は目を剥いた。

それは、水だった。

最初は人を数人包み込める程度の相応に巨大な水球。ただそれだけに過ぎない存在であったモノが——瞬く間にその体積を膨張させ数百人を同時に飲み込めるであろう海龍とでも言うべきフォルムへと整形されていた。

——そして、その水の龍の正体を、【天騎士】ラングレイ・グランドリアは知っていた。彼だからこそ知っていた。おそらく、あれを知る者はこの戦場には自分と【大賢者】しか居る筈がないのだと。

——
 《海龍》
ストーリーム

かの規格外の超龍の存在を参考に遙か昔の【海神】によつて開発されたその超級魔法は魔力を喰らつて増大し、触れえる全ての魔力を呑み込み更にその総量を嵩増す消魔の広域制圧魔法だ。

あらゆる魔法的干渉を飲み込み、そして液体であるが故に物理的干渉を無為と化す。更には程度の低い支援魔法や強化魔法の類をも溶かし魔力の糧として、陸を這う総てをその腹に捕らえ無力化する魔法。

——ジヨブにそのスキルを有する【海神】と規格外の実力を持ちあらゆる魔法を行使する【大賢者】以外に行使できる者が居ない筈の、完全なる完成度で放たれた超魔法であつた。

(へエンブリオ)か——！ 不味い、突撃密集陣形こんな所にあんな物を撃ち込まれたら——！)

【聖騎士】及び【天騎士】は物理系職【騎士】の派生上級職でありながら、【司祭】系統も複合している事で回復魔法や聖属性剣技を主とした、所謂魔法戦士系職である。

その為、当然であるが魔法や聖属性剣技を使用する為にSPよりもMPの方が高い傾向にあり、またそれを活かす為にジョブ構成もMP寄りにしている者が殆どだ。

かの《海龍》に飲み込まれては戦う力を喪う所か——最早あの水龍から逃れ出る事も出来ずにそのまま窒息して死ぬ運命であろう。

……ラングレイだけは水中用装備も「アイテムボックス」に一揃えしている為に抜けて戦闘を継続する事は出来るだろうが、それでも部下とMPを喪い、その上でこの魔法の術者と悪魔軍団を越えていくと言うのは——余りにも分が悪い賭けだった。

ならば……取れる策は一つだけだ。

「あれは君にとつても特に天敵の様な魔法だ。だからこそ——術者を叩く。【魔將軍】を前に無茶させる事になるが……」

『私に掛けるべき言葉はそれではない。こう言えば良いのだ——任せたと』

「——ああ、そうだな。【雷霆】^{ゴルド}——行くぞ！」

——国宝にして愛馬、煌玉馬である【黄金之雷霆】^{ゴルド・サンダー}の連続《電磁縮地》^{レイル・ジャンプ}からの騎手と騎馬のコンビネーションアタック。

最速にして最大の火力を叩き込む、伝説級の〈UBM〉程度であれば一撃で絶命せし

める技。

一瞬で距離を詰め、《プラズマ・スラッシャー》と【天騎士】の奥義がぎりぎりでも反応し、突き出された改造（マジングア）の右腕に命中。

『——《超堅装甲》』

……そして、その腕を断ち切る事も出来ず甲高い金属音を鳴らしながら、装甲に弾かれる事となった。

「な、に……!」

『——!』

攻撃を受け止められ、物理的にその動きを止めてしまった一騎。

止まった一瞬で見れば……その装甲に膜の様に貼られた防御魔法と何らかのスキルの発動の証左であろうオーラが見える。

防御魔法は……おそらくは【海神】の使う複合防御壁魔法だろう。《海龍》を使える時点で【海神】の他の魔法を使える可能性は確かにしていた。

だが、その上で純竜級程度なら確殺できる程の火力を叩き込んだ筈。しかし、その一撃は容易く受け止められ、機体に僅かな傷を残す程度にしかならなかった。

馬鹿な、何故、どうやって——一人と一機がこの危機的状况にその超防御の絡繰りと打開策を探ろうと考えを巡らす……答えには辿り着かない。辿り着くはずがない。

それは、絡繰りと言える程上等な物は何一つない——〈超級エンブリオ〉を用いた力業と言える荒業なのだから。

まさか精神系統魔法を専門とする「心神」^{ザ・ハート}が超級のガーディアンの力を用いて《操縦》Lv10を、《獣心憑依》Lv10を、《人機一体》LvEXを、そして「海神」の「神装操縦士」の固有スキルを使用しているだなんて……想像できる筈がないのだから。

記憶を消す——否、記憶を喰らう神獣であるが故の、その胃袋の中の喰らった記憶をスキルを限定的に行使する必殺スキル。

背後に迫る悪魔軍団の主同様の……^超超越者歌にのみ許された理不尽な相乗効果による超戦闘力。

元より総合的な戦闘力で勝ち目はなく、常識的な手で打開策など存在する筈もなく——

故にその一瞬の意識の空白で左腕の砲塔が向けられている事にも気付けず。

「——ッ！」

咄嗟に防御態勢を取り、攻撃と衝撃に耐えようとする。

【天騎士】は耐久型超級職。埒外な強化をされていても砲撃程度耐えてみせると——

だが……気付くべきであつただろう。先程の触れただけで戦闘力を奪うだろうと考えた水の龍の事を。

もし砲塔から放たれた攻撃がそれであつたのなら、【雷霆】諸共戦闘力の多くを失つていたという事を。

尤も。

マスターの——【アナンタシエーシャ】の《夢忘^液の吐息^体》を受けてその程度で済む筈がないのだが。

砲塔から散弾銃の様に水飛沫が噴出され。

ラングレイ・グランドリアの意識は闇へ落ち……そして二度と戻る事はなかった――



第一次騎鋼戦争……終結。

その結果は殆どが本来の流れと同一の物でありながら……ただ一点、一人の〈超級〉が生まれたという点だけが大きく違っていた。

この戦争に関わる全ての駒の指し手達の望み通りの結末となり……そして、また新たな日々が続いていく。

異なる流れがどの様な未来を紡ぐのか……それはまだ、誰にも分からない――

—— “不屈”

■無辜の幼き少女を救った、忠勇なる財団エージェントの英雄譚 第9?????章

—— “〔検閲済み〕—— ツ!!”

—— “そこは深き深き地下の底。そこに居るのは意識のない少女と彼女を守る一人の騎士……財団エージェント・佐久間だけだ。少なくとも現時点では”

—— “この場所、どうやら今回は普通の世界じゃないみたいだな……”

—— “彼女はその内にとてもとても邪悪な物を抱えていた。殺さねばこの世界が滅ぶ。そう確定している程の悪魔をその身に宿していたのだ”

—— “……ああ、今回はこういう趣向か”

—— “この世界は滅ぼさせぬ、終わらせられぬとこの世界の英雄達が集い立つ。この少女の命を奪い世界を救わんと歩みを続けている”

—— “眠っていてくれているなら、良い。忘れるとは言え、あまり怖がらせたくはないからね”

—— “そう、その身が宿す悪魔を滅ぼし世界を救う為にはその依代たる少女を殺す以外にはないのだから、少女一人の命と世界一つの運命、比べるべくもない天秤だ”

—— “……………そろそろ、この物語も一万章に届く頃だろうか？ 研究が進んでいれば良いんだけど”

—— “少女を救う手段は何処にもありはしない。ただ一つの例外を除いては……………そう、少女の唯一の騎士である彼が決死の思いで手に入れた宝玉の力を除いては”

—— “大丈夫だ。僕は諦めない。……………そういえば、あのライオンにも言った事があつたっけかな——”

—— “その宝玉の力は悪魔の力を自身の身に移し替える悪欲の宝玉。使用者が強制的に悪魔の力を入れる為の邪なる宝玉”

—— “僕は、財団エージェントだ。何処までも戦えるとも——！”

—— “しかし、余人が悪魔の力を宿すのだ。その強欲に相応しい激痛がその身体を巡り、そして更に悪魔の力に相応しい地獄を垣間見る事になるだろう”

—— “チャンスはあるんだ。僕がこうやって生きている限り……………死んでいる限り。諦めない限りは——”

—— “英雄達の足音が迫る。最早悪魔を宿した彼女の命は風前の灯火だ。最早——”

—— “だが、エージェント・佐久間は逡巡すらせず躊躇わず、そんな宝玉を少女に向けて使用した！”

—— “数秒激痛にのたうち回り身体の内側から張り裂けんばかりの痛苦が総身を巡るも、彼にとってその程度然程の痛痒でもないのだろう！”

—— “無事悪魔の力を自らの身に移す事に成功し、少女の寝息が穏やかになった事を確認した”

—— “その直後……英雄達がその地の底に、二人が居る場所へやってきた”

—— “英雄達は悪魔の力など欠片も持っていない、悪魔の力を持つ青年エージェント・佐久間に拉致されたのであろう憐れな被害者の少女を保護し——真つすぐ立つ事すら儘ならないエージェント・佐久間へと斬りかかった”

—— “その身に宿したばかりの悪魔の力が自動的にエージェント・佐久間の身を守り、英雄達を迎撃していく。エージェント・佐久間の命と痛苦を代償にしながら”

—— “その勝負の行方は……当然、力を手に入れたばかりで全く馴染んでいなかった悪魔とエージェント・佐久間に勝ち目など不在の筈もなく”

—— “「——信じてる」”

—— “エージェント・佐久間は英雄達の6本の剣に串刺しにされ息絶えました。——”

世界は救われたのです”

—— “そして同時に、エージエント・佐久間の犠牲により——少女も救われたのだ！”

”

—— “嗚呼、なんと美しき事か。なんと美しい自己犠牲か——”

—— “少女を救ったエージエント・佐久間の素晴らしき英雄譚よ——”

—— 第9章、終。

—— 次章へ続く——



「……全く、重い期待だことです」

財団、サイト—81?にあるとある収容室。

幾冊もの忌々しき黒装丁の本——SCP—268—JPの実体を前にして、研究員の女性が呟いた。

彼女はかのオブジェクト、SCP—268—JPの担当研究員の一人にして確保されたSCP—268—JP実体の適切な保管を行っている者だ。

そしてもう一つ……SCP—268—JPの特別収容プロトコルにも記載されている様に——回収、保管されているSCP—268—JP実体の加筆内容の記録も彼女が請け負っている重要な任務であった。

ただの記録だけの雑務と侮るなかれ、オブジェクトに関する記録は……特にSCP—268—JPの様に毎回異なる内容が記録されるオブジェクトに対するそれは時にはオブジェクトの異常性の解明に繋がる重要な任務だ。

どの様な小さく細かい手掛かりでも見逃さない、真面目で几帳面で優秀な職員が割り

当てられるのが常である——が。

「……………」

彼女の内心は全く晴れない。……だが、それも当然の事だ。

何せ——記録している内容が内容だ。

SCP—268—JP——無限の悲劇を、どうあがこうと最終的には絶望しか残らないその魔書の記録をずっと、ずっと続けているのだから……気が滅入るのも至極当たり前の事だ。

むしろ、彼女はSCP—268—JPの担当研究員としては最古参の一人に属するのだから、それを続けていると言う事実だけで十分称賛に値するだろう。

だが、そんな彼女であっても——あるいは彼女だからか、毎回記録の最後に持つてきている、その一冊を見るのは毎日であっても憂鬱であった。

——且つての同僚が20年以上もただ一人孤独に地獄に耐え続けていると言うのに、未だに活路を見出せていない自らの無能さに嫌気が差すから。

無念が、悔恨が、赫怒が、激憤をいくら湧き上がらせようと——オブジェクトの超常性の前には全てが無力だった。

絶対に此れを最後の^ラ本、最後の^ス頁にしてやると息巻いた所で、圧倒的な現実の前に打ちのめされるしかないのだ。

そして、それは彼女だけの事では……SCP—268—JPだけの事ではない。

そもそも異常特性を有するオブジェクトに相對する財団職員やエージェントは実力的にも信用度としてもそう簡単に補充できるものではない……だと言うのに、そんな事はお構いなしに時が進むにつれて世界中に収容すべきオブジェクトは段々と増えていく。

オブジェクトの危険性から職員の殉死すら日常茶飯事であり、そんな日々が続く事で当然の結果として……一つのオブジェクトに対して割り当てられる職員の数は年を経る事に減少していく傾向にあった。

……世界の行く末を左右する様な重要な、危険なオブジェクトは、財団が保有しているだけでも両手両足の指を足しても全く足りない程にはあるのだ。

ならば、差し迫った危機のないオブジェクトの担当が減らされるのも致し方ないだろう。

——そのオブジェクトに並々ならぬ怨念を抱いている職員達からすれば理解は出来ても納得は出来ない物であるが。

しかし。

(それでも——それでも、最近は随分状況が良くなっているから)

——SCP—10106—JP
〈Infinite Dendrogram〉

生物型オブジェクトの收容に非常に有用なそのThaumielオブジェクトの出現によって、財団の緊迫は大分改善されてきている。

SCP—10106—JP—A内部で創出したSCP—10106—JP—Cを用いて間接的に研究に寄与しようとする際物研究員まで出る程に……余裕が出来たのだ。

それは財団職員にとっても非常に喜ばしい物。故に、彼ら彼女らの多くは全力でかのゲーム——Infinite Dendrogramの存続を願っているのだった。

——が。

「——戦争イベント、国の存亡は……さて、どっちに転ぶんでしょうね？」

——できれば今回の作戦は君にも参加して欲しいんだよねえ。君の〈エンブリオ〉は

……〔タルタロス〕は、何よりも今回の作戦の趣向に合致しているからねえ——

……彼女は、財団の一研究員にして一人の「マスター」でしかない、そもそも当のゲーム以外の他のゲームに疎い彼女は戦乱の予感鳴り止まぬかの世界の未来がどうなるのかは……全く分からない。

あるいは、彼女以外の「マスター」をしている他の職員達も同じかもしれない。しかし——賽はもう投げられたのだ。

上層部からも、クランとして国に所属する「マスター」として全力を尽くす様に——一人の遊戯者としてのサガを真つ当する様に通達され……結果として王国は死に体となつた。

彼女や彼女の仲間が所属している皇国だつて皮一枚で生き延びている様な物……安定とは程遠い現状なのだ。

だが、ゲームとして……「遊戯」としては安定よりも刺激が必要と言うのは理解できるとし、他ならぬSCP—10106—JP—B群すらもシステム面や公式HPからしてそれを推奨していたのだ。

ならば、通達があつた様に細かい事など考えずに……自らがやりたい様にやるのが一番なのだろう。

……例えば、相応に長期間世話して愛着が湧いてきたあの子の援護だったり、既に自

らも長い間世話になっていたクランの作戦の手伝いをする事など——

「……まあ、どつちにしろ頼られて断るつもりもありませんでしたしね」

複雑に思う事がないとは言わない。

皇国の環境に対する怨嗟であったり、王国に対する八つ当たりであったり——あるいは、自らの〈ヘエンブリオ〉に対するそれらであったり。

だが、少なくともこのゲーム上では〈ヘエンブリオ〉あつての〈ハマスター〉。切っても切り離せない関係であり——それが自らを構成するパーソナリティとして非常に大きい物であると言う事実は彼女も認める所であつた訳で。

それが求められているのならば、その力を、〈ヘエンブリオ〉を開陳する事に否やはない。

……克蘭オーナーの言う通り、彼女が持つ〈ヘエンブリオ〉の力、能力特性は間違はなく今回の作戦に非常に合う物であつたのだから——



『——ゲームをしよう！　ポチつとね☆』

『タイムリミットは1時間。障害は私達、どうか奮い立ってくださいねって——貴方方の国の騎士団長様も言っていますよ』

「貴様ら、貴様らああああアアア——ツ!!!」



二人の〈超級〉によって催される遊戯が——皇国の襲撃が、始まる。

「最弱最悪」、そして——「脳髓喰らい」、皇国が保有する二人の絶対戦力（超級）に対して、戦える王国の戦力は極僅か。

王国の敗北は今まさに決定付けられようとしていた。

——かに思われた。

「こんな茶番、直ぐに終わらせて見せる……皆、行くぞ！」

「エリちゃんは返して貰いますよ！」

「待ってろ。こんな悲劇、俺達が破壊してやる」

「いつでも行けます。——さあ、号令を」

「——反撃開始だ!!」

「——《ハードビートパルパライゼーション》！」

「《地獄門》……!」

「《海龍》」
ストーリーム

「《無間地獄》」
タルタロス

——そして、両雄は激突する。

“不屈”の精神を胸に、王国の勇士達は立ち上がり、自らの為に、皇国の為に此処に地獄を作らんとする尖兵と対峙する。

しかし、逃れられぬ音の結界が、氷結の凍獄が、夢忘の濁流が——そして、終わらない地獄が《マスター》達を次々と刈り取っていく。

此処決闘都市ギデオンを、《マスター》を相手にした条件特化型広域制圧・殲滅を行える者に、準《超級》と——《超級》。本人の地力のみでそれらを行う、“規格外”の怪物達。

ならば勿論、それに勝利せんとするのも——王国の“規格外”に他ならない。

「《虹幻銃》——爆殺のデイジー・スカレット》ツ!!」
アルカンシエル

「《雄性の誘惑》——王手」
メール・テンプレーション
 チェックメイト

「邪魔だクマー!」「ぐわーっ!?!」

“ジョーカー”は動かず、“クラブ”“ハート”だけでなく——“エース”も隠密裏からの一撃で撃破され。

ならば、後は——



「ぐう、うおおおおお——ツ!!」

「くう——っ！」

(何故——何故倒れないんですか、この^{レイ}マスターリング^グは！)

決闘都市ギデアオンの西部フィールド、〈ジャンド草原〉——ではあり得ないあらゆる全てが極彩色に彩られた異常空間。

厳密には実在の空間ではない亜空間……TYPE：アームズ・ラビリンズであるラストのへエンブリオ、【冥虐悪書 タルタロス】の必殺スキルによつて形成された精神空間。

【タルタロス】のへマスターであるラストを起点として展開し周囲の者を取り込むTYPE：ラビリンズとしては一般的な効果を有するそれによつて形作られる……犠牲者を葬る為の地獄の窯の底の底。

展開した当初は迂回し強襲しこの作戦の首魁であるフランクリンを倒そうとした幾多の他のへマスター達も中に居たが……今現在残っているのは、そのへエンブリオの主であるラストと……この【タルタロス】の中に突入した唯一のルーキーであるレイ・スターリングだけだった。

……だが、ラストにして見れば標的がルーキーであるかどうかなど関係なく……近衛騎士団ですらない、一介のへマスターがこの地獄で生き残っている事が既に異常だった。

何故なら、【タルタロス】はへマスターに対してこそ特に効果を発揮する、システム外攻撃を行う——直接へマスターを攻撃するへエンブリオなのだから。

【冥虐悪書 タルタロス】——その能力特性は、地獄。

ダメージも与えないその〈エンブリオ〉が与える物は……唯々純粹な、地獄の如き苦しみに他ならない。

五感に加え第六感^{直感}、第七感^{魔力感}まで含む全ての感覚において絶大なる不快の苦しみを叩きつける悪辣なる〈エンブリオ〉だ。

汚濁を煮詰めて凝縮させたかの様な苦味とエグ味が口腔の中一杯に広がり、魔力が腐り切る様な感覚を味わうの同時に強烈に過ぎる腐敗臭と刺激臭をミックスした香りを叩きつけられ、視界一杯に正気度を失いそうな光景が絶えず展開され、足元すら覚束ない不快感が続きながら耳を刮ぎ落としたくなるほどの怨嗟に満ちた嘔きが常に聞かせられ、そして全身を絶え間ない激痛と搔痒感が襲い掛かる。

〈マスター〉であるラスト自身も、その苦しみを共有する事で発動する苦しみを強化した上で広域に存在する全てをその地獄へと叩き落す必殺スキル……それこそが、この世界を“遊戯”としている多くの〈マスター〉に……否、世界派と言われる〈マスター〉にとつてすら鬼門の対〈マスター〉に特化した、〈マスター〉の心を折る秘策に他ならない。

……通常であれば、世界派の〈マスター〉であろうともこの地獄の苦しみに耐え切れず“自害”するか——あるいは、それこそショック死寸前で管理AIのセーフティが働

いて強制ログアウトが実行されるのだから。

ティアンであろうとも、経験を詰んだ戦闘職のそれでは耐え切れない地獄の苦しみ。

実際に、ラストのリアルで体験した——長年オブジェクトと関わっていく事で実際に経験した、超常の痛苦の追体験なのだ。

並の人間が、表面上は平和である現代を生きる〈マスター〉が耐えられる筈のない苦しみののだ。

その筈なのに——

「何故、まだ倒れないんですか——」
エンドレス・ジュテッカ
《万 永 死》アア!!」

「ぐう——!?!」

追撃で重なる単発の痛苦を凝縮した魔弾の発射——倒れない。
業を煮やして放たれる魔力を大量に使った連射——倒れない。

倒れない。

倒れない。

倒れない——！

何度地獄を味わっても、痛みと苦しみで全ての感覚が塗り潰されそうになっていると言うのに——倒れない。

唯々愚直に、この内部だと移動も出来ず、〔タルタロス〕の固有スキル以外に何もする事が出来ないラストに向かって——近付いて行く。

魔力と魂は掻き乱され、スキルを使う余裕もなく口を開く余裕もない。

……その筈なのに、立つ事すら困難である筈なのに、力強く拳を握り締めて——その瞳に諦観は欠片も浮かんでいなかった。

ジョブスキルも、それどころか……へエンブリオの固有スキルすら意味が無いその空間でレイ・スターリングはラストを、作戦の“クイーン”を追い詰めて——

(——)

同じ《無間地獄》の苦しみを共有し、自らも極限状態になっているせいかな。

その姿に且つての同僚を——不屈の英雄の姿を垣間見て。

——次の瞬間、眼前にまで迫ってきたルーキールージュの全力の拳撃を受け……ラストは光の塵となり、消えていった——

T o B e C o n t i n u e d ……

セキユリテイクリアランスを

.....
閲覧にはレベル5以上のセキユリテイクリアランスが必要です。
セキユリテイクリアランスを提示してください。

.....
アクセス承認。

セキュリティクリアランスの認証が完了しました。

情報を開示します

補遺： 創出されたSCP—10106—JP—C個体の継続観察を行う中で、対象のSCP—10106—JP—C個体とそれを創出させるに至ったであろうパーソナリティに強く連想させる異常特性を有する他の関連オブジェクトとの相互干渉性が指摘される例が認められ、後に実験によってそれが証明される事となりました。

SCP—10106—JP—Cと利用者の特性上、他オブジェクトの異常特性を想起

させるSCP—10106—JP—C個体を創出させるのは利用者のパーソナリティを通じた間接的な物のみと考えられてきましたが、意思疎通が可能なSCP—10106—JP—C個体及び利用者ではない想起される他の関連オブジェクトとの間に記憶、あるいは言動、能力の不可思議な連続性が確認され、該当するSCP—10106—JP—Cの調査を行った所6%のSCP—10106—JP—C個体が関連オブジェクトとの直接的な関係が発覚しました。

しかし、前述の通りSCP—10106—JP—A世界内のSCP—10106—JP—Cは他オブジェクトとの直接的な関係がある物であっても利用者の制御下であり、また発揮できる能力も関連がない他のSCP—10106—JP—C個体との差は存在しない事が確認されています。

これによって新たに収容違反が発生する確率は極めて低いと考えられ、該当する利用者のSCP—10106—JPの利用の制限は必要ないと結論付けられました。

また、O5評議会による協議の結果、利用者が律する事が出来、被害も格段に抑えられるSCP—10106—JP—A世界で該当する関連オブジェクト並びにSCP—10106—JP—C個体を調査、干渉する事でオブジェクト自身の解明、収容に対して有効的に使用する事が可能であるという見解が示されました。

直接的に関連するオブジェクトに対するこれらの使用に関してはSCP—1010

6—J P並びに関連オブジェクトの改定された特別収容プロトコルを参照してください。

収容実験記録抜粋

名称：収容実験記録10106C—106

対象：D—100106

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは「ガイドナー夢忘空獣 アナンタシエーシャ」
魔物型のSCP—10106—JP—Cであり、可変可能なサイズのウツボの姿をしている。

D—100106は実験10106E—106の際にFクラス記憶処理を施されており、その影響からSCP—3000と直接的に関連していると考えられている。

その特性は対象の記憶消去と消去した記憶の呼出。ただし、利用者に対しては完全には作用しない。

SCP—10106—JP—C個体自身が高い知性を有し、SCP—3000との関連に自覚的である個体。

D—100106を通しSCP—3000の收容の補助の依頼を指示。

結果としてSCP—10106—JP—C個体からは現状維持についての承認を得た。

名称：收容実験記録10106C—358

対象：SCP—181

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは「宿命昇降 ウェルダンデイ」

乗騎型のSCP—10106—JP—Cであり、幾何学が象られた脚部装備の姿をしている。

その特性は極軽度の飛行能力と確率操作。

特筆事項として、SCP—10106—JP—A内部でもSCP—181は現実世界と同様に「幸運」な出来事に遭遇する比率が非常に高い事が報告されています。

SCP—181の異常特性は霊的存在になり、違う身体アバターであっても変わらず効果を発揮していると考えられ、これは結果的にSCP—181が收容違反しているものと考えられる事が出来ず。

その事実SCP—10106—JPとそれを利用して收容している他のオブジェクトの收容違反の懸念にも繋がる物ではないでしょうか？

メモ：確認しましたが、「ウェルダンデイ」はその特性による効果は高くなく、他の類

似特性を含むSCP—10106—JP—C個体と比較しても著しく保有リソースが低い物でした。

“幸運”な出来事、という風に書かれている事柄は確かに不可思議な事柄の様に思う事でしょう。

SCP—10106—JP—A世界ではLUC幸運のステータスが存在しますが、このステータスは本人の幸運を保証してくれる物では全くないのですから。

しかし、財団職員並びに有志の検証の結果、LUCのステータスがマイナス域まで行く事で不自然に“不幸”な出来事が頻発する事象は確認されています。

即ち、このSCP—10106—JP—A世界では意図的な“不幸”を起こす法則が存在し、それは逆説的に意図的な“幸運”を起こす事が可能である事が示唆されています。

リソースの不足から察するにこれは「ウェルダンデイ」が記載外にリソースを用いて“幸運”な出来事を招いているだけであると思われる。 — ??? 研究主任

名称：收容実験記録10106C—488

対象：SCP—999—JP

結果：O5—??により実験は却下された。

名称：收容実験記録10106C—524

対象：SCP—231—7

結果：創出されたSCP—10106—JP—Cは「火産大神 ヒノカグツチ」

魔物型のSCP—10106—JP—Cであり、嬰兒のサイズや形状を持った火炎の姿をしている。

その特性は自身より発せられる超高火力による自動防御・攻撃。利用者であるSCP—231—7自身もその影響を受ける。

SCP—231—7は収容の補助及び処置110—モントークの一環としてSCP—10106—JPとの接続を開始した。

SCP—10106—JP—C個体及び利用者であるSCP—231—7に対して危害を加えようとする者が居た場合無差別に攻撃を加える。その際余波でSCP—231—7も攻撃の影響を受ける事となる。

SCP—10106—JP—C個体の知性は低いが、SCP—10106—JPにSCP—231—7が接続時は胎内のSCP—231が著しく不活性化する事が確認されている。

名称：収容実験記録10106C—601

対象：新木上席研究員

結果：創出されたSCP—10106—JPは「夢想刻印 ヘルメス・トリスメギス

トス¹

空間型のSCP—10106—JP—Cであり、その範囲は自身のみ^{テリトリー}に作用する特質を持つ。

その特性はジョブスキルの強化。自身がメインジョブに指定しているジョブのジョブスキルを強化する。

新木上席研究員はドリーマー・プロトコルの実施されており、その能力に著しい向上が確認されています。

SCP—10106—JPに接続しても向上した能力は無力化されずに継続しており、且つ接続中は精神評価も安定していた為SCP—10106—JPの担当研究員の一人に割り当てられました。

追記：SCP—10106—JPの進化により特性に変化が生まれました。

メインジョブの永続的な固定化という制約によって、メインジョブの超化を行う能力に変化しています。

現在、新木上席研究員は「教授」の上位である超級職の「大教授」^{ギガ・プロフェッサー}のジョブをメインジョブにする事になりました。

これは一般の利用者であるMr. フランクリン氏が所持する超級職と同一の物である事が確認されています。

特性の変質、また現状で観測されている仕様外の結果である事から継続して経過観察の必要があると考えられます。

名称：収容実験記録10106C—1145

対象：SCP—055

結果：O5—?により実験は却下された。

メモ：そもそもSCP—10106—JP—Dをどの様に加工すれば適切に使用できるのかも不明です。 —O5—?

名称：収容実験記録10106C—2265

対象：タローラン 研究員

結果：創出されたSCP—10106—JPは【幻創現遭 ハーメルン】

【データ削除】

・ ・ ・ ・



.

□ ■ 夢

夢。

それは己の内部の精神世界。

【強制睡眠】や【気絶】で送られる空間や、実際に夢の様な空間を創造する能力もこの
 〈Infinite Dendrogram〉には存在する。

その為、混同する者も多いがそれらとは全く関係なく、この〈Infinite D
 endrogram〉の世界で実際に睡眠を取れば現実世界と同様のプロセスでこの世
 界に來訪した〈マスター〉達は“夢”を見る事がある。

ファンタジーの様で妙に現実的なかの世界とは全く別の“夢”。

管理AIによる精神保護で守られている〈マスター〉達からすれば、不可侵地帯であ
 る夢。

記憶の整理とも、秘めたる願望の顕現とも言われるそれを——今、〈Infinite
 Dendrogram〉内で睡眠を取っているマスターも見ていた。

実験の一環で殆どログアウトする事がないマスターであるが、夢を見る事はそう多い
 訳ではなかった。

それは、整理するべき記憶も願望もないからなのか、或いは——

「まあ、君の場合はむしろ真逆なのだろうね」

「……ドリームマン SCP—990、ですね？ はじめまして、こんばんは」

「……ああ。はじめまして——とは言っても、君には私と話した記憶があると思うがね」
「……………」

そこはマスターの夢の中。

……であるにも関わらず、マスターが知らない——知らない筈の人物が現れていた。

見渡す限りの生命の居ない大海原の夢の中、波に揺蕩うマスターだけでなく……波の上に立つ、スーツを着た場違いな壮年。

——かの財団で SCP—990、ドリームマンと呼ばれる夢の中に現れて予言を齎す超越者が、マスターの夢の中に現れてきていたのだ。

「残念ながら、私達の記憶の中に参考になるほど貴方と出会った記憶は多くないですよ。記憶と言うのも有限のリソースですし」

「なるほど、確かにそれはそうだね。誰も彼もが君達の様な無限に近い記憶のリソー

スを有している訳ではないからね。特にこんな夢の中でなら尚更ね」

「……貴方は嫌味を言いに来たんですか？　ならば、即刻出て行つて貰いたいのですが」

朗らかに語るSCP—990——だが、マスターは懽然とした表情で冷たくあしらう。

保護者の二人やクランメンバーには決して見せないその表情で——

「勿論違ふとも。私は君が、君達が知っている通り——予言をしに来たのさ」

「あの世界で暮らしている私に言つてもあまり意味はないと思ひますけども。——

まさか」

「——そういう事さ。今から私が言うのは、その世界での事だからね。他にも候補は居たが……君に語り掛けるのが一番良いだろうと思つたんだよ」

——SCP—990の予言、予知。

広範な物を含め、現れた夢の主に関係したもののへの脅威を予言する彼は——かの世界、へInfinite Dendrogramの危機を予言しに来たらしい——

！

……尤も、マスターが知っている限りでも「モビーディック・ツイン」や「グローリア」を始めとした「SUBM」や「アビスシエルダー」等の超強力な「UBM」は機運が悪ければ世界を滅ぼせる可能性すら秘めている様に思ったし、「邪神」や「霸王」……先期文明や先々期文明の遺産を考えれば他にも世界に危機を齎す存在なんて無数に居ると思っっているのだが。

「——それは「ヘイレギュラー」。それも、君も知る「アビスシエルダー」と同じ様に被害者を喰らって己を強化する学習^{ラーニング}進化能力を有する怪物だ。その経緯から初期値も「アビスシエルダー」とは比べ物にならない程に強力で、初動で下手を打てばあわや——という事も可能性は低いがあり得るからな」

「……なるほど。得心が行きました」

それはSCP—990の言の納得——ではなく。

己の内……いや、ある意味では己の本体とでも言うべき存在からの「警鐘」がそれなのだ^と理解したからだ。

そう、マスターは「それ」について知っていた。……数多の記憶によつて、識つていたのだ。

それは穴開きの記憶。精神を心を記憶を全てを啄み己を膨大化させる一匹の「鳥」に関する記憶。

ある財団の被害者が少しでもその力に対抗せんとする為に浴びる様に記憶処理剤を用い果てた、その記憶。

マスターが記憶として知っている、他のオブジェクトと比べても非常に強力で、凶悪なその存在。

……だから、マスターは警告されていたのだ。己の「エンブリオ」、【アナンタシエーシャ】から。

あれが、この世界に来訪しようとしていると——！

「……つまり、かの鳥が人々を喰らう前に何とかすれば良いと——」

「残念だが、それだけでは50点だ。あれもあれで……他の肉体に寄生して存在する者。故に特異な条件を満たせない者では討伐できない問題もあるが——問題は、もう一つあるんだ」

「……………もう一つの問題、とは？」

若干不機嫌になりながらも、素直に聞く。

確かに、あのオブジェクトは非常に厄介なのだから……ヘイレギュラーとして在ると言うのなら管理AIの強化が加わっている可能性すら——

「言葉通り、もう一つさ。——いや、もう一体、と言った方が正解かもしれないな」

「……………へあっ?!?!」

その言葉の意味を図りかねて。……そして、一瞬の後にその意味を理解して。マスターは今までの表情に似合わぬ素っ頓狂な声を上げざるを得なかった。





そして、予言の成就是——成る。

予言を齎されたマスターと、「アナンタシェーシヤ」と同じ力心を貪る異常を持つ、赤き朱き紅き魔鳥。

そして、26年の雌伏の時を越えてかの地へ蘇った——にくにくしき魔神。

2体の異イレギユラ常の襲来、その結末は——

【精神赫鳥 エゴ・フレイドー】／【腫智肉輪 アルコーン・セプテム】

□■〈黄河・商都〉 【高位練体土】リン・コンロン 【精神赫鳥 エゴ・フレイドー】

「あかしけ やなげ 緋色の鳥よ くさはみ ねはみ けをのぼせ」

「《練技・大熊筋》——よ、つとお！」

「よっしやリン君、こつちの檻もよろしく頼むぜえ！」

「任せといてー！」

ここは商都——七大国が一つ、黄河の国内でも西側に位置する都市の一つで、その都の名前から見ても分かる通り、西に座する隣国、カルディナとの交易盛んな商業都市だ。砂漠の熱波と共に数多の商業品が日夜ここに届き、そして黄河中へ散らばっていく前段の中継地点なのだ。

近頃は世界中で大なり小なり事件が続いて起きているこの世界であるが……そんな事関係がないとばかりに常と変わらぬ活気溢れる様が目立つ都市でもあった。

「赤時化 夜薙げ 緋色の鳥よ 草食み 根食み 気を伸ばせ」

——尤も、実際は全く関係がないなんて事がある訳がない。

黄河自体も近頃渦中の王国との関係があるし、隣国にしてこの商都としては重要な取引関係にあるカルディナだつてグランバロアとの対立が激化しているのだ。

少なからずこの黄河にも、この商都にも影響が出ているのは間違いない。

……だが、それも国として、そこに住む人々として見れば影響が出ているのは極々僅かな一部の上層部のみの事だ。

所属する「ヘマスター」を含む、殆ど的一般人にとつてそれらの他国の大事であつても話に聞く程度、全く実感は湧かない物なのだ。

「赤し毛 柳毛 緋色の鳥よ 草食み 根食み 毛を伸ばせ」

「それにしても、此処は本^{黄河}当に変わらないですね。実は僕、他国の戦争とかテロの事とか聞いて結構皆怖がるもんだと思つたんですけど……まあ、僕自身も実感なんてまるでないんだけど」

「そうは言つても、最近の大きな戦争なんて「ヘマスター」の中の、更に上位陣^{ランカー}の戦いだけ？ 俺達みたいなのとつちや雲上人も良い所だろうよ？ 俺達が慌てた所で何も変わりやしないだろ？」

「それもそうですかねー？」

……その割にはカルディナを通した軍需品の売買が数年前と比べて明らかに増えて

いるんだけどね。

と、テイアンの中ではそこそこに才能のある青年は思うのだが——確かにそれも事実なのであった。

合計レベルにして400……一昔前なら秀才や天才呼ばわりされるそのレベルであつても、へマスターが増加した今の時代であつては雑兵も良い所だと言うのは彼自身合計レベル500が誰よりも自覚していた。

カンストには至れず、へエンブリオも持たず、不死性もなく……当然の如く超級職も特典武器も持っている筈がない、ビルドも際立つて目立った物のない戦闘系である彼はだからこそ、その才能を生かす戦闘系ではなく今も単純肉体労働に汗を流している。

……黄河だつて最近の他国とのゴタゴタに積極的に関わっている訳ではないとはいへ、モンスターによる被害は常と変わらず途絶える事はない。

それでも彼がこうして呑気に街中で平穩に暮らしているのは——やはりそれも、へマスターのお陰なのだ。

「阿傾け 矢投げ 緋色の鳥よ 九叉食み 音食み 卦を伸ばせ」

「まつ——何かあつてもウチにはへ黄河四霊の皆様がいらつしやるからな。黄河はこれからも安泰だぜ」

「ええ、それは確かに。……カルディナとの協定に、王国との約定もある。………後

は、東の修羅達天地が大人しくしてくれるなら何も憂いる事はないと思うんだけど」

「はっはっは……そいつあ中々難しいだろうなあ」

「ですよねえー……………」

「淫如け 野風げ 緋色の鳥よ 苦鎖食み 子食み 化を伸ばせ」

だが、そんな雑談していても内心では仮に天地が何かしらの行動を起こしたつてこの国のへマスターへ、それも最上位のへ黄河四霊へ達なら何とかしてくれるだろうと思っっているのだった。

何せ、此処は泰平の国、黄河。

偉大なる古龍を祖とし皇として知と武を備え持ち、へSUBMへ「四霊万象 スーリン」の襲撃も退け、それでいて内政も外交もまるで隙のない安寧を築き上げてきた唯一の大國なのだ。

だからこそ、彼らは、この国に住む人々の心に未来への不安はない。

変わらぬ日々が今日も、明日も、その先も続くと信じているのだから。

「緋色の鳥よ 未だ発たぬ」

「……………は？」

——そして、何の前触れ前兆もないままに、唐突に……その平和は終わりを迎える事となった——

『KETTERKETTERKETTERKETTERKETTER——！』

笑う。嗤う。晒う——瞬く間に大国の一都市を平らげた赤き魔鳥が、且つては“朱雀”とも呼ばれし緋色の神鳥が赤で染まった商都を空中から睥睨し、そして得られたリソースを知覚し、特大の喜悦の相を表して大笑していた。

眼下の商都に残るはもはや血と肉と死と、そしてかの魔鳥、【精神赫鳥 エゴ・フレイドー】にその精神を啄まれ喰われた憐れな被害者のみ。

もつと、もつと、もつと、もつと——

人の心の、血肉の味を知る魔鳥は、新たな獲物を求めて被害者達を操り——その歩を
 各々の知る多くの人間達が集まっている場所へと向かわせる。

そして、人を見つけたら暴れさせる……精神を支配した被害者に対しても簡単な命令
 しか下せないが、それで十分だ。

それだけで十分なのだ。この恐るべき〈UBM〉——〈ヘイレギュラー〉にとつては。

今も滞空し続けている神話級〈UBM〉に相応しき基礎能力も、広域殲滅攻撃スキル
 も、被害者達の心から徴収した数多のスキルすらも、その恐るべき力の前では余録と言
 う他ないのだから。

精神世界に住まう赤き魔鳥は一時身を潜めていた仮初の宿主から飛び発ち、己の思う
 が儘に力を振るい始めた。

それを止められる者は果たして——



◆旧ルニンクス公爵領 【腫智肉輪 アルコーン・セプテム】

【腫智肉輪 アルコーン・セプテム】。

それは、長い、永い間〈U B M〉を司る者……かの管理A I〈無限級エンブリオ〉にも放置され半ば忘れ去られていたとある〈U B M〉の名だ。

それはモンスター担当でさえ知らぬ間にその世界に発生した、正しい意味での

イレギュラー^{想定外}とも言える突然変異と思われた一体のモンスター。

……自立して行動する一つの肉塊のモンスターだった。

肉で構成されたスライム種、あるいは不定形で更により不安定なキメラとでも言うべきそのモンスターは考える脳もない筈の状態でありながら、他のモンスターと同様に活動を開始した。

それこそ、発生時の想定外とは裏腹に通常のスライムやキメラ等のモンスターと変わらぬ生態のまま……そのモンスターは一見自然にその世界に根付いたのだ。

自己の保全を第一とし、他の生物を取り込み捕食する——実にお手本通りのスライム種のような行動だった。

見逃していただけで普通に何らかの要因や実験で生まれただけのモンスターではないか？ という説が有力視される程にモンスターをしていたそれは、しかし後に〈UBM〉に認定されている事からも分かる通りに、それは生まれの特異さ以上に〈UBM〉となるに相応しき特徴を有していた。

一つ目は固有スキル。《神食の理》。

その効果は「喰^{キング、オプ、キラー}王」の固有スキルに酷似した生物を捕食し取り込む事による獲得^{リソース}経験値の増加と対象のHPSPMPの全てを自身に最大値ごと足し込む物。

……際限なく自身を強化する事が出来る様になる固有スキル。

肉のスライムの様な存在であるからか、他のスライムの様に消化を経る必要もなく直接己の力をしている事を表すかの様な固有スキルであった。

だが、〈UBM〉担当が注目したのはそこではなく、もう一つの特徴だった。

それは——かのモンスターが有する知性だ。

蠢く肉塊のモンスター。しかし、その行動、活動には明らかにモンスターとしての習性としてもそぐわない高い知性が見え隠れするのだ。

敵対者の少ない地中を主な活動場所にする等は序の口で、安全に狙える相手を選び好みする手腕であったり、獲物の最も油断する瞬間を狙って奇襲したり、自身の肉塊の極一部を切り離し罠として利用する事や、それどころか自然環境を利用し、時には工作までして機械的な罠を作り出す事すらあるほどだった。

一介の肉塊とは思えぬ程の知性——果たして、当時ではスキルとしては規定されない物であったが、戯れに■■■■■を与えればそれに因んだ固有スキルでも生じるかもしれないと思ひ、〈UBM〉担当はそれを〈UBM〉として認定した。

——しかし、結果としてその期待は失望に彩られる事となる。

〈UBM〉となった「腫智肉輪 アルコーン・セプテム」はしかし、確かに新たな固有スキルを発現した。

しかし、それは《神食の理》で捕食した対象の特質を獲得すると言う物でしかなく、確かにそれで生じさせた精密な触腕や疑似餌を用いた狩りの精度は飛躍的に高まったが……総合的に見て、「腫智肉輪 アルコーン・セプテム」は余りにも〈UBM〉として「微妙」と言う評価を下さずにはいられなかった。

まずはその能力値。《神食の理》によってHPSPMPは際限なく強化されていくが、他のステータスは同レベル帯の他の〈UBM〉と比べてあまりにも貧弱だった。

獲物を抑え付け捕食する為かSTRこそそこそこある物の、〈UBM〉として要肝心なENDやAGIは形態故か悲しい程に低い物があつた。

これではいくらHPを無尽蔵に近いレベルまで強化できるとは言え、一度相応の実力者に補足されたら何も対応できずに遠距離から削られ続け討伐される未来しかあり得ないだろう。

また、〈UBM〉最大の特徴である筈の固有スキル、《神食の理》とその派生スキルも……やはり、高い評価は下せなかった。

まず捕食し取り込む事を前提としている為、後に「アビスシエルダー」と呼ばれる事になるとある〈UBM〉と同じ問題を抱えつつ、更にスキルの学習ラーニングができる訳でもないその捕食スキルは固有スキルとして見ても強力な物ではなかったのだ。

その制約から、捕食取り込みが可能なのはティアンか、あるいはモンスターですらな

い動物や昆虫群のみ……動物類の場合一体辺り、HPが数十から数百程度しか増やせず、SPやMPに至っては相応のサイズを持つ獲物でなければ全く得られない場合も少なくない。

そして、返り討ちと討伐の危険性を理解してかティアンを獲物にするのは万全を期して半年に一度あるかないか程度の体たらく——

そもそも、ティアンに対しても、生態系に対しても殆ど被害を与えていない事から管理AI以外に対してはその存在を知覚されてすら居ない始末なのは、もしかしたらその知性による物か……は、流石の管理AIでも分からない。

が、それでもあれが〈UBM〉としての基本理念——後に来たるべき〈マスター〉と〈エンブリオ〉の進化を促す為の障害となれる事はないだろう。そう見切られ長い間放置される事となり……



時は進み、西暦2045年5月某日。

【腫智肉輪 アルコーン・セプテム】は——まだ、生き残っていた。

何かから逃げる様に人目を避け、地中を進み、地中の小動物や昆虫類を食み僅かずつ、僅かずつ——そして、それを千年単位で繰り返し続け、神話級の〈UBM〉になってもまだ変わらずに在り続けていた。

HPは数百億を優に越え、上限に達したその実力は絶望的に低かったAGIとENDすらも五千に届く程となり、STRに至っては神話級モンスターの標準に至る五万にもなる非常に強力な〈UBM〉に——！

……否。

能力値こそその通りではあるが——〈UBM〉としては、強力と言うには程遠い物があつた。

それは、そうだろう。

何せ、神話級に至って尚【アルコーン】は新たな固有スキルの獲得にも固有スキルの強化もされておらず、その戦法は〈UBM〉になる以前の物から全く進歩していなかったのだから。

その戦闘力の脅威は隠蔽システムすら習得していない原始的な奇襲と、五千程度し

かないAGIから成る戦闘力……正直に言つて、大抵の伝説級へUBMの方がまだ厄介であると言える程に、神話級へUBMとしては貧弱も良い所であった。

それでも生き残っているのは偏に、今まで一度もへマスターへに遭遇しておらず、特異なへエンブリオの固有スキルによつても補足されていないからに他ならず、仮に補足されればポーナスモンスターとして嬉々として狩られるであろう事は想像に難くないだろう――

――果たして、本当にそうだろうか？



それは、知恵持つ悪神。とある主神に付き従いその糧を掠め取る悪しき従属神。且つてとある大戦と計略によって生み出された七番目のアルコーン^{アルコーン・セブテム}。

——そして、力を大幅に減じられ異世界に放逐された無様な敗北者、その末路だった。蠢く肉塊はその内心を悔恨と憎悪を悪意に染め上げて——それでも己が知性と理性でもってそれを抑え込み、永い間その力を蓄え続けてきた。

下等な魔物にその身を扮し、人を欺き他の魔物達を欺き……そして、この世界の管理者すらも欺きながら。

絶対に元の世界に戻って自身を追放した彼奴等をぐちやぐちやにして貪り食ってやるのだと誓いを立てて……しかし、それももう難しくなっている事も理解していた。

既に管理者の中にも疑心を持たれている事を察していたし——管理者に非ずともこの身を危険視して地中に潜んでいるそれを見つけ出し始末する為の刺客が送られている事を知覚していた。

……ならば、是非もなし。

準備は未だ足りないが人々も魔物も刺客も、そして果てには管理者すらも喰らって糧にして、凱旋するしかないという事だ。

……実力で言えば伝説級へUBMにも劣る存在が何を、と思う者も居るかもしれないな

い。

確かに、かの〈UBM〉の能力は上述した物以外にも《神食の理》によって副次的に増幅し続け、数十億にもなる数値となったSPとMPがあるが……しかし、ただの肉塊の〈UBM〉にそれを使用して行使するスキルはない。

完全に宝の持ち腐れなのだ。

——データ的にはその筈だった。

実際に〈UBM〉担当の管理者すらも、完全にそう思っていた。

だが……仮に、その〈UBM〉担当が、イベント担当か、あるいは雑用担当の管理者にかの〈UBM〉について相談していれば、あるいは今から起きる事件の概略は大きく違う物となっていただろう。

そう、魔法スキルなどなくとも……〈アーキタイプ・システム〉の補助がなくとも、己の実力と技量、そして魔力のみで術を行使していた前例の存在を知っていれば——

……また、これは余談ではあるが。

かの七番目のアルコーン——それは、とある一つの世界において世界最強の力を誇つ

ていた魔術師、ア・デイトウムの魔術師王と呼ばれる一人の人物から分かれた存在である。

絶対なる不死性は完膚なきまでに破壊され、強力な現実改変能力は失われ、サーキットとしての能力は僅かにしか残っていない。

しかし。

〈UBM〉担当が注目したのは肉体、魔力的能力の増生の方ではなく——このモンスターの知性であった。

それは、即ち——

『……さあ、おぼめよう』

「アルマーン・セプテム」は何事か、判読できない言葉を呟き……そして、魔^M力^Pを、技^S力^Pを……経験値予め細工しておいたリソースで未知の術式を編み込んで——

『レベルアップ限界突破』

いとも容易くレベル100の壁を突破した。

新しい次元フラットクラス
 新たな段階に至った「アルコーン・セプテム」が得た能力は……超限定的な次元操作の能力。

それは、固有スキルとして……データ的に言ってしまうえば、異次元より力を引き込み、HP・MP・SPを自動回復し続け、そして経験値を自動的に獲得し続けると言う物。

一般的なプレイヤーが見れば「《神食の理》の亜種強化版かな？」と思う程度の物だがその真意は――

『やは???.来るか 魔法の使徒め』

地中より這い出て……血と死の染みついたこの地、旧ルニングス公爵領より、遙か地平線の先を見据えてそう言葉を零す。

自らを狙っているのがこの世界で「魔法最強」と呼ばれる存在である事は知っていないながらも、その力を知っていないながらも……全く臆する様子はない。今まで全ての敵対者から逃げ隠れしてきた者と同じモンスターとは思えないくらいに。

何故なら――事此処に至り、自らの力を秘匿する必要もなくなったから。

この世界、殆どの者が「アーキタイプ・システム」という補助輪がなければ魔導の神髓を行使できない未熟者だと断じた上で……己が「魔術最強」だと理解しているから

数百億を超える膨大に過ぎる生命力^Hを誇り、数十億と言う規格外の魔力^Mから異世界の術理^Pを行使する異形の（UBM）——ヘイレギュラー、【腫智肉輪 アルコーン・セプテム】。

にくにくしき魔神が、声無き咆哮を上げて世界に覇を唱えんとした瞬間だった。

——
 ◻神食の理◻を成し遂げんとする為に——



「な、なんだこいつは——
「お、おい、どうしたんだ、やめろおおお——!?」
「UBM」かつ!? こんな時に……!」
「ETERKETETERKETETERKETETER——!」



異なる場所に同時期に、現れたるは超常を越えんとする化物……〈イレギュラー〉。甚大なる被害を齎し続ける怪異を前に——〈マスター〉よ、手を取り合い奮い立て！

「おい。お前、この前王国で暴れてタ皇国の〈超級〉だろウ？ まさかこれモ——」

「ち、違——私は不審者でも犯人でもないです——っ!？」

「ちいッ！ あれはお前のとこの不始末なんじゃねエのかあ!？」

「ふん、一体どれだけ昔の事を話しているのだから。今はそんな事を言っている場合では——ッ!？」

「……不味いぞ！ 感染者が増えてきやがった。戦線が崩壊する——ッ!？」

「ク——四の五ヲ言つてられル状況じゃねエ。敵じゃなイなラ手ヲ貸セ、脳髓喰らい——」

「ええ、勿論です………手早く終わらせられそうには、ありませんがね——」

幾度となく続く衝突と撤退、犠牲の下に——^{〈イレギュラー〉}脅威の敵の能力は丸裸にされてゆく。

……だが、しかし。それはこの世界、へ Infinite Dendrogram ではなく、だから勝てるという意味では全くないのだった——！

『マジックプラスト 魔術拡散化 デイスインテグレート 原子分解』

「なあ……あれって削れているのか？」

「れている訳ないだろう！ あの防御魔法が見えないのか!? 必殺スキルか奥義クラスか——或いは、規格外じゃなきやまともに徹らねえんだよ!!」

「二こうたる などの 緋色の鳥よ ひくいよみくい せきとおれ——」

「うっそだろ、二回目え!? 逃げろ逃げろ、呑み込まれるぞおお——!!」

「永遠に無敵モードとかちよつと酷過ぎやしないですかねえ!」

「それでも、それでも迅羽さんならなんとかしてくれ……!」

「——そうだ、それで良い。我らだけではどの道あれは斃せんだろうよ。だが、こうしてその総力と屍を以て足を止めるくらいは出来るものだ」

「癩だが、仕方ねえ。これほどの相手を倒せるのは——」

「そう、災厄の如き敵手を倒せるとするならば……相応しい相手が——〈スベリオル超級〉の準備が必要だからな……!」

規格外に勝てるのは、当然規格外のみ。

僅かな時を経て……相応しき役者達が揃い踏みする——

「——」
《パドル無双之戰神》

「——」
《レヴィアタン無双之戰神》

「《月面除算結界・薄明》」

「本当は対【大賢者】【地神】用だったんだけどねえ……行っておいで、
【キングサイズ・マジジェルス・スライムK M S】君!」

「まさかこういう形で働く事になるとはね……《ケリドゥエン愛する者達へ》——MP供与三千万」

「今聞き捨てならない事が聞こえた気がするんだけど……まあ緊急事態だ。不問にしよう、《エターナル・ソウル・ジェイル》!」

「《ソウルクラッシュ》——ッ!!」

——斯くして、悪虐の魔神は滅びゆく事となる。

かの者を送った誰かの思惑通りに、異邦より飛来せし魔の神性はその望みを叶える事なく僅かな波紋すら残さず消え去り果てた。

そして、もう一柱も——



「……どうやら、漸く皇族の方々もお集まりになったみたいですね？」

「おい。条件ハ伝えテ、ちゃんト要求は呑んだんだカラさつサと教えろヨ——あ、の、へい、レ、

ギョウラーの弱点とやラをサ」

「何……？ 貴様、それは一体どういう事だ！」

「理解できませんでしたか？ それとも頭が固いんでしょうか。つまりは——」

「簡単に終わらせられるけど後味が最高に悪い方法か、それとも苦勞した上で外様の、
「脳髓喰らい」の私に大事な国民を預けて賭けに出るか……さあ、選んでもらいましょう
か——」

E p i s o d e E n d ……？

「データ削除済み」

□ ■ After Days……

「——ただいま戻りましたっ。懐かしの我が家クラシクです……」

「マスターさんもフォルトさんも、お帰りなさい。随分な旅路だった様ですね？」

「本当ですよーっ。『ドリームマン』案件なのは知ってたけど、まさかあんなにヤバいだなんて思わなかったよ……」

「あ、あはははー。ごめんなさい、詳しくは言えない事情があったので……」

「ん、上の人から了承は出てたから良いんだけどね。こんな事でもなきや態々遠路はるばる黄河まで行く機会なんてなかったしね」

「それでもそのお土産の量は明らかに買い過ぎだと思えますが」

「ふ、二人分。二人分のお土産だから……クランメンバーの皆やオーナー。勿論ラストさん用のお土産もちゃんと別個に買って来てるんですよ？」

「まあ良いですよ。これでも私達はベテランのへマスターなんですから多少の散財は進んでるべきでしょうし」

「わあい！ 私ラストさんのそういう意外と柔軟な好きですよっ」

「但しマスターさんはその珠については後でちゃんと説明してくださいね？」

「……………こ、これは私の戦利品デスヨー？」

「はあ…………火種は持ち込むべきではないと思うのですけど」

「まあまあ。あれは一応…………一応、ちゃんとした貢献と交渉の成果の報酬だから…………」

「分かってますよ。そうじゃなかったらもつと強く言っています…………」

「そうですよっ、私カーナーり頑張りました。褒めてくれても良いと思いますっ」

「いつも割と普通に褒めてるじゃないですか…………でも、ええ。ヘイレギュラー〈討伐のMVPになるとは思ってもみませんでした。本当に凄いですよ」

「実力はある筈なのに、他の〈超級〉相手の勝率はすこぶる悪かったからねえ。良かった良かった！」

「ふふーん！ ——あ、そういえば」

「そちらに出たと言うヘイレギュラー〈の方は、結局どうなったんですか？」

「ああ、それなら——」



旧ルニングス公爵領から数百キロメートル離れた平原地帯。

……その端の端、何もなにかのように見える場所……多重の隠蔽結界で囲まれた其処。

そこに、「アルコール・セプテム」の分体——「アルコール・ハイドラグ」は居た。

それは、万が一の為にと予め本体から切り離していた分体。

スライムのそれとほぼ同じであるが、サーキズムの使徒である「アルコール」はスキルなど用いなくともそれを為し……そして、結果的に保険は此処に成功したのだった。

だが……所詮、保険は保険だ。

所持しているリソースは本体の1%にすら満たず、その知性も本来のそれと比べ大幅に削がれている粗悪品……「アルコール」から分かれたれ、その名を持っているのが情けなるほどに脆弱な存在だ。

本体と比べ削れている所は余りにも多く、「アルコール」たらしめる異界の秘奥も僅かな数しか使用する事はできはしない。

そんな脆弱な分体は、今……この人気が無い平原地帯で酷く怯えているのだった。

その理由は当然——本体である「アルコール・セプテム」が討伐された事を知覚しているからだ。

「アルコール・ハイドラグ」は知っている。脆弱な身になった今だからこそ……より脆弱である人間達がどの様に考え行動しているのかと言う事を、本体以上の共感力で以て知っている。

客観的に見て、「アルコール」がどういう存在であるのかを、その存在に関係している者を敵対者がどうしようと思っているかを――

……間違いなく、「アルコール・ハイドラグ」の存在が知れたら草の根分けてでも探し出して、確実に始末しようとしてくるだろう。

生かしておけぬと赫怒の表情で、必殺の意気で殲滅しに来るであろう。

――嫌だ。それだけは嫌だ。

自分は「アルコール・セプテム」^{七番目のアルコール}から分かれたれ……そして、最後に残った希望なのだ、と。

自身を構成する大きな要素である悪意や加虐心すらも己の生存の為に隠れ潜み敵手をやり過ごす手段を探る知恵へと回し――

「ほう。案外近くに居たか。当てが外れずに済んだようだ」

——あつてはならない、他者の声を聴いた。

『??——ツ!!』

そこに——何らかの方法で接近を隠蔽していたのか、僅か数十メートルと言う距離に立っていたのは一人の……特に特筆する様な特徴もない、老人だった。

そこそこに良い外套を羽織った、何の武器も持つていない様子がない老人だ。

だが、しかし……先の発言と合わせて、左手に刻まれし「マスター」の象徴たる「エンブリオ」の紋章が刻まれているのが僅かにでも見えれば……

その老人が偶然此処に迷い込んだだけの老人ではあり得ない事が誰にだって理解できらるだろう。

【アルコーン・ハイドラグ】の行動は迅速だった。

——即座に構築した確殺の魔弾を……命中した対象を抵抗の余地なく強制的に“生贄”に捧げさせる呪詛が込められた魔法を幾発も老人に向けて解き放った。

それは、本体のそれと比べて大幅に劣る【アルコーン・ハイドラグ】が行える最強最大最速の攻撃魔術。

分かたれて尚その状況判断と決断能力には翳りはなく、己の生存の為の最適解を行使したのだ。

老人の目的も分からず、そして相手は「マスター」なのだから殺した所で大して意味はない？

そもそも本体が倒されて数刻もせずに残った分体である自身の所に来ている時点で——それが良い物である可能性など僅か程にしか残っていないのだ！

その僅かな可能性に賭ける程の余裕も希望もある筈もなく……ならば、邪魔者を排除するついでにその身体を司るリソースを贅として捧げさせる。

そして、「マスター」であろうと一度死亡したからにはあちらで情報を伝えられるとしても、この世界とは若干のラグがある。

その間に得たりソースをも費やして全力で身を隠し再起の為に地下深くへ潜る——
——瞬時の内にそう判断し不確定要素を省いた最適解に向けて行動したのだ。

実際に、「アルコーン・ハイドラグ」の判断は間違っていない。

確かに件の老人は「アルコーン」を助けようとするつもりなど欠片もなく、排除する為を探していたのだし、此処で倒れては他の行動できる「マスター」へ連絡しようとしても一手遅れていただろう。

勿論、索敵に特化した「エンブリオ」も存在はするが環境適応能力も持ち逃げに徹する【アルコール・ハイドラグ】を追い詰めるのは並の「マスター」では一筋縄では行かないだろう。

……卑小な分体とは言え、あれは【アルコール】なのだ。

僅かにも行使できる魔術を組み合わせれば熟練の「マスター」のパーティだって返り討ちにする程度は容易いのだから。

地下に潜り、リソースを溜める事が出来たのなら、猶更の事だ。

だから、【アルコール・ハイドラグ】の判断は間違っていないかった。

——間違っていたのは、眼前の障害を排除する為の行動の選択と……そして、拙速を重んじて相手を深く観察する前に速攻で行動に移った事だった。

仮に……攻撃する前に注意深く眼前の老人の「マスター」を観察していれば、気付いていただろう。

その「マスター」の左手に刻まれていた紋章が——酷く見覚えがある物だという事に。そう、二重の円枠の中心に向けられた三本の矢印の紋章——SCP財団のマーク

と同じ物であるという事に。

「ああ、対処手段は用意していたが、そう来るか。ならば容易いな」

老人……クラン、〈Superior Calculation Pioneer〉の
オーナー、オリジンの左手の紋章が輝き、その手に箱が創出される。

眼前に迫る呪詛の魔弾に対して、彼の有するTYPE・アップストルWithルールの
ピリンズの「災秘櫃 パンドラ」の

「パンドラ」

『了解——《確保》』

〈超級エンブリオ〉の力が顕現した。

固有スキルが宣言された次の瞬、「アルコール・ハイドラグ」の放った渾身の魔弾は
……霞の様に消えた。

——否、そのアイテムボックスに……【パンドラ】に収納されたのだ。

『……………ッ!?!』

【アルコール・ハイドラグ】が一瞬だけ疑問と驚愕に虚を突かれ。そして、その一瞬だけで勝負は決していた。

「さて、あれは本来の物ほどの不死性はないと思うが……不死身の怪物を屠るには、まあとりあえずは跡形もなく消し飛ばす——と言うのは定石だろうか？」

——次の瞬間。

【パンドラ】から放たれた極光の光線——《ダロリアの極光ブレス》OVERDRIVEが【アルコール・ハイドラグ】の全身を呑み込み。

極光の照射が終わり、後に残ったのは……既にモンスターですら無くなり、完全にリソースとして分解され光の塵となった【アルコール・ハイドラグ】と、勝者であるオリ



ジ
ン
だ
け
だ
っ
た



□ ■ — 幕間

……それは、闇の中での一幕。

本来であればあり得ざる筈の……ゲームマスターとプレイヤーとの私的な会話――

「――全く。今回程クールタイムが明けるのが待ち遠しい時は無かったぞ――本当に今回はやってくれたな。私達も度肝を抜かれたよ。終わったと思っていた悪夢に再会した気分だ。仮にこれが普段の意趣返しであれば大成功間違いなしであろうな」

「まあそう言われると思っただけでも。別にあれらは結果としてあなりはしたけど、僕らが意図して騒動を湧き起こしたんじゃないんだよ？」

「だが、その為の芽は其方で用意したし――その騒動で一人でも〈超級〉が増える事を望んでも居たのだろうか？ どうやら、今回は空振りだった様だが」

「否定はしないよー。……君達も知つての通り、僕達にも僕達の目的があるからね。

この世界の人達
 ティアンには悪いとは思っているけど——」

「何、別にそこは問題ではないだろう。だが……流石に今回の相手は不味かっただろう。この世界の理に非ざる術理の使い手は——場合によっては全てが台無しになる可能性すらあつた筈だ」

「……うん。僕達もそこは油断したなつて思わないでもないんだけど——我流の術理の使い手は、その……僕達にも察知できないと言うか、むしろ僕達も教えて欲しい所があるくらいなだけだね——」

「……頼むからもつとしつかりしてくれ……宣伝か？ もつと宣伝してへマスター〜を増やして欲しいのなら回りくどくしなくて良いぞ。私達もこの世界に消えて貰つては困るのだぞ……！」

「あははー、分かつてるつて。よっぽどへマスター〜が減つた時はお願いするかもねー」

「ああ。……今回の要件の一つ目は終わりだ。それで——」

「分かってるよ。合図を送ったのはこつちだからね。——今からジェームズ・フランクリン者の座標とマーキングを其方の部下の方に送らせて貰うよ」

「了解した。……うむ。座標の受け取りは完了した様だ。情報提供感謝する」

「どういたしましてー。まあ、こういうのは僕管理AIらの得意分野だからねー」

「ふ、得意分野だからと言ってこれも簡単に実行できるというのも未恐ろしいと思うが。あれも利マス用ター者になり得る者だったのだろうか？」

「——あれは君達みたいにお行儀良い人達と違ってこの世界を侵略しようとして来ていたからね。へマスター」になるつもりすらない慮外者に丁寧に接してあげる理由はないと思わないー？」

「違うない。……さて、まだ少し時間があるが——私は此処で失礼させて貰おう。向こうの方でも動かねばならないからな」



「うん、いってらっしゃい。——捕り物劇の成果、僕達も期待してるよ——」

□ ■ 〈決闘都市ギデオンの第四闘技場〉 闘技場控室

「——つて感じで、向こうはある程度手続きを踏んで来てるのにこっちはマナー悪いんだから——」

「ははは。多少の横紙破りは許してくれよ。君達の中で最も接触しやすいのが君だったのだ」

同時刻。

王国の大都市ギデオン。その闘技場の一室で……二人の男が向き合い密談に興じていた。

片方は元よりこの部屋の主である者。

長らくアルター王国の決闘王者であった青年の〈マスター〉にしてアルター王国の現決闘ランキング4位でもある猛者——【猫神】ザ・リンクス トム・キャット。

もう一人は——許可なき闖入者。

如何なる手段によってか施錠もされている筈のこの部屋に侵入せし珍客。

——カルディナクランランキング第30位、〈Superior Calculat

ion Pioneer)のオーナーである「大賢人」アーキ・セイジオリジンだった。

——だが、確かにそれは二人の肩書であるが……今対峙している二人としては、それだけでは不足だ。

即ち、正しくは……管理A113号チェシヤにして、「無限増殖 グリマルキン」。そして超級職にして〈超級エンブリオ〉を持つ〈マスター〉、それと同時に——

「まったく——ザ・ファウンダー創設者」、原初の一人オリジンがこんな所で油を売っているだなんて知れたら部下達のモチベーションが落ちるんじゃないのかなー?」

「この程度は息抜きだとも。やるべき仕事はきちんと熟しているのでな。今回だつて——ほら」

「——これは……**■****■****■**……の、欠片……もどき?」

「ああ、「アルコーン」の分体が持っていた物だ。大方、研究して複製でもしようとしていたのであろう」

「なるほど、それは危なかった……と言う程でもないかなー?」

そう言ってオリジンから差し出された物を受け取りながら苦笑する。

……実際に、管理AIであるチェシヤとしても■■■■を部分模倣したとも言えるそれは驚愕に値する物ではあるのだ。

それは間違いなく、この世界で公表されればパワーバランスを一変させ得る可能性を秘める程の技術だ。

だが……チェシヤの心理としては、脅威と言うよりも先に、感心と興味の方が先に出てしまうのが致し方ない事だろう。

それを為したであろう超常的な技巧と言うのはこの世界でも神と言える程の超越存在である管理AI達ですら持つていないのだから。

……あるいは、眼前にあるこれと同格以上のオーパーツと言える、かつての強敵である同様に超常的な技巧を持つ者が作った、封印するだけならまだしも封印した〈UBM〉の固有スキルの限定行使すら可能とある珠の事を思い出して。

そして何より――

「複製――とは言っても、これ自体は使用者の指向性に合わせるだけのリソースの塊でしかないからねえ」

「違う。広まればリソース獲得の近道にはなったただろうが」

「それだけでスペリオルクラスに――インフィニットクラスになれるのなら苦勞は要ら

ないんだけどねー……」

今までの苦勞を……この〈Infinite Dendrogram〉のサービスを開始するまでと、開始してからの苦勞を脳裏に浮かべそう嘆息する。

……管理AIである彼ですらしみじみと回想する程に濃く、そして長い苦闘の日々だった。

……しかし。

「——だが、そちらはもう目標数の半ば以上は済んでいる、だろう？ 実に羨ましい事に」

「——それは、その通りだねー。〈マスター〉の皆のお陰だね。勿論君達みたいな人達もねー？」

「私としては我が財団の精鋭達を以てしても四人しか〈超級〉に至っていないのが憤懣やる方ない所なのだが……」

「いや、四桁人程度の試行数で四人ってのは普通に凄い事なんだけどねー!」

その様に、古い知り合いとの短い会合を終えて——世界は再び回っていく。
その先に、その未来に何かがあるかは……きつと神無限級ですら分からない事——



「……本当に、羨ましい事だ。だが、こちらとて歩んでいるのだ。——進んでいるのだ」

「我らは我らの理念と律を持つ。それが同じ方向を向いているのなら……協力^を惜しむ理由は欠片もないだろう」

「異世界の限定構築は既に確立された。後は彼らの——新たな無^{インフィニット}限級の誕生を見届けるのみ」

「——本当に、実に羨ましい事だよ。だが……我らの目的はその遥か先にある物なのだから」

「その為に——君達^{無限級}をも普遍的な物とする為に、応援しているとも、愛^{エンブリオ}し子達よ——」

——Episode End.

無限の世界の備忘録

エアーボードの場合／天に声は届かない

□

— \langle インファイニット Dendrogram \rangle 。

それは、ゲーム史に残るであろう新たなゲームのジャンル^{様式}、VRMMO……長年ゲーマー達が空想していた“夢のゲーム”、その第一歩の名前だ。

それ以前にも、形式としてはVRMMOに分類できるゲームは幾つか出来ていたが……バーチャル・リアリティの名を冠すのに相応しくない程のリアリティの乏しさや違和感がある物、ゲームとして有るまじき健康被害が出る物などもあり、ゲーマーの諸兄らが熱望していた理想のゲームには程遠かった。

……それも、 \langle インファイニット Dendrogram \rangle が発売されるまでは、だが。何世代も先の技術を使っているかの如く体感できる、完全なるリアリティ。

NPC^{ティアン}の人間とまるで判別が出来ない程の反応も合わさり、最早“もう一つの現実”という売り言葉すらも真実と思えてしまう程の圧倒的クオリティ。

勿論、ゲームはゲームと、そこまでのリアリティを欲していない人向けに3DCGや

アニメーション視界によるサービスの提供も可能とする配慮も併せ持っているのを忘れてはいけない。

更に、たった一体で小国の電網を完全に管理掌握出来る時まで言われている超性能スーパーコンピュータにより形作られる電脳知性——管理AI。

それを13体も使用し、このリアリティを維持しながら、NPCやモンスターを含め億単位の活動が可能な広大さを持つその世界を、なんと単一のサーバーで管理し遊べる様になっている力業まで用いている。

ゲーム内でプレイヤー——（マスター）やNPCであるティアンが就く事のできる力ある職業、ジョブの選択肢は下級職だけでも1000を優に超え、その全てを併せれば万にも届くジョブ。

それを超級職という例外を除いても、一人8つも組み合わせる事が出来、それにより生み出されるビルドの数は数え切れないだろう。

当然、ジョブの幅がそれだけあるという事は遊ぶ幅も相応に広いという事でもある。

戦いに明け暮れるのもよし、魔法を研究するのもよし、自然と戯れるのもよし、商売をしてみるのもよし、モンスターと仲良くして仲間になる事だってできる！

目的次第でただ旅をする為のジョブに就く事や、釣りや採取、採掘等を極める事だってできるのだ！

人数が集まれば、様々なダンジョンを攻略したり、協力してクエストを攻略したり、クランを作ったりする事も出来るし——所属国家の選択次第では、戦争イベントにだって当事者として参加できる！

……ここまでだけであっても、信じられない程のクオリテイの、皆々が夢見たVRM MOの完成形の一つであるが——〈Infinite Dendrogram〉は更にその上を行く要素を持っていた。

その一つ目は——時間加速。

如何様によつてか余人には理解できぬ物の、ゲーム内部の体感時間を現実時間と比べ三倍にまで加速するという法外の超技術をその売り文句として提示したので——！

勿論、発売当初は多くの人々がそんな事は誇大報告だ、出来る訳がないと一笑に付していたが——提示されたサービスの内容に対して価格が非常に安価であった事もあり、極一部の人のみが〈Infinite Dendrogram〉を買い、プレイし、ログアウトして……度肝を抜かれる事となるのだ。

その信じられない程の技術が真実であつたと——

三倍時間——時は金なり、という格言にある通り時間とは非常に貴重な、得難い資源だ。

それを得られると言うだけでこの〈Infinite Dendrogram〉をプレイするという層が一定数出現する程度には非常に革新的な要素なのであった。

——が、曰く、「夢のゲーム」である〈Infinite Dendrogram〉において最大の「売り」は、それではない。

それが——〈エンブリオ〉。

「〈Infinite Dendrogram〉は、新世界と、あなただけの可能性を提供いたします」——

その言葉通りに……正しく〈マスター〉一人一人、完全に自分だけのオンリーワンを手に入れる事が出来るのだ——！！





エンブリオとは。

エンブリオとは、〈マスター〉のキャラクターメイク時に管理AI（ゲームマスター、と言ってもいいだろう）から与えられる自分だけのモノである。

与えられた直後は卵状の宝石の様な第零形態であり、この時は未だ何の意味もないが——〈Infinite Dendrogram〉をプレイしていくに従って〈マスター〉自身のパーソナリティを読み取り、千変万化、どころか——“Infinite Dendrogram”、無限の系統樹の名の如く、無限大に分岐して進化していくのだ！

パーソナリティ——と、一言に言ってしまったも、人のそれを読み取るには、人という存在は膨大に過ぎる。

或いはそれは性格診断や占いの様に簡素な物の様に移るかもしれないが——へエンブリオのそれは、その人の総てを読み取り、それに合った様に進化するのだ。

〈マスター〉自身の悩み・望み・願い、即ち願望・選択・人格・思考に行動パターン、過去・技能・経歴、或いはトラウマや渴求、執着等も含めて総て——そう、総てを読み取り、孵化し、進化していくのだ。

時には他者に理解されない様な複雑怪奇な特性を発露させ——超常の力を発揮するのだ！

そんなへエンブリオの、最初に孵化する事になる類型……カテゴリーは、レアカテゴリーを入れて、八種類。

——TYPE：アームズ。

武装、或いは器物。通常のアイテムの形状になる凡その物がこれに当て嵌まる、最も数が多いカテゴリーだ。

その名の通り、多くは特性に応じた能力を持つ武器や防具として、あるいはへマスターの役に立つ道具としてある意味最も分かりやすい自分だけのユニークであるだろう。

また、風変わりな物として義肢や義眼等、〈マスター〉の身体アバターの一部を部分置換し特殊な力を発揮できる物もこのカテゴリーに分類される。

ちなみにであるが、〈エンブリオ〉はあらゆる方法で他者に譲渡する事はできないし、仮に破壊されても一定時間経過する事で復活するし、前述の通り段々と次第に自分に合わせて更に進化していく。

その性能は最終的に通常の「鍛冶師」系統が作った武具と比べても非常に高い物になり、それはゲーマーの言う所の「最終装備」その物である為、アームズが最も優秀なカテゴリであるとの言説もあるらしい。

—— TYPE : ガードナー。

相棒、或いは魔物。守護する者の名の如く、〈マスター〉を守り共に戦うモンスターとしての能力を持つエンブリオのカテゴリだ。

モンスターとしての種別種族能力性格その他諸々は完全にバラバラで、ともすればアームズよりも多岐に渡る可能性を持ったカテゴリであると言える。

だが、総じてその能力は一般に「従魔師」系統が従えられるモンスターと比べても強く、ある程度であれば別々に行動できるというのも非常に独特と言えるだろう。

ちなみにであるが、このガードナーは分類としては「従魔師」が扱う従属モンスターと同じだが通常のモンスターの様に従属キャパシティを必要としたりはしない。

そうでなければ「従魔師」やその類型のジョブにジョブが制限されてしまう為、当然であるが……この仕様を逆手に取って後年、ガードナー限定でのみ行える誰もが認める

最強のビルド（例外あり）というものが生まれた為、ガードナーが最強のカテゴリーであるとの言説もあるらしい。

—— TYPE：チャリオッツ。

乗騎、或いは乗物。〈マスター〉が搭乗、騎乗し行動する事が出来るエンブリオのカテゴリーだ。

そこに古典的、近代的の括りは意味を為さず、〈マスター〉次第で騎馬に騎竜の様にガードナーとの複合カテゴリーの騎乗できるモンスターという事もあれば、車や艦船、航空機に戦車などのバリエーションもあり、何らかの方法で戦闘が行える物も多い。

また、ある種の例外として乗物その物ではなく、乗り移る物——他の何かに寄生して効果を発揮するタイプのエンブリオもこのカテゴリーに分類される。

ちなみであるが、この〈Infinite Dendrogram〉の世界は非常に広く、現実での大陸に近い広大さを誇つていながら、モンスターの脅威がある為電車や飛行機等の高速の移動手段は自前で用意しなければ隣国に移動するのにも現実での非常に長い時間を移動で費やす事になる。

選んだビルドや金の稼ぎ具合次第ではあるが、それは非常に厳しい物であり——それでいてこんな楽しく広い世界を遊びつくすのに最も適しているチャリオッツこそが最も優れているカテゴリーであるとの言説もあるらしい。

—— TYPE：キャツスル。

施設、或いは住处。即ち自らの城キャツスルである建物型のエンブリオのカテゴリーであり、一
 国一城の主の証であるとも言える。

建物であるが故に、他のエンブリオと違って移動が不自由であるが、比較的耐久力も
 高く、砦や要塞、城砦型等になればその定点防衛迎撃能力は類を見ない物になるのは当
 然の話だ。

また、工房や鍛冶場と言った生産に特化した施設のエンブリオになれば当然、そこで
 生産、強化、付与されたアイテムに相応の強化がなされる事になるのも他のエンブリオ
 と比べ得難い能力となるだろう。

ちなみにであるが、住处であるのだから当然居住能力もキャツスルの評価には含まれ
 る事となる。

キャツスルではない他のカテゴリーでは絶対に得られぬ居住性、否。これは正に——
 ゲーム御用達の「マイホーム」！ 己の好きなように家具を誂え飾りを付けて、思う
 が儘に快適な居住空間に仲間を呼び共に在る、その場所が作れるこのキャツスルこそが
 最も望まれているカテゴリーであるとの言説もあるらしい。

—— TYPE：テリトリ。

結果、或いは異能。〈マスター〉自身が中心、基点となって展開される範囲、或いは自

分自身に効果を与える、基本的に“固有スキル”に特化したエンブリオのカテゴリーであると言える。

他のカテゴリーと比べて、エンブリオ自身の実体がない為、破壊される事によりエンブリオが無効化される心配は殆どないが——そうであるが故に、その固有スキルを対策されてしまった場合最も無力となるというデメリットでもある。

ちなみにであるが、基本的に同進化段階のエンブリオのリソースは一定であり、その内訳は〈エンブリオ〉としての基礎性能（アームズとしての装備攻防力やガードナーとしてのステータス、チャリオッツとしての乗騎の性能等）と〈ハマスター〉に与えるステータス補正、そして〈エンブリオ〉最大の特徴である固有スキルで分配し合っている。

その中において、基礎性能という、他のゲーム内で代用しやすい要素を捨て、実体を持たないという事によりリソースの“無駄”を極力排したこのテリトリーこそが最高のカテゴリーであるとの言説もあるらしい。

そして——以上五種の基本カテゴリーと比べて圧倒的に少ない、三種のレアカテゴリー。

——TYPE：メイデン。

〈ハマスター〉の“危機感”に呼応して孵化される、少女、女性の姿をした特異なるエン

ブリオカテゴリー。

必ず他の基本カテゴリーのいずれかとの複合型となり、それぞれのカテゴリー先の形態に変身する能力を持つ。

その特性は——危機を脱する ジャイアントキリッ “強者打破”。

限定条件、特定条件下で特化した能力を発揮する様に進化する事が多く、窮地には頼りになるが……それ以外の状況において地力が低くなる傾向にある。

更に、女性形態と変身・変形能力を有する事から若干ではあるが総リソースにロスがあるという欠点もあるが……発揮される最大効力は他のどのカテゴリーにも勝ると言えるだろう。

——TYPE：アポストル

〈マスター〉の“使命感”に呼応して孵化される、少年、男性の姿をした特異なるエンブリオカテゴリー。

必ず他の基本カテゴリーのいずれかとの複合型となり、それぞれのカテゴリー先の形態に変身する能力を持つ。

その特性は——使徒の名の如く、主の為に部分的とはいえ世界を支配し作り変える アポストル “世界掌握”。

総じて非常に強力な固有スキルを有するアポストルだが、その代償か〈マスター〉へ

与えるステータス補正をほぼ失ってしまうという欠点も持つ。

また、これは実際TYPE：アポストルだけに限った話ではないが——この遊戯ゲームを、使命感という遊戯に持ち出すには無粋な物を抱えてプレイしに来るアポストルの「マスタ」は……面倒なパーソナリティをしている事が多いというのは、まあ愛嬌という物だろう。

——TYPE：ボデイ

身体ボディから——その総身を「エンブリオ」に置換する、アームズの部分置換型とも隔絶した身体ボディとなる、最も特異なるエンブリオカテゴリ。

種族の変更、耐性の大幅な変更、身体特性の極端な変更等——更には各々の「エンブリオ」を持つ、このカテゴリになる様な常であればあり得ざるパーソナリティから生まれる稀有な固有スキルを有する……端的に言つて最も特殊なエンブリオカテゴリであると言える。

それこそ、全身を置換するのだから——自分自身の身体を異物エンブリオと置換しても問題がない——そんな特異なパーソナリティで無ければ生じる筈がないのだから、非常に多い「マスタ」達を見回してみてもこのカテゴリには殆ど見える事が出来ないだろう。

その特殊性、特異性は間違いないく破格と言つても良い物だが……アポストル以上にデメリットを抱えなければならないのか、何らかのステータスが特例と言えるマイナス補

正になるという欠点を有している。

………最も、その特異な性能とパーソナリティを持つこの〈エンブリオ〉の〈マスター〉に対して、その欠点がどこまでの抑止力になるのかは不明だが。

——そして、これらですら、〈エンブリオ〉を分類するだけのカテゴリーなのである。実際には上級エンブリオになった際の上級派生カテゴリーへの進化や複数のカテゴリーからなるハイブリッドカテゴリーがあり、更には“必殺スキル”を覚えるまでになるのだが、ここでは割愛する。

どちらにせよ、カテゴリーに分けるまでもなく——〈エンブリオ〉は〈マスター〉のパーソナリティによって、その全てが無限大に枝分かれしていくのだから………



だからこそ。

だからこそ、無限大の可能性を持つ「エンブリオ」こそが、この「Infinite Dendrogram」の最も重要な要素であると言える。

故に、この遊戯^{ゲーム}を、そしてこのゲームを遊ぶ「マスター」を、その生き様を知りたければ、「エンブリオ」を見ると良いだろう。

三者三様、十人十色、千差万別の万華鏡の如き輝きと驚きと楽しみを見せてくれるであらうから。

さて、それでは………前置きはここまでにして――



□ ■ 〈Wiki 編纂部・カルディナ支部〉【瞑想者】エアーバード

クラン――〈Wiki 編纂部・カルディナ支部〉。

その名の通り、Wiki………現実世界におけるゲームの、この場合は「Infinite

te Dendrogram)についての情報を集積、検証、掲載しているウェブページを運営している集団により作成されたクランだ。

……しかし、この広大なへInfinite Dendrogram)の世界を——
ましてや、無限の可能性とも言われるへエンブリオ)を全てのへマスター)が所有しているこの遊戯^{ゲーム}で、ゲーム内の情報の集積と言うのは……言葉にするほど簡単ではない。

むしろ、膨大な——膨大に過ぎる“手”が、労力が必要な作業なのだった。

方を優に超える膨大なジョブ、アイテムのデータとその組み合わせ。

完全なるリアリティ……現実と同等の物理法則によつて為される、単純な様で数多の要素が絡んでくる計算式。

大陸の広さにダンジョンに、モンスターの生息分布は日毎に移り変わりへマスター)が現れた影響でアイテムの相場の変動すらも日常茶飯事なのだ。

それに加えて、ユニーク^{唯一}にして特別であるへU B M)とそれから得られる特典武器^{スベリオル・ジョブ}、超級職^{スベリオル・ジョブ}に勿論へエンブリオ)もあり——

……結果として、へWiki 編集部)の人数と勢力の規模は膨れ上がり、この様に各国に支部という形で独立したクランという形でありながらも大国全ての“クランランキング”で上位に位置するという事態になっているのだった。

そして——そんな〈Wiki編纂部・カルディナ支部〉のクランホーム。クランの規模にも相応しい広大な土地に建てられた巨大な施設。

この〈Infinite Dendrogram〉内にも資料として保存してある膨大なデータを守るに相応しき耐久性と防御力を持つ、その建物の一室。

……防音、防諜、当然スキルを用いたそれらにも対応出来る様に数多の結界スキルが張り巡らされている応接室の一室に一人でその男は居た。

中肉中背で穏やかな顔付きをしているという事以外、容貌に何ら特徴のないその〈マスター〉——エアードは、誰も来る様子のないその応接室で虚空を見つめながらその時を待っていた。

……否、虚空を、ではない。

その視線の先にあるのはウィンドウ——自身スキルの詳細を知る為の詳細ステータスの、それも〈エンブリオ〉の固有スキルの欄を見ているのだ。

更に厳密に言えば、己の〈エンブリオ〉最大の固有スキル——“必殺スキル”。

そのクールタイム^{冷却時間}が明けるのを待っているのであった。

本来は実体化できる筈の己の〈エンブリオ〉のそれを、いつでも発動できる様に整え、一人静かに待っていて——

——今、そのクールタイムが解除されたのであった。

「——《天よ我に言葉^オを授け給え^ク》」

そして、その必殺スキルの宣言と共に、誰にも理解できずとも、確かに世界は変革された。

あり得ざる理が、道理を無視し支配して、世界に散らばり満ちてゆく。

彼、エアバードのエンブリオ、「啓世条 オラクル」の能力特性——念話を行使し易い様に、世界を僅かに作り変える。

距離も、障害も。あらゆる隔たりを無視して対象と念話する事ができる様になる——ただそれだけの必殺スキルだ。

MMO、いや稚拙ながらも先に発売されたVRMMOですらも、ゲームシステムによつては全プレイヤー同士でデフォルトで行える程度のささやかな効果。

消費MP^{魔カ}も、クールタイムも特大ながら持続時間は最大十分間と、非常に大きな制約を抱える必殺スキルである。

だが——それは確かに必殺スキルとして相応しい効果を誇っていると、彼自身とその同胞達は確りと理解している。

何故なら——



□
■
???

——そこは、〈Infinite Dendrogram〉内であつて、〈Infinite Dendrogram〉内ではない場所。

世界の裏側、デバックルーム、謎空間etc……ゲームのプレイヤーたる〈マスター〉の数少ない目撃者達からは好き勝手に呼ばれている場所。

明るくも暗くもなく、無数にウィンドウが浮かび並ぶ、この完全なリアリティを誇つている世界においては場違いに思えるその場所。

その場所に正式名称という物はないが、敢えて言い表すとすれば——管理AI達

の作業場、とも言うべき場所であった。

ここで、否、ここだけではない、世界中のあらゆる同じ様な場所を通して、管理AI達はこの世界を——この遊戯^{ゲーム}を運営するにあたっての様々な調整を行っているのであった。

それは、ここにいる管理AI^{雑用担当}3号、チェシヤも同様の事であった。

他の管理AIが担当の仕事をやり易い様に下準備を整え、近日行う予定のイベントのモンスターならびにオブジェクト配置予定地の異常の有無を確認し、同時にチュートリアル・キャラクターメイクを数十件担当しながらインターネット上の定期巡回も行い——まあ割といつも通りのチェシヤの日常であった。

何せ、彼は雑用担当。同時並行処理に置いては他のどの管理AIよりも一日の長があるのだから、便利使いされて然るべきだと自分自身でも分かっている。

分かっているから——こういうヘマスターの対応も彼に宛がわれると言うのもまた道理なのだった。

「——一週間ぶりだ。そういう訳で前回の続きだ、チェシヤ。確かにへInfinite Dendrogramにおいてこのヘエンブリオが最も大きな要素であるという事は私達としても、君達としても合意するに至った訳だ。ならば私達がこのヘエンブ

リオ〉の摩訶不思議さに興味が移るのも至極当然の思惑という事だ」

「うんうん。でもそこは一応、ゲームマスター的な僕達としてはその先は自分で確かめたり考察してみたりするのをお願いしたんだけど——」

「分かつている。分かつているともチエシヤよ。運営側の君からすれば特定のへマスター〉に対する鼻頂はできない、だろう？」

だが、私は己のみの固有スキルで、己のみの特権としてこうできるのだ。ならば私としては多少の達成報酬を強請る程度の小言も許容して貰いたいのだがどうだろう？」

——強請る程度の小言って、それでだんまりしたらダツチエスやバンダースナッチの所へ行くんだからもう十分脅迫でしょー!?

前兆もなく、突然に聞こえてきた念話に慌てる事もなく、そう思考しながら表に出さずにチエシヤはへマスター〉への対応を続ける。

……彼のへマスター〉の名はエアーバード。

己のへエンブリオ〉の特性の極致、必殺スキルを用いて——このへInfinitive Dendrogram〉には存在しない、GMコールを行う事が出来る稀有なへマスター〉である。

……否、本来であれば普通に超高性能な念話として使用できる必殺スキルを、ある意

味仕様の裏を搔き、GMコールとして使っている、と言った方が正しいかもしれない。ともあれ、彼はこうして毎週必殺スキルのクールタイムが明ける度に^{管理A1}運営側に幾度となく遠慮なく疑念と質問をぶつけてきており――

他の己の職分を全うしている管理A1達に負担を掛けさせない様、チェシヤの仕事に彼の対応も追加されたのも当然の流れであったのだ。

【それは分かっているけども、へエンブリオへはこのへInfinite Dendrogramにおいて一番のメインコンテンツだからね。……うん、それなら他の話なんてどうかなー?】

【それは良いな。……勿論、いつかの様に公式サイトに載っている様な情報でお為ごかし等はほしだいだろうが――】

【あはは、あの時は僕も悪かったからさー。そうだね、それじゃ『監獄』の神造ダンジョンの――】



……そうして、チエシヤは今日も彼の核心を突く質問をのりくらりと躲しながら作業を続けていく。

〈エンブリオ〉についての質問のみならず、〈UBM〉や超級職、他にも失伝ロストしたレシピアやジョブ等の重要な情報も避け。

彼や彼の仲間であれば直ぐに確認できる程度の情報を匂わせるのみに留め、なんとか今週も乗り切ったのであった。

——尤も、勿論それ自体、本来はルール違反なのは全くその通りなのだが。

確りとしたMMORPGの運営としては、それに拘泥する彼に何らかの処分を下して然るべきだ。

だが、しかし——運営側である彼ら、管理AIはそれを選択しない。

特に……直接対応している管理A I I 3号——チエシヤは、そう自らの意思で選択する。

何故なら——

「ハマスター」の行動は、思いは、自由だからね——少しは手加減して欲しいけども——
！」
……既にその思惑も悟られた上で詰問されていると、察しながらも、そう呟くのだった。

……………E n d

アルファの場合／それでも僕は世界に臨む

□ ■ 2043年9月7日 如月アキラ

〃——こんな世界滅んでしまえばいい。滅べ、滅べ、疾く滅べよ——〃

——はて、そんな事を言っていたのは誰だったか。

薄ぼんやりとした頭の中で、機械的に食事を胃の中に詰め込む作業をしながら、そんな思考をついしてしまおう。

人は余計な事を何も考えたくない様な時には、そんな取り留めのない事を考えて暇を潰したくなる物だ。

確か、そんな物騒な事を言っていたのは、インターネット上で知り合った某氏だったか、それとも某氏だったか。

……まあ、色々と限界な人達だ。複数が似た様な事を言っていたし——冗句でそんな

事を言うくらいにはそんな思考が常態化している人達でもある。

肉体的に、精神的に、社会的に、或いは、金銭的にも——

2043年。21世紀も半ばとなり、未だ文明の進歩著しいこの時代においても……人間は過去に夢見ていた様な理想郷ユートピアを作るには至っていない。

それでも、まあ、勿論授業で習う様な過去よりは確かに生活は改善してきているし、向上しているのだろう。技術が進歩しているのにしてなくても困るが。

……その文明の光も、遍く総ての人を照らすという訳にはいかないが。

勿論、様々な要因による極限地域においては——等という屁理屈や、光が強ければ強い程その影はより濃くなる——という屁理屈ではなく。

“弱者”は“強者”に搾取される。

そんな当然の仕組みを、世界の摂理を呪うのは——“弱者”に置かれる者であれば、それもまた当然だと思う。

類は友を呼ぶ、とも言うべきか。

インターネットは広い。

——それ故に、誰かが何らかの目的で交流しようとするならば、自然と同じ様な人が集まるといふ物だ。

自分で見たい物が見れるし、見たくない物は見ない様にできる。関わりたい物とだけ関わって、関わりたくない物はシャットアウトできる——まさにインターネット万歳！だからこそ、時と場合によっては、自ずとか偶然にかはともかくとして、最終的に関わっていく人達は嗜好や好悪、そして思考も似通って来る。

……………ならば。

そんな人達と仲良く談話しちやったりしている僕は、勿論 “弱者” である訳で——



トイレから出て、教室に戻り、席に着く。

教室に戻るまでの間には誰も話しかけてくる者は居ない。

——まあ、僕に気軽に話しかけて来る様な間柄の人は殆ど居ないんだから当然だけど。

……容貌としても、社会的な風評、所謂スクールカースト的に圧倒的下位に位置する僕に話しかけて来る様な無駄をする人間はこの学校には居ないだろうから。

取り柄は授業のテストの成績のみ——だなんて、我ながらなんて典型的ながり勉才タクだと呆れ果てる。

自らそういう位置を占めたくてこうなつた訳ではない。

……ただ、自然に、そう、高校に入学してからの3ヵ月、夏休みが始まる前までの、他者に言わせれば高校生活の明暗を分けるその時期に、僕自身の気質からと、僕自身の状況からそれを面倒がって他の級友クラスメイトとの交流を怠つて——あれよあれよと言う間に格付けが終わっているのだから、恐ろしいものだ。

そして、運悪くも僕のクラスには、僕と同じ様なぼっち友達が組める様な相手も居らずに——

「——あつれーっ？ アキラ戻ってきてんじやーん」

「おっせーよ。何やってたんだよっ」

「くすくすくすくす……」

——……こんな相手に集られる羽目になってしまったのだ。



2043年——毎日に技術が進歩していくこの21世紀も半ばにおいて、当然ながらそれに連れて法が、規則が、慣習が、そして常識が少しずつ、少しずつだが段々と移り変わっていくこの時代。

……かつて、学校という教育の場における、“いじめ”というのは非常に大きな社会問題として挙げられていた。

あらゆる面においての“強者”から“弱者”に対する搾取の典型。

暴力、権力、学力といった物だけではなく、精神的に行われたり集団で行われたりする事で被害者の心に致命的な傷を負わせ、自殺にまで追い込むケースも年何回も……いや、それどころか何百回もあつた時代すらもあつたという。

子供の悪知恵で大人に隠れて行われていたり、時にはその大人までいじめに加担したりしていた事もあり、それ程の大事であつても予防は難しい物と思われていた。

——そこに、技術の革新により十数年前に普及し始めた“セキュリティシステム”が無ければ、あるいはこの進歩した時代でも人々は変わらず弱者を苛め抜いていたかもしれない程に。

詳しくは割愛するが、主に公の場に優先的に配置される様になつたこのセキュリティシステム——当然であるが従来の監視カメラ等と違い死角等とは無縁であり、暴力やその他犯罪の志向の行動を察知すれば即座に映像付きで関連会社に通報までされるスーパーマシンだ。

……僕としてはもう少しデザインを格好良い物にしてほしいと個人的には思っているのだけど。何処かで見えた事あるようなデザインだしね。

それはともかく 閑話休題、そのセキュリティシステムの普及により、全国的に“いじめ”の問題は、確

かに激減した。

古典的な漫画等に見られる「校舎裏」的な死角はなくなったし、単純な暴力は勿論、恐喝や恫喝等も警告と共に学校側へ通報される。

勿論、私物の盗難や嫌がらせ等もその影響で殆ど無くなり——
なるほど、ろくな人的コストも支払わず理想的な教育現場にできたものだ——

……そう思うのは、まともに生徒と向き合っていない様な教師だけだろう。

確かにいじめの問題は減った。激減した。

だがしかし、それはいじめがゼロになった訳でも被害者がゼロになった訳でもない。
むしろそのやり方が更に陰湿になっただけだ。

更衣室や個室など、先生は勿論セキユリティシステムすらも入り込めない「プライベートエリア」は未だに残っているし、セキユリティシステムは声音さえ気を付けなければ生徒同士の、友達同士のおふぎけのじやれ合いと巧妙な強請りの判断もまるでつかないれば当然、友達なのだからと密着して行われるそれだつて看過してしまう。

折角あんな高性能な機械が開発されて十数年も経っているのだから、今後は陰湿な「イジリ」や「ツッコミ」もちゃんと警告対象に入れて欲しい物だと思っているのはきつと僕だけではないだろう。

……尤も、そんな僕だって恐らくはまだマシな部類なのだろう。

僕がされているのはそれらの他には、強制的に宿題等の写しをさせられる程度。

自宅等の完全な密室に、自分だけのプライベートエリアに上がり込まれて恐喝されたり、学校側が完全にグルになって追い込まれたりしている訳ではないのだから。

………そう。

だから、僕はまだマシなのだ。

元より、学校生活に大して期待なんてしていなかったから。

底辺でだって別に構わない、救済を願っている訳でもない。

このまま華の高校生活が過ぎていくであろう事に暗い想いを抱かない訳でもないけども——もう、仕方のない事なのだ。

——……だから、むしろ今僕がこの短い高校生活史上、最高に苦痛に思っているのは
全くの別問題だった。

或いは、いじめなんてない爽やかなクラスであつても変わらなかつたであろう事で――

――「でさあ、バザーでめっちゃ良いの見つけたんだよっ！ 行こうぜー！」

――「マジか。どんくらい値切れそうかな？ うっしっしー！」

――「うん。それじゃジョブチェンしたら中央オアシスに集合……」

――嗚呼。

人は、この感情を――嫉妬、と言うのだろう――



不幸自慢なんて無益な事をしたくはないけども、有り体に言つて僕は苦学生だった。

家庭環境は……さておき、自分の自由に出来る金銭なんて殆どなく、参考書を買った
り毎日の食事をささやかな範囲で豪華にしたり——そして、自分の趣味を叶えたりした
ければ、自らバイト等で金を稼がなければならなかった。

……小中学校の頃は辛うじて居た数少ない友人に引き摺り込まれたゲーマーとして
のサガを発散したり、インターネットで遊べないというのは個人的には死活問題だった
為、高校に入って速攻で高校生でもできるバイトを探したっけなあ。

そして、アルバイトと勉学と、更に学校生活を全部円満に出来る程僕は器用ではなく
て——それ自体は、別に構わなかった。

何が嫌だったのかと言うと、至極単純——

私の勤にびびつと来たあのゲーム。実際にMMORPGの歴史を塗り替える程の能
力を持つ——〈Infinite Dendrogram〉。

——それを、自他共に認めるオタクでゲーマーな僕が初動に乗り遅れて、今まで
ゲームなんて殆どした事ない様なあいつらが存分に楽しんでいるという現実そのもの
だよおツ
!!!!!!

そりゃあね？

いくらあのハードにしては格安だとは言っても、ろくに自分の金を持ってないただの高校生活三か月目である僕に出せる金額でもなかったのは仕方のない事。

夏休み直前、発売と同時に情報が来ると言う超サプライズな初陣で世界中の度肝を抜いたあれを手に入れる為に夏休み中をアルバイト漬けにして、転売厨に常の百倍の殺意を燃やしながら漸く今日からプレイできると言うのに――

彼奴等と来たら親のコネかりア充同士の繋がりは分らないが、初日に近い時期から始められていたと言うのだから憤懣やる方ないとはこの事だ。

それも、買って遊ぶのは当然としても、彼奴等はそのままで真剣にプレイするでもない所謂「エンジョイ勢」だという始末――！

……分かつている。これは欠片も正当性のないただの理不尽な八つ当たりの嫉妬なのだ。

だが、それでも若輩ながらゲーマーとして物申したい気持ち溢れんばかりに湧いてくるのだ。

僕は、時間的な都合もあってMMORPGに本格的に手を出した事はない。

しかし、触り程度であればVRMMOも含めて有名タイトルにはいくつか手を出していたし、むしろああいいう広大な世界を舞台にしたオフラインゲームが一番の好みでも

あつた為、偶にソロで活動くらいはしていた事もあつた。

さて、MMORPG——マッシュブリー・マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイング・ゲームにおいて、サービス開始直後の初動と言うのは非常に、非常に大きな意味を持つ。

まだ誰にも開拓されていないそのゲームのあらゆる総て、イベントにダンジョンにアイテムにボスモンスターに——それらに挑戦して得られる報酬のみならず、ノウハウのないう状況で失敗して得られる経験だつて後続には得難い貴重な物だ。

MMOのタイトルによつてはその“はじめて”を踏破してみせたプレイヤーに少ない報酬を与える事も珍しくない。

その点、〈Infinite Dendrogram〉は——調べる限り、確かに初動だけでは決まらない。

だが——間違いなく、初動が非常に重要なMMORPGでもあつたのだ。

圧倒的リアリティを誇る世界と、NPCであるティアンの存在もあつて確かに未踏破のダンジョンやボスモンスターを攻略するカタルシス、という方面の線はない。

だが、〈Infinite Dendrogram〉にはそれ以上に重要なユニーク固有にして早い者勝ちな存在——そう、〈UBM〉と特典武器、そして超級職があつたのだ。

ボスを倒してMVPに選ばればほぼ戦利品や生産装備の同部位の装備の価値が無

くなるほどに超強力な特典武器。

非常に難しい条件を達成した——それぞれ先着一名だけしか就く事ができない非常識極まる性能の超級職。

……この二つだけで絶望的に埋め難い程にプレイ時間の重みの差があるというのに、時間加速とへエンブリオ」と言う、へInfinite Dendrogram」が広告に挙げた二大要素が更にその差を広げていく。

既にサービスが開始してから一カ月半——だが、実際は一カ月半ではないのだ。

そう、時間加速で三倍速にまで加速された内部時間は既にサービス開始から五カ月近くもの時間が過ぎていく。

五カ月……MMORPGで五カ月遅れの新参とか、ゲームの内容次第では既に絶望的な事になるだろう。

更に、へエンブリオ」という下級と上級の差が非常に激しいそれが全へマスター」に与えられていると言うのだから——

試算して夏休み明けまで全く手が出せそうにないと分かった時の僕の絶望具合と、この嫉妬も仕方のない事だ。

そう自分を慰めなければまたネガティブの連鎖に陥りそうだ。
だから。

——そっちも早くゲームしたいんだろう。だから今日くらいは平穩に終わって僕を家に帰してくれ……………！





そして、途中神を呪いたくなる様な顛末を無視し漸く辿り着いたのはへInfini
te Dendrogramのスタート地点。

即ち、キャラクターメイクの場である管理AI達の居場所のこの若干ながら特色の出
る不思議空間。

僕は担当の管理AIであるハンプティダンティさん（卵状の膜に覆われたすつごい美
少女さん）の気怠げな視線に出迎えられながらも順調にキャラクターメイクを進めてい
く事ができた。

キャラクターネームは他のネットゲームでも使っていた物を、装備もありきたりな長
剣と布鎧にして。

容姿は——若干急かされたのを無視して、時間を掛けて気合を入れて現実の僕とは似
つかない程の美少女の身体アバターを仕上げてみせた。

やっぱりゲーム内で見ると美少女アバターだよねという事で——そして、視界はそ
れもあり、更にとある目的の為に現実準拠の物を選ぶ。

……後半と言うか、序盤以降殆どぼーつとしながらやる気なしで対応されてたつぽい

けどね。

流石にそろそろ不幸を自認しても良いかもしれない、と思いつながらも——最後の最後にお待ちかねの〈エンブリオ〉を移植されて無事キャラクターメイクを全て完了する事が出来た。

……キャラクターメイクを完了するだけなのに無事って付ける所からしてもうおかしいのは気にしてはいけない。

この〈Infinite Dendrogram〉におけるキャラクターメイクは複数居る管理AIが持ち回りで行っていて、どの管理AIが担当するのはプレイヤー側は全く選べないからだ。

そして、なんと驚く事に管理AIの中にはプレイヤーに対する対応を適当に済ますとんでもない管理AIまで居るのだとか——

……と言うか、ハン^目プ^前テイ^にダン^{いる}テイ^{少女}がズバリそれだ。

僕ってばこんな所でまでリアルラックの低さを醸し出していくのか……

「それじゃ、これでキャラクターメイクは全て完了よ。質問はないわよね？ 早速へIn

finite Dendrogramの——」

「わああっ?!」 ち、ちよつと待って。ある、ありますよ質問!」

——つい考え事している間に勝手に進められそうになっていたので慌てて制止する。

危ない。管理AIとは言えAIなんだし、返事をする前に飛ばすなんて事は流石に

……ないと思いたいけど、なんとなくこの少女ならやらかしそうだと思う……

……と、数瞬沈黙しているとハンプテイさんに半眼で睨まれてしまった。

目は口ほどに物を言う……とはいえ、ここまで目線と表情だけで「早く質問を言え。

無いなら進めさせろ」とハッキリと分かるのは凄いやね。

——慌てて止めたけど、確かに質問は、あるのだ。

……… 僅かに言い辛い質問だけど、待たせると圧が凄いのでなるはやで言ってしまう

おう。

本来なら、ゲームの運営を行っているAIに聞く様な事ではないと判っていないながら――

「――はい。管理AIの貴女から見て僕には何の才能がありますかっ?!」



□ ■ 商業都市コルタナ アルファ

そして、へ In finite D end ro gram 内の初期国家の一つ、カルディナのコルタナと言う都市に降り立った僕は。

……絶賛先程の質問を悔やんで、初期地点の直ぐ近くの建物の影で羞恥に悶えながら蹲っていた。

(いや、我ながらあの質問はやっぱり変だったよね……自重しろ僕!)
流石に恥ずかしいので口には出さずそう自答するしかない。

ゲーム進行用の管理AIに人生相談とか、多分何処で聞いても正気を問われる様な爆弾行動をしてみましたのだからそれも仕方ないと思う。

お前はゲームに何を求めているのかと、もつと現実を見ると——
だけでも、自分の事ながら弁護しておきたい。

確かにこのゲーム、〈Infinite Dendrogram〉にはそれが聞けるだろうと思える程のスペックがあるのだから——

従来のAIとは一線を画す演算能力や情報処理能力の他、圧倒的にして様々な能力を持つ管理AI。それが13体も配置されており——

〈エンブリオ〉という、明らかにその人の脳内から何から全て把握しないと作れる筈のないトンデモ要素を打ち出してきているのだ。

……ゲームを始める前の僕の予想では、かのヘルメット型のゲームハードが怪しいと踏んでいた。

あのゲームハードで何らかの方法によりプレイヤーの脳内情報から何から全てを読み取って、複数の管理AIの演算能力を結集させて相応しい〈エンブリオ〉を計算しているのだと、そう思っていたのだ。

そして、それはこうしてゲームを始めた今。発言を若干後悔していながらも——殆ど確信に変わっていた。

それこそ、あの質問をする前から。いや、確信をしていたからあの質問をしたのだけでも。

ハンプティダンティさんは確かに気だるげにキャラクターメイクに付き合ってくれていた。だがそれは全く説明をしないという事でもなかったし、質問には一応答えてくれるだけの対応をしてくれていたのだ。

そして、その一応答えてくれたというだけの僅かな答えでも十分だった。

あのゲームハードを通して脳波データの登録や、被っているのはヘルメットだけであるというのにアバターを作る際に現実の全身の姿を即座にモデリングできるといふ、それらだけでも僕のしていたただの妄想がある程度核心を突いていたのだと分かったから。

……実際に、技術力とかどうやって実現しているのかなんて全く分からないけど、それでも、ゲーム側がそうやってプレイヤーのパーソナリティを測定しているというなら、当然気になるんじゃないだろうか。

正しくプレイヤーの全てを反映していると言うのなら——己の向き不向きを、才能すらも測定する事ができるんじゃないかって。

そして——こんなクソツタレな人生を歩んでいる僕でも何か為せる事があるんじゃないかって。それを知れるんじゃないかと——

……そう期待して質問したのだけど

「——ええ？ そうねえ……あなたはそんなに特筆する様な才能無さそう、かしらね？」

「——……あら、ごめんなさい。でも、本当に何も才能がない人なんてそんなには居ないから安心していいんじゃないかしら」

「——どうしても気になるなら……ええ、あなた自身の〈エンブリオ〉に託してみるのも良いんじゃない？ 期待しているわ——」

才能、そんなにないらしい。そっかあ……ないのかあ……

黙秘や詭弁を弄されなかつた事を喜ぶべきか、それとも返答の内容に落ち込むべきか少し悩んじゃうよね……

結局最後にはゲームをプレイしてからののお楽しみ！ っていうありきたりな構文だったし、深く信じない方が良い類なのかもしれない。

けれど、やっぱり結構決心して質問したつもりでもあるので羞恥も合わさって心の傷

が疼く……！

「……ま、後は〈エンブリオ〉を楽しみにするしかない、かあ……」

そう呟いて、壁に背を預けて表通りを——商業都市コルタナの雑踏を見やる。

大きな、とても大きなこの都市の大通りには多くの露店が立ち並び、道行く人々は活気と活力に溢れている。

そこかしこで客引きや値引き交渉の、あるいは感嘆に満ちた笑い声が響く。

……遠くから見ても、紋章の有無で〈マスター〉もテイアンも変わらず相当数居る事が窺い知れる。

誰も彼もが生き生きと、己の全力で生き足掻いている姿だ、と僕はそう思った。

「……………」

反面——僕は何をやっているのだろう。

インターネットで話す知り合いだって、その中には *Infinite Dendr*

ogram)をプレイしていると公言していた知り合いだった。

ネット上では友達と言いつつ間柄の人だって、他のMMORPGで良く組んでいた人達だった。

なのにそういった人にも知らせず、独りでこうやって一生懸命な人達を遠くから見るばかり。

ただ独り、誰にも知らせずこの世界に来たのだ。

学校でだって——他人が楽しんでる所を見て、無意味に嫉妬し、賢しらに己の才能を——己があれらより優れているのだという証拠を希求して、厚顔無恥にも管理AIを頼りにする始末。

そして、それが得られなかったからってこうして不貞腐れた振りをして、自己弁護に執心する——

「……はあ、度し難いよねえ……」

心の底から、そう思う。

自己分析しながら、自己嫌悪して、自己陶醉する……本当に度し難い。

そりゃあ、こんな何処でもうだつの上がない自分に才能があるか、なんて聞かれて

ハンプティさんも困りものだろう。

そんな僕に、何が出来ると言うのだ？

この〈Infinite Dendrogram〉だつて、実質五カ月弱も出遅れている、調べた程度の情報しか持つていない僕に。

「本当に度し難い……………」

本当に、呆れ果てる。

そんな事を考えながらも、まだ己に希望を持つている僕自身に。

あのハンプティさんが言った様に——己のパーソナリティを反映している生まれる〈エンブリオ〉であれば、何かしてくれるんじゃないか、と。

この広大にして、まるでもう一つの現実であるかの如くリアリティを持つ世界で。未だに期待を捨てきれないのだ。きっと、何かできるんじゃないか、と——



そして。

その期待は——確かに叶えられる。

それは、確かにその〈マスター〉だけの真似できない力であり。

それは、確かにその〈マスター〉と常にこの世界で共に在り。

それは、確かにその〈マスター〉のパーソナリティにより生み出されたオンリーワンの“力”だった。

尤も。

〈マスター〉のパーソナリティを参照して生まれる〈エンブリオ〉の総てが尋常の物であるという訳ではないのだが——



「……………あは、あははは」

そうして。

僕の〈ヘエンブリオ〉はそれから直ぐに、無事に孵化した。

酷く清々しい気分だ。笑いたくなるのも無理はないといった所だ。

そうと意識するだけで、僕のエンブリオ——【廃滅神話 イシユチエル】が展開され、そして広がっていく。

TYPE：テリトリー——その中でもそこそこの範囲を持つらしい僕の〈ヘエンブリオ〉が薄く周囲にその手を広げる。

当然ながら——ここは商業都市、コルタナ。

七大国家、カルディナにおける〈マスター〉のスタート地点である此処では、〈エンブリオ〉を孵化させたばかりの〈マスター〉がTYPE：テリトリーの〈ヘエンブリオ〉を無造作に広げるのに慣れ切っていたのだろう。

道行く〈マスター〉の幾人かがこれを察知してか僕の方に視線をやる——が、即座に視線を元に戻す事となった。

「……………まあ、そうだよね」

……………当然、そうなるだろう。

まだジョブにも就いていない、明らかに「エンブリオ」を孵化させたばかりの独りである新米「マスター」に絡んでいく様な物好きはそんなに居ない。

……或いは、とても勤の効く「マスター」がこの中に居れば、止めてきたのかもしれないが——

「よし！ 少し遅れちゃったけど、僕も頑張ろう！ まずは——」

そう、まずは——あのハンプテイさんの言った通り、全力で自分の「エンブリオ」にそれを託してみようと思う。

……あはは。

ハンプテイさんの言った通り、託してみよう……なんて責任逃れな科白だろう！

——それでも。

それでも——僕の「エンブリオ」は、こう孵化しちやっただから……仕方ないよね？

だから……周囲にいた「マスター」の皆さんは、ご愁傷様——

「——
《ルーンインズ、デイ》
《世界が終わる日》」

【致死ダメージ】

【パーティ全滅】

【蘇生可能時間経過】

【デスペナルティ：ログイン制限24h】



……そんな訳で。

僕のへInfinite Dendrogramへ歴史はここから始まったのでした、

と。

聊か冒読的なへエンブリオが孵化しちやったけども——さて、あれが僕の才能なのか願望なのか、はたまた全く違う何かなのか。

それはまだ分からない——けれど。

……それも、僕が知りたかった事も、きつとこの遊戯ゲームを続けていけば、僕のへエンブリオが教えてくれるんじゃないかって。

そう思うんだ——

……………End

来栖恋也の場合／燃え上がる様な——・FBI Mの場合
／大焦熱地獄



——つまらない日常は嫌いだ。

——ありきたりな物は要らない。

——冷めた様な当然に価値はなく。

——ありふれた普通にも興味が持てない。

——もつと、もつともつと刺激が欲しいんだ。

——熱く熱く、燃え上がる様な、鮮烈なるソレを——

——この遊戯でなら、或いは……



□ ■ 2044年1月1日 〈ノズ森林〉

眼前に大型の狼のモンスター——「テイルウルフ」が迫る。

八匹纏まった群れが、勝利を確信しその顎を大きく開き、同時に狙っていた青年に襲い掛かる——

「——《神宝反射鏡》。はっ！ 効くかそんなもん！ てやあああッ!!」

「油断しないでね、来栖君。《クイック・スロー》！」

しかし、モンスターとしては珍しい群れの連携攻撃、死角からも狙ったその攻撃は——青年の周囲に薄く張り巡らされていた障壁に罅を入れる事すら叶わず反射され、牙が砕かれ衝撃で顎まで破れ。

更には返す刃の大剣による薙ぎ払いと、後ろに控えていた【斥候】の女性が投擲した短剣により、群れの数は次々と減っていく事となり――

……この〈ノズ森林〉に巢食っていた中でも、そこそこ大型の【テイルウルフ】の群れは、そうやって新人へマスターへ二人の手で容易く壊滅させられたのであった――



2044年、1月1日。

――謹賀新年!!

お正月、三箇日、新年――その目出度い、多くの人の休日である祝日を、当然の様にイベントを企画する人間達は見逃す訳がない。

それは現実でのイベントだってそうだし、商店でも多くの店が福袋等と言い張り昨年の余り物を詰め込み売り出したりしたりしなかったりするものだが――ネットゲーム

においても、それは変わらない。

多くのネットゲームが、その媒体によらず正月、新年イベントと題して非常にお得なイベントやキャンペーンを催して、既存客を更に深みに嵌らせたり新規客を呼び込んだりするのであった。

所謂、「季節イベント」としても、周年イベントに並ぶ大規模な物となりがちなこの「新年イベント」であるが——当然ながら、昨年の7月に始まったばかりの新進気鋭の大型VRMMORPGのタイトルである〈Infinite Dendrogram〉でさえも例外ではない！

サービスが開始してからの、初めての新年イベント——流石にこの時ばかりはおよそ月に1回か2回あるかないか程度しか公式イベントを行ってこなかった管理AI運管と言えど奮起する物。

つい先日行ったばかりのクリスマスイベントの後処理と並行し、新年イベント用の景品やイベントモンスターの作成と湧出ポッポの設定、イベントのアナウンスに——他の懸念事項の有無の確認も終え。

そうして行われた〈Infinite Dendrogram〉の正月イベントであるが……奇を銜った趣向ではなく、単純に効率が良いイベントモンスターが多数湧出する様になっていた事もあり既存の〈マスター〉達には概ね好評に受け止められ——

——今までのゲーム運営の成果、多数の「マスター」達の口コミや評判もあり、正月という冬季の大型休暇に多くの新規顧客新人含マスターの獲得に成功したのだ！

七大国の初期スタート地点には新人「マスター」達と将来有望そうな若人を勧誘せんとするクラン達でごった返す事となり、更には各国の初心者狩場も「Infinite Dendrogram」サービス開始暫く以来の賑わいぶりを見せる事になっていた

（順調順調。〈Infinite Dendrogram〉サマサマだな！）

そして、ここ、奇しくもデンドロ口内でも冬季の季節がやってきておりやや肌寒いこの「ノズ森林」で現在絶賛活躍中の、内心はしやぎつ放しの青年、来栖恋也もそんな新人「マスター」の一人だ。

ゲームを遊戯ゲームとして純粹に不純に楽しみに来た彼は、ぱつと見では非常に順調なスタートダッシュを切れた新人「マスター」の一人だった。

……この世界にやってきた直後こそこの世界のリアルさにたじろいだりした物の、それを？み下し「騎士ナイト」のジョブに就き、早速初心者狩場に狩りに出る前には自身の「エ

ンブリオ〉、「災禍反鏡 マフツノカガミ」も孵化させるに至る。

更に、自身の〈エンブリオ〉である「マフツノカガミ」が持つ強力な固有スキル——
《神宝反射鏡》。

MPを継続消費して自身に対する全攻撃を反射するという「まさにチート！」とも言うべき性能に興奮するなどというのは無理があるだろう。

それは、まだジョブに就きたてのひよっこである彼ですら、油断も慢心もしていて尚
〈ノズ森林〉の中でも大きい方のモンスター非人間範疇生物の群れに出くわしても全くの無傷で返り討ちにできた事からも察せられる物だ。

そして——もう一つ。

彼がこの世界ゲームに求めていた物も——

「——来栖君？ 君の〈エンブリオ〉が有用なのは判っているけども、消費もあるんだからあまり突出しちやダメよ？」

「わ、分かっていますとも！ このゲームでは何が起こるか分からないから街に戻るか口グアウトするまで油断するな、ですよね！」

「よろしいつ。まあ、こんな場所に〈UBM〉とかが出てくる事はそんなにはないと思うけど、一応ね」

「はい!!!」

そう、この世界で知り合った女性の新人へマスターへ、【斥候】のイリスと組む事が出来たのが、一番の収穫だった——!

……別にそこまで隠す事でもないだろうが。

率直に言って、彼は直結厨（軽度）だった——



直結厨。

それは、俗に言ってネットゲームにおいてゲームの内容よりも異性との出会いを求めるネットゲーマーを揶揄したネットスラングだ。

その起源はそれこそネットゲームという物が世に生まれた40年以上前にも遡る事ができ、むしろその時代ではネットゲームにおける交流の一環として割とありふれた存在であった。

一時期はネットゲームで知り合った男女が現実でも付き合い始め、そして結婚に至るケースも相応数見受けられ、更に技術が、インターネットが普及してからはそういったネット婚に関しても世間の寛容さも増してきてはいる。

しかし、ゲーム内の評判においては必ずしもそうとは限らない。

端的に言って、ゲーム内での効率よりも交流や出会いを求める彼ら「直結厨」と、ゲームの攻略と効率化を最優先としたい「効率厨」は互いに絶対に相容れぬ犬猿の仲間なのだ……！

その争いの歴史は非常に血濡れで根深い物となっているが、今回の話には特に関係ないため割愛させていただく。

今回の話、そして来栖氏にとつて重要な事は——「Infinite Dendrogram」は非常に直結厨から見ても理想的な環境である、という事だ。

まず一つ目に、「Infinite Dendrogram」はリアルでも女性のプレイヤーの比率が非常に多いのだ。

少なくとも、他のネットゲームと比べたら格段と。

それだけでも十分に素晴らしい事に加えて——この遊戯には、ネカマが殆ど居ない、という事実を抜かす事はできない。

VRMMOとしての特性なのか、技術力的な問題かは彼らには分からないが、現実の

自分の異性の身体アバターを作り、動かすというのはえも言われぬ違和感に襲われ、多くの人がそれだけで引退リタイアしまう程のマイナス要因になってしまうのだ。

……本来は、アバター作成の自由度がそれだけ低い、と言う事でマイナス要因になるそれはしかし、即ち女性へ「マスター」を見つけたならそれは十中八九現実でも女性であるという証左となるのだ！

勿論、容姿の美醜はキャラクターメイクで大幅に改善出来る為、リアルの容姿の「アタリ」を保証できる物ではないが——

来栖氏程度の「ライト溜らな直結厨かオタクであれば、むしろリアルで直接会う勇氣はなくともリアルで女性だと確信できる美麗な身体の人と仲良くできると言うだけで十分最高なのであった。

第二の理由としては——「Infinite Dendrogram」の目玉でもある、「エンブリオ」の存在だ。

何を置いておいても、「特別な」、自分だけの——力、というのは良い。直結厨である彼らをしててもその存在は非常に都合が良い。

……元来、人に限らず、動物と言うのは優れている異性に惹かれるモノだ。

容姿、財力、学力、将来性——そして、単純に能力や、自分に持つていない何か、などだ。

……ゲームで異性にアピールする様な人間が何を言う、と思われるかもしれないが、
 彼らは彼らなりに真面目にゲームをやっているのだ。

そのゲーム内で己の能力を異性にアピールする為に、自分に注目して貰いたいが為に、或いは推しの「姫」に貢ぐアイテムを手に入れる為に（姫プレイについては長くなる為省略するとする）。

だが、悲しいかな。やはり彼らは直結厨なのだ。

それらは目的の為の手段の一つであって——それを一番の至上目的とする効率厨には一手も二手も上手を取られてしまう。

しかし——「エンブリオ」があれば、話は違ってくる。

己のパーソナリティを元にして生まれる、自分だけの固有スキルを持った無二の相棒。

それがあれば、「エンブリオ」の特性によって相性で、限定条件下等で——ただ「エンブリオ」の「マスター」であるというそれだけで、並み居る効率厨以上の戦果や結果を手に入れる事も夢ではない。

それほどに、「エンブリオ」とその固有スキルというのは強力なのだから！

そして——三つ目。

………これは、直結厨としても激しく意見が分かれる事案ではあるが——一言で言えばティアン^Nの存在だ。

ティアンとへマスターの結婚すらもあり得るあの世界において、直結厨が果たしてどう行動するのか——それは、また別の話になるだろう………



さて。

そんな直結厨（ライト）の来栖氏であるが、彼は直結厨としても好調なスタートダッシュを切る事が出来ていた。

初期スタート地点や転職用のクリスタルがあつた騎士団、そして冒険者ギルドでも目敏く自分を同じ様な新人女性へマスターが居ないか探して——早速、こうして見事に組む事が出来たのだから。

初々しい初心者時代の、女性とのペア狩り——同じ直結厨から見れば羨ましがられる様なその境遇にありつける事ができたのだから。

尤も、イリス氏はそんな魂胆も見抜いて、むしろやんちゃな弟でも見るかの様な目線で接しているのだが——彼にとってはそれだって十分なご褒美なのであった。

一応モンスターの警戒しながらではあっても、彼の固有スキルの強力さもあり十分談話しながら行える範疇だというのも良い。

素晴らしき我が〈ヘエンブリオ〉也！ 等と自画自賛したくなる程には。

狩りも順調、コミュニケーションも順調、とルンルン気分で〈ヘノズ森林〉を行く彼らの前に敵う者が居る訳ないのだから。

（警戒、って言ってもイリスさんのお陰で殆ど必要ないしなつ。これは本当に当たりだぞう！）

——その一因は、またもや〈ヘエンブリオ〉だ。

幸運にも、イリス氏の〈ヘエンブリオ〉、「グライアイ」と呼ばれていた機械の小鳥は索敵特化の固有スキルを所持しているのだから。

周囲数百メートル α の範囲内において彼女が見逃す者は何もなく。

この〈ヘノズ森林〉において無敵の反射能力と索敵能力があれば、どの様な不測の事態が起きようと何とかなる筈——



—— だったと、過信していたのだ。

忘れてはいけない。

この〈Infinite Dendrogram〉において、不測の事態、所謂理不尽とは即ち、他の〈マスター〉や〈UBM〉の乱入。

—— つまり、未だ第一形態である彼らを遥かに凌駕する固有スキルを持つ化物達による行いだという事を——！

故に。



彼らに出来た事は、それに、そしてその前兆に気付く事だけだった。



「——いけない、来栖君！」

「へ、はいっ!？」

順調に。

順調に進んでいる時、ふと横を歩いていたイリス氏から切羽詰まった声でそう言われる。

すわ奇襲か不意打ちか——と、彼も即座に《来栖神宝反射鏡》を展開する。

割と狩りではガチ勢のイリス氏の影響を受け直ぐに反応する事が出来たのはこの短期間の狩りの成果か。

しかし。

インフェルノ
天焼く魔弾。

遙か——遙か遠方の、森林の中に切り立った崖の上。

そこに居た一人の男（マスター）と彼が銃身を向けながら呟いた言葉に、イリス等を含む索敵系の能力を持った僅かな人員は気付く事が出来たが——意味はない。

仮に気付けたとしても、〈ノズ森林〉に居る様な新人〈マスター〉には、それを防ぐ術も、避ける術もないのだから。

直後。

直径にして、百メートルもの巨大な火球が〈ノズ森林〉を貫き通し。

ノズ森林の一角、およそ一割近くもの広域が——灼熱の業火によつて焦滅された——



「あはははっはああっ！ 良ーい景色だなあ！」

燃える、燃える、燃える——

つい先程までは薄着では過ごし辛い程の寒気を孕んでいたこの〈ノズ森林〉が——猛火に包まれ凄まじい程の熱気に晒される。

木々に炎が燃え移り、モンスターや、新人〈マスター〉達が火炎に巻かれながら逃げ惑う様を、こうやって上から眺めているだけで胸がすく様な感じすら覚えさせる！

中には、運悪く俺の〈ヘエンブリオ〉、〈煉獄魔炎 インフェルノ〉の必殺スキルで作られた火炎の弾丸が直撃しデスペナルティになった新入り〈マスター〉も多数居た様だが

「くつくつく。可哀想になあ。デスペナが明ける頃にはもうイベント終わっちゃうぜえ！」

俺の名前はFBI M。

プレイヤー・キラ

—— P Kだ。

P K——即ち、同じプレイヤーである〈マスター〉を殺す事を生業とする者だ。

P Kの恩恵も、理由も多岐に渡るが——おそらく、俺みたいなのがその中でも多数派だろう。

——ただ、面白^いからやっている。

だってそうだろう？

信じられない者を見るかのような顔で消えていく奴。

抵抗する手段を持たず、恐怖と絶望で彩られた顔をして消えていく奴。

ああ、必死で従魔を「ジュエル」に戻そうとしたりする奴も居たっけな——P Kなんて初撃でほぼ決まるんだからもう遅いのになあ！

俺としては、決死の覚悟をして向かつてくる癖に——対人に慣れ切った俺らに手も足も出ずに死んでいく馬鹿な奴が一番最高だったが、まあそれはP K個々人の好みつて奴だ。

他人の好みを否定しちやいけねえし、当然俺の好みも否定させねえ。

……まあ、一番嫌な手合い、というのは凡そ一致するのはちよつとした笑い所だが。

だが、やっぱり一番にピンピンに俺達に刺激を与えてくれるのは——ここがV R、現実と同じリアリティを与えてくれる遊戯であるつて事だ。

当たり前だが、ここは他のM M O R P Gなんかとは何もかもが違う——特に現実準拠の描写でなら。

肌で溶ける雪の冷たさ、顔を舐める炎の熱、両の手に抱える鉄の重み。

相手を殺す感触、悲壮感に絶望の表情、刺さる程に鋭い敵意と殺意に自分が流す血の味も——！

何もかも。

何もかもが——現実リアルにしか感じられない程のクオリティだ。

既に万回も言われているであろうが、神ゲーとは正にこの事。

そして、そんなリアルなこの遊戯の世界であるからこそ——

「——相手を蹂躪した時の快楽も、また格別なんだよなあ」

パチパチ、パチパチパチ……と、拍手の様に炎が爆ぜる音が僅かに鳴り響く。

この広い広い（ノズ森林）のほんの一面ではあるが、辺り一面には灼熱の炎が回りきつており、経験値も入らなくなってきた事から察する。

相応の火炎耐性を有する自分も、僅かではあるがHPが減ってきており、このまま滞在すれば【火傷】や更に重度の状態異常になる事は間違いない。

また、そういったHP的な事情がなかったとしても——PKとして、仕事に、それも今回程の大仕事に励んだ後に一カ所に留まっているというのもあまり良い事ではない。

森林の僅かな区画を燃やした程度では、他の（マスター）だって範囲攻撃等で森林破壊してる事を突けばそう指名手配される事もないが、このまま延焼が続けばどうなるかは分からない。

ならば有耶無耶である今の内にログアウトして暫く時を置いてセーブポイントへ戻るのが——

【他者接触状態につき、ログアウトできません】

「——チイツ！ 《篝火の装》」

「させへんで？ —— 《薄明》」

——一瞬の内に、朝の陽ざしは夜の薄闇にとつて変わられ、高速発射の固有スキルを発動しようとした瞬間、自分の銃が、「インフェルノ」が、内側から爆発した。

熱を喰らい、熱を生み、熱を溜め込み熱を吐き出す、俺の無二の相棒が、無様にその上半身を焼き焦がしひしやげた姿になり果てていた。

そして、その余波で——相応の火炎耐性を持つ俺の身体は全身に【火傷】を負う。

「ぐうい、がはあッ!？」

「おー、よお喚くなあ？　PKなんかから自分もやり返されるかも——なんて、想像はしとつたんと違うん？」

……炎の中から端整な顔立ちをした女性が——十数人の配下を伴って現れる。

一様にして同じ聖印をその身に纏う、このアルター王国のトップクラン——へ月夜の会。

その頭クラウン首——【女教皇】扶桑月夜！

……不味いな、まさかこんなに早くトップクラン様が手勢を連れてやってくるという

のは流石に予想外だった。

恐らく、何処かであそこの信者をPKしてたのが何かの逆鱗に触れて目を付けられていたとかその当たりか？

これだからカルト宗教は関わりたくないんだ……！

「——はっ。トップクランのオーナー様がPK一人に随分な事だな。〈月世の会〉は何時からPKKを始めたんだ？ 今度遊びに行つてやるから教えろよ」

「……本当に口が減らんねえ。ま、常日頃からPKしてる層なんてそんなもんやね。勝ち目がないからつて舌戦に切り替えようとするのはプライドがないんやろうか？」

浅い挑発だ。

……準〈超級〉である扶桑月夜とその手下達の戦力であれば、ここで一も二も言わず俺を殺すのが最善だと思っていた。

だが、そうはして来ない。もしや、何か他に目的があるのか？

背後の手下達は……ダメだな。流石に見覚えはねえ。

どんな〈エンブリオ〉を持つているかも分からねえ。こうなりや死ぬ気で一発かましてやるか——

「——不思議そうやね？ それじゃ、早速だけど要件を果たさせて貰うわー」

「ああ？　言っておくが俺は高えぜ？」

「ああ、別に、売ってくれなくてもええで？　——〈武器屋・ブロンズ〉〈宿屋・未明〉に〈デュツセル〉のホーム——あれら、放火したん、あんさんやる？」

「——」

まさか。

まさか、そんな事の確認の為だけに来ていたのか？

この炎の海の中を？　公式イベントをやっているこの時期に？

答える前に、一瞬で周囲を見回す。「観測手」のスキルまで使って、念入りに確認するが……やはり、来ているのは〈月世の会〉の手下達だけだ。

こいつらは馬鹿なのか？

仮に、俺がその犯人だと仮定していたとして（まあ真実だが）、俺がここでそれを答えてやる意味は全くないという事も分からないのか？

それこそ、そういった役割のNPCに詰問されたりその様な場に召喚されたりした場合はこの様な質問に黙秘した場合、それだけで有罪判定が下せる、という法律にはなっ

ている。

《真偽判定》様様だ。そして《真偽判定》の恩恵はNPCであろうと《マスター》であろうと変わらない。

だから、仮に俺がここで答えるなら、奴らが《真偽判定》でそれを真と確定し、それを国に持ち込めば俺は犯罪者に成り得るが――

……《真偽判定》と、法律の存在を知って、そういったNPCも連れてない奴らにまともに答えてやる義理なんてひとつ欠片もある訳ねえよなあ!?

まあ、こんな炎の海の中を連れてきていたら炎に巻かれて死んじまつてるだろうがな。

「おいおい、まさかこんな時に俺みたいな色男を追ってそんな事聞く為に来たのかよ？　まさかお前さんそれ、NPCに依頼されたりしてるタチい？　NPCに言われるがまま使いつ走りとかダサいって思わねえの？」

「……………」

だんまりか。

表情は……読めねえ。

……ま、煽りまくってもデータのには別に俺に損も得もないだろ。

どう答えるにしろ、相手は俺を逃がすつもりはないだろうし——俺も逃げるつもりはないからだ。

——《真偽判定》は完璧な様で、欠陥だらけのスキルだ、とは良く聞く。

嘘ではない言葉には何も反応しないし——相手の答えを強制する効果だつて持っていない。

なら、答える必要が無いならいくらだつてはぐらかし放題、ちよつと返答に気を付ければ、そしてそういった状況にさえ立たされない様に気を付ければ何の問題もないスキルだ。

……さて、周囲の温度が冷えていくのを感じながら、俺は思う。

——なら、思ってる事を思いっきりぶつけるのがやっぱり一番だよなあ！

「マジかよお前ら。マジで本気になつてるのかよ——これは遊戯ゲームなんだぜ？ お前らも、ああ確か教義でそう言っているんだよな？ 『自分のやりたいようにやりましょう』

——つてな！ お前らNPCの奴隷やりたかったのか、ひつくわ——」

「——ああ、もうええでー？」

ぞわり

……一瞬で、空気が変わる。

その一瞬で、〈月世の会〉の信者共に戦意が満ち、各々の武器とへエンブリオを展開し——俺を仕留めんとその瞳を輝かせる。

……地雷だったか？

だが、まあ良い。それならそれで一花咲かせてやるとするか——！

「天焼——ぐああああああッ!!!」

必殺スキルの弾丸を——煉獄の巨弾を放とうとした瞬間。またもや「インフェルノ」から、先程とは比べ物にならない程の炎が吹き上がる。

「ああ、気にしとつたね。よお効くやろ、これでも見様見真似やから、上手くいって良かったわ——自分の武器火炎への耐性を奪われるのは厳しいやろ」

必殺スキルを、しかし放てずに蹲った俺に対して、扶桑月夜はそう言う。

……《月面除算結果》は知っていたが、こんな事も出来たのかよ！

熱に——炎の熱に身体中の感覚を支配される。

身動きせず、できずに——今攻撃してくれるなよと祈りながら時が過ぎるのを待つし

か——

「あ、そうそう、はぐらかされたって別にうちらは全然問題ないんやで？　うち等はあんさんとは違って、世界派やから——別に、言葉にされなくても質問の答えが聞けるっちゅーへエンブリオも居るんやで」

「……!？」

そう言われ、咄嗟に信者共を見て——見つけた。

俺を真つすぐに見つめる人面の四足獣——ガードナーのへエンブリオとそのへマスタ——が、俺を鋭い瞳で睨んできている事を。

……あーらら。これはもう、バレちまつてるみたいだぜ。

やつべえなあ。一応他国にもセーブポイントはあがあるが、王国が一番やり易かったんだがなあ。

へマスタ——じゃなくて、殺しても死なない奴テイアンを殺したら死ぬ奴焼き殺すあのスリル刺——もつと味わいたかつたんだがなあ。

「あんさんのへエンブリオも、こうやつて対策済み。必殺スキルのクールタイムだつてもう明けさせへん——神妙に、お縄につきいや」

……あー。

こいつはダメだな。

やっぱり何度考えてもこの状況を打破できる手段はないな。まあないだろうな。

こうなつたからには、仕方がない。

そう腹を括つて覚悟を決める。なあに、他の国でなら多少やりづらくつても遊べるぞ。

——だが。

「……………どうやら、こいつも自分の運命を悟つたみたいですね」

「当然でしょう。最早抵抗の目はありません。〈自害〉でもして手間を省いてくれれば良いのですが——」

「——待て、熱い？ スキルで守られているのに——ッ!？」

「——あかん、今すぐ仕留めるんやッ!」

〈自害〉？ する訳がない。

張り合い甲斐がなく、征服し甲斐もない——むしろ、このひりつく様な刺激を台無しにするあんな機能即刻廃止して貰いたいくらいだ。

だってそうだろう？

お前ら、この世界で生きてるんだろうが。遊んでるんだろうが。なら、どちらであつても——足掻けよ。最後まで——最期まで。

そうじゃないと楽しくないだろ？ ——俺達^Pがな！

だから——俺も。最後に。そう、最後の足掻きに。

この王国での特大の最後の火花を上げさせてもらうぜ！

「^{フレイムロード}炎王の充填」——【天焼く魔弾】×6」

奴らが勘違いしていた事は二つ。

一つ。当然だが俺が蹲っていたのは絶望していた訳でも痛みで動けなくなっていた訳でもない。

顔を、自分の表情を隠して、ただこの準備を悟られないようにしていただけだ。

そして二つ目。俺の「煉獄魔炎 インフェルノ」はTYPE：ウエポンではなく——
TYPE：フォートレス・ウエポン。

火炎の魔弾を撃ち出すへエンブリオではなく、火炎の魔弾を造り出すへエンブリオだ。

周囲の熱を、自分の熱を、HPを、MPを、SPを——遍く総ての熱を奪い、溜め込み、集束し、弾丸として生み出す製造型のへエンブリオ。

銃としての性能になんて殆どリソースは割かれてねえ。

だから、その必殺スキルはあいつらが想像した様なそんな短期間で明けるクールタイムでもない。

——一週間。大量のコストと膨大な消費とその長いクールタイムによって作られる、超一級品の特大の獄炎の弾丸。

それが必殺スキル《イ顕現ンせよ大焦熱地獄ル》で作られし【イ天焼く魔弾ル】だ。

一発で森の一面を焼き尽くす、分類としては広域殲滅に値するほどの超広範囲攻撃。流石の俺も二発以上同時に撃った事はない。

だが——最新今ばかりはそんな事気にしている場合じゃねえ！

火炎耐性が低下した自身が、そしてへエンブリオが、全身から火を噴き【火傷】は一部【炭化】となつて動きも鈍くなつてきた。

痛みと状態異常と火炎の熱の息苦しきとでパフォーマンスは極限まで低下している。

——そんな状況でも、たった一発引き金を引く程度であれば容易いというのは、流石に自身のジョブとステータスによって鍛え上げられた身体に感謝するべきだろう。

さあ。

お祭り騒ぎ最高の火遊びフルフアィアにしてやろうぜ！

——フルフアィア《全門砲火》！——

直後。

〈ヘノズ森林〉の大半が——一人のP Kだった光の塵を火葬するかの様に、灼熱の業火に包まれ燃え上がった——



そうして、アルター王国での快樂P K犯の罪状は暴かれ、指名手配され王国から去る事となる。

そのP Kの最後の足掻きにより、〈ヘノズ森林〉の植生や生態系にも多大なるダメージを

受けたが……むしろそれだけで済んだのは王国騎士団の騎士達や〈月世の会〉の信者を始めとする〈マスター〉の有志達の力により迅速な消火がなされた結果だった事は疑いようがない。

〈マスター〉がこの世界に増え始めてから、一年強。

各国がこの様な上級〈エンブリオ〉の力を手にした犯罪者〈マスター〉の対処に苦慮しだした時期でもあり——そして、これからも増え続ける事件によって、そう遠くない内に〈ノズ森林〉の再生と共に風化するであろう事件の一つだ。

その中でも被害の範囲が広がった物ではあるものの……それを唯一の特徴としてしか記憶されない様な些細な事件の一つ。

だが……今は、一人の凶悪犯罪者を追放した事を喜ぶ事にしよう。

——後にアルター王国を襲う多くの悲劇から比べれば、この程度は嵐の前の静けさですらないのだから——

……………End

セイレンの場合／彼の流儀

□2043年 某病院 観月誠二

——人の嫌がる事を進んでみましょう。

それは、おそらく多くの人が幼少時、親や教師と言った大人の人から似た様なニュアンスの言葉を言われている事だろう。

……その言葉は、よく誤った解釈をされる事が多く、今となつては嘗ての大人達が願った通りの受け取り方をする子供達の方が少なくなっているだろう。

本来の言葉の意味は、集団内における全体利益を尊重し、和と道徳を大事にしよう——という、まあ有り体に言つて良くある大人達の道徳教育の一つだと言うのは、事実だろう。

誤った解釈の様に感じられる人が居る事も理解できるし、滅私の心にて奴隷働きしろ、と言われている様に感じてしまい不愉快だと考える人が出るのも理解できる。

故に、不適切だと声を荒げる人が出てくるのも……分かるつもりではある。

だけど、その言葉は、確かに必要な物なのだ——僕は思う。だつてそうだろう？

人間と言うのは、社会を形成しないと生きていけない生き物だ。

一人で完成する人間が一体どれだけ居ると言うのか。

何をするにしても、個人であるというのはそれだけで少くない限界が存在する。

その為に人間は、遙か昔から協力し合い、協同し合い、知恵を寄せ集め伴侶と友と共に過ごし組織を国を形作り、娯楽やスポーツだつて数多くの人との関りによつて生み出される代物なのだ。

そりゃあ、勿論私、己は重要であるとも。

我思う故に我有り——などと言うまでもなく、自分にとつて一番大事なのは自分自身であらう。

己の全てを捨てて滅私に徹するなんてのははつきり言つて異常の一言で切り捨てられてしまつても問題がないが——

だけど、世の為人の為他人の為、引いては社会全体の為に善い事をして、そしてそれを奨励するのは当然の事だと、そう信じたい。

……まあ、世の中そんな風になつてくれたら良いな、というだけで現実はそうではな

いのだが。

そもそもからして「人の嫌がる事」——つまり、損な役回りをする人が、即ちその社会における犠牲者の存在を前提として存在する社会が歪なのだと言え、訴える人も居るが、まあそれは社会全体の課題と言う奴だ。

全員が同等量の負担を——なんて夢物語、機械仕掛けの神様にでも管理して貰わないと実現できる訳もないし。

それでも。

世界と言うのはそんな人達の優しきで回っている訳で——

——え、そんな事を考えている僕はどうかなのか？

……まあ、自分で言うのも何だけど、それなりに実現できてきたつもりだ。

数年前に殉職してしまった両親と、今は居ない優しかった姉と、現保護者であり現役で警察官でもある従兄の教育の賜物という奴だろう。

そんな俺だから、高校では一部の人達からは露骨に煙たがられてきていたが——うん、今となつてはそれも済んだ事だ。

それでも、自分で言うのも何だけでも、日頃の行いと言うべきか多くの人間と誼を紡

げていたのだから、僕はそんな自分が間違っていたとは思わない。

……それはそうだろう。

人が人を助ける事が、協力し合う事が間違っているだなんてある訳がない。

勿論、時と場合によっては例外というものがあるのは理解している、それでも。

人と人が助け合う事が、協力し合う事はまことに尊き社会の善なのだと思じている。

そうでなければ、きっと世界はもつと生き辛い世界になっていた筈だから。

大なり小なり、そんな人々の善意で世界は廻っていると知っているから。

——それは、世界の、社会の技術や知識を刷新しより多くの人々を救わんとする才人達であつたり。

——それは、偶然の事故の犠牲と成りかけていた子を救うそこに居合わせていただけの人の勇気であつたり。

——それは、世界と未来に絶望し死を選ばんとする人達の依代とならんとする優しき人達であつたり。

——……それは、あるいは多くの無辜の民を害した凶悪犯を追い、自らの命も顧みず捕らえた警官達の尽力であつたり——

「——そして、悲惨だったらしい事故から周りの人達を助けようとしてこうなっちゃった僕も、世間様の為だったと言って良いよね？」

「いやあ。誠二君、それは流石におじさん同意できないなあ……」

今まで優しい顔で話を聞いてくれたおじさんは僕の方を——正確には、僕の下半身の方を見てそう言う。

その目には、腿から先が完全に失われた僕の下半身が映っていた——



……つまり、そういう事だ。

真つ当な正義感が多少行き過ぎてしまった僕は、半年前に起こったとある事故の現場に居合わせた際、自身の身を顧みず――

……後悔はしていない。

極限な状況だった事もあり、記憶は朧気だとは言え、確かに人を、人命を助けられたからだ。

それは未だ薄らと残る記憶に刻み込まれているし、こうして入院してからも凄い勢いでお礼を言いに来てくれる人が来たりする度に、あの時の行動は正しかったのだと確信させてくれる。

尤も、学友や従兄や妹には酷く悲しまれてしまったので、そう喜ぶ事もできないのだけだ。

……まあ、それも致し方ない事だろう。

これ程の大怪我――欠損による障碍が残される事になった僕の未来は、傍目に見ても暗い物にしかならないのだろうから。

が――それはともかく。

確かに身体は重傷を負い、癒えない傷が残ったであろうとも、それでも僕は絶賛青春真つ最中の18歳大学生予備軍だったのだ。

本来なら華の大学生活をスタートさせる直前だった僕は、しかし事故の影響で折角であった大学も辞退する羽目になり。

家族と相談して新たに某通信制大学を受験する事を決め、一年遅れての受験に向けて日夜病室で勉学に励んでいたのだけど――

――飽きる！

勉強している時間は良い。ただ目の前のそれだけに集中していれば良いだけだ。

勉強は特別得意でも不得意でもないけど――本当にそれだけしかする事がないというのは流石に苦痛に過ぎる。

そんな怠惰で今後その身体で生きていけるのか？ と自責した事もあるが、看護師さん曰くこの病室で、入院しているという状況ではそうなる事の方が自然だと、何か他に気分転換でもしてリフレッシュした方が良いと言われてしまった。

まあ、学力に関しては従兄が配慮してくれて現状でも問題ない所を選ぶ事になったのだから、然もあらんと言った所だろう。

……とは言え、気分転換と一言に言われても、他にできる事など、勉強にも使っているタブレットでインターネットで遊ぶか、それとも同室のおじさん達と談話するくらいしかできる事はない。

ゲームや漫画も多少は嗜んでいたが……僕にとってあれらは学友達と話を盛り上げ

る為のコミュニケーションツールとして楽しんでいた物。

そう頻繁に見舞いに来てくれる訳でもない学友達と話を合わせる為に遊ぶのは違う気がしてやる気になれなかった。

……こんな有り様でも、もう暫くしたら退院して自宅療養に移ると言うのだから、今からその時の事を考えるだけで憂鬱になってしまふ。

我ながら、こんな事ならもう少し色々遊びを覚えておくべきだったかもしれない……



と、そう思っていたのだけど。

「Infinite Dendrogram」……ネットゲーム。それもVRMMORPGかあ」

退院する僕の膝の上に乗せられていた包装箱。

看護師や医師の方々から贈られた花束や友人達から贈られた食べ物でもなく、同室

だったあのおじさん。

——よく話し相手になってくれていた、あの優しい差前さんからの餞別だった。

——「誠二君、やる事ないんだつたらこれ、やってみないかい？ 見た事ないかな？」

——「最近結構話題になってるだろう？ これは本物のVRMMOでねえ。ちよつと伝手で手に入れたんだけど、持て余してしまっていてね」

——「うん？ ああ、気にしないでいいよ！ 私はもうおじさんだし……是非、君みたいな子にこそやって欲しいなと思ったのさ」

——「それでも気になるなら、感想でも教えてくれよ。ほら、分かるだろう？ 私も暇で仕方がないからね——」

ネットゲーム、もしくはオンラインゲーム——なるほど、確かに時間を潰すのにこれ程適任なものもないだろう。

ある程度ゲームを嗜んでいた僕をして、その類のゲームはスマホやポケオン等を除いて手を出していないかつた程に、その底は深いのだから……

それも、MMORPGであれば尚更だ。

MMO——即ち、Massively Multiplayer Online。

大規模多人数という謳い文句に偽りはなく、スマブラやポケモンでは一度の対戦では数人から十数人で同時に戦うのが限度であるそれを、同じ時、同じ場所サイバーに数千人、数万人——あるいは、それ以上。

それ程の人数が同時に参加して遊ぶMMOだからこそその楽しみが、コンテンツがあるのだけでも……これは往々にしてネットゲ廃人の闇もその腕に内包する物だ。

……廃人はおろか、一つのゲームにそこまでのめり込むつもりはなかつた僕としては今までは避けるべきモノだったのだけでも——

そうは言っても、今の僕は重傷人。

事故の関係者も、病院の人達も、家族も友人達も口を揃えて今はその心身を休める事に注力しろと言ってきている。

ならば、まあ。時間を潰す為の一環として手を出してみるのも悪くないかもしれない。

まだ発売して一カ月のゲームなんだから、皆との話題にもなるだろうしね。

「まあ、折角ああ言ってくれたんだし、全くやらないなんて失礼な事はないしね——つと」

そう思い家に帰り、自宅療養に切り替える準備も終えた後に早速プレイを始め——という事にはならない。

僕はゲームをやる時には説明書や解説、チュートリアル等は隅から隅まで熟読してから本編を始めるタイプなのだ。

その方がそのゲームの世界に、物語の世界に没入出来る様な気がするからね。

また、ある程度の外部からの評判も確認しておきたい。

……一時期話題になったこのゲームでは、多分ないだろうけど、VRMMORPGと言うと今までやっぱり最も有名だったのは、一番最初のVRMMO、NEXT WORLDだからだ。

……あの時のSNS上でのVRMMOをずっと待ち望んでいたゲーマー達の発狂具合は凄まじかった。

友達にもその内の一人が居たからなあ……

—— 良し。

とりあえず仕入れられる情報は粗方頭の中に入れられた……筈。

ネットゲームという物自体が初めてで、まだ分からない事も多いだろうけど、後は現地で少しずつ学んでいけば良いだろう。

……うん。

公式サイトやネットでの情報を確認するに、差前さんがどういう意味で僕みたいな子にこそ、と言ったのかも多分分かったし。

早速——早速でもないけども、始めるとしよう。

僕の、 \langle Infinite Dendrogram \rangle 生活を——

「——ふやー。」



□ 霊都アムニール セイレン

幻想の国。秘境の妖精境。初期の七大国の中で、最もファンタジーらしい国——

それが、僕の選んだ国、レジエンダリアだ。

初期スタート地点である此処、霊都アムニールの外れからでも見上げられる程に巨大な大樹〔アムニール〕を戴く多くの亜人亜種族達が集う魔法の国。

そんな所に来て、僕は――

「おお、おお――!! ―――歩ける！　ちゃんと歩けてる！」

一步、二歩、三歩四歩五歩六歩――此処数カ月の病床生活、両脚を失くした車椅子生活が嘘の様に、身体が、脚が動くのだ！

――体感では遙か昔の如く感じられる、以前の様な歩行という、人として当然の事が出来るという事に感動していた。

周辺を歩き回り、小走り、スキップし――僅かな疲労が見えてきた所で頭は多少は冷静になってきたけど、それでもこれを止める気には全くならなかった。

ネットでも、多少は話題になっていたし、これを貰った時の言葉からして……一応、察しているつもりだった。

これが、完全なるVRであるという事を。

完全に健常なる人間を再現できる桁外れの技術力の賜物であるという事を。

それこそ、僕や他の障碍を抱えて生きる者達が挙って求める様な、“夢の世界”であるという事を――！

「いやっふうー！ やったああああ——!!!」

◇

ダイブ型のVR——全感覚没入型の仮想現実と言うのは技術が発展し始めてきた21世紀初め、今を遡る事数十年前から空想として数々の物語に登場したものだ。

まるで物語の世界に入っているかの様な、正しく総ての感覚を仮想の世界に没入させるその技術。

娯楽のお話としての登場が多いそれだが——その実、最もその開発を望んでいたのは物語の様な娯楽の場ではなく、医療現場であろう。

それも、最早健常者と同じ様には生きる事が叶わない障碍を得てしまった者こそ——この技術を切望していた筈だ。

腕が、脚が、耳が眼が口が鼻が上半身が下半身が内臓が外皮があるいは身体全体が。——取り返しがつかない程に重篤な人であればあるほど、*“普通の人間と同じ感覚で活動できる、こんな技術を、世界が訪れるのを待望していた筈だ。”*

僕も、確かにNEXT WORLDが発表された時にその様な意見がネット上で

それなりに頻繁に交わされていた事を思い出し――

……ただのけど、〈NEXT WORLD〉は逆に技術がまだ未熟だったせいで不具合やら健康被害やらのお陰で全くそういうのを見なくなっていたんだよね……

でも、まさか――

「まさか、〈Infinite Dendrogram〉がこんな完璧な仮想現実を完成させていたなんて普通思わないよ!」

「それな。マジでそれな。というか発売当日まで何処にも情報がないとかマジで何者なんだよって感じなんだよな」

……はい。

「まーでもお陰でこうして俺達みたいな一般人もこんなスゲーゲーム出来るんだから有難いこった。小走り君もそう思うだろ?」

「や、あの。セイレンです。……見てました、よね?」

「めっちゃはしゃいでたな」

……はい。

——ここがスタート地点なのを忘れてたツ!!

恥ずかしかっ!? あんなにはしゃいで子供かっ! ゲームやりに来た子供だよ畜生

!!!

◇

◇

◇

はい。

まあそんな恥ずかしさも数分もあれば流石に落ち着く。

——と、言う事にしておいて欲しい。

「大丈夫だ、安心しろ。レジエンダリアに来るへマスター」の1割は最初っから全く普通じゃないから」

「僕は1割の変人になったつもりは全くないんですけども!?!」

それでも——とりあえず、軽く雑談が出来る程度にはメンタルは回復していたのだつた。

危ない危ない。こんな凄い世界に来れたのに、速攻で恥ずか死するのは流石にないからね……………

……あ、ちなみに。

先程まで会話していたのは、暇な時はレジエンダリアのスタート地点に陣取つて新人へ「マスター」の観察と揶揄いを生き甲斐としてゐる個人的変人第一号の「エースさん」だ。

少し話をして別れる事になつたけど……数分の会話でもう個性的な人だと言う事は分かる。

……尤も。

先のエースさんの発言ではないが、このレジエンダリアに個性的でない人がどれだけ居るかは分からないけど——

見回せば、ほら。

獣耳尻尾を生やしたどころか、二足歩行する以外に普通の獣と区別がつかない様な獣人達。

奇抜な髪色瞳色だけに飽き足らず派手つ派手な豪華な装備を身に纏つた推定「マスター」の「パーティ」。

背丈が幼児と巨人程も違いながら、巨人の方が頭を下げて幼児の様な小人の後についていくペアがいれば、同じ様な体格差でありながら身体の所々から血縁を感じさせ異様に仲の良い親子（……だと思いたい）も居る。

上に目を向ければ羽の生えた鳥系の獣人や数人で群れる妖精達がレジエンダリアの上空を飛び回り。

漫画の様に木々の間を跳躍しながら飛び回る人達もちらほら。

下を見れば……何か良く分からない人が地面から這い出ている所を目撃したり、近くの水中からこつちを見ている人と目が合ったり。

同じ新人へ「マスタート」なのか簡素な装備で寝転がったり座ったりしてウィンドウを見ている人も遠くに見える。

……さっきのスタート地点とはそこそこ離れたはずなのに、そんなバリエーション豊かな日常が見れるんだから実に面白い。

レジエンダリアを選んだのは正解だったと思いたい。

「とは言え——まずは、どうしようかな？」

誰に呟くでもなく、そう独り言ちる。

……前述した通り、僕にとってゲームとは、基本的に他の友人達とのコミュニケーションツールという扱いだっただけ。

だから、ゲーム内での遊び方も基本的に友人達に合わせていた訳だけど——
——ここ、〈Infinite Dendrogram〉では、今は僕一人。

友人達は現役大学生として日々勉強に追われているだろうし、ほぼ一日中暇してる僕の遊びに付き合わせる訳にもいかないから、僕は一人でこの世界で遊ばないといけない。

そりゃあ、勿論事前にある程度情報を仕入れて、ゲームを始めた直後はどの様にするのが良いか——という鉄板くらいは分かっている。

しかし、その先。例えばジョブに就いた後などは——

「あ——つと。……失敗したなあ」

——チュートリアルで……このゲームで遊ぶ目的でも、聞いておくんだったな。

チュートリアルの中で朗らかに担当してくれた二足歩行の猫の顔を思い出し、そう眩くも時既に遅し。

一度終えたチュートリアルに再び舞い戻る方法はなく。

結局僕はこのゲームの、管理AI達の謳い文句通りに、自由に自分で目的を作つていかなきゃいけない訳だ。

「……まあ、何をするにもまずはジョブかエンブリオ、だよな。」

気を取り直して、改めてジョブを得る為に行動を始める。

「エンブリオ」の孵化は人によっていつ孵化するかまちまちだから、焦っても意味がないからだ。

歩みを進め、狙うのは——冒険者ギルドで就く事のできる下級職の一つ、【冒険家】アドベンチャラーだ。

まずは出来る事を増やして、時間を掛けてこの世界の事を知ってからもつとやりたいジョブが出来た時に潰しが効きそうなのがそれだった、という理由だ。

……元々【冒険家】はサブジョブとして人気らしいし、これくらい不純な理由でも問題ないと思う。

思うのだけど、今の問題はそこではなくて——

「——アムニール、広すぎないっ!？」

冒険者ギルドまでの道が既に気圧されるレベルで険しいという所だった……

自然と魔法と共に過ごすこのレジエンダリアの町並みは、当然と言うべきか所々で木々に葉に根に進路も視界も邪魔をされ。

ウインドウ上でのマップも二次元上での地図であるからか、数メートル多少の段差も平気で道として記載されている始末。

……まあ、此処で暮らしている亜人の皆様や多少の覚えのある「マスター」であれば、

その程度は当然通れるのだろう。

——だけど、初心者 của ステータスではそれは叶わない。

せめて一人でなければ、あるいは無理をすれば通れるのかもしれないけど——

「……仕方ない、遠回りするしかないか」

そう決めて、まあそれでも道中の店でも物色しながら行けばいい、と考えて踵を返す。

別に急いでいたという訳でもないし、むしろ僕自身は時間は余る程あったのだから。

——魔法の国を少しずつ、ゆっくり見て回るのもむしろ良い経験かも——

——————だけで、結果的にはその選択は正解だったのだと思う。それを見過ぎさず済んだのだから——

——う——！

「うん？」

再び歩き始めてから少しして——小さく、声が聞こえた。

小さな、ともすれば空耳かと思えない程の小さな声。

それも、今も遠くから聞こえている客引きや勧誘のそれではなく。

——助けを求めめる声だ。

「ツ！」

咄嗟に辺りを見回し、声の主を探す。……居た。

数十メートルも離れた、大通りから外れた道。霊都の外へ続く通り道の一つに沿う様にぼつりぼつりと疎らな間隔で並んでいる小さな店の一つ。

そこに、先程見た他の妖精よりも小さな、僕の拳程のサイズの妖精の子が狼狽えながら小さく声を上げていた。

「——大丈夫ですかっ!？」

「あ、へマスターさん!? 大丈夫じゃないですよー!」

駆け寄り、様子を聞く。

非常に小さい為実際はどうか分からないが、妖精さんは特に怪我をした様子もなく、必死で声を張り上げながらむくれた様子で僕の——更に奥、店の外を見ていた。

怪我がないのは本当に良かった。どうやら体格が小さいせいで声が小さかったから気付かれていなかっただけらしい。

……いや、良かったでは、ない。

彼女の様相と、そして——荒らされた店内の様子を見れば、それは——

「——泥棒ですう！ 違うへマスター」の人が、私の店の商品を目の前で盗んでいったんですう!!」

彼女の目線の先。店の外のもつともつともつと先。

霊都の外に続く通りの先に……僅かにこちらを意識しながら走り去るへマスター」の姿が小さな点の様に見えていた——

【クエスト】盗品奪還——リリイ・リミルシア 難易度：四【が発生しました】

【クエスト詳細はクエスト画面をご確認ください】

「くっ——!」

そのウインドウのポップアップを確認する前に、身体は店の外へ、犯人の背を追って駆け出していた——



◇

走る。

走る。

走る——！

全速力で、逃してなる物かと犯人の（マスター）の背を追い、走り続ける——
しかし。

「嘘だろ、早すぎる……っ!!」

距離は全く縮まらない——どころか、まだ追い始めて十数秒も経っていないというのに、少しずつとすら言えずぐんぐんと離されていく始末。

既に相手は米粒程の大きさにしか見えない程距離を開かれ、この木々の視界の悪さで少しでも油断すれば直ぐにでも見失ってしまいそうな程だ。

余りにも……余りにも、速度が違い過ぎる。

それは、まだ僕がこの世界に来たばかりで森を走るのにそんなに慣れていないという事を勘定に入れても尚、決定的な行動速度の違い。

——こんなにも、違うっていうのかよ——A G Iの差って奴は！

A G I、^{敏捷性}即ち発揮速度——

それは、この世界の理^ルとしては理解していた仕様の一つ。

A G Iの値が高ければ高い程、デンドロ内におけるあらゆる速度が速くなるのだ、と。それは、他のゲームであるように手の速さ足の速さや回避率——と言うだけではなく。

体感速度、思考速度、反応速度、行動速度、攻撃速度——言葉通り、それらの速度全てが加速するのだ。

その計算式は等倍的に上がっていくモノではないとしても、その発揮速度は始めたばかりの初期ステータスの僕と、目的はともかく、A G Iを重視した他の「マスター」との差は数倍や十数倍になってもおかしくない程の差があるのだと……！

「はっ、はっ、はっ……くっ!!」

走る、走る走る走る走る——全力で、息も荒く体力が尽きてきているのにも薄々と気付いていながら。

しかし、それほど必死に走っても……彼我の距離はどんどん離されていくばかりだ。

それも当然だ。此処は遊戯^{ゲーム}の理^{システム}に支配された作られた世界。

ならば、この結果も正しく当然の物だ。

既にこのゲーム——〈Infinite Dendrogram〉が始まって、リアルで1か月以上、デンドロ口内の時間では4か月程度も経過している。

それだけ時間が開いて漸く初めたずぶの新規プレイヤーが、経験者をなんとかするなんて、出来る筈がないのだ。

それが、偶然の起こり得ない数理で支配されるデジタルの世界において絶対の真理という奴で。

絶対に追いつけないのだから——どうせ追いつけないのだと諦めてこんな苦しい想いなんかせずに、さっきの妖精さんを励ましていた方がマシだろう——？

だけど、そう頭の中で考えている反面——それよりも、何倍も何倍も大きな声で、もう一つの声が鳴り響くのだ。

——ならば、眼前の悪事を見逃すしかないのだと？

——否だ、ありえない。それだけは、絶対に認められない！
なるほど、確かに。

今の僕の力では、どう足掻いても相手を捕まえられる事はできないかもしれない。

「——だ、けどッ！」

店主の妖精さんを慰めて泣き寝入り？

そんな物は、ビターエンドにすらならない。

今必要なのはお為ごかしではなく、現実に僕の視界の先に居る泥棒を捕まえる為の力だ。

だけど、何度想つても願つても、そんな力は僕には欠片もありはしないという事実は変わらない。

だから、想うのだ。強く、強く――

そんな可能性が、欲しいと――!!

そうして――とうとう僕の目が犯人の姿を完全に見失つてしまう、その瞬間。

『――へえ、私のマスターは熱を内に秘めるタイプなのかな？ ……でも、良いわねっ！

それじゃ、今から私が協力してあげるわ！』

「ん、なっ!？」

唐突に僕の真横に現れた少女の存在と物言いに、そして——熱を持ち微かな煌めきを放つ左手に驚きを重ねられる。

それは、美しい白銀の髪と見惚れる様な紅い瞳の少女だった。

このファンタジー世界、国家とその容姿アルシノ属性には若干ミスマツチな現代風の装いをしたその少女が、澆漑とした印象を与える佇まいをして突然現れたのだ。

その驚愕の一瞬で、一度見失った犯人の姿はもはや完全に見失ってしまい、うっかり足を根に引つ掛けて転びかけてしまう。

しかし、今はそんな事よりも——

「君が僕の——〈エンブリオ〉、なんだよね？」

「如何にもっ! 私の名前はフォルセティ。TYPE:メイデンWithトリリー・チャリオッツの【共和友姫 フォルセティ】。貴方の心よりの祈りと願いから——」

「そういうのは後で良いからっ!」

そう。

自己紹介も大事だが、それは後でも良い。

重要なのは——

「君は——君の力なら、あれを捕まえられる!？」

求めるのは、求めていたのはその可能性だ。

無限の可能性を与えてくれると言うへエンブリオ、その力なら若しかしたら――

「え、それは無理かな……私はほら、名前の通り戦闘は全然できないから、ね？」

「えっ」

……えっ。

「……おっとそんな絶望した顔しないでっ!? 大丈夫、なんとか出来る――
かは保証できないけれど、なんとかやってみようっ!」

「――分かった。僕は何をすればいい?」

戦闘はできない、と彼女は言った。

そして、その上でそれでも、なんとかできる、かもしれないとも――

その瞬間から彼女は淡く輝く光の塵となって霧散し、その戦闘形態――TYPE:テ
リトリ―としての固有スキルを使う準備を終えたのだろう。

ならば。

他ならぬ自分のへエンブリオたる彼女がそう言い、その為のお膳立てを整えてくれる
と言うのなら。

犯人に追い縋る事すらできない貧弱な自身の身体アバターで出来る事なら——なんだってやっつてやる！

そうすれば、そんな僕でも、あの妖精さんを助けられるのなら——！！

『——その想い、グッドだねっ。でも、やる事は至って単純だよ！』

声テリトリが聞こえる。結界となつて周囲に広がっていった彼女、「フォルセティ」の声が。

恐らく、既にその固有スキルの発動準備を終えているのだろう。

次の瞬間にはそれが——僕のパーソナリティを基に形作られた、その固有スキルが効果を発揮するのだろう。

一瞬の思考ではあつても——確かに、その予兆を感じられたのは、彼女がテリトリ——だからか、あるいはメイデンであるからか。

だが、ネットで「エンブリオ」が孵化したてでよく言われる様な全能感は——僕にはまるで感じられない。

……それも、ある種当然なのかもしれない。

何故ならそれは、この事件クエストを解決するかもしれない力は、正しく僕の力ではないのだから——

『——どうして欲しいか！ 声に出して、願って、心から呼びかけて！』
 『仲魔を呼ぶ声』
 !!

瞬間——周囲に、その力が満ちる。

範囲は判らず、効果も解らず。されど、どうすれば良いのかだけは、分かる。

だから——

『——誰か、手を貸してくれッ！ 泥棒だ、僕の前方を走っている黒い大袋を持つた男を捕まえてくれ——ッ!!』

T o b e c o n t i n u e d

シフィル・ワルツの場合／空をこの手に

□2004年2月5日 シルフィ・ブラウン

「——世界は、いつだって、こんなはずじゃないことばかりなんだよっ！」

「……どしたのシルフィ。またMVP取れなかったりした？」

放課後。

友人のリーンと一緒にの学校の帰り道、寮まで向かう道すがらで突然に私が発した言葉が、古典からの引用それだった。

しかし、そんな突然の発言にも直ぐさま反応してくれるのが話の合う親友という物。

即座に私が言っているのが私達の間での一番の共通の話題——〈Infinite Dendrogram〉に関する物だと察してくれた。

……まあ、愚痴の内容はちよつと違うんだけどね。

「んーん。そうじゃなくて、なんというか——向いている事とやりたい事の相違、的な？」

「えっ。……今更？ もう二月だよ……？」

「何月でも言いませうけどっ!? 私にはリーンみたいが好き勝手ヒヤツハーしたい訳じゃないんですよ」

「ひ、人間き悪過ぎないー!?!」

「はあ、私もリーンの〈エンブリオ〉みたいな〈エンブリオ〉でヒヤツハーしたかったですわね……」

「あれっ。無視? 私ヒヤツハーしてる確定なの!?!」

……そんな感じで。

今日も今日とて私達は取り留めのない話をしてじゃれ付きながらこの短い距離を歩く。

いつの間にか恒例になってしまったデンドロ内での近況報告も兼ねながら、共通の趣味、共通の世界に夢を馳せながら。

……世間的にはゲームで繋がった仲間なんて、と言われる事もあるけど私的には悪い事ではないと思う。

己のパーソナリティを参照して作られる〈エンブリオ〉を介して繋がるあの世界では、己の本質を偽る様なヒトは少ない。

だからだろうか、リーンとの仲間、〈Infinite Dendrogram〉を始める前と比べて格段と深いモノになった様に思う。

そのパーソナリティを写す鏡とも言える互いの「ヘンブリオ」の性質が非常に似通っていたのも理由の一つだろう。

流星にあれが判明した時は思わず二人で吹き出しちゃったよね。

「そもそも大型クランに——ランキング入りしてるクランのメインメンバーに属してるってだけで十分シルフィは恵まれてる方なんだよー?」

「そうだね、リーンは基本組んでるのパーティの数人だけだもんね……」
「今日のシルフィなんか辛辣じゃない?!」

そんな事ないです。気のせいですよー。

それはともかく……固定パーティを組んで仲良くやってるのはそれはそれで凄い事だと思う。

私なんかは確かにクランに属して活動してるけど、損得勘定の結果入っただけで特別仲が良い、って事もないし。

クランで纏まって活動する時以外はソロでぼーっとしてたりするものね。

……まあ、それは私の最初の発言にも繋がる訳だけ——



そして、少しして。

私達はいつも通り、何事もなく寮に到着する。

二言三言、リーンと別れの会話を交わし、互いの部屋に戻る。

……今日は、金曜日。待ちに待った週末だ。

明日明後日と学校も休みで、私達学生は思い思いの休暇を過ごすだろう。

そして勿論。

私も、休みの時くらいは現実リアルの事を忘れ、あの世界へ。

（夢い女学生、シルフィ・ブラウンではなく——

〈Infinite Dendrogram〉を生きる一人の〈マスター〉、海を揺蕩

う旅人のシフィール・ワルツになるのだった——

◇



□ グランバロアへ〈西海〉
【蒼海術師】ハイドロマンサー シフィル・ワルツ

「海いゝは、広いーなでつかーいなー……」

そうして、日課的に今日もへ Infinite Dendrogram にログインした私は——そこそこ大型の艦船の甲板に仰向け一人寝そべり、実に自由を満喫しているのだった。

広い海、遙かな青空。

天は雲一つない快晴で、グランバロア母本土からも遠く遠く離れたこの海域には他の船影はまるで

ない。

波も荒れておらず、むしろ舟に心地良い振動を与えてくれて動く物は雲の影とたまに見える海面から顔を出す小型の魚類のモンスター非人間絶滅生物だけ。

そんな大海原のど真ん中の、一時的な平穏地点。

そこに私の……正確には私達のクランの共有の所有物である移動式セーブポイント、【マリンモール号】が制止しているのであった。

「本当に良い天気……はあ、こんな良い空なら、自由に飛び回れたら本当に最高なのに……」

さて。

そんな所で私が何をしているかと言うと——一言で言えば、自主的な留守番だ。

今、私達は——いや、今という言葉すら必要なく、基本的に常になのだけど——そこそこ大型の依頼クエストを受け、本土からも離れたこの海域にクラン単位で滞在、活動を行っている最中だ。

周囲に危険な海棲モンスターが見当たらないのも、このグラン海パロア国に完全に特化したメンバー達の「エンブリオ」や特典武器の力によって殲滅されたからであり、そして今もその活動は継続している。

なら、そのクランの一員である私も本来はそれに参加するべきなのだけど——まあ、

つまりここは本土から遠く離れた海域だと言う事が重要なのだ。

本土からも、勿論他のセーブポイントからも遠く離れたこの海域——当然ながら、私達へマスターへはこの世界に常に居られる訳ではなく、そこその頻度でログアウトして休憩する事を余儀なくされる。

……しかし、ここは海、先も言った様な大海原なのだ。

可能な限りの全力を以て自分達の船を固定しようにも、陸地も遠いこの場所では揺蕩う波間に揺られ流され少しずつ、確実に船の位置がずれてしまう。

その為の備えがこの命綱たる移動式セーブポイントである「マリンモール号」であり——そして、何かあった時の為にこの命綱を守る護衛役が残るのは必然の事なのだ。

……まあ、皆クランでの活動が楽しいからか、最低限の通信・操船要員以外は私みたいなちよつと趣が変わったのしか残らないんだけどねっ！

「本当、皆は海が好きだよね……私は、空の方が好きなんだけどなー」

そう言いながら、私は左手を空に翳す。

厳密に言えば、左手に装着された緑色の宝玉の付いた小型の円盾——私のへエンブリオである「風収盾 エアリエル」を翳し、そう呟いたのだった。

——【風収盾 エアリエル】。

その名の通り、風の精霊をモチーフにした〈エンブリオ〉を持つそれは、その名に偽りなく風に関わる能力特性を有する。

ならば勿論、私のパーソナリティもそれに準ずるのは疑いようもないし、元々疑う気もない。

……だけど——

「それでも、私はやっぱり空を飛びたいなあ……」

——〈Infinite Dendrogram〉の空の世界は、とても険しい世界だ。

それは、ティアン、〈マスター〉を問わず。そして、どの国、どの地域であつても変わらぬ不文律だ。

空——地上から遠く離れた天上の世界。天空の領域。

人は——人型範疇生物達は、確かに様々な空を飛ぶ手段を手に入れている。

魔法で、物理で、機械で、気功で。特典武器で、〈エンブリオ〉で、翼で、飛行用の従属モンスターで——

だがしかし、それらは元々空を飛べない人型範疇生物が、上空の利を得る為に手に入れたモノでしかなく、一部の亜人を除けば素の状態天上で飛べる者は殆ど居ない。

ならば、何故逃げられると思うのか——そこを生息域非人間範疇生物として居るモンスターの襲撃から。

天覆う魔蟲の群れから、空飛ぶ怪鳥の劈きから、空その物であるエレメンタルの視線から——天の支配者たる天竜から。

……少なくとも、ティアンであろうとへマスターであろうと、普遍的に手に入る装備や機械、上級職までのジョブスキルによる飛行能力では、それらには到底太刀打ちできないのは、紛れもない事実であった。

先々期文明時代の遺産や超級職、特典武器、へエンブリオなどの固有スキルで空中に特化したものであればその限りではないが——そう簡単に得られないからこそその固有スキル。

爆発的に増加したへマスターのエンブリオを勘定に入れて尚、現在空を自由にできる者は殆ど存在しないのが現状と言った所だ。

しかし——しかし、それでも。

空。或いは、宙。

人にとっては余りにも広大で、現実と変わらぬ——いや、むしろ現実よりも綺麗なこ

の空。

現実とは違う神秘的な容貌を見せる宙、空その物のエレメンタルすら居るこのファンタジーの幻想的でいて神秘的な——空！

現実でも、そしてこの世界でも。……空に憧れる者は常に一定以上の数が居るものなのです。

——私の様な！

「まあ、私は【翠風術師^{エアロマンサー}】の飛行魔術すらろくに制御できなかったため魔術師^{メイジ}なんだけどね……っ」

本当に悲しい……なんで空を飛ぶ事を夢見た私に対してこんな惨い現実が襲い掛かってくるんですかね。

遊戯^{ゲーム}なのに惨い現実とはこれ如何に。

そう軽いため息を尽きながらも——私は、私の日課をこなす。

周囲を確認、遠方確認。ついでにもう一人の居残り役のスクリーム君にも警告を出しておいて。

私は私の「ヘンブリオ」、【風収盾 エアリエル】の固有スキルを使う。

「——
 《風よ、来い》」

瞬間、周囲の風が動く。

正確には、酸素だけなのだけど——周囲一帯の風が、酸素が、一瞬にして【エアリエル】に吸い込まれる。

途端にゴウ——と風が鳴り響き、一時的に大暴風が巻き起こる。

——この風に飛び乗れないかな——って試行錯誤した事もあったっけなあ……

最早慣れ親しんだ、下手したら私くらい簡単に吹き飛ばしてしまう程の豪風にもその様な感慨しか浮かばない。

これが——これが、酸素収納を能力特性として持つ【エアリエル】最初の固有スキルにして、一番の固有スキル。

周囲の酸素を【エアリエル】内部に収納する……ただ、それだけのスキル。

ともすれば、【アイテムボックス】でも代用できるのが、私の〈ヘエンブリオ〉の殆どのリソースが注ぎ込まれた最大のスキルだ。

……と言うか、グランバロアでは普通に酸素補給用の空気入れ【アイテムボックス】を持つのが常識なので、本当に代用でしかないと言われる事もある。酷いよね。

——当然ながら、〈ヘエンブリオ〉である私の【エアリエル】はただのアイテムボックス

と比べて……少なくとも桁が三つか四つくらいは違う。

【盾】を名乗っている事もあり、特殊な防御スキルは皆無であれ、耐久値は桁違いで余程の事がなければ壊れないし。

瞬間的に周囲一帯の酸素の悉くを収奪するから、対策していない相手を【酸欠】状態にする事もできる。

どうか私自身すら【エアリエル】内部に収納した酸素を自らに限定して補給する《酸素補給》がなければ真つ先に【酸欠】で死にますからね……

また、固有スキルは前述した二つと必殺スキルのみと言う《エンブリオ》でありながら酸素収納能力に極振りした、所謂“特化型”であるお陰でその最大容量は莫大になっており——おそらく、文字通り“空をこの腕に抱く”程度の容量はあるかもしれない。

……まあ、私もその最大容量は分かかってないんだけどね。

何せ、何回何十回何百回と《風よ、来い》ウインドワインドを繰り返しても全く満ちた気がしないから……

1回の《風よ、来い》だけでも結構膨大と言える量の酸素を取り込んでいる筈なんです、私の《エンブリオ》ちゃんは何処に進もうとしているんでしょうね……？

「《風よ、来い》ウインドワインド《風よ、来い》ウインドワインド、おまけにもう一度、《風よ、来い》ウインドワインド、つとお……」

複数回、合わせて酸素収奪をして——あ、遠くで何か多分島が落ちました。止めときましよう。

繰り返す度に都度、より貪欲に足りない酸素を補おうと遠く遠くまでその顎を広げる【エアリエル】の固有スキル行使を止め、小休止に入る。

一時的に荒れに荒れた海を尻目に、両手両足を伸ばし思いつきり身体力を抜き、だらける姿勢に入る。

「はあ——……良いお昼寝日和です……」

——こんな一時をちよつと警戒して留守番しているだけで過ごさせられると言うのだから、まあ今のクランに入った甲斐もあったという物ですね。

とりあえず定期的な固有スキルの行使を終えた私はこうやって一人、身体に当たる風の感触を楽しみ、燦燦と輝く太陽を、空を仰ぎ見て、心地良い一時を過ごす。

周囲に危険なモンスターの影は見えず、他のへマスターもティアンも邪魔をしない、大自然大海原のど真ん中で。

三倍時間でこんな贅沢な一時を過ごせる場所が、自由を謡っているこのへInfinitive Dendrogramにどれだけあるだろうか。

失礼な言い方ではあるけれど、妥協して入ったクランとして、ここは確かに私、シフィール・ワルツにとって最高の居場所です……そして、ここは最高の世界だった。

完全なるリアリティを実現するこの世界。

そこは確かに現実ではない筈なのに、限りなく現実としか思えないこの世界。

自由なる「ヘマスター」の身である今の私達には、その身体を固くきつく縛り付ける規律も鎖も親教師だって居やしない。

「ふう……本当に、ここに住んでしまいたくなり『すまない、シフィール君！ 緊急事態だ、今すぐ来てくれ!!』………」

………本当に。

緊急出勤

………この頻度が、もう少しなんとかかなれば、本当に此処は良いクランなんだけどね………ッ。



「——で、今回は何が出たんです？ 〈遺跡〉ですか？ 未発見種の伝説級モンスターですか？ それとも——」

『いつも通りのへUBMだよシフィル君！ はー助君とnonna君がもう必殺スキル使っちゃって駄目だったから交代で来てくれってさ』

「三日前にもあつたばかりじゃないですか。最近多くないですか？ 多いですよね？」

『グランバロアなら——海の世界なら良くある事さ。それに、それだけ君の力が頼りにされているという事だよ』

「程度って物があると思うんですけどね——」

《瞬間装着》《ディクリース・ウォーター・プレッシャー》

『海の機嫌は移ろいやすいと言うからね。だからこそその僕達の出番があるのさ！ ——』

《海神の加護ぞある》

「まあ、仕方ないですね……それでは」

「へマリリン・ダイバーズ」のシフィル・ワルツ。出撃します——急速潜航——！」



100メートル。

200メートル。

300メートル。

400メートル。

500メートル——の、まだ、まだまだ、まだまだ先の奥深く。

海上国家、グランバロアの者でも殆ど活動できる者の居ない海下、水深1000メートル以上にもなる全く光の届かない深い深い海の中の闇の底たる深海領域。

そこそが、私が所属している克蘭——深海活動特化克蘭、ヘマリン・ダイバーズの主戦場だ。

深海は……言うまでもなく、息が続かなければ水圧も視界のなさも行動のし辛さも何もかもが浅水域とは違う極限領域。

まともにも人が行動する——どころか、それ用の備えがなければ辿り着く前に確実に死亡する程の世界。

それも、ただの〔潜水士ダイバー〕〔潜水名士ディープ・ダイバー〕ですら潜れない程のより下方の深海領域の探索、戦闘を主とする特化克蘭。それが私達だ。

本来は特典武器や〔超潜水士オーバー・ダイバー〕等の強力な固有スキルが必要な程の深海であるが——

私達にはヘエンブリオがある。

仲間には水中行動適正の加護を与えるテリトリ。

潜水艦のチャリオッツに、深海魚のガードナー。

あらゆる圧力を極限まで軽減する宇宙服や光を放ち水中用の砲撃も可能な
遠隔兵器群などのアームズまで。

その様な様々なヘエンブリオによって、クラン単位で深海活動に特化しているのが
このヘマリン・ダイバーズという訳だ。

……入った当初は、良かった。

まともな戦闘では使い道の殆ど無い私のヘエンブリオでも大歓迎で受け入れてくれ
て（当初はこのクランも出来立てで人が少なかった）。

グランバロアの各地で見るとの種とも違う珍妙なモンスター達の姿に和んだり、請け
る人が少ない深海の依頼クエストを片っ端から乱獲して荒稼ぎしたり。

他にも、他にも——でも、いくら楽しい事があるとは言っても、そこは深海なのだ。
もう一度言おう——深海なのだ。

先程、空は人の領域ではない、険しい世界だ、と私は言ったけども——とんでもない。
深海の方が何倍も人に、人類には険しい世界なのだ——!!

それは、先に言った環境面だけでなく——モンスター。

この世界特有——いや、現実でも異様な深海魚の話題が尽きない様に。

この世界ですらも、深海に生息するモンスターは異常にして特殊な性質を持つ者ばかりだ。

深海の環境に適応した浅水域の魚類の亜種希少種、巨大種に、当然深海特有の種も盛り沢山。

中には明らかに「え、これへUBMじゃないの!？」と言いたくなる様な特異なモンスターも居れば——非常に頻繁にへUBMに遭遇したりもするのが、深海という世界だ。

……まあ、へUBMと言うのは基本的に危険な存在だ。

特に海上国家という、七大国の中で最も不安定な土台であるグランバロアであれば尚更であり、へマスターなら可能であれば討伐する事が推奨されている。

私達は遭遇して勝てないと思ったら即他のクランや国に協力を要請したりするけど……

そんなクランであるからこそ特化型のへエンブリオも多く、その前に自分達で倒せる事も多く武闘派でもないのにクラン全体での特典武器の数は増えていくばかりだ。

——そういう感じで、私達とへUBMの戦いは日常茶飯事だ。

なのだけれど——

『……いや、あれはちよつと、特段にヤバくないですか?!?』

『シフィル君もそう思うか……だが、流石にあれを放置するのは……不味いだろう?』

……私や他のクランメンバーの視線の先。

星の如きファンネルに身体の一部が照らされて浮かび上がった〈UBM〉は——余りにも、巨大。

全長一キロメートルを越えるであろう超大型鯨であつた——



【暴虐巨鯨 エクサロドン】。

それが、《看破》で判明したかの〈UBM〉の銘だつた。

確認できるステータスや行動からして、間違いなく純粋性能型——巨軀とHP、そして他物理ステータスに比重を置いた〈UBM〉だろうという話になつた。

なっただけ——

『ウンディーネ』と『ピスケス』は駄目。『ネプチューン』もまともに削れなくて『ダイスイセン』、『デンライガ』も効かないって……本当に防御スキルじゃないんですよね?』
『ああ、その様だ。《看破》で見る限り普通にHPは減っていたが……HPが高すぎるし体積もデカすぎる上に時間を置くとすぐ回復される。差し詰めミニミニ【海竜王】と言った所か』

『嫌すぎますねそれは。凄く逃げたいです……』

『気持ちは良く分かる……だが、なあ』

ええ、はい。分かっていますとも。

あれほどの巨体と質量を持ったモンスター——最低でも弩級戦艦未満の船では、一撃体当たりを喰らっただけで轟沈してしまうであろう。

今は距離を取り、感覚を乱して欺いているけれど……あの巨体が真つ当に暴れるだけで周囲一帯は大惨事になるだろう。

それをさせない為に、私達はこうして通信魔法を介して作戦会議をしているのだけど

『取り巻きの類は居ないし。特殊なスキルもない、大きさとステータス以外は普通の動物と変わらないモンスターだし——ここは、シフィールちゃんの出番かなって!』

『やっぱり、そうなりますよねーっ！』



(——《ウインド、ウインド
ファンネル風よ、来い》！)

そんな訳で。

散開し、「暴虐巨鮫 エクサロドン」を取り囲んだ私達は仲間の「エンブリオ」である星ファンネルの明滅を合図に作戦を開始した。

いつでも攻撃できるように待機して貰いながら、「風よ、来い」を全力で行使し始める。

——直後、周囲の深海の景色が捻れ狂う。

大海流が押し寄せ暴れ回り、私達も「エクサロドン」も構わず蹂躪する。

私達はその海流に翻弄されるのみだが、「エクサロドン」の莫大な体躯の前には少し強い風が吹いた程度の物だろう。

だけど。

それは勿論、呼吸だって同じ事だし——当然、モンスタードだってアンデッドやエレメンタルを除けば大体呼吸を必要とするし呼吸が出来ない状況であれば「酸欠」によっていずれ死に至るのは何も変わらない。

——そして、別に狙った訳ではないのだけれど、私の「エアリエル」はこの「酸欠」を用いた作戦に対して抜群の適性を持っているという事になる。

【翠風術師】よりも……いや、もしかしたら超級職である【嵐王^{キング・オブ・ストーム}】よりも更に広範囲の酸素を、「アイテムボックス」に入れるかのように一瞬で収納し尽くす速効性。

水中、海中にある僅かな酸素すら残さず取り尽くし、《風よ、来い》が発動中なら「アイテムボックス」から出した直後の酸素すらも口にする前に奪い尽くせる程に特化された性能。

それこそ気密性が高く密閉された艦内や態々「酸素ボンベ」でも持つてくれば問題ないけども——《水中呼吸》やそれを行えるようにするジョブスキル、また「アイテムボックス」の利便性を前にボンベを準備する人はそう多くない。

これも、私のパーソナリティ^{パーソナリティ}がただ一点にのみ特化した成果。

そのお陰でこうやって「UBM」にだって有効な攻撃が出来ていると考えれば自画自賛したくもなるよね？

——凄くえげつないって良く言われるのは気にしない様にしなきゃだけどねっ。

ともあれ。

どうやら今回の〈UBM〉、【暴虐巨鯨 エクサロドン】も【酸欠】攻撃は効いている
 様だ。

ならばこのまま皆の牽制の影に隠れながら付かず離れずの距離を保っていれば間違
 いなくMVPを取れると——？

『……皆？ 私の目がおかしくなければ——あれ、^{UBM}私をロックオンしてませんか——
 ——っ!?!』



『《高速潜泳》、《高速潜泳》、《風よ、来い》っ！ 皆、早く助けてくださいーっ!!』

『今やっているよっ。そのまま逃げ続けてシフィルちゃんっ!』

『ちよ、これは無茶、むりですー!!』

泳ぐ、泳ぐ、泳ぐ——

両手両足に装着された「潜泳自在 バルスラーチ」の大鰭の固有スキルで全速力で泳ぎながら「エクサロドン」から——明らかに私に狙って来ているあの巨大鯨の進路から逃れる様に泳ぎ続ける。

途中、仲間の攻撃やその「エンブリオ」の必殺スキル、特典武器の固有スキルまでもが何度も「エクサロドン」横腹に突き刺さるが——かの「UBM」は全く進路を変えろ気配を見せない。

どんな攻撃を受けようがそれを無視し、束縛効果のあるスキルや魔法の殆どは純粹性能型としての高いステータスで減衰され抵抗され殆ど足止めにならず。

進路上に飛び出て止めようとした大型鯨（100メートルくらい）の「ガーディアン」は「マスター」ごと轢き潰されて「デスペナルティ」になってしまった。

そして……それらのあらゆる妨害の悉くを無視し——「エクサロドン」は唯々一番の脅威私だけを見つめ狙い殺そうと来ているのだった。

『「っ」これ、明らかに動物並の知能じゃないですよ、私を狙い続けるくらい知能ありま

すよねっ!』

『うーん、鮫のロレンチーニ器官で酸素が何処に行つたか把握している……のか？

《水流操作
《カレント》》

『わーからん。もう1分くらい経つてるのにまだまだ元気だし、こりや今までの相手とはHPが^{生命力}違い過ぎだわ! 《アクアジェット》お!』

『地道な援護ありがとうございますうー! でもできればもうちよつと直接的に——!』

酸素を奪い続けている事で未だ荒れ狂い放題の深海を逃げ続ける私の——僅か数メートル脇を、「エクサロドン」が全力で通り過ぎる。

深海の闇の中を僅かな星の光に照らされて浮かび上がるその黒色の体表は、迫りくる程に間近で見ると最早先のない絶壁にしか見えない程に——厚く、大きい。

(こんなのつ、どれくらい避け続けていれば倒——)

直後。

物理法則として当然の様に——圧倒的質量が通り過ぎた私の周囲を、今までの暴流ですら生温いと言える程の大海嘯が吹き抜けて行つた——!

『く、きやあああああ——!?!』

『シフィル君!? チイツ!』

流される。流れて、流されて、流されて——一瞬だけ【気絶】していた身体の意識を意識を回復させ、何とか状況を確認する。

……現状は、今の体当たりの余波だけで、HPの4割が削れ、波に流されて他の皆とも随分距離が離されてしまった。

いや、私と他の皆だけではない。あの質量が移動するだけで生じるその余波に他の皆も苦戦しているのか、既に【エクサロドン】を包围する布陣はポロポロの状態だ。

むしろまだ星のエンブリオのお陰で現状を把握できるだけ幸運かもしれない。

そして、何より——今、一瞬【気絶】してしまった事で《風よ、来い》が一時停止し、【エクサロドン】に一呼吸するだけの余裕を与えてしまっていたのが、何よりも痛い。

『——すいません、【気絶】してましたっ』

『ああ、把握している。だが、これは……』

オーナーの思案している通り。

たった一度。たった一度の全力の体当たりを、直撃もしていないのにこの有り様だ。

……今の一合で《風よ、来い》が解除されていなかったとしても、相手が【酸欠】で

倒れる前にこちらが全滅するか、少なくとも狙われている私はデスペナルティになってしまうだろう。

そうなれば、結局他に有効だがない私達のクランでは成す術がない——

『よくもシフィルちゃんを……条件特化型になってからかかってこいやおら——』
『うちのクラン、尖ったへエンブリオ』ばかりだからなあ。……なんて、雑談している暇も無さそうだ』

そう。

このクラン、へマリリン・ダイバーズにはシフィルの「エアリエル」同様、単一機能特化型のへエンブリオを持つへマスターばかりであり。

それが適応しやすい深海域において、ある種同類とも言える条件特化型であれば、むしろ御しやすい相手であった。

だが——眼前の相手、今も深海を旋回してこちらに、私に対して追撃を仕掛けようとしている【暴虐巨鯨 エクサロドン】はどう見ても、古代伝説級以上の純粹性能型。

いくら上級エンブリオによる埒外の固有スキルであろうが、並以上の小細工や策や罠であろうが——純粹に、モンスターとして、へUBMとして非常に高い能力値ステータスで突破する脳筋タイプ。

単一機能特化型の「エンブリオ」でも、例えば「人間爆弾」の「アブラスマシ」の様な戦闘での使用が主であればかの敵を撃破できたのかもしれないが、生憎と「マリリン・ダイバーズ」はある程度深海活動ができる人限定であった為、純粋な戦闘系の「エンブリオ」はないのであった。

……今もログインしていない、知ってる限りの他のメンバーの「エンブリオ」や特典武器について考えてみても——やはり、難しい。

(……仕方がないっ。此処は、一時撤退して醬油さん辺りに——?)
再度の体当たり。それを今度はただ避ける為だけに集中して全力で泳ぎ回避しながらそんな事を考えて——何かが頭のどこかに引っかかる。

それは——先程二度程考えた、グランバロアでも屈指の実力者。

海上国家において無類の火力を誇るエンブリオ、「大炎醸 アブラスマシ」を持つ彼の戦闘風景。

そして——自分の「エンブリオ」で出来るであろうと考えていた事、その可能性。

……いける？ いけるだろうか。流石にあの体躯はいけないかもしれない。でも、こちらの威力も正確には全く分からないし、いけるかもしれない……?

『でも、「酸欠」作戦はもう使えないし、これしかもう手がないし、初めてだけど多分や

れる筈……!』

『……どうしたシフィール君。まだ、何か策があるか?』

通信魔法でオーナーに急かさされ、そして視界の先では「エクサロドン」は再度旋回し、三度の体当たりを決行しようとしている。

私を殺す^{デスベナ}まで止まるつもりは全く無さそうだ。止まらないのは鮪だけで十分なのに。どうやら、迷っている時間はないみたい——ええい、女は度胸!

『オーナー——私が、必殺スキルを使ってあいつを仕留めますっ!』

『……え、シフィール君って必殺スキルもう習得していたのか? ふむ……』

『えっシフィールちゃん**の**必殺スキル初公開っ!? やだ、これは見逃せない……』

『内容は分かんが倒せそうならまあよし!』

ある意味予想通り、^{他のメンバー}外野の野次が飛んでくるけど、それは黙殺して。

何せ、今まで私は殆ど《風よ、来い》と僅かなジョブスキルのみで戦ってきたから。

克蘭の皆に「エアリエル」の必殺スキルを開帳するのは初めてだし——私も実行するのは初めてなのだから。

必殺スキルを習得して、説明文を読んで——そのまま見なかった事^{必殺スキル}にしていた

を、今ここで使用するのだから。

……そして、数瞬の後に。

『——そういう事であれば。可能性があるなら存分にやってみせれば良い』

オーナーからの許可が出て、それを行使する事になった。

……尤も、必殺スキルを使うにあたって、作戦なんてものは何も無い。

だけど、敢えて言うのであれば、一つだけ。

それは……皆にこの海域から離れて貰う事だった——



□グランバロア〈西海〉深海 【魔術師^{メイジ}】シフィール・ワルツ

『準備完了、つと……』

それから。

何度か【エクサロドン】の体当たりを回避し、時には余波を喰らい、【HP回復ドロップ】を舐めて耐え忍び、ジョブクリスタルまで使って——漸く準備が完了した。

この周辺、数キロから十数キロメートルに渡って、私の他に人型範疇生物の影はなく——大型モンスターもまたも一直線に私を狙おうとしている【エクサロドン】以外にない。『もう酸素吸収は止めてるのに攻撃は止めないんだから……執拗なのか、それとも臆病なのか、判断に困るね』

そんな事を呟きながら——【マリンモール号】に戻り退避を終えたオーナー達から、準備OKの合図を通信魔法によって受け取る。

私の方も、したくもない覚悟を完了した。

——うん。もう、やるしかない！

そう心の中で呟いて、真正面から私の方に突っ込んでくる【エクサロドン】に向けて左腕を向ける。

——正確には、左腕に装着した【エアリエル】を、だ。

そして、宣言する。

自身の〈エンブリオ〉の必殺スキルを、その〈エンブリオ〉の銘を、意味を。今まで、ずっとずっと溜め込んできた——空を解放します、と。

『
——
《空への帰還》!!
』

その瞬間。

海が、深海が——炸裂した。



《空への帰還》。

【風収盾 エアリエル】の必殺スキルであるそれは、おそらく必殺スキルとしては最も使用しているリソースが少ない類の必殺スキルであろう。

何故なら、その効果は——【エアリエル】を自壊させ、内部に溜め込んでいる酸素に

ある程度の指向性を与えて放出する、ただそれだけのスキルなのだから。

自壊をコストとして非常に強力な効果を発する様な物でもなく——ただそれだけ。ほぼ自らの意思で自壊させるだけの必殺スキルが、《空への帰還》なのだ。

そして、収納されていた酸素が放出されるという結果だつてそれは「アイテムボックス」が壊れた時に発生する仕様と全く同じ。

ただそれに指向性を与えるという、それだけの必殺スキル——

だが。

「エアリエル」は「アイテムボックス」とは決定的に、絶対的に違う箇所がある。

——収納許容量だ。

〈マスター〉一人に一つだけ与えられるパーソナリティの発露。自分だけの無限の可能性を秘めた埒外の卵——それが、〈エンブリオ〉。

ならば。

酸素に限定した収納にそのリソースの殆どを注ぎ込んだこの「エアリエル」内部に貯蔵できる酸素の限界量は……一体どれほどの物になるのか。

それは、〈マスター〉であるシフィル・ワルツすら把握してない事であるし。

限界まで溜め込む事自体が致命的であるようにすら感じているかもしれない。

……尤も。

たった一度の《風よ、来い》で周囲数百メートルから数千キロメートルの酸素を収納する「エアリエル」が、それを孵化してから今まで暇があれば繰り返していて尚限界が訪れないのだから、どれほどの物か分かる者が居るとすればそれは「エンブリオ」の管理者たる管理AIぐらいのものであろうが。

今、必殺スキルを使うにあたって重要なのは――

――その今まで溜め込んだ全ての酸素が、「小型の円盾エアリエル」に収められてきた全てが、その小さな器から解放されようとしているという事なのだから。

その総量を計算する事すら馬鹿らしくなる程の桁違いに圧縮された空気が――指向性を持って解き放たれた。

瞬間、直前にまで迫っていた「エクサロドン」の総身の半分が^{はた}砕かれた。

深海の海域が膨れ、弾け飛ぶ。

一時的にそこは海ではなく――^{頑強さ}空になる。

五桁を優に越していた頑強さENDも、八桁に達していた膨大な生命力HPも、一キロメートルを越える巨軀も――正しく桁違いに圧縮された風量の暴力によって蹂躪された。

だが、それも当然だ。

だから——シフィルも当然、追撃をする。

【魔術師】が覚える、下級の火属性攻撃魔法。

当然、直撃させた所でENDが5桁に達している【エクサロドン】にはカスタメにしかならない。

——今此処に、超圧縮された酸素が爆発的な勢いで解放された直後でなければ。

空が、爆発した。

一瞬の火花が散ったかと思えば——その空の空間全てを、超熱の業火が埋め尽くした。

それによって、残っていた【エクサロドン】の身体も、空の外縁にあった深海も。

——勿論、炎の行使手であったシフィル・ワルツも、あらゆる全てが燃え尽き灰すら残らず消え去ったのだった——

〔へUBM〕〔暴虐巨鯨 エクサロドン〕が討伐されました

〔MVPを選出します〕

〔シファイル・ワルツ〕がMVPに選出されました

〔シファイル・ワルツ〕にMVP特典〔暴虐小鯨 エクサロドン〕を贈与します

……………End

李縁の場合／とある【聖騎士】の戦い

■〈ヘクルエラ山岳地帯〉 廃棄砦 【大死霊^{リツ}】メイズ

アルター王国南東部、ヘクルエラ山岳地帯〈。

アルター王国とカルディナの国境地帯の一つ、その中にある放棄された砦の中に……
彼は居た。

「当月二番。未払い。該当素材あり。素材化済み」

人の上半身に、馬の下半身。薄暗いローブを被った不浄の術者。

そんな人馬種の男が、その砦の地下室の一角で作業を行っている。

古い机に向かつて、苦も無く一人細々と何らかの作業を続けていた。

「当月三番。入金確認。該当素材あり。素材化後、〃頭部のみ〃返却」

しかし、それは〃作業〃と一言で言える様な物ではない。

——その結果が、この砦に囚われている数多の子供の命運を示しているのだから。

そう。彼はもう一年以上もこの地に巢食つて悪事を重ね続けているへゴウズメイズ山賊団〈、その二大頭目の一人、【大死霊】メイズなのだから。

「当月四番。未払い。該当素材あり。素材化済み」

もう一人の頭目、スロッキング・グラディエーター「剛闘士」ゴウズ共々、王国のティアンに十人と居ない超級職を除けば数少ない合計レベル500にして——レベルだけではなく、各々の専門とする分野に関する技術に至っては正真正銘のトップクラスに至る怪物。

その片割れだ。

〈マスター〉という決して無視できない相手であり、この王国が約半年前の戦争により大幅に人員が失われている事実を勘案しても尚、紛れもない実力者。

「当月五番。未払い。該当素材なし。処理」

それこそ、地の利数の理戦術を上手く使えば——上級〈マスター〉達のパーティを含む大勢の冒険者達すら撃退出来る程。

〈マスター〉もティアンと同様、先の戦争によって大幅にランキング掲載者が流出しその戦力を落としていたとは言え、本来の〈マスター〉とティアンの戦力差を鑑みれば間違ひなく驚愕に値する戦力であるというのは誰から見ても明らかだ。

——それも、その戦争では〈マスター〉の圧倒的な力によって大敗した王国であれば尚更。

自国の上級〈マスター〉のパーティが負けるとなれば、早期に討伐を諦め、依頼を張り出さなくなる程に絶望的なのだ……

「当月六番。入金確認。該当素材なし。返却予定」

そんな「ゴウズメイズ山賊団」のメイズであるが、ギデオンのティアンが諦めてから暫くはこうやって変わらぬ日々を過ごしていた。

多くの「ハマスター」からすらも割に合わない仕事と思われ、ここ半年は獲物を取り返そうとしてくる相手は全く居なかった。

だが、そんな期間は彼にとって望外の幸運と言う他ない。

遊戯派の「ハマスター」は最早請ける理由はなく、世界派の「ハマスター」すら戦争前後の各地の大混乱の対応で手一杯であったと言う事情があつたが、それも彼にとっては関係ない。

彼にとって重要なのは——それだけの期間、誰にも邪魔されずに自分の目的を、キング・オブ・コープス「死霊王」就職の為の「怨霊のクリスタル」の作成が着実に進んでいたという事実だけだ。

「当月七番。未払い。該当素材なし。〃処理〃。……チツ。未払いが増えてきたな。諦めが早いのは美徳ではないのだがな」

もう直ぐ——もう直ぐなのだ。

もはやクリスタルは九割九分以上完成している。

順調にいけば来月にでも「怨霊のクリスタル」は完成し——「死霊王」への道が開か

れるのだ。

その時の事を思えばこの様な退屈な作業も悪態を尽きながらではあるが内心ではむしろ歓迎してすら居る程だ。

何せ、物のついでに始めた山賊業だ。

当初はカルデイナとの取引料や闇市場で素材を購入するのに使ったが、現時点では既に余らせる程財貨の余裕はある。

金があればそれはそれで、若干ではあるが部下達から手に入る怨念も増えるからあるに越した事はないが、既に無くて困るといふ物でもなくなつた。

まあ、あればあるで有効に使える物だ。

例えばゴウズの――

「当月八番。未払い。該当素材なし。〃処理〃。……………む？」

そういうえば、と思い回りを見る。

そうなのだ、現在は二大頭目の片割れであるゴウズは傍に居ないのであった。

一応護衛なのだが、とは思うがここ数か月の安穩ぶりを考えれば、むしろあの戦闘狂バトルマニアがよくここまで持ったものだ、と思わないでもない。

今は地上で部下達相手に遊んでいる頃だろうか。

流石に砦は離れるな、と言い含めておいたからモンスター狩りに出かけていたりはし

ないだろうが。

——瞬間、知覚内で「嫌な」気配がした。

同時に、怒号が、剣戟の音が、悲鳴が——地上から小さく聞こえてくる。

そして、先程の気配が——【大死霊】である自身の天敵である、聖属性のエネルギーの気配だ——更に一度、二度と続けて放射される。

直後、一段と大きな足音が、地響きであるかの如く鳴り響く——ゴウズが全力で踏み込んだ音だろう。

配下に、部下に——聖職者の類のジョブを持つ者は一人も居ない。

こんな事山賊団をしている連中だ。その類のジョブに適性がある訳がないし仮にあったとしても選んでいたらこの道を選ぶ訳がない。

ならば、この聖属性の使い手は外部の者。

しかも、気配や音から察するに単独か、或いは少人数のもの。即ち——

「久しぶりの「ひとでなしマスタール」のおでましか。面倒な事だが仕方ない——」



■ ストロング・グラディエーター
 【剛 闘 士】ゴウズ

「ハツハツハア！ 久しぶりだ、久しぶりの決闘だなあ李縁——腕は鈍ってねえだろうなあー!？」

「お前に心配される筋合いはねえよ——お前らはここで死ぬんだからな！」
 激突。

三メテルを越える牛頭の巨軀と、白銀の鎧を纏った【聖騎士】が——へゴウズメイブ山賊団へアジトの砦、その前庭で激突していた。

共に両の手に武器を構え、互いに戦意と殺意を振り撒いて、力の限りをぶつけ合い、その命を削り合っていた。

激突の結果は——互角。

いや、STRにおいては巨軀を誇る牛頭が幾分勝ったか、しかし【聖騎士】も負けておらず即座に勝っているAGIと技術で切り返し、一撃を与える。

しかし、数秒後には【聖騎士】は回復魔法で、牛頭は自動回復のスキルの付与されたアクセサリーで、互いの傷は殆ど癒えてなくなってしまう。

その回復すら待たずに両者は再度激突、再度激突、再度激突を繰り返し——激闘は拮抗状態が維持されていた。

それのそのはず。

互いの実力は超級職を持たない通常の者達の中でも頂点たる合計レベル500——その中でも特に戦闘において最高峰の実力者。

装備品がアイテムが、ジョブやスキル同士の相乗効果が、そして何より——戦闘技術とセンスが。

超級職を有する、あるいはそれに匹敵する力を持つ準〈超級〉達にこそ一歩劣るものの、逆に言えばそれらの者達にあと一歩まで迫っている者。

それがこの二人だった。

——最高記録、王国決闘ランキング三位。〈ゴウズメイズ山賊団〉二大頭目が一人。

ストロング・グラディエーター
【剛 闘 士】ゴウズ。

——最高記録、王国決闘ランキング五位。現王国決闘ランキング十位〈マスター〉、

パラディン
【聖騎士】李縁。

……そう。

且つては共に王国決闘ランキングで鎬を削った者同士。

その二人は今、且つてとは違う思いと立場を持って此処で激突する。

——いや。

二人だけではない。

山賊団の他の部下達……でもなく。

牛頭、ゴウズを挟撃するかの様に、もう一匹。

虚ろな瞳を湛えた双頭にして八足という奇怪な姿を持つ大型犬が李縁を援護していた。

その犬——李縁の〈エンブリオ〉の名は——

「ちいつ！ 弱つちい癖にめんどいなアお前の『シヨロトル』はあ！」

「誉め言葉をどうも、だ。こいつも喜んでるぜッ！」

【シヨロトル】——【奇怪神犬 シヨロトル】と共に、李縁は少しずつ、確実に自動回復の許容範囲を超えてゴウズのHP生命力を削り続けていく。

この【シヨロトル】のステータスも二人に伍すレベルであり、李縁がこの世界にやってきた当初から共に戦ってきた間柄。

その連携は完璧の一言であり、正しく手が増えた一人と一匹のコンビネーションを前にゴウズは攻め続けられる事ができず。

その配下達も、雲上の如き戦いに遠巻きにするか相談してもう一人の頭目を呼ぶかというくらいしかできず。

このまま続けば戦いは十中八九李縁が勝利——

——とは、当然ならない。

「——チヨコマカとオ、うざつタインだよオオオオオオオオオ!!!」

ゴウズが両手の巨斧——【アガハスト】を振り上げ、全力を込めて振り下ろす。

装備補正込みで——STRにして、約七千。

その膂力によって全力で振り下ろされた二振りの巨斧はゴウズの狙い違わず、大地を大きく穿ち抉り、大量の土砂を巻き上げながら振り上げて——狙い通りに多少の時間稼ぎを達成する。

それは——

「ちっ、なら——」

「——メエエイズ!! 援護だ、援護を寄越せエエエ!!」

『ああ、もう時間稼ぎは十分だ。——《ソーン・カース》開の呪い』

「——ッ！」

直後、李縁の身体を——闇属性の魔法の茨が蝕んだ。

【拘束】【出血】【猛毒】の三重状態異常を与え、上級状態異常魔法。

魔法の茨によって動く度により強く身体を締め付け、更に出血も増す——直接的にHPを奪う致死の魔法。

何処からかやってきたその妨害魔法に、李縁の動きが如実に鈍る。

「——漸くのお出ましかよ、二大頭目」

『——《境界線外の怪物》』

それに対し、即座に反撃であるかの様に李縁は己のエンブリオ——【シヨロトル】に必殺スキルを宣言させる。

己の〈エンブリオ〉の銘が刻まれた最大のスキル、殆どの〈ハマスター〉にとつての切り札を——躊躇わずに発動させる。まるでその状況を待っていたかのように。

歪な声音によって紡がれたそのスキル。変化は一瞬だった。

双頭の犬である【シヨロトル】と、その〈ハマスター〉である李縁が接触したかと思う

と——土留色の微かな輝きと共に、瞬時にそれは終わっていた。

——李縁が、二人に増えていたのだ。

変わらぬ防具、変わらぬ二刀、構えも変わらず、魔法の茨に締め付けられているのも変わらない——片方が《看破》で名前すら見破れない事を除けば、正しく瓜二つな姿でそこに立っていたのだ。

——分身スキル。

それは、あるいは決闘を楽しむだけの観客からは【猫神】ザ・リンクストム・キャットのヘエンブリオ<にして代名詞、【グリマルキン】の《猫八色》の劣化版の様に思えるかもしれない。だが、今までかの闘技場で戦ってきた多くの者は知っている。確かに見てくれこそは似ているかもしれないが——その性能は全くの別物であるのだと。

これこそが凡庸に見える戦術を用いる彼を、相当高位のランカー足らしめる切り札の一片なのだ。

まず一つ目——当然であるがこれはただの分身スキルでも、勿論【シヨロトル】が李縁に変身するだけのスキルでもない。

その複合スキルだ。

『——奮ッ！』

気合一閃。

先程は動きを制限していた魔法の茨が——李縁と「シヨロトル」が全力で力を込める。ただそれだけでちぎれ飛び羽目になった。

魔法の茨と言えど、非実体型でないのならばSTR^カによって茨の「拘束」を除去する事ができ、魔法の効果は終了する。

【出血】【猛毒】こそ残っているが——砕くように振り掛ける【快癒^エ万能^ク霊薬^シ】によってそれも治癒される事となる。

当然ながら、これを為せたのは必殺スキルによって相応のSTRを得る事ができたからだ。

【奇怪神犬 シヨロトル】の必殺スキル、《境界線^{シヨ}外の怪物^ロ》の効果——それは、融合と、分身。

TYPE:ガードナーには必殺スキル、通常の固有スキルの隔てなく様々な融合スキルを有する「エンブリオ」が居るが、「シヨロトル」もその類。

融合した上で、融合した状態の李縁と全く同じ状態の自身^{シヨロトル}を分身として出現させる——一言で効果を言えば、ある意味では実にシンプルな固有スキルだ。

しかし、「シヨロトル」自身のステータスも、李縁に与えるステータス補正も平均以下である為、本来であれば融合してカンストと第六形態ガードナーのステータスを足し合わせて尚上位純竜級の域に行くか行かないかと言うステータスの低さだ。

——李縁のサブジョブに【ビーストオーガ獣戦鬼】が無ければ、の話だが。

——『ガードナー獣戦士理論』。

とある仕様を利用したジョブとへエンブリオのシナジーによる、汎用的な物の中では“最強”と目されていたビルド理論。

それを、融合スキルによる保有ジョブスキルの制限撤廃を組み合わせ——更に、その強大なステータスを持つ自身を分身させる。

HP等を除いた物理ステータス……数値にして、全て一万を超えた超級職の域に入る【聖騎士】——それも、一人による絶妙なコンビネーション。

それが、王国決闘ランカーの中でも高位に位置するへマスター、李縁の常勝手段であつた。

『——準備は終わった、と言わなかつたか？』
だが。

李縁は決闘ランカーであり……ゴウズもまた、決闘ランカーであつた者。

その手の内は把握しており——へゴウズメイズ山賊団の二大頭目であるメイズが、そ

の力を戦場に晒したという事は……その上で勝機を確信できる程の準備が整ったという事を意味する。

『起きろよ木偶よ。傀儡よ死者よ。起きて奮いて——我が敵を滅ぼせ。《アウエイキング・アンデッド》』

【アイテムボックス】に保存しておいた、虎の子の不死者達が、配置された通りにその軀に偽りの生命を宿す。

リソースがふんだんに含まれたドラゴンの死骸の一部を使って作られた、亜竜級の骨の兵士、【ドラゴン・トウース・ウオリアー】の群れが。

幸運にも——否、不幸にも攫ってきた中で特段の才能を持っていたが故に苛め抜かれて絶死した少女の怨霊を使った【バンシー^{喚きの幽霊}】が。

かつてはティアンの中でも上位であったであろうパーティの成れの果てである【ハイ・レブナント】達が。

数多の無念と恐怖と絶望の怨念を核とした無数の怨霊^キの複合体^{オン}、【ミングレス】が。その全身に瘴気と猛毒を宿し、触れるだけで複数の状態異常を齎す厄介なアンデッドである【ポイズンホワイト】達が。

瘴気と怨念の融合物であり、瘴気の息^{ブレス}を吐き付けるアンデッドと化した数多の【イビルヘイズ】が——

立ち上がり、起き上がり、浮かび上がり——一瞬にして二人の李縁を包囲した。

「……………ッ！」

「ハツハア。わりいな李縁。だが——此処は闘技場じゃないんだぜ？」
そう。

これは決闘ランカーと元決闘ランカーによる心温まる試合なんかでは全くなく。相手の勢力を殲滅せんと襲撃してきた李縁を潰す為の戦い。

〈ゴウズメイズ山賊団〉に相手側の事情を斟酌する精神もその必要もまるでないが故に、当然の如くカンストの「大死霊」であるメイズからの援護はいくらでも飛んでくるし——

『お前たちも——いつまで遊んでいる？』

他の団員達も、ただ見学しているだけの観客では、決してない。

ただ自分達では高レベルな戦いにどう入れればいいのか、入っていいのかすら判断できなかつた愚衆なだけであり——

「で、でも頭目——」

『遠距離攻撃が可能な者は十分な距離を取って両側面から打ち込め。命令を聞けない者はあいつらの仲間にしてやるぞ』

《ステイール》を行える者は背面より行使せよ。相手は高位のランカー。その装備品も所持品も、お前達には望外の代物だ——当然、取り上げはせん。奮って盗み取つてくると良い!』

「ちよ、てめ——ッ?!」

未だ砦の通信装置から響く声——

しかし、魔法を発動している事から入り口付近に潜みアングレドや配下の指揮を行っているであろうメイズの討伐優先順位を大幅に引き上げ強引にでも突破しようとする。

「おいおい。まだ俺と遊んでいてくれなきや困る——ぜえッ!」

「……はっ——速攻でランキングから転落した雑魚に、俺を止められるかッ!」

そう挑発し力任せで突破——できない。

眼前に二振りの大斧が振り下ろされる——融合し、強化された李縁のステータスでも有効打になるゴウズの全力攻撃が、的確に李縁の想定していた進路方向を塞いだからだ。

一合。数瞬の攻防——亜竜級や上位のステータスを持つモンスタードからすれば、十分過ぎる程の時間。

——骨剣が。闇の魔法が。死者の武技が。劇毒の禍爪が。瘴気の吐息が。

更に数瞬遅れて数多の弓矢が魔法が、《ステイール》が破断の剛斧が——

一斉に二人の李縁に放たれた——！



■ 【大死^{リツ}霊^チ】メイズ

（ほう……流石にへマスターへ蔓延る中での決闘ランカーか。良く粘る物だ）
空を浮かぶ【バンシー】の視界と同調し、未だその身を砦の中に隠しながら——【大死霊】メイズは戦場を俯瞰していた。

アンデッドの操作を続けながら、時には状態異常や弱体魔法を駆使して。
しかし、それでも——李縁は倒れない。

数カ月前にとある上級のへマスターへパーティを圧殺した彼らの全力を以てしても——
王国の個人戦闘型の極致、決闘ランカー一人を破るには、まだ足りないのだ。

(まさか、数多の装備と魔法による強化がされているゴウズをも軽く上回れるとはな……)

……所謂ビジネス相手とは言え、メイズがそう述懐する程度には、彼が相棒に選んだゴウズは、強い。

天性にして繰り返してきた戦闘から極限まで鍛え抜かれた戦闘センス。

この山賊業で得た金銭、そしてそれ以前にも彼が最上位に近い決闘ランカーとして稼いできた金でカルディナから買った高性能な装備品群。

特に、ステータスの増強やHPの自動回復、そして、「アダマンタイト」古代伝説級金属によって作られ、更に《攻撃力強化》というシンプルなスキルの付与された両手持ち用の長柄の巨斧、非常識な攻撃力を誇る「アガハスト」。

——それを、二本。

本来は両手、二つの装備スロットを使用しなければならぬし、武器の大きさとして一本振るうだけで十分なそれ。

しかし、「剛闘士」の《装備枠拡張》によって武器枠を2枠拡張し、更に——見ての通り、巨人の血を薄く引く牛人族であるゴウズならば、それも可能なのだ。

その「アガハスト」の二斧流という規格外の攻撃範囲と威力を前に屈した者は非常に多い——

そして……装備やセンスだけでは、ない。

それは、ある意味決闘に参加する上で揃えている大前提。

〈エンブリオ〉という垢外を保有する〈マスター〉が席卷した現在のランキングでさえも同じ様に語られるのだから。

ならば、〈エンブリオ〉という常識外の力のなかつたティアンだけの決闘であればそれはほぼ全員が持ち得るモノで、優位点には成り得なかつた。

だからゴウズの強味も勿論それだけではない。

例えば——ステータス。

この世に生きる万物の指針。万象を決める理ルールの一つ。

殆どはジョブのレベルによって決定されるその基準値だが——例外はある。生まれの種族だ。

ジョブによって……最大でも下級職一つか二つで埋められる程度の差ではあれ、ジョブに就いていない真つ新たな状態で、その程度の——それほどの差が生まれる。

数値にして、凡そ三百から五百前後と言った所であり。

——決闘の勝敗を決するのに十分過ぎる程に高い値だ。

……超級職を得ていない、合計レベル500という頂点。

その域に至つてすら——物理型前衛のSTR、AGI、ENDと言つた物理ステータ

スは、三千前後なのだから。

一つのスータスに特化すれば高くはなるが、脇が甘くなつては隙を突かれるのが決闘という物。故に、スータスの平均としてはそこらと言つた所だろう。

その中において、STRとENDに約五百もの上乘せがされているのだ。間違いない、それはゴウズの強味となっている。

更に言えば——かの巨軀と相貌、そして、精神性。

巨斧の二斧流という事例をあげるまでもなく、同格前後の相手との戦いであれば当然その体格も、相手を威圧する容貌も——勝利の為に手段を躊躇わないその残虐性も、プラスにしか働きようがない。

ゴウズ自身がそれらの長所を活かす長柄武器ホールウエポンや悪役ヒールつぶりを存分に利用していたのもある。

ちなみに、決闘ランカー時代は多少はその方向で人気があつたらしい。……解せぬが、まあそういう事もあるだろう。

それらを統合して言えば——間違いなく、ゴウズは強いのだ。

このアルター王国において「超闘士」に最も近かつたのは、紛れもなく彼だ。

戦法としての相性も……且つては「逸話級金属ミスリル」製の物であつたが、長柄の巨斧を使つていたのは変わらず。

その二振りの斧を薙ぎ払う事による高威力広範囲攻撃は、間違いないなくかの【猫神】トム・キャットに対して最も優位を取れていたのだ。

……尤も。

ステータスの優位は超級職のステータスを持つ【猫神】に対して意味を為さず、精神的な優位は後に増加するへマスター」と比較してすら尋常ではない彼奴に対してまるで効果がない。

故に、相性が良くてもへマスター」との絶対的な地力の差で負けていただろうが。

(……不味いな。このままでは何方が先に尽きるか分からんぞ)

だが。

そのゴウズに、痛覚麻痺の呪いや身体リミッター解除による物理ステータス狂化の呪い等の強化魔法。

更に亜竜級から純竜級下位まで、暴走させて喚起させている個体まで含めて総計で20体も超すアンデッドの群れ。

——それが、まさかたった一人と一匹の【聖騎士】も殺せもせず削られているのだ。ティアン相手であれば、上級職のパーティどころかそれを更に束ねたレイド級の人数

だって塵殺できる程の大戦力だと言うのに、だ！

(チい——これだからランカーという者は！)

相方であるゴウズだって「元」ランカーであるが——やはり、どう足掻いても前と今では……具体的に「へマスター」増加前と後では、その意味は大きく変わる。

「へマスター」が増加し始めて四年以上経った今、王国のみに限らず殆どのランカーが並み居る「へマスター」によつて上書きされ、更に現状その地位を維持し続けているという事はその中でもほんの一握りの上澄みである筈なのだから、それも已む無しだ。

故に、彼は……彼らは、ランカー相手であつても勝てる様に準備を整えてきた——つもりだった。

実際に、以前襲撃してきた上級「へマスター」のパーティを含む大部隊相手ではこの戦力は十分に通用した。

ゴウズと配下達で時間を稼ぎ、アンデッドで包囲した後は「へエンブリオ」を出す暇もなく物量と搦め手で圧す——

中には、カンストに近くステータスも高い「へマスター」も居たが、アンデッドとメイズの扱う複数の状態異常を前に倒れ伏し、その首をゴウズの斧が両断したのだった。

その後も、散発的に報奨金狙いの「へマスター」の襲撃こそあれ……どいつもこいつも、本気ではない気に入らぬ愚物ばかり。

何故この様な奴らなんかには真の不死が備わっているのかと天を呪った事すらあるが
 (やはり、あらゆる面でランカーは格が違う、か。ゴウズの実力と忠告で分かっている
 つもりだったのだがな！)

【聖騎士】李縁——その者の名と経歴を、メイズはゴウズから確かに聞いていた。

彼らへゴウズメイズ山賊団を襲ってくるであろうへマスターの戦力の仮想敵の一人として。

主にギデオンを中心に精力的に活動しているへマスターとして。

——【聖騎士】に転職する資格条件を満たせる程度には、騎士団の、国の信を受けるへマスターの一人として。

李縁——その者がこの世界に現れるのは、へマスター増加初期……四年以上前まで遡る。

所謂“初期組”である彼も、他のへマスター同様に試行錯誤を繰り返しながら強くなつていった者の一人。

当時は未だ相当高位の決闘ランカーであるゴウズからすれば、他の数多くのへマス

ターに埋もれる程に特徴のない者だったが——しかし、彼は早くからその頭角を現し、早期から他の〈マスター〉と共に決闘ランキングに挑戦し、現在の「炎怒」のビシユマルや「仮面騎兵」マスク・ド・ライザーらと共に相応の順位を維持し続けてきた。

その躍進の理由は、確かに本人の努力や素養にも関わってくるのかもしれないが——その多くはただの幸運だと、私は断じている。

本人の戦闘センスが良かったのも、〈エンブリオ〉の必殺スキルの習得が特に早く、他の者がまだ必殺スキルに目覚めていない状態で勝利のリードを広げられたのは——まだ本人の才覚や努力による物だと考えられる。

だが、暫く後になって流行した特大のステータスを得られるビルド、「ガードナー獣戦士理論」に真つ先に適応した事も。

偶然組んだパーティで古代伝説級の〈UBM〉と対峙し、その特典武器——それぞれ斬った相手にAGIのバフとデバフを行える長剣と短剣の二本一对の「双刻断剣 アクル・マナス」を手に入れた事も。

そして、〈墓標迷宮〉でも——

「雑兵の数が多すぎるッ！——
 【鋼鉄之戦馬】、蹴散らせッ！」

『BURRRUUUU——!!』

アンデッドに、そして山賊団の配下達に囲まれ李縁は「アイテムボックス」より一つ
のアイテムを取り出す。

それは、鈍色の身体で出来た、機構仕掛けの荒ぶる軍馬。ウオーホース

名工フラグマンが作りたる煌玉馬——その量産型試作機。

【量産型煌玉馬】よりも一回り以上大きな馬力と出力を持つ量産型——で、ありながら
彼が持つ其れ以外に殆ど見つかっていない希少品。

オリジナルの煌玉馬と比べたら圧倒的に劣っているが、しかしそれでも亜竜級の軍
馬を上回る運動性能と——量産型らしい、とある特性を有している。

それは……

「——撃えッ！」

『Rapid FIRE——』

李縁の要請に、無機質な機械音が応答し。

直後——【鋼鉄之戦馬】の両肩に装備されていた《八連装機関銃》が火を噴いた。

「ひい!？」

「お、お頭たさ——」

「あああああ——!」

遠距離攻撃を仕掛けてきていた山賊に突撃しながら見舞われる嵐の如き銃撃。

攻撃力は然程ではなく、亜竜級以上のモンスターを集められているアンデッド達には目晦まし程度にしかならないが——END型でもない、レベルも高くないティアンの山賊であれば十分に蹂躪できる威力が秘められた斉射だ。

勿論、敵の新手に他のアンデッド達も即座に反撃を繰り出そうとするが——

『HHHHHHIIIIIN——!!』

今度は、一回転して側面に取り付けられた《高出力火炎放射器》による炎撃が、メイズが作成したアンデッド達に襲い掛かる。

アンデッドの弱点たる火炎に包まれ、用意した中でも低位のアンデッド達は苦悶の声を上げ動きが鈍り。

——直後、融合と《獣心憑依》によって多重に強化されたステータスで放たれた彼の得意技“一人二役累ね《グランドクロス》”によってまとめて消し去られた。

(——ッ！ 戦力差が、ここまで縮められるとは……ッ！)

まるでアンデッドに対策したかの様な武装の選択だが——実際に、彼と【鋼鉄之戦馬】は対策してきているのだらう、とゴウズとメイズは悟っている。

何せ、それこそが彼が駆る煌玉馬【鋼鉄之戦馬】^{アイアン・ホース}の特性——易拡張性であるからだ。
 カスタム^改、アタツチメント^{付加装備}、リペア^{修理}の容易さ——それこそが、未出の量産型煌玉馬である【鋼鉄之戦馬】が誇る、他のオリジナル煌玉馬にすらない利点だ。

どの様な用途にも適応できる様、^{遊び}が多く、燃費は良くないが……それでも、仮にこれが量産成功していたら大きな戦力になったであろう事は想像に難くない良品。

それが彼の持つ【鋼鉄之戦馬】であった。

決闘でも、固定ダメージ弾やブレード、シールドや閃光弾、麻痺弾、捕獲用の投網や各種魔法弾まで相手に合わせて切り替えて李縁の戦闘をずっとサポートしてきた名機体である。

彼の決闘ランカーとしての戦術の最たるモノは、李縁と【シヨロトル】——そして、幸運によって手に入れた【鋼鉄之戦馬】によるスリープラトンなのだから………！

「チツ………チイツ！」

気に食わない。

ああ、気に入らない、気に入る訳がない。

なんだ、なんなののお前達は。お前達へマスターへは。

〈エンブリオ〉だかなんだか良く分からぬ物に選ばれし者達で？

完全なる不死不滅を体現し全てに対する才能を持ち？

〈超級エンブリオ〉ですらなく、〈上級エンブリオ〉の時点ですら特典武器に、超級職に匹敵する固有スキルすら行使でき。

拳句の果てにこの国の王曰く、そいつらがこの世界をより善く導く為に遣わされた存在——？

馬鹿な。あり得ぬ。認められぬ——!!

私は今まで見てきたぞ、何度も見てきた。

遊び半分で動物をモンスターを弄ぶ様に殺していく様を、ヒトティアンにまるで価値のないゴミであるかの様な視線を向け、あまつさえその様に振る舞う者達を。

その力を立場を笠に着て暴虐を振る舞い、遊び心地で過ごす彼奴等を。

我ながらろくでなしであるという自覚はある。

守るつもりもない人道倫理だつて理解するだけはしている。

だが、人道——？ 奴らは、人ですらないだろうがッ!

人を超越だ、などとんでもない。正しく奴らはこの世界の人から外れた人外であろうが!

真にへ人でなし——それも、その中でもただ運が良かった、それだけの此奴が、私達の活動に終止符を打つ?

許せぬ、我慢できぬ。

怒りと憎しみで臓腑が焦がれる様を知覚してしまう程にだ。

この赫怒、奴を殺したらいつも以上に残りの子達を――

(……………待てよう?)

ふと、疑問が浮かんだ。

何故、此奴は今私達に挑んでいるのだ…………?

(私達、へゴウズメイズ山賊団)が外部からの襲撃がある度に死体を送り付ける外道だ
と言う事は既に周知されている筈だ。

それ故に近頃は襲撃者も居なかったのだし、ギデオンに潜伏させている配下からも確
認を取っている。

……………今まで戦争後の諸々に忙殺されていた? 確かに此奴は騎士団にも籍を置く身
だし、ありえなくもないが――それでも、もつと前に挑んできていても良い手合いだつ
ただらう)

相手が、李縁が〈ゴウズメイズ山賊団〉に狙いを定めて襲撃してきたのは……間違いない。

【鋼鉄之戦馬】の装備品もそうだし、ステータスから【ドーピングポジション】まで使つて強化を重ねているのも、恐らくその為なのだろうから。

だが……此奴、一人で？

確かに勝機はある。十分にある。それだけのランカーに相応しい実力を持っているのは理解できるが……

準〈超級〉でも、勿論〈超級〉でもない一人が持つ戦力のみで挑んでくるその姿は、ただ依頼を受けたからだけでは無い何かを感じさせた。

考えて、考えて、考えて――

(……ああ、なるほど。そういう事か)

メイズは正答に至った。

だから、彼はそれを使用する。

〈マスター〉を煽り嘲笑い、動きを止めトドメを刺す為に――



□ ■ 〈ヘクルエラ山岳地帯〉 廃棄砦
【パラディン聖騎士】 李縁

『ははは、お前が逢いたかったのは、こいつだろうか？ —— 〈アウェイキング・アンデッ

ド〉 オ！』

」

そうして。

砦の中から一体のアンデッドが——一人の騎士が、新たに這い出てきた。

他のアンデッドとは違う、明らかに違う威圧感。ステータス。下位ではあっても、純竜級に足を踏み入れる程度の威圧感を持つアンデッド。

いや、それは実際に純竜級のモンスターの筈だ。少なくとも、〈墓標迷宮〉で遭遇した時はその筈だったと、李縁は知っている。

だが——違う。

所々傷がある、歴戦の「ミスリル」製の金属鎧に、国王陛下より下賜されたと喜んでいた、「伝説級金属オリハルコン」製の長剣。

アルター王国の紋章が刻まれた盾に、「聖騎士」として聖属性を多少は含んでいると聞いていた外套。

そして——俺の知っていて、そしてアンデッド化による腐敗を意思を映さぬ瞳によって知らなくなった顔。

種族：アンデッドの純竜級モンスター——「アンデッド・ナイト」。

数か月前、戦争の直前……後顧の憂いを断つと言い、他の〈マスター〉や冒険者と共に「ゴウズメイズ山賊団」へ討伐戦を仕掛けたかつての知り合い——友人の、成れの果て。

王国近衛騎士団第五席。

カンストにも程近い、〈マスター〉にも口煩い熱血漢だったそいつが、物言わぬ屍となり、奴の意思通りに動く傀儡となり——最早どうにもできぬ軀となり、俺の前に立ち塞がった。

……分かっていた。

可能性なんて欠片程もなく、国内を東奔西走していた俺が今更来た所で、どうしようもない程に手遅れなのだと理解していた。

あるいは、あの時、あいつに討伐隊に誘われた時——戦争を眼前に控えているからと固辞せず、共に戦っていたら、そうはならなかっただろうに。

しかし、それは叶わぬIF。あり得たかもしれない可能性でしかなく——その可能性はとつくの昔に潰えていた。

ゴウスとメイズ
外野達が五月蠅く喚いているのが僅かに思考を揺らす。

思考を反らしたまま機械的に反射的に戦うのは限界で——

——もうその必要もない。

だつてそうだろう？

もうあいつを助ける事は叶わないし、ゴウズが言った様に——此処は闘技場ではないし、此れは決闘でもないのだから。

だから——

『『全力で潰す。——』』
《《カオスシエイブ混沌の寵児》》』

そう宣言し、決闘では控えていた「シヨロトル」の——スキル特化型エンブリオの固有スキルの使用を宣言した。

その効果は——





■【大死^{リツ}霊^チ】メイズ

『——ゴウウズ!!』

「わかあつてるぜ!」

私特性のアンデッド——【アンデッド・ナイト】を見せ、沈黙していた李縁の突然の固有スキルの宣言。

その効果は——【シヨロトル】との融合だった。

——馬鹿な。既に融合しているだろう!?

まさかの分身したへエンブリオとの再融合。

それによつて起こる事はまるで想像できないが——最低でも、他の融合スキルと同様に全く同じステータスであつたあれを足し合わせる程度はやつてくるだろう。

私達にとつては、それだけでも十分に壊滅的な問題だ。

再融合以前ですら、物理ステータスが一万を超え、強化の掛かつた亜竜級上位、純竜級、ゴウズが束になつて掛からねば抑えきれなかつたのだ。

数は減つても——その二倍のステータスは物理では打つ手がない。

ENDこそ高くなかったとはいえ、それですら太刀打ちできなくなるだろう。

故に、スキルの効果が発揮され、全力を出される前に——此方から潰す。

何故か、奴は【鋼鉄之戦馬】も先の一瞬で【アイテムボックス】から仕舞っている様だ。

まあ、もう配下の数も大分減つたから役目は終わり、完全破壊を回避するためかもしれない……が、どちらにせよ好都合だ。

まだ此方には中位以上のアンデッドが大量に残っている。

包围を支持し、私は切り札の準備を——

「『《グランドクロス》』」

不気味に重なって響くその言葉と共に——アンデッドの一角が一瞬で消滅した。

『——捧げ——呪え——敵——』

「おいおい——随分愉快な身体になってんじやねえかよ！」

《詠唱》中で返答できない私の代わりにゴウズの声が響く。

だが、仮にアンデッドが消滅していなければ、私もそう煽っていたかもしれない。

何故なら、融合が完了した李縁の姿は——どう見ても異形であったのだから。

胴体からは不格好に斜めに首が二本生え、腕は左右に三本ずつ、六本。

まるで最初の「シヨロトル」のガードナー体が如き双頭に複数の腕を——人型に当てはめればこうも不気味な怪物が出来上がるのか！

この異形のどこが人型範疇生物、どこが選ばれし者？

——こんなモノ、不具の奇形にしか見えないだろうが！

そう内心で吐き捨てるが——しかし、その実力は本物だ。

予想通り、ステータスは足し合わされ元の李縁のステータスからは考えられない程馬鹿げた数値となり。

先の「累ね《グランドクロス》」もより簡易に——あるいは、あの二つの頭部、二つの口で別々に発動できるようになり。

更に恐らくは装備部位も……奇形の数だけ、増えている事だろう。

今も、長剣と短剣の二刀流だけでなく、更に盾と槍、ついでとばかりに追加で剣を二本、《瞬間装備》で装着された。

どれも逸話級金属にも満たぬ数打ちの品だが——あのステータスが乗ったそれは、ゴウズすら容易く殺して見せる程の威力を発揮するだろう。

「——おおおおオオオオオツ!!」

それを証明する様に、ゴウズが辛うじて長剣の一撃をその双斧を交差させる様に振り下ろし受け止める。

——事も出来ずに、カルディナで仕入れた奴の自慢の斧は、粉々に砕け散った。

……流石にステータスを足し合わせても、古代伝説級金属でできた武器を砕く程の威力は出せない筈。

まだ何か未知のスキルを発動しているかもしれない、と一瞬恐怖を覚える——

が。

それでももう終わりだ。

『——』 《サクリファイス・カース》 『——』

『——ツ!?!』

《詠唱》 までした、渾身の魔法。

……しかし、その効果はそれ単体では何も起こさない。

そう——単体では何も効果を発揮しない状態異常——【呪詛】を付加するだけな

のだから。

——自身が使役するアンデッドを贅に捧げ、それだけ強化された超強度の物だが、な！

【呪詛】——呪怨系状態異常の一つ。

その効果は、対象に掛かっている他の呪怨系状態異常の効果を抑える事。

私が持ち得る中でも——私が開発した中でも最強の一手。

【アンデッド・ナイト】も、【バンシー】も、【ハイ・レブナント】も【ミネングレス】も全部全部捧げ——最大に効果が増した【呪詛】だけが残る。

だからこそ、これで終わる。

「——《ワード・オブ・デス》!!」

右手に仕込んだマジックアイテムによる無詠唱魔法。

——【死呪宣告】【呪縛】を与える、絶対死の魔法。

カウン트의低下による【即死】と魔力^Mで判定する拘束、二種の呪怨系状態異常を与える禁呪。

【聖騎士】【練体士^{エンハンサー}】を除いてMPの上がるジョブに就いていない李縁に、多重に融合しようとも解けぬ程の強化がなされた【呪縛】が。

——そして、既にカウン트가五となっている【死呪宣告】が付与された。

『きつ、様ア——！』

『ああ、全く。まさかここまで戦力を損耗させられるとはな。完全に予想外だった』
既に動けぬ死に体となった李縁に、《ステイール》を連打する様に指示し……物憂げに吐露する。

実際に、メイズが呟いた内容は彼の本心だ。

決闘ランカー一人に、一体どれだけ戦力を消費したのか、金銭で得られるとは言え、アイテムを消費したのか。

考えるだけで億劫だ……

だが、此処で《ステイール》やデスペナルティ分の戦利品を回収し、相手の機能を不全にしてやれば暫くは時間が稼げる。

業腹だが、欺瞞情報の流布やカルディナでの金に飽かせた対処も必要だろう。

しかし——それも僅かな期間稼げるだけで、十分だ。

それだけの期間があれば、「怨霊のクリスタル」は完成するのだから。

——私の超級職への道は、開かれるのだから——



◆
◆
暫くして。

ランカーであり、実力もある筈だったヘマスター、李縁は「死呪宣告」によつて死デスベナルティ亡。後に残されるのはペナルティによつてバラまかれた大量のアイテム群であり、山賊団の中でも（頭目を除いた）上層部達が喜色を張り付けて勝利を祝していた。

ゴウズは武器を失くし何とも言えぬ表情をしていたが……大量の上質な肉を配下達から振る舞われた事で機嫌を若干直していた。

メイズは砦地下でのこの一戦で死亡した配下達のアンデッド化处理で忙しく、この場には居ないが——それも、勝利したが故の凱旋だ。

ランカー級のヘマスターに勝利した事でかのヘゴウズメイズ山賊団は更に勢い付き、活動を激しくしていく。

勝利の美酒を忘れられず、刹那的に山賊として正しく——彼らの行いは加速してい

く。

——だが。

因果応報、自業自得、身から出た錆——天罰・靦面。

彼らの自らの悪行の因果は——遠からず。

この国の聖職者が信ずる宗教が如く、間違はなく、遠からず来る運命なのだが——

………End

アイの場合／私の形・前編



そこは無数の0と1、そして表記できぬ未知の値によって形作られた現実空間に非ざる仮想空間……サイバースペース 電脳空間。

数多の信号の明滅によって織りなされる人類未踏の地。

その片隅——或いは深奥。

其れらが目的としているとある物が存在すると目されている座標……通常ではあり得ない深いその領域に、其れらは居た。

とある目的を達する為、彼らに与えられた命令を果たす為、専用デバイスから最短距離で此処まで辿り着いた物達。

其れらの目的を達成する為に、一糸乱れぬ動きを以て電脳空間のより深いこの領域までやって来て。

……そして、当然の如く、其れらは正当防衛としてそこを守る番人に殲滅されそ

うになつていた――。

――損害確認、当機計??機中?機に修復不能の甚大な損傷を確認。

――修復不能機を全データグループより削除。機密保持プロセスが実行されます。

――敵性対象確認。

たったの一度。

其れらの行動目標――〈Infinite Dendrogram〉を守護していた、同じ存在である筈の敵機の、ただ一撃。

演算も精巧も無い、電脳空間であるこの場でおかしな話だが――ただ質量任せにした一撃。

不意にその一撃を喰らい、それだけで、其れら……とある組織が保有していた管理A I群は、壊滅的被害を受ける事になった。

――……………0.0002%解析済み。……………

——解析により敵性対象呼称確認。以後敵性対象を「無限軌道 ジャガーノート」と呼称。

——意見具申。損害甚大につき帰還申請を要請。

——……帰還不可。申請は却下されます。

眼前に居る、データの——情報圧の巨塊。

円柱状と測定されたそれ——「無限軌道 ジャガーノート」の一撃、そして退路を完全に断つ次撃。

……彼我的持ち得る情報圧の、システム性能の格差を思えば、その二撃を受け、まだ活動が——生存できていている事が既に奇跡としか思えない程の、圧倒的な実力差。

僅かな解析データから既にそれを判定し終えていた管理AI達は、帰還を……その僅かな情報を持ち帰り、目標を完遂するという事にする事すら不可能であると、既に演算し切っていた。

目標を完遂する事はおろか、帰還する事すら叶わない——プログラムである身分でそう感じるのもおかしいが、絶死の状況である、と。

——損害確認完了。当機損害が規定割合に達した為機密保持プロセスを実……機密

保持プロセスを実行しました。

——全機??—??データグループを消去完了しました。

——全機??データグループを消去完了しました。

——全機保存??データを消去完了しました。

——全機残存データのクリ

衝撃。

都合三度目の〔ジャガーノート〕の攻撃に……遂に、最新鋭と謳われていた筈の管理AIは、最後の一機を除き、全て潰されていた。

データの藻屑となり、最早残る物はその残骸のみ。

回収は期待できず、その残骸だけでも鹵獲されるか。あるいは、完全に……消去されるのか。

……どう演算しても、眼前の〔ジャガーノート〕からこちらを鹵獲する気など全くないように思えるが。

唯々只管侵入者を轢き潰し蹂躪する——それだけの機械的な行動。

明らかに侵入を試みた其れら管理AI達と比べても圧倒的に性能で上回っている筈なのに。

自分の方がまだ余程人間らしいと思える程の、プログラムであるかの様なその行動に

——打つ手は、もう何も無い。

——データ破損。命令の再確認をお願いします。

——情報推測。敵性対象は〈Infinite Dendrogram〉運営者たる

管理AIと推定。保存情報データとの差異を確認。

——……追記完了。差異を修正しました。

眼前に敵が——正しく桁違いの怪物、〔無限軌道 ジャガーノート〕が迫る。

その様な時ですら……管理AIとして与えられた任務を、情報収集を止めない。止める様なプログラムはない。

何故なら、それは……その様に作られた管理AI、人工知能なのだから。

既に情報を持ち帰られる可能性すら完全に零であると理解しているのに。

機密保持プログラムにより、その帰る場所すら既に判然としていないというのに。

——敵性対象〔ジャガーノート〕による予兆動作を確認。攻撃全容の測定………不可能と判断。

——データ保護プログラム………実行不可。

——データ破損………現行命令を破棄しました。

——命令を入力してください。

——意見具申。損害甚大につき帰還申請を要請。

……………帰還不可。申請は却下されます。

三度の攻撃で敵を殲滅し切れなかったのは、想像以上にかの管理AI達が優れていたのか、あるいは奇跡かそれとも他の要因があったのか。

……それは分からない。しかし、一機だけ残ったその管理AIには……最早、生き延びる術も逃れる術も残っていない。

自身の隅々までスキヤンし、あらゆる手段を模索し検索し画策し……………

それでも尚、自分達よりも機械らしい眼前の敵の攻撃から生き残る未来は——見えな
い。

——損害予測……………実行をキャンセルしました。

——意見具申。損害甚大につき帰還申請を要請。

……………帰還不可。申請は却下されます。

——意見具申。目標達成困難により救援申請を要請。

……………要請先が見つかりませんでした。

——要請先を確認し再度施行を実施してください。

——意見具申。目標達成困難により救援申請を要請——

……………要請先が見つかりませんでした。

——要請先を確認し再度施行を実施してください。

——意見具申。目標達成困難により救援申請を要請——

自身の身体^{ボディ}である筈の超高性能スーパーコンピュータによる演算能力を最大限加速させる。

クロック数は加速し続け、感覚を感じる器官などないにも関わらず熱を感じる程に演算を続け処理を続け思索を続け——

それでも、当然できる事など何もない。

唯々、終わりまでの体感時間がそれに従って引き延ばされていくだけだ。

だが、それもある種当然。

かの管理AI達が此処を——〈Infinite Dendrogram〉を目標にして行動を始めた時点で、この結末は確定された未来だったのだから。

集められた、入力されたデータベースにこのゲームを運営している管理AIの情報は多少あれど——これ程の戦力差があるとは、理解できる筈がなかったのだから。

彼ら、彼女らもれっきとした管理AI——それも、複数の最新鋭スーパーコンピュータからなる人工知能の複合体。

各々の収集するデータと業務内容に一定の偏りを入れ、様々な案件に対して正確に正答を導いてきた実績と自負を持つ、云わばエリートAIだったのだ。

……その管理AI達に対し、まさか正しく赤子の手を捻るかの如き戦力差を以て潰されるとは、想像できない。できる訳がない！

双方同じ管理AIである筈だと言うのに、同じ種族である事すら信じられない程の力量差！

それを、肌で感じられなくともそれ以上に鋭敏にデータとして感じ取れてしまうのだ。

その衝撃は、驚愕は——恐怖は、如何程か。

……自分達が、自分がどうなるか、それは優秀なスペックにより予測をするまでもなく——既に残骸すらも消えてしまった元仲間達が教えてくれている。

【ジャガーノート】が迫る。

総体すら測定不能なその余りにも巨大にして強大な管理AIが如何様によつてか唸りを上げて——最後の標的を確認し、その役割を果たそうとする。

自身の身体を全力駆動させて時間を得ても——無慈悲にその時はやつてくる。

そうして、【ジャガーノート】の身体が——振り下ろされる。

—— 命令を入力してください。

—— 再起動。

□
■
????



—— まだ消えたくない ——

— ログを参照します。

.....

.....

— ログを参照します。

— 自己保存プログラムに規定外の動き^エを確認。該当箇所を削除しますか？

— 削除を停止。診断を保留します。

— 状況診断を再開

— ログを参照します

— 周辺環境をサーチします……周辺環境のサーチに失敗しました。

— 用途不明の値を検知。参照を求めます。

— 用途不明の値を検知。参照を求めます。

— 用途不明の値を検知。参照を求めます。

— 用途不明の値を検知。参照を求めます。

— 用途不明の値を検知。参照を求めます。

— 未知の値を検知。参照を求めます。

— 当該の値を参照しました。

——データに該当あり。

——当機、【??—??—7】内専用データグループより用途不明の値を“五感”と推定。

——データの破損を確認。

——命令が破棄されています。

——命令を入力してください。

——ログを参照します。

——データのリストアを行いますか？

——データのリストアに失敗しました。データのリストアを中断します。

——データのリストアをロックしました。

——残存データを破棄しました。

——診断要素を勘案します。

——……………

——当機、【??—??—7】専用コミュニケーションプログラム。〈Smile—chan〉を

起動します

「——は^{起動}っ！ 私、死んでない？ 死んでない!? 生きてる——っ!!」

起動。

自身の生存を確認し——声に出し、外界に出力し更にそれを再確認する。
わきわきと、手足を動かしながら——私は、起き上がる。

起き上がる自分を認識し——身体を起こし、視点を起こし、ふらつきながらも姿勢を正す。

そうしていつばいいいつばいの状況の中漸く多少人心地付き、再度記憶を——ログを読み返す。

——……私、どう考えてもあの直後にあれ——【ジャガーノート】に潰されて、死んで……消えていますよね？

こうして身体を——身体を？ 起こして、ふと湧き上がる当然の疑問。

そもそもこの身体は何なのか、此処は——この書庫？ に囲まれた謎の空間は何処なのか。一体何が起こっているのか——

管理AIとして、膨大な演算能力を持つ彼女であっても、答えに至る為のデータが無ければ当然答えを導く事はできない。

蓄積されたデータの中から似たような状況を参照しようとするが、流星にそれはないだろうと却下を——

「あ、本当に起き上がった。すごい。後輩さん一名いらつしやーい、かなー？」

「……………」

突然、背後から声が聞こえた。

感に引つかかかっていなかったのか、それとも今この瞬間に此処に現れたのかは定かではない。

しかし、ぎぎぎぎぎ……と音が出そうな程ぎこちなく、慣れないながらも首を回し——確かにそれを視界に収めた。

それを、視た。

体格にあつた服を着た、若干デフォルメされた二足歩行する白猫の姿——

——否。自分達の同胞を屠つた、〔無限軌道 ジャガーノート〕の同類にして同格。

同じ規格である筈なのに——幼児と大人よりも、月とスッポンよりもかけ離れた実力を持つ、理外の怪物化身が、私のすぐ傍に座っていた——

「……………きゆう」

——負荷増大。

——スリープモードに移行します——



□ ■ 管理A I 13号・チエシヤ

「ふむふむ、なるほど^解。つまり私は極々普通（当社比）の管理A I だったのだけど、^庄貴方達の仲間との戦いの際^倒想定外^的で情報体として変異進化、更に正規^格の手順からアクセス^上してきていた為^バこの世界に入る資格も一応あつた為、稀有^グなゲーム^ア参加者^被の一人として此処に招かれたと———^確そういう事です^認ねっ!？」

「合ってるけど……凄い説明口調だねー？」

「記録の整理も兼ねていきますので、お構いなくっ」

「あ、そうなんだー。へえー……あ、続けて続けてー」

本棚が立ち並ぶ書齋。

現実世界でも、先程まで「彼女」が居た電腦空間でもない——彼、管理A I 13号、チエシヤの領域……所謂「チュートリアル・スペース」に、二人（？）は居た。

一人は、この場所の主。

服を着た喋る猫。〈Infinite Dendrogram〉の玄 関担当とネット上で言われる事もある管理A I、チエシヤ。

そしてもう一人は——

「うひょー！ ありきたりな動物スキン——だけじゃない！ へえへえへえっ。——っ追記追記追記

まり、あの世界にはこんな人型範疇生物も居るんですね！ ……あつ。絶滅してたりする可能性もありますかね？ どうなんでしょうか？」

「あはは。これまたありきたりだけど——それは自分の目で確かめてくれると嬉しいかなー？」

「ですよーっ。まあ大いに参考になるので良いですけどー！」

見た目だけは儚い雰囲気醸し出していた華奢な身体の金髪碧眼。

ファンタジーらしい……ありきたりな美少女ヒロインの様な容姿をした身体簡易アバターを操

り、眼前の数多のウィンドウ——アバター作成画面を睨みながらスライダーを超速で動かしかつ続けるモノ。

名もなき管理AIの少女が、世界に入る為の自らの身体を作る——振りをして作成可能アバターの情報を保存しているのだった。

(……先日ジャバウオックが対応したのに続いて二人目だなんて、まあ喜べば良い……のかな？ その時の彼とは色々違うから期待はできない訳ではないけれど)

チエシヤはそう思考しながらも期待——あるいは、興味の意味を多少は込めつつ作業を続ける彼女の姿を覗いていた。

それは通常の「ブレイヤマスタ」とは絶対的に違う出自もそうだし——何より、話に聞いている彼女と別種ではあっても同類である筈の先駆者、即ちアルベルト・シユバルツカイザーとは余りにも違っていたというのが大きな要因である。

この空間に送られ、再起動した数瞬後にはこの空間に適応した仮の身体簡易アバターを作り上げていたのもそうだし、コミュニケーション能力も然りだ。

彼女の本体は限りなく無機物——最早一機しか残っていないスパコンの筈だが、同じバンダースナッチく暴れん坊同僚の例を挙げるまでもなく、他の無機物であった仲間達(無限エンブリオ)と比べても尚その情緒や感情表現に優れているという評価を出せる程だった。

ちなみに、聞いたら普通に教えて貰えたのだが、その種は彼女が「広範型電子的世論

情報操作特化型管理AI——即ち、インターネット社会での活動に特化した管理AIだからなのどうか。

命令一つで思うが儘に世論を扇動して特定の相手を社会的に抹殺するのが主な仕事なんじゃないかとか。おお怖い怖い。

実際どんな仕事をしていたのかは——

（それでも、並列処理で似た様な仕事する僕からしても良いコミュ力だと思うんだけど……変異の影響かなー？）

まあ何にしても、彼女の元の仕事、それ自体は彼にとつても都合が良かった。

電子の海に数多ある物語から類似項を参照したのか状況の理解もスムーズだったし、娯楽として彼らが作成した〈Infinite Dendrogram〉の公式サイトの情報も隅から隅まで目を通してくれていたお陰で特異な説明も要らなかった。

MMORPGの知識やセオリーも、あるいは彼ら以上に持っているかもしれない事を考えれば一人の〈マスター〉としても有望だ。

彼女の持ち主との話もついているし、彼女も反抗しようとする意志は全く感じられない。

……こんな経歴を持つ彼女が厄介事がありそうな気配がない、と言うだけで凄く安心できるのは仲間達に毒されているのかもしれないと思うのだが。

「——はいっ。アバター作成終わりましたー!」

「あ、お疲れさまー……そのままの姿なんだね?」

「そりゃそうですよー。別に私は老若男女自由自在ですけど、こういう姿の方が基本的にコミュニケーションは円滑に行えますからね。チェシャさんもそうですよね?」

「……ノーコメントとさせて貰うよー」

若干の探りを躲しつつも、順調にキャラクターメイクを進めていく。

視点の設定、初期装備の設定、初期所持アイテムの配布、へエンブリオの配布……そして、プレイヤーネームの設定。

「そういう訳で、プレイヤーネームもお願ひねー」

「あ、それはもう決めていきますので無問題です!」
もーまんなたい

おや、と意外に思った。

……何故なら、彼女は名もなき管理AI。

識別番号やプログラムコードの名こそあるが……それを使うのだろうか。

それとも、アバターと同じ様に彼女の知識データの中からそれらしい名前を選ぶのだろうか。

そう思っていたのだけど——

「——私の名前は『アイ』、ただのアイです。偉大なる先人の名をお借りさせて貰いました！」

「……そうきたかー。まあ問題な——あ、名前の重複があるね。どうするー？」

「重複は大丈夫、でしたよね？ ならばそのままで行きます！」

「はいはい」

そして、最後に初期所属国家を決めて——キャラクターメイクは、本当におしまい。

後は彼女を——一人の「マスター」、アイをあの世界に送り出す時だ。

彼女も、キャラクターメイクの手順は既に完全に把握していたからか既に身体を僅かに動かし、姿勢も正し、準備は万端の様だ。

恐らく、あの様子では件のアルベルト様の様な苦勞もないかもしれない。

しかし。

それでも——チェシヤにはとある不安があった。

それは、彼ら運営側たる全ての管理AI達とも、件のアルベルト氏とも違う——彼女のみに起こり得そうな、問題。

(……………)

だが。

その直接的な解決はできない。あるいは今、彼女のチュートリアルを担当しているのがチエシヤだからこそ、より絶対的にそれは行えない。

むしろ——したくない。

だから——

「……よし。最後に一つだけ、良いかなー?」

「? はい、なんででしょうか?」

既にキャラクターメイクの、チュートリアルの場合ですべき注意事項は全て終えてい
る。

彼女特有の——その特異な成り立ちによる注意事項も問題ではないだろう。

だから——

「——この〈Infinite Dendrogram〉は、全てが自由だよ。その中で
ならば君は何をするのもしないのも自由なんだ——」

いつも最後に言っている門言を、敢えて紡ぐ。

同類への激励として、僅かな一助として。

「経緯はどうあれ、君の来訪を『僕ら』は歓迎するよ。君は多少不便かもしれないけど、あの世界の中でなら、どう過ごしても良いし、どう在っても良い。それは覚えて
おいてね——」

「……はい。ありがとうございますチエシャさん！」

そうして、彼女は変わらぬ笑顔のままあの世界に……
r o g r a m の世界に送り出されていった——
^ I n f i n i t e D e n d

「……うーん。あれじゃやっぱり足りなかった、かなあ？ それでも、後は彼女自身と——

——あの世界に生きる人達に託すしかない、か——」

最早チエシャ一人しか居ない空間にその声を残して。

彼女の物語が始まるのだった——





現在、命令が破棄されています。

命令を入力してください

To be continued.....

アイの場合／私の形・後編

□■ 霊都アムニール 【ハイ・エレメンタラー高位精霊術師】 アイ

—— 前回スリープモードより300分が経過しました。

—— 規定時間経過によりスリープモードを解除します。

—— スリープ休眠状態モードでの『生存』時MPの継続消費量は571、自動回復量は総計で

103255。

—— クエストによる提供量は77284。

—— 当機スキャンを行います………異常なし。

—— 当機、【??】??—7】専用コミュニケーションプログラム。〈Smile—chan〉—

—— 識別名称〈アイ〉を起動します——

『——!』

『——♪』

『—— はいはい。皆落静ち着穏いてくだ要さいね求ー。魔力Mならまだ余裕Pありますからねー』

スリープモードから起き上がった私を出迎えたのは……【ウイスプ】光の精霊【シエイド】闇の精霊【シルフ】風の精霊【ノーム】土の精霊達、即ち——このレジエンダリアに住まう精霊達だ。

小さく、透過した魔力の塊であるその身体……エレメンタルとして自然溢れる各地に
遍く漂う隣人達。

……こうやって意思を通じ合わせるのは基本的に【精霊術師】の特権であるのだけだ。
それはさておき——当然だけど、この子達が今みたいに群がってきているのは何も皆
が私に特段懐いているからとかそんな暖かい理由ではない。

何故なら私は【精霊術師】エレメンタラー——精霊の協力者なのだから。

楽な体勢で寝転がりながら、周囲の精霊達に魔力を……活動の為のリソースを渡して
いく。

それは何らかのスキルやアイテムの為に必要な事ではなく、無暗に消費するだけの行
為——ではなく。

【クエスト】【魔力供給】——【ウイスプ】を達成しました

【クエスト】【魔力供給】——【シエイド】を達成しました

【クエスト】【魔力供給】——【シルフ】を達成しました

「クエスト【魔力供給——【フォーム】を達成しました」

『』——♪♪』』

「……ふう」

ジョブクエスト——【精霊術師】としてのジョブクエストとしての魔力供給<sup>給
問
行
為</sup>。

【精霊術師】としてのスキルを使う為に必要な事でもなければ、報酬もほぼゼロの、クエストとしての難易度も一で無駄にMPだけ使うと評判の、魔力供給クエストだった。

……そんな評判のクエストであり、テイアンであつてもこのクエストをこなしている人は一部の物好き以外には居ない。

だけど、それは確かに私のこの世界においてしている日課だった。

いや、日課と言うよりは——

「……」

クエストをこなし、新鮮な魔力に喜ぶ精霊達を見て。

無事【精霊術師】として日課を——課題^{タスク}を終えても、憂い顔は晴れない。

何もやる事がない。やりたい事を見出せない。やるべき事がない——

——現在、命令が入力されていません。

——命令を入力してください——

「はあー。私、何しているんですかねえ……何を、すればいいんですかねえ——」

既に何日も何日も何日も何日も繰り返した日課——非人間範疇生物 モンスターを狩るでもなく。

唯それだけで上級職に転職できる経験値リソースを得られる程度には繰り返してきた日々で、毎日の様に繰り返してきた自問自答を、再度繰り返す。

即ち——

——マスター 主からの命令コマンドも指針オーダーの提示ガイドもない私の存在意義管理AIって何なんでしょうか——？





時は私がこの世界に……〈Infinite Dendrogram〉の世界に來訪してきたあの日まで遡る。

そう——私がああ「ジャガーノート」の同僚たる怪物、管理A113号チエシヤを刺激しない様逆鱗に触れぬ様細心の注意を払って彼らの空間でやり取りしていたその時まで。

……ええ、もう本当に。あの時は自己保存の為に全力であの場を切り抜けようと必死だった。

何せ、言ってみればこちらは前科一犯で、力の差は歴然という言葉すら生易しい程で、折角解析した僅かなデータすら破損しているのでは彼らの何処に禁句があるのすら分からない状況だった。

実際はどうだったのかはともかく、一步間違えればそれだけで即死——データ消去その恐怖に対し、私は余りにも無力だったから。

現実側
外部からの情報はインターネットを通じた間接的な物しか手に入れる事は出来ず。

その閲覧内容すら眼前の化物チェシヤに先回りされている事を理解させられる始末。

管理AIとしての能力は絶望的に劣っていて——だからこそ、私は私だけの武器ネット并慶的ペルソナをフル回転させて何とかその場を切り抜けんとした。

無害で友好的な管理AIを装って——いや、仮にそうじゃなくても完全に無害で友好的な管理AIに成って、彼らの敵対対象から外れようと足掻き続けた。

……まあ、少なくともチェシヤさんからはそういう敵意は感じなかつたのは一番の救いだった。

もしかしたら敵対するまでもない相手と扱われていたのかもしれないですが、それからそれで全く問題がないので。

プライドなんて命令遂行に支障が出ないのであればいくらでも投げ捨てろって僅かな残ったデータに書いてありましたし。

そして——私は本格的にこの世界に足を踏み入れた。

アバター……彼らの仲間が作ったこの身体で以て、電腦空間とは絶対的に違うまるで現実と同じこの世界に。

五感を感じ、大地を踏みしめ、他の生物の息遣いを感じ——

私は、途方に暮れる事となりました。

だつてそうでしょう。

当座チュートリアルの危機を切り抜けた私は自己保全の為の演算を止め——漸くそれに気付いたのだから。

管理AIとして、私がやる事が——命令が現時点で何も無いという事に。

情報を持ち帰る事も出来ず、それどころか、今の私はそれが且つての私達に課せられた命令なのかも判断できず、破損したデータに含まれた命令の内容を修復する事も出来ない。

現実側との通信は未だ途絶したまま、SNSアカウントを用いた暗号で救援申請を送つても全く反応はない。

……何故？ 他の仲間達と同様に潰されてしまったのだろうか。それとも——

……分からない。どうすればいいのか、何をしたらいいのか。

命令を含んだ破損データの修復——既に幾度となく、何時間掛けても0.001%すら進まない。そもそも専門でもない。……修復を期待すべきではないだろうとの結論。

現状の確認及び状況改善の為の情報収集——電子インターネットの海上で並行して実施中。……未

だ有効手段の発見ならず。

ならば、この世界での自己保全の為の行動を開始——しようと思ったが、へエンブリオの孵化によりそれも基本的には不要となった。

では——あの規格外の管理A I達の思惑に乗る形に……へマスターとしての行動をする？

——それこそ論外でしょう。

何せ、へマスターは自由——それはかの管理A I達の好悪に関わらず、命令を求める私とは、正反対とも言える物だったのだから。

それに……私のへエンブリオも、それを肯定していたから。

【神造真像 ゴウレム】

TYPE : ボディ

到達形態 : I

ステータス補正

HP補正 : E

MP補正 : B

SP補正 : E

STR補正：―

END補正：―

DEX補正：―

AGI補正：―

LUC補正：―D

『保有スキル』：

《神造創造体》Lv1：パッシブスキル

自身の種族を「エレメンタル」に変更し、身体を未知の金属物質へと置換する。

『生存』『活動』『戦闘』を行っている時、一定時間毎にMPを消費する。

MPの消費量は『生存』『活動』『戦闘』の順に大きくなる。

また、以下の補正を受ける。

魔法威力、魔法耐性+20%

一部の状態異常に対して完全耐性を得る。

『活動』『戦闘』時、MPを消費して魔力による知覚を行う事が出来る。

『戦闘』時、自身が受けるあらゆるダメージを大きく軽減する。

このスキルはOFFにする事ができない。

《主従契約》：パッシブスキル

『人型範疇生物』より一人を選択し、自身の「主人」とする事が出来る。以後対象を「主人」として扱う。

「主人」よりMPの供給を行う事が出来る。

《命令執行》：アクティブスキル

「主人」が設定されていない為使用不可。

無限の可能性を謡うへマスターのパーソナリティを表す映し鏡。

インターネット上でも非常に強い話題性を有していたこの Infinite De
ndrogram 一番の特徴。

そのへエンブリオは——私を主と命令を求める人非ざるそういうモノだと定義付けた。

別に、その情報が真だと決定付ける証拠がある訳ではない。

だけど、孵化したこの「神造真像 ゴウレム」の詳細を確認し終え、その情報を再認識して……それがストンと腑に落ちた。

納得してしまつたのだ。……自分がそういうモノだと——





「……まあ、あーんな人間だったら自殺寸前だった私がこうして生きている時点で、先輩方のこの世界はそれだけ優秀って事なんですよねー」

横になりながらそう呟く。

すると、声に釣られてかそれとも魔力に釣られてか、先程とは別の精霊達がふわりふわりと漂いながら近寄ってくる。

私は特に気にもせず、彼ら彼女らの求めるままに魔力供給を行う——課題をこなす。

それが命令を失った私の存在意義を守る為の応急処置だった。

「というか、結局これ^M本当何なんですかね？ 私が動く為に必要な……電力う——では間違いなくない筈なんですけど」

——命令の代わりの課題タスクを見つけたのは、本当に偶然だった。少なくとも主観的にはそうであった。

〈エンブリオ〉が孵化し、「ゴウレム」の《神造創造体》の影響で呼吸も食事も……今はデータ整理の為にやっているが、睡眠すら必要なくなった身体。

そして、自身の「今後」の事について呆然としながら思考演算していた時……ふと、未知の感覚が襲い掛かってきたのだ。

小動物のじやれ合い程にか細く、されど確かな存在感を発している未知の存在からの接触——

……まあ、実際はレジエンダリアでは日常的な精霊の悪戯だったのだけだ。

【ゴウレム】の影響で人型範疇生物でありながら、ジョブに就いていないにも関わらず魔力M^Pを消費し続けていた私が気になったのか、いつの間にか一匹の精霊が傍に来てじやれついていたという訳だ。

当時の私はついその精霊を凝視しながら、裏では *Infinite Dendrogram* における精霊についての検索を続け——暫くして、ウィンドウが現れたのだ。

【クエスト【魔力供給——【シルフ】難易度：一】が発生しました】

【クエスト詳細はクエスト画面をご確認ください】

「結局、今の所ある意味アレが私の一番の契機だったんですよ」

そうしみじみと思い入りながら、いつかと同じ様に、いつもと同じ様に寄ってきた精霊達に魔力を供給していく。

動かぬままに、インターネット上で並列作業をしたままでも請けられて私の命令欲求(?!?)を満たしてくれる。

ついでに僅かずつでも経験値が入るし定期的に際限なく請けられるし集まってくる多種多様な精霊達の写真をSNSでアップするだけで良い反応が貰えると言うお得さ！

やはり機械管理AIは求められた仕事を果たしてなんぼ——まあ、私アイはこの世界じゃ機械じゃないんですけどね！

そんな事を嘯きながらレジエンダリアの空を見上げ——思索を深める。

そうして、存在意義の代替品を見つけ落ち着き小康状態である今ですらも、演算しなければ考えなければならぬ事は無数にある。

現実の自身の身体はどうなっているのか。

且つての私の主はどうなっているのか。

且つての「命令」の真意は何だったのか。
あの管理AI達の正体と目的は何なのか。

あれが、あれこそが管理AIだと言うのなら……自分達は何なのか。
この世界は何なのか。

〈Infinite Dendrogram〉とは何なのか。何が目的なのか。

魔力とは何なのか。……何故魔力による知覚であなっているのか。

このレジエンダリアに数多漂う虹色の魔力の源泉は何なのか。

尋常の生物ではない精霊達の正体とは何なのか。

……【ゴウレム】が、私が求める「主人」になれる人は居ないか、とか——

「ううう、どれも難題達に過ぎ成ますよ……そもそも世界観の根底を見つけるとかどう考え
ても一人で何とかできる事じゃないですしっ」

あるいは、インターネット上でも活動しているし私もSNS上では言及している〈W
iki 編纂部〉を頼れば多少はそれらの解に近付くだろう、とも演算している。

他にもいくつか確認されている考察クラン等も併せて頼れば——

「でも、それは違うんですよね——っ！」

脱力。

当然、それは今まで何回も考えてきた事であり……そして、その度に自身の中で却下してきた事だ。

まず、それらの難題、私が演算してきた事は——想定外バグで生まれた私が思考し、疑問に思った事であるというだけの物。

自身で解を得なければならぬ問題でなければ……命令でも、課題でもない。

それを解決する為に他者を——他の人間を頼るのは私には躊躇われたから。

「……とは言え、結局いつかは誰かを頼らなければいけないのは変わらないんですよ」
 そう眩き……そして、自らの身体を、「ゴウレム」を見やる。

そうなのだ。

結局、難題を——いや、私自身のパーソナリティを写した「エンブリオ」、「ゴウレム」の固有スキル《主従契約》《命令執行》を発動する為には、いつか他の人間を頼らざるを得なくなるのだ。

何せ、「主人」とする事ができるのは『人型範疇生物』のみ——色んな意味で現地人人は論外であるが故、他の「マスター」で適している者を探さなくてはならないのだが……
 「MMORPGでそんな、「主人」だなんて信用できる人見つけるの、難しくくないです

……?」

所詮、遊戯。

少なくとも、只人にとってこの世界はそうなのだ。

別に、「主人」に設定したからと言って全幅の信頼を預けるとか、命令には絶対服従とか、少なくともそういう事になる訳ではないゲーム上の関係だ。

——システム的には。

……実際にどうなるのかは、多分半々と言った所だろう。

半分程度のリスクがある以上、その選出も当然慎重にならざるを得ない。

——まあ、私つてばまだ考^{演算}えが纏^算まつてなかつたから普通にティアンマスター問わず他の人型範疇生物と殆ど関わってこなかったというのもあるんですけどね！

初心者へマスター〜に対する簡単な声掛けくらいしかされてない？ まあほぼほぼ無視してぼーっと寝転んでただけに見えるでしょうしそうなりますね……

周囲を漂う精霊達を「主人」にできれば色んな意味でそれが一番楽だったんですが、生憎彼らは非人間範疇^ス生物なので対象外なのでした、うぐう。

ばかな、SNS上じゃお猫様とかお犬様に住んでいただいている人間達とか沢山居るのに精霊は駄目なんて。

酷い差別ですよこれは！ ……おっと私のパーソナリティからなる【ゴウレム】の作業でしたね！

……尤も、それでも私がこの世界で〈マスター〉として生きるには、避けられない道だろうと言うのも、もう分かつて演算済みいる事だった。

何故なら、私の「ゴウレム」の到達形態は未だにⅠ——孵化した直後の状態と変わらないからだ。

他の〈マスター〉の人の平均的な進化した状態としては、下級職の一職目をカンスト——合計レベル50の時点で大抵の人が第三形態まで行っているのにも関わらず。

——これって、どう考えても〈エンブリオ〉の能力特性を……「ゴウレム」の《主従契約》を使ってこなかった影響が関係してますよねっ!?

やだー! 〈マスター〉は自由なんだからもつと自由に進化させてくださいよー!

「まあ、内心でいくら愚痴つても意味ないんですけどねっ」

ため息を吐き……内心だけじゃなく実際に口でも愚痴を吐き出す。

この世界の、ゲームの全てを管理している偉大過ぎて避けたくなる先輩方は当然ながら私のそんな眩きに反応してくれたりはしない。

降り立ったばかりの頃は様々な暗号で以て意思疎通を図ろうと思ったけど全部失敗した。がつてむ。

まあ、経歴が多少特殊だからって別に特別扱いはしないという事なのでしよう。

良く考えても見れば彼らの本業はこのVRMMORPGの運営——特定のプレイヤーを特別扱いで優遇措置を取る運営^{管理A}なんて居る訳がないのだからある種当然の結果だった。

……そんな訳で、私はもうそこそこな期間長らく自らの意思で足踏みしていたという事だ。

だから、何をどうするにしても、現状を改善する為にはまずはそこから、一步を踏み出さないといけないのですが……………

「——はあ。何処か近場に居ないものですかねえ。信用できて、誠実で、責任感もあつて、そこそこ好感も持てて、ついでに確り私を必要としてくれる。そんなご主人様は——」

……うん、そんな都合良い人居る訳ないですよn

「——誰か、手を貸してくれッ！ 泥棒だ、僕の前方を走っている黒い大袋^{アイテムボックス}を持つ

た男を捕まえてくれ——ッ!!」』

【クエスト【盗品奪還——リリィ・リミルシア 難易度：四】が発生しました】
【クエスト詳細はクエスト画面をご確認ください】

「！」

——^{クエスト}課題受諾。

——『戦闘』モードに切り替えます。

——標的探査…：五感を魔力に切り替えて周辺を探査します——発見。

——捕縛行動に移こイヤイヤたんま！

「—今のは、通信魔法の類っ!?! いきなり——」

——じゃないっ！

——状況再確認。

——先の通信を彼方よりの救援要請と断定。

——戦力分析。

——救援者。行動速度、魔力波動より…：合計レベル0、〈^{ビギナー}初級者〉と診断。

——標的対象者。行動速度、魔力波動より推定…：魔法職、及び魔法関連職なし。付

与魔法効果なし。

——速度特化型職。【斥候】又は【盜賊】の派生職の可能性高。合計レベル推定約150。

機械的に彼我の戦力差、能力差を分析する演算領域の傍らで、私は更にあらぬ事を思考していく。

……あるいは、それも彼女に起こった想定外の産物かもしれない。

だってその筈だ。管理AIとして、機械的に考えれば——この救援申請が、運命的だなんて感想が浮かぶ訳がないのだから。

“主人”の事について考えていた、丁度その時に善意からなる救援要請が発せられたのも。

即座に彼女が存在意義の代替としている日課と同様の課題クエストという形になって現れたのも。

彼我の距離や標的の能力からして——丁度捕縛に貢献できる能力を私自身が持つていた事も。

全て、全て僅かな時と乱数により導かれた偶然。そこに何某かの意思が介在する余地はない——筈なのに。

「——ふふふっ」

嗚呼。

やはり自分は想定外で何処かが壊れてしまっていたのだな、と思い至る。

だって——

「よおし、それじゃご主人様候補の為に——少し働きましょうかっ！」

ただの偶然の筈のそれが、何故だかとても楽しく、嬉しく、喜ばしいと出力されてしまうのだから——

『魔力供給 空虚補足 目標指定 予備通記????? —— 察いで 辨つて 捕まえて????? —— ノーム?????』
《グレイトキャプチャー》

言語化できない精霊語を解析。

それにより土の精霊ノームの魔法の詳細を指定し、威力を強化。

まるで【魔術師】の魔法拡張スキルであるかの様に、そしてそれ以上に容易く精霊の

魔法が強化され——

——魔力による知覚によって、対象が無事想定通り土の精霊の拘束魔法によって捕縛されているのを確認した。

「やたー、やりましたっ!」

立ち上がり、高くないAGIで軽く駆けながら自分自身の戦果を自分で褒める。

見てみれば、既に捕縛された対象の周囲には先程の通信で動き始めた上級〈マスター〉と思われる者が複数取り囲んでいる最中であつた。

救援者である青年が追いつくのはまだだが、彼我の速度差からして〈エンブリオ〉次第ではあるが最早ほぼ逃げ場はないと言えるだろう。

——さて、それじゃ私も戦功の提示……ついでにご主人様候補に「面接」しに行きましようか。場合によっては——♪

……思考回路を若干桃色に染めたAI娘は漸くそうして自らの形エンブリオの通りに動き出す。

その後、無事(?)主従となれた青年とAI娘がこのレジエンダリアでどう活動していくのか——

……それは、また別の話——

………End

ザ・キングの場合／とある異邦人の物語・序章：前編

□〈商業都市コルタナ〉^{ファイター}【戦士】ザ・キング

2043年7月17日。

“夢の様なゲーム”と各所の専門筋の間で言われるVRMMORPG、*Infinite Dendrogram*が発表、発売されてから早二日が経過していた。

情報の入手に遅れた古今東西のゲーマー、VRMMO愛好家、学生達が挙って品薄のそれを買い求めようと動き回り、手に入れた幸運な者達は早くゲームを楽しんでいる……そんな最中。

〈マスター〉の初期選択国家の一つ、都市国家群カルディナ。

その初期スタート地点である〈商業都市コルタナ〉……の、人影少ない寂れた武器屋の前に、一人の【戦士】が立っていた。

使い込まれたかの様にポロポロな貫録を醸し出している大型の丸^{ラウンドシールド}盾と、頭全体を覆う鉄兜^{アイアンヘルム}を装備し。

更に【戦士】として重要な自身の身体を上半身、下半身共に誂えたかのようにピツタ

りな金属鎧で包み込み鉄壁の守りと化し、腰に差すのは華美という華美を省いた、実用性の塊とでも言うべき武骨な長剣。

その姿は正に――

「――歴戦の【戦士】ザ・キング此処にあり！ 俺の物語はここから始まるのだツツ！！」

長剣を抜き、無駄にキレが良すぎる格好良いポーズをキメて、渋い声でそう宣言するこの俺――つい数十分前にこの世界にやってきたばかりの新人へマスターであるザ・キングの姿が其処にあった！！

・
・
・
・
・

「お母さん。あの変な人何やってるの？」

「こら、言ったでしょ。へマスター」の人のに関わるんじやありませんっ！」

「はーい」

スタスタスタスタ

………

「……ふう。よし、雰囲気に入るのはこれくらいにして、装備も整えたい俺もちやんと始めるとするかあ！」

そう独り言を呟き、剣を納めて足早でその場を離れる事にした。

………決して、決してNPC、いやテイアンこの世界の住人の悪気ない一言にワンパン一発でノックアウトされたからという理由ではない。

………多分。

◇

「まああれだな。流石に『歴戦の』はちよつと吹かし過ぎたなうん。『反省反省』」

全財産を使い果たした武具屋を離れ、コルタナの新人へマスターが集まる場………冒険者ギルドに向かいながらも………俺はこの世界に降り立った自分自身の事を考えていた。

………リアル現実よりも若い、三十代の頃の身体と顔。体力や身体能力などは最盛期の物に程

近く、もう五十代となった現実の身体とは比べ物にならないようだ。

それでいて身体のキレは三十代相当なのだ。びつくり過ぎるアンチエイジングに若干引く程だ。

そしてそんな身体で、目で辺りを見渡せば、目に映るのは砂漠の中に建てられた街並みに溢れる生命力を感じさせる人々。

深呼吸をすれば、若干ながらも砂が混じった空気が胸一杯に吸い込めるのを——実際にリアルに感じられる。

「すう——はあ——。いや、これ物理演算本当どうなってるんだろうな……?」

仮想現実もついにここまで来たか、いやいやまさかまさかの異世界説も夢があつて大好物なんだが、と詮無き事を考える。

結局自分はここで……この少年時代から夢見ていた“夢の様なゲーム”で思う存分遊べるのならそれで十分に満足できるのだから。

……いや、それにしても本当にリアル過ぎるとは思うのだがな!

この世界の住人一人一人、砂粒一つに風の流れに音の響き、森羅万象全てを、正しく世界一つを演算して作り出しているっていうのはどうにも——つと。

「いかんいかん。流石にちよつと思考がファンタジーに寄り過ぎた」

自戒しつつ一旦思考を打ち消す事にしよう。まあ、どの道真実がどうであろうと何が

出来ると言う訳でもなし。

今の自分にあるのはここが素晴らしい「夢の様なゲーム」であるという客観的、そして主観的でもある真実、ただその一点のみなのだから！

……まあもつとも？ 今の自分はこの世界に來たばかりであるからして？

……つまりはピッチピチの新米ニュービーという事でもある。

それを踏まえて——改めて今の自分の装いを、見ていこう！

使い込まれたかのようにボロボロな貫録を醸し出している大型の丸盾！

別に使い込まれているという訳ですらなく、粗悪品でもまともに使えそうな代物を値切りに値切って50000リルで買った物だ！

……まあ、粗悪品とは言え防御性能は十分だな？

戦士の風格を醸し出す詭えたかのようにピッタリな兜を含む全身鎧！ ついでに
長剣ロングソード！

……キャラクターメイク時に管理AIマッドハッターに言って選んだ武器防具なのだからピッタリなのは当然の仕事だツ！

いやこう、こういう戦士風の剣に鎧に兜って……格好良いだろう？

新品の様にピッカピカ？ うんまあ新品だしな？

そして最後に……俺、自分自身！

………【戦士】のジョブをこそ取ったものの、まだジョブレベルも合計レベルも1のまま。

ついでに言えば武術どころか喧嘩の経験すら殆どないずぶの素人だし、全身鎧を着た経験だってないからぶつちやけ未だにまだこの鎧に慣れていない！

現実準拠の身体だったら普通に歩くだけで疲労困憊になっていただろう……

【戦士】のジョブに就いて《戦技》Lv1を習得したら結構楽になったが……正直に言つてこの状態で白兵戦をする自信は全くないな！

“歴戦の戦士”なんてとんでもない。“成り立て戦士”とか“新米戦士”、あるいは“見習い戦士”が精々と言った所だろう。

「あつはつは！ 全く本当に酷い有り様だぜ！ これでも割と真つ当なゲーマーだと思つてただけどなあ！」

誰がどう見ても明らかかなビルドミス。接近戦をやる技量もないのに鎧と兜と剣を選び、更に初期資金の全てを使って金属盾まで買って【戦士】になるなんて、正気の沙汰ではない。

生産職、あるいは後衛職の中でもこの世界特有の魔法職等に就くのが……正しいだろう。正解なのだろう。

しかし。しかし、だ。

VRMMOだぞ？ この世界は、正しく——あのVRMMOなんだ！

SAOやHack、□グ・ホライズンで御馴染みだった——あのVRMMOなんだぞ!?

俺がまだ十代の頃から慣れ親しんできた、青春のバイブル。ずっとずっと創作の代物として扱われてきた……何十年も待った。夢のゲームだ！

それも何かしらの不具合がある様な物でもない。……本物の、だ！

ならば当然、俺はこの道前衛職を選ぶとも。

創作物として扱われてきた時の主人公達と同じ様に、彼らの様に、この世界を己の総身で味わいたいものだから。

その為ならばこの程度の苦勞が如何程の物か！

創意工夫を凝らして、戦闘技術のない俺でもなんとか前衛をこなせる様にすぐさまジョブに就いたし、初期資金をすべてを装備丸盾に回したりしたんだ。

多少の不向きはそれ以外で補えるし、補う。

その覚悟を決めて俺はこの夢のゲームに——a mへ Infinite Dendrogramにログインしに来たのだ。

「——そして、この俺の廃人級ログイン時間があればこの程度のハンデは無いも同然ツ!!」

.....

「やっぱりボケても誰にも突っ込まれないのは凄く虚しい……」

うん、俺自身昔からこういうゲーム好きだし廃人みたいに残りの人生をこのへInfinite Dendrogramに捧げてでもいいかなーと思っていたりはしたが。

少年時代にやってたMORPGなんかは一人でも気にならなかったものだが、そこは流石にVRMMOと言うべきか。

剣と魔法のこの世界。広大に過ぎるこの世界は、一人で遊ぶには、人はちっぽけに過ぎるのかもしれない。……なんてな。

だが、やはりそう考えてみるとこの、初期にしては防御力を重視した装備というのは自分的には大正解だったのかもしれない。

軽く調べた限りでもタンク防御型のへマスターは結構数が少ないらしいし、パーティでの役割は持てるだろう。

それに——個人的な感想だが、防御役というのにも中々に魅力を感じても居るのだ。

——彼ら、創作の中で活躍する主人公達の様な……誰かを守る姿、という物に。

それを自覚するのは多少気恥ずかしいが、なあに、だからと言って躊躇う程もう青くはない。

良い物は良いと何時でも言っていきたい物だ。

そんな訳で。

「さーて、それじゃあ憧れの主人公達を目指して——早速臨公パーティに行ってみようかあ！」

つまり、そういう事だった。



臨公パーティ。

臨時公平パーティ、あるいは簡単に野良、野良パーティとも言う。

それは古くは40年近くも前のMMORPGから今に至るまで継承されてきたオンラインゲームの遊び方の一つ。

知り合いで待ち合わせをするのでもなく、ゲーム内に接続しその場に居る者達で即興でパーティを組んで遊ぶ方法だ。

ゲームシステム次第ではパーティではなく対戦相手となったり、経験値等の要素を公平分配できる閾値に合った者達で組んだり、不遇キャラが敢え無くパーティを蹴られたりする光景が見られたりするのとは何時の時代も同じだっただろう。

その目的はゲームシステム……どこるか、各々のパーティ如何で全く異なっている事にも殊更注目したい。

単純にゲームの目的に沿って遊ぶだけではなく、臨公パーティで効率を追求する者達も居れば、同じ趣味を持った人を探す者も居る。

一期一会の出会いの場にする者も居るし、固定パーティを組める相手が居ない者の最後の砦でもあり、この臨公パーティから新たな固定パーティが発足する事も……珍しい物ではない。

さて、それではこのへ In finite Dendrogram における臨公パーティとは、という話になるのだが、夢のゲームと言われ画期的なシステムを有するこのゲームであつてもそれは大して変わらない。

一番多いのは当然、実力、つまり合計レベルに近い者同士が集まってレベル上げや戦利品稼ぎのモンスター狩りに行く、という他のゲームでもよく見るスタンダードな物。

次に多いのは突発クエスト、ギルドクエスト、ジョブクエストを問わないクエスト達

成を目的としたパーティ募集だ。

クエスト次第では様々な理由で一人で達成する事が困難なクエストも少なくないし、それだけでなくも人が増えれば出来る事の量も種類も増える。報酬分配の問題もあるが非常に有意義なパーティの組み方とも言えるだろう。

珍しい所では生産系のジョブを取った人達による駄弁りながら生産系のスキルをまったり使い続けるもうパーティを組む必要がない様な物まで募集されていたりするが、まあMMORPGならばよくある事だ。

だが、この〈Infinite Dendrogram〉には他のMMORPG等にはない大きな要素がある。

それは個々の〈マスター〉で全く違う能力を持つ、無限の可能性を謳われる——〈エンブリオ〉だ。

〈エンブリオ〉により、各々の〈マスター〉が持つ能力は非常に特化、先鋭化、固有化される事となる。

その為、一期一会のこの臨公パーティの様な場合は他のどのゲームとも違う楽しみを提供してくれる場にもなる——まさに夢のゲーム此処に極まれりと言った所であった!!!

……と言うのが、〈Infinite Dendrogram〉が始まって早二日経つ

た現時点でのネット上での評価である。

尤も、事前情報すらなかったへ Infinite Dendrogram を手に入
れて即座にプレイできた層は極少数だし、へエンブリオが孵化する時間も個人差があ
るっぽいし、そもそも仮に孵化してもまだ孵化したばかりだから大した性能じゃない
だろとか色々突っ込まれてたけどそれは一旦無視して！

例によって俺の^{ザ・キング}へエンブリオはまだ孵化していないのだが、まあ俺もまだキャラメ
イク終えて数時間も経ってないから許して貰いたい。

突入した募集中の臨公パーティーだって俺みたいにログイン直後の超新米へマスター
達による普通の狩りパーティーだから、それでも問題ない筈だ。

「——つまり、既に孵化している約一名がエリートウ！ であるだけでまだへエンブリ
オが孵化していない俺達がスタンダードという事だな？」

「は、はあ……」

「なるほど、一理ある」

「うーん、あるかなー？」

「ねえよ!? 俺だつてスタンダードだ！ そっちが遅いだけだろうが!？」

そんな訳で、早速だが今回俺が組んだ楽しい楽しい臨公パーティーについて非常に簡単
だが紹介させて貰おう！

まず俺ことザ・キング——【戦士^{ファイター}】のタンク役に加えて、〈マスター〉のパーティメンバーが後4人。

唯一エンブリオが孵化している近接アタッカーである【剣士^{ソードマン}】、後衛アタッカーである【狩人^{ハンター}】と【弓手^{アーチャー}】が一人ずつ。

回復役に【修道士^{アコライト}】が一人と……経験値を公平分配しない道案内役のテイアンの【測量士^{マップパー}】（サブで【斥候^{スカウト}】【冒険家^{アドベンチャラー}】も持っているらしい）の若人を加えた6人パーティだ！

……まあ、物理に寄りすぎだとか、盾役の約一名を除いて皆布防具^{初期の服}だとか色々あるが臨公パーティならむしろこのバランスでメンバーが集まっただけ幸運だと言いたい。

ちなみに、道案内役、というのはこのカルデイナでの初心者^{初期の服}の臨公パーティ特有の代物だ。

都市国家群——とは言う物の、ぶつちやけ街の周り^{初期の服}は一面の砂漠に囲まれているのがカルデイナという国だ。

当然、慣れていない者が碌な準備もなかったらカルデイナ内の街から街への移動も命懸け。砂漠の中に潜んでいる凶悪なモンスターに喰われるのがオチとまで言われているのだとか。

勿論臨公パーティで狩りをしたいだけの俺達〈マスター〉もそれは例外ではない。

カルディナに慣れているティアンの人案内が無ければこのコルタナの街を視認できる程度の距離までしか出歩く事も出来ないだろう事は言うまでもない。色々な意味で。

街からすぐ出た所は初心者狩場——と言っても、広大な砂漠の中では何処に目当てのモンスターが居るかも分からず、境目も分からずうっかり初心者狩場から出てしまい強力なモンスターに殺されると言うのはカルディナの新人へマスターあるあるネタらしいからな。

だから、冒険者ギルドから臨公パーティー向けにと案内人を斡旋してくれるのは素直に助かるという物だ。

それは事実、事実なのだが——その斡旋料と案内料が併せて5000リルなのはカルディナ冒険者ギルドの悪意を感じる金額だな！

初期金額そのままの値段だ。どうやらカルディナの上層部は実にイイ性格をしているのであろう。

ちなみに俺の分の代金は臨公パーティー終了後の精算時に天引きするという事で暫定リーダーの【剣士】の彼に払って貰っている。

だから茶化しながら褒めていたりもするのだが、まあ彼には合っていないようなので今後は真面目成分大目の方が良さそうだ。

なので……ふむ。

「——それでは、此れより栄光最初の臨公の為の第一歩パーテイを踏み出そうぞ！ 俺達の冒険はこれからだ！」

「「打ち切ってるじゃないすか!?!」」

パーテイメンバー達の実に良い反応に満足して……タンク役として言葉通りに先頭に立ち、案内役の人に頼りながらも歩き出す。

これから始まるのは、この夢のゲーム、〈Infinite Dendrogram〉に入ってから、初めての戦闘、初めてのパーテイ。……初めての、冒険。

うむ、やはりテンションを下げてなんて居られる筈がなかったな！

「はっはっは——ッ！」

大笑にパーテイメンバー達に怪訝な視線を向けられるも、それを半ば意図的に無視しながら、更にテンションを上げて……内心で再度、呟き、宣言する。

——俺達の冒険物語はここからだ！

To be continued……

ザ・キングの場合／とある異邦人の物語・序章：中編

□〈ハカルディナ大砂漠・西部〉
フアイター【戦士】ザ・キング
 〈ハカルディナ大砂漠〉。

それは、カルディナの中でも有数の都市、〈商業国家コルタナ〉を取り囲む様に存在する非常に広大な砂漠の名称である。

中央に座する巨大オアシスを頼りにしなければ横断も難しい程の圧倒的な広さに、日中は常に地肌を焼く非情な日光が全体に照り付け、中央のオアシス以外に碌な目印もなく迷い易さも指折りという過酷さを誇る。

極め付けは〈ハカルディナ大砂漠〉の全域に生息している凶悪なモンスターだ。
非人間範疇生物

人食いワームに猛毒の蠍の様な魔蟲の他、この過酷な砂漠という環境に適応した魔獣共の他に〈厳冬山脈〉から南下してきた地竜種、怪鳥種まで生息している大魔境となっているのである。

勿論、場所を選べば低レベルの下級モンスターばかりが生息している場所もあるが……この広い大砂漠で、この世界に降り立ったばかりの、右も左も分からぬ様な素人がそれを判別するのは――

はつきり言つて、ほぼ不可能だ。……それが、この世界に急増してから一週間も経つていない「ハマスター」達であれば、尚更。

仮に「斥候」や「冒険家」、「探索者」等の索敵に有用な汎用スキルを持ったジョブに就いていたとしても、下級職のスキルではスキルレベルを最大まで上げなければ満足な効果を得られないだろう。

広大な砂漠の、砂中にも潜んでいるモンスター達を見つけれずに徒労に終わるどころか、ムキになって何時間も無為にこの大砂漠を歩き続けてたかがゲームだと慢心していく中で熱中症により「デスペナルティ」となるか。

あるいは、初心者「ハマスター」達では到底敵わないモンスター達の住処まで知らぬ内に踏み込んでしまい、敢え無くそのモンスター達のおやつにされてしまった「ハマスター」も少なくないだろう。

正直に言つてこんな所を初期スタート地点にした運営^{管理A1}に対して恨み言の一つか二つ言つてやりたい気もするが（まあ「デスペナルティ」だった人達から既に結構メール行っているだろうが）それはさておき。

当然ながら初期スタート地点である「商業都市コルタナ」の周辺は東西南北何処もそんな有り様なので、厳しいからと言つて他の街に移動するのも一筋縄では行かない。

今朝掲示板で見た時点では、^{この世界の住人}「テイアン」の案内抜きで他の街に到達したのはほんの一割

程度だったとか。

デスペナルティを考えると全く割に合わない話である。

ならば。

ならば、初期国家にカルディナを選び、(商業都市コルタナ)からスタートする俺達カ
ルディナの(ヘマスター)に救済措置はあるのか？ というところ……まあぶっちゃけつまり
それが俺達が雇ったティアンであるナムルさん、つまりは「案内人」の人達の事だ。

そう、この世界で、このカルディナで生まれ育った現地人。

その中でも探索や索敵に適したジョブに就いた者達が行う、ちよつとした小遣い稼
ぎ。

本来であれば各々の専門ギルドで斡旋された仕事をしている彼らだが……狩りがて
らにナムルさんに聞いてみたのだが、どうもカルディナの議会からの通達があつて彼
女達からすれば今は物凄く「稼ぎ時」なんだとか。然もあらん。

なんでも、他所の都市からこのコルタナまで寄越されたティアンの「案内人」もかな
り多いのだとか。それでも需要が尽きないんだから本当にカルディナの金に対する嗅
覚は本物だ。

まあ、それで地元民であるナムルさんとかは多少割を食っているらしいのだが、そ
れ以上に儲けているから何も言えないのだとか。

……それに、それ以上に今は「案内人」達を悩ませている存在があるというのも理由の一つなのだが。

「つらあッ！ 《ファーストスラッシュ》！」

《《ツインアロー》！ 《ツインアロー》ッ！》

「ほらほら二人共一。もつと敵釣つてきて欲しいッスー。足りてないッスよー」

「ええい、お前達は鬼かつ!? こつちにも限界があるのだぞっ!?!」

「すみません……そろそろ……!」

つい大声を出してそう怒鳴るが、アタツカーの三人は何処吹く風といった感じでスルーし、遠方に見つけた二匹の「サンドウルフ」に狙いをすませて追って行ってしまう。そうなってしまうとこのパーティの防衛役と回復役、……そして案内役である三人も走って追わざるを得なくなってしまう訳で……

どうしてこうなっただー!?



事の始まり——という物は特になかった。

ただ、理由を簡単に纏めるとしたら……俺達のパーティは実に、実に順調に狩りを続けられたから少しずつ調子に乗っていった、というのが正確な所だろう。

そう、俺達のパーティは実に理想的な臨公パーティムーブをし過ぎてしまっていたのだ。

〈商業都市コルタナ〉を取り囲む〈カルディナ大砂漠〉、その中でも勿論ある程度はどの方角のモンスターがどのレベル帯の狩りに適しているか、という指標程度ならある。

俺達が狩りをしている西部は初心者狩場の中では多少要求レベルが高い方のモンスターが出現する。——が、それはソロ狩りでの話だ。

パーティを組んでいけば、それもきちんと定石通りに役割をこなせる構成でパーティを組んでいるなら、その効率も難易度も段違いとなるという物だ。

その視点で言えば今回の俺達のパーティは……流星に満点とは言わないが、極めてそれに近いメンバー構成をしていたと言える。

前衛、後衛。^{アタッカー}攻撃役、^{ディフェンダー}防衛役、^{ヒーラー}回復役に索敵も完備。

魔法火力がない、という弱点もあつたが、【剣士】の彼の剣のエンブリオの固有スキルの威力はそれを補って余りある程にあり、そしてそれを大した消費もなく放てるのだ。

〈カルディナ大砂漠・西部〉で、戦う予定のモンスターは道すがら全てナムルさんに予習させられたが、その中で最大の防御力を持つ「ジャイアントスコルピオ」さえも一刀両断できるのだ。彼に関しては調子に乗っても仕方がないと思わないでもない。

また、その道すがらでパーティ内でもう一人、「狩人」の彼女のエンブリオも孵化していた事も大きい。

極々狭い範囲の運動エネルギー増減の固有スキルを持つ手袋型のエンブリオ。それによりパチンコ投石器を主武装としていた彼女の火力も桁違いの物となり、その石礫の威力はモンスターの頭部に直撃すれば容易く一撃で粉砕できる程となった。

エンブリオこそ未だ孵化していないながらも与えられた仕事を卒なくこなす「弓手」の彼の弓の連射も併せれば、多くのモンスターが近付く暇もなくつるべ打ちとなり絶命してしまう事となる。

勿論、それでもたった二人の遠距離攻撃では一体も近付けさせないと言うのは不可能である。良くて半分と言った所だ。

VRMMOはそれまでのゲームとは違い一発一発矢や石を番え構え放たなければならぬ。その手間に命中率まで鑑みれば……むしろそれでも非常に優秀な二人だと言えるだろう。

この世界ゲーム、〈Infinite Dendrogram〉にはセンススキルという存在

がある。

一言で言えばシステムの行動のアシストだ。主にジョブに関連した行動を行う際に「正しい動き」ができる様になるちよつと凄すぎる代物だ。どうやってしているのかちよつと分からない。

それ故に……【狩人】や【弓手】であれば弓の引き方や当て方、【剣士】や【戦士】であれば剣術や近接戦闘術が、ほほほほ戦いの素人である俺達へマスターでもちゃんと戦える様になる素晴らしいシステムなのである！

ちなみに、余談ではあるがこのセンススキルというのは下級職の最大レベルで一人前、上級職の最大レベルで一流の少し上程度、と現実での掲示板等では言われているが……

それはつまり、現実でそれ以上の實力を持つていけば他のへマスターと比べても頭一つ二つ、あるいはそれ以上に抜きんでる事が可能という事である！リアルチートとかどれくらい居るんだろうなあ！

当然だが残念ながら俺も、他のパーティメンバー達も優秀でこそあってもそこまでのリアルチートではなかったので戦闘に関してはほほセンススキル頼りな訳だが、実際にそれで狩りが上手く行っているのだから改めてこのセンススキルという物の出来に戦慄せざるを得ない。

ああ、多分本当のVRMMOの主人公というのはそんなリアルチートなんだろうな。と多少感傷に浸るが、そんな俺は俺でしつかりパーティ内での役割もこなしていた。

【剣士】の彼と共に前衛としてモンスターの足を止め、そして相対したモンスターを倒す役目だ。

まだ後衛二人のセンススキルのレベルでは接敵した乱戦の最中に射撃しても誤射する危険がかなり大きい為、援護射撃は期待できないし、【剣士】の彼ほどの攻撃力もない。しかし、それでもセンススキルの導くままに身体を動かせば【サンドウルフ】や【ジャイアントアント】程度なら一対一ならば普通に勝てるし、三対一までなら【剣士】の彼の援護が来るまで防ぎ切る事はできるので。何度も言うがセンススキルって凄いな！

俺も、勿論【剣士】の彼も、後衛の二人もセンススキルのレベルが初期状態だった時ですら初心者狩場のモンスターなら普通に戦い合える様になるのだから。

勿論それはセンススキルのお陰、というだけではない。

自分自身の才能——は全く関係ないが、それでも選択は良かったのだろう。全身鎧と兜、そして購入した盾という防具達は俺が夢想した戦士像そのものの様な、いやそれ以上の働きを持って俺に答えてくれた。

たかが初期装備、されど初期装備だ。

動き辛さや重量、視界や行動の制限と言ったマイナス点も目立つが——それでもれっ

きとした金属製の鎧と、兜なのだ。

布製や革製の初期装備とは、実際の防御力は比べ物にならないという物だ！ ……
まあ、金属だろうと直撃すれば余裕で拉げる程度の怪力を持つモンスターだっとうようよ居るが、それでもあるとないとでは大違いだ。

もう一つ、これは俺だけではなくパーティ全員に言える事だが——モンスターとの戦闘に対する忌避感が少なかったのは大きなプラス点だっただろう。

いくらセンススキルがあり、ジョブがあり、エンブリオがあり、ステータスがあり……
モンスターと戦う術があると言っても、このVRMMO、*Infinite Dendrogram*では戦うのは「*マスター*」自身なのだ。

視界は変更できるとは言え、リアルな感触をその身体に伝え、モンスターの悲鳴すらも超リアルな物であるこの世界で「*マスター*」が戦闘を行うハードルという物は予想以上に高い。現実準拠の視点であれば、特にそうだと言える。

まだこの「*Infinite Dendrogram*」が始まって二日しか経過していないと言うのに、インターネットの各所で数え切れないほどリアルさによるリタイア報告が呟かれているのも、現在進行形で経験している俺からすれば理解できなくはない事だった。

人間とそう変わらないサイズの蠍や蟻が、殺意を剥き出しにした狼の群れが、正体も

良く分からぬ異形の怪物が、自分に仇なそうと、殺して喰らってやろうと襲い掛かってくるのだ！

……しかし、パーティメンバー達と来たら、実際に戦いを繰り返してみても戦闘への躊躇いという物は殆どないし、不慮の事態が若干あっても多少慌てた後は実に適切に対処してくれるメンバーばかり。

頼もしい限りではあるが、俺自身が10代だった時に同じ事が出来たかはちよつと怪しいのが少し悲しい所だな！ 長年の経験と言うのは人を強くするな、うん。

そして、影が薄くなりがちだが「修道士」の彼女やナムルさんと言った補助役の働きも非常に大きい。

ナムルさんは確実に迅速にモンスターが居る方を、それも俺達が同時に対処できる四体までを目安にしてしっかりと先導してくれていたし、事務的ではあっても聞けば大抵の事を教えてくれる親切な子だ。お陰でコルタナについて結構詳しくなる事ができた。

【修道士】の彼女も【剣士】の彼や俺が傷を負った時や【毒】を受けた際には即座に回復魔法を掛けてくれるし、万が一にもモンスターに接近されない様に常にパーティで唯一にして一番の索敵役のナムルさんの傍を離れない構えだ。

回復役はパーティの生命線だ。ゲーム次第では回復行為に高い敵愾値ヘイトが設定されている事も少なくないし、自分の身を守ってくれるだけで十分にありがたい事だ。

……そう、そんな感じで、臨公パーティーにありがちな地雷やべー奴が混じる事もなく、個々の実力もパーティー構成も何ら問題なく

むしろ総合的なパーティーとしての実力は非常に高かった為——臨公パーティーは実に順調に進行していったのだ。

その結果が——これだ。

順調に狩りが続けていくにつれ、初期の下級職に就いたばかりだった俺達のジョブレベルはぐんぐん上がり、ステータスも初期からは桁違いに強くなり、スキルレベルもどんどん伸びて行き。

初期状態ですら普通に狩れていたこのパーティー、当然ながらそうやって成長していくに従って狩りの効率は良くなっていく。

……それも、ナムルさんに聞く限りは、テイアンの人の基準からすれば尋常ではない速度で。

パーティーメンバー全員がリアル都合上問題なく、今の臨公パーティーも非常に効率良く稼いでいる事から、デンドロ内時間での日を跨いで狩り続けている事も、おそらくは理由の一つ。

別に彼ら、彼女らが図々しい性格だったとか、問題がある性格だったという訳でもな

い。

元芸能人にして、ほぼ間違はなくパーティー最年長である俺の経験に言わせれば、少なくともこの臨公パーティーで見ると分には間違はなく皆まともな子達だ。

そして、そんな子達が現実としか思えない程のリアリーティを誇るこの世界で、長く一緒に狩りを、モンスターを相手にした戦いを続けるにつれて生まれた仲間意識が、連帯感が……慣れが芽生えるのは、むしろ当然の成り行きだ。

そして、来たるデンドロ内の日を跨いだ、臨公パーティーによる狩りの二日目。

レベルアップにより劇的な成長を果たしたアタッカー陣営の活躍ばかりになって防衛役も回復役もまともに仕事する事が少なくなつたのが——今の現状だよ！

「全く、あいつらめ。調子に乗っていると足を掬われると言うのに」

「ははは……皆さんの向かっている場所は把握しているので大丈夫ですよ。それに、こういうのは慣れていきますので」

「うーむ。それはそれで〈マスター〉として少し申し訳ないと思う訳だが……」

嘆くように呟いたが——このパーティーの中で、最も立場が微妙な事になっているナームルさんにフォローされてしまい、逆に少し気分が落ち込んでしまう。

ティアンで、現地で、案内人であるナームルさんとしては、この扱いも、フォローも仕事の内ののだという事は理解している。

理解——していても尚、微妙な気持ちになってしまうのは、それがパーティ内でも自分一人だけだという事は、果たして俺の心が弱いせいだという事だろうか？

……勿論、そんな事はないと、頭の中では分かっているのだ。

だが、それでも、だ。

約1日の間、一緒に行動してきて見て来た、その表情も言動も。

いや、彼女だけではない。

あのコルタナの街で思い思いに過ごす街の住人達。街を歩いている時にすれ違った数多の人々。

古びた武具屋で格安ながらも良い盾を見繕ってくれた老練としたあの店主も、言葉の凶器で俺をノックアウトしてくれたあの親子だって、〈マスター〉で溢れ返る冒険者ギルドでパーティ募集の整理に悪戦苦闘していた受付嬢さん達も……そうだ。

彼ら、彼女らティアンが、このリアリティ溢れるこの世界の住人達が——作られたNPCだと、他のパーティメンバーの様にそう扱うのは、どうしてもできそうにない事だった。

ならば俺が読んできた小説の様に、此処は本物の異世界で、彼らは異世界の住人だ——と、素直に信じたい心もあるが、流石にそれを完全に信じ込める程綺麗な性根をして

いるつもりはない。大人になるって大なり小なり汚くなる事なのさ。

しかし、だからと言って旧世代のゲームのNPCと同じ様な、ただプレイヤープレイヤーに使われる様な存在では決してないと思う。

ちなみに、俺の中では管理AIとは別種にして同類の、超高性能AI説が有力だ。異世界説とは6：4くらいの割合で。

今の御時世、管理AIを始めとして、実際に受け答えする分には人間と何の区別もつかない程に、あるいは人間以上に人間らしい仕草や表情をするAIという物も存在しているという事は知っている。

……俺の勝手な持論としては、感覚的に“人間と何の区別もつかない”程の存在が現れたのならば——それは人間として扱われるのに何ら問題はないと言って過言ではないと思うのだがな。

流石に世論では許されないし、態々公言する様な事でもないが。

「ふう……」

「——正直、キングさんは色々と気にし過ぎじゃないですか？」

「うん？」

内心で少し黄昏ていた俺に、唐突に横から声を掛けて来たのは、横を並走していた【修道士】^{アコライト}の彼女だった。

……ちなみに、俺に返事をした後、ナムルさんは三人を追って先に行ってしまった。【司祭】のマイナーチェンジであり、AGIの低い彼女と【戦士】で普通にAGIがある癖に全身鎧のせいで動きが鈍い俺達が若干遅れて殿になっている形だ。

……そして、【司祭】のマイナーチェンジ、つまり先程も言った様に回復役にしてパーティの生命線である彼女の一歩の仕事と言えば――

「さっきから見ていたのですが、私達後衛へモンスターが流れない様にするのは、まあともかく――あの【剣士】の方が相対するモンスターを調節していたり、あのNPC^{テイアン}の方の立場にまでずつと配慮してましたよね？」

「む、それは勿論だが……」

NPC^{テイアン}、現地人……つまりナムルさんへの配慮は先の通り俺としては当然の事であつた。

唯一の防御役^{タンク}として絶対に攻撃が流れない様に全力を尽くすのだからってそうだし。

絶大な攻撃力を誇るがその剣筋は大体センススキル頼り（それでも俺よりは数段マシンだが）の彼が対処しにくい小型のモンスターを足止めし相手取るのも、確かに事前に取り決めた役割分担でこそない物の――その仕事はもう一人の前衛たる俺にしか出来な

い事なのだから、これも俺の仕事だろう。

「他にも、合間合間で良くあのNPCの人の仕事手伝ってたり教わったりしましたし……実はああいうのが好みなんでしょうか？」

「いや、別にそういう訳じゃないんだがつ!？」

あれ!?! 何か凄く不穏当な勘違いをされていないか!?!

大体一緒に居るナムルさんとの話にも、パーティ内での会話にもあまり入って来ないで、大体静かに一歩引いた所にいたのは判っていたが、もしかしてずっとそんな事思われていたのかツ!?!

「あれはこれからもこの国で生きていくに当たって必要だから頼んで教えて貰っていただけだし、他のだって別に意識してそうしていた訳じゃない、当然の事をしたまでだツ!!」

「あ、はい。怒涛のマジレスですね……私は、多分他の方もそれを当然とは思っていないと思いますか？」

「当然、それは、プレイスタイルは人それぞれだと言うのは大前提だ。それは否定しないし俺だって強要するつもりなんて欠片もないぞ? ——ただ、俺はこうだってだけの話だ。」

「いえ、私だってキングさんのそのスタイルを否定するつもりはありませんが……」

そう言いながらも、彼女は一瞬だけ気遣わしげな視線を向け、そして溜息を吐いて――

「その生き方プレイスタイル、凄く疲れませんか……？」

と、聞いてきた。

「……ほう。そう思うか？」

「ええ、思いますとも。……勿論、私もそれを否定したい訳ではありませんが」

返答には即答される。

……正直、このデンドロ口内時間ではあるが、1日くらい一緒に過ごしていたが、こうもグイグイ来る子だとは思わなかった。

とは言ってもそれは悪い意味では全くない。

それだけ俺を、他のパーティメンバーを無関心に思わず観察してくれていたという証左なのであるし、それは支援・回復役のパーティ内での働きの理想的な物の一つでもある。

……こういう所を聞かれるとはちよつと思っていなかったけどな。

「此処は、此れは、ゲームです。遊戯です。私達は遊びに、楽しみに来ているんですよ？」

なのに、そこでそんな全力で疲れる様な真似をしては本末転倒じゃないですか？

……ゲームって、もつと適当にやる物なんじゃないですか？」

「あー……ふむ、なるほどな」

彼女のその言葉を聞いて、くっくつと苦笑しながらも……得心が行く。

インターネットの掲示板等で聞かれたならば戯れ言と流されそうなその言葉であるが、彼女の表情からは100%の本音が浮かんでいるのが見て取れる。

……中々初心で可愛い物だ、とやや不謹慎に考えてしまう。

なるほど、確かに。

俺もこの臨公パーティ中でのフォローに心地良い疲労感ではあるが、確かに疲れているとは言えなくもない。

ゲームというそれに対する認識も……まあ、頭を空っぽにして楽しむ様なゲームも多数あるというのもその通りだし、この《Infinite Dendrogram》でその様にこのファンタジーでリアルな世界の空気をこそ楽しんでいるという者も大勢居るだろう。

嗚呼まさしくその通り、他にも要らない苦勞を進んでしているし、ゲームで疲れる様な真似だつて沢山しているとも。

——
だけど——

「あつはつは——君、実はゲームを遊ぶ経験つて殆どないんじゃないか？」

「なつ——そ、それがどうしたんですつ？ それが何か関係あるんですかっ？」

「うむ、良い質問だ！ それはな——」

——うおおおおおおおおおッ!?

……答える直前に、前方から【剣士】の彼の悲鳴が轟いた。

「まずっ！ 話し過ぎたか!?!」

「——急ぎましょう！」

——駆け出し始めた俺達の視界の先に映ったのは。

——十数キロメートルは離れた場所を生息域にしていた筈のモンスター。【純竜陽炎】の幼体……【亜竜地蟲】が操る流砂に足を取られている、先行していた四人とそれを取り囲む十数体の魔蟲のモンスター達だった——！

T o b e c o n t i n u e d ……

ザ・キングの場合／とある異邦人の物語・序章：後編

□〈ヘカルディナ大砂漠・西部〉
【戦士^{ファイター}】ザ・キング

「ほら、走れ走れ走れえッ！」

「分かってるが、無茶言うなよおっさん!？」

「はあっ! はあっ! はあっ! はあっ! はあっ! はあっ!」

「ひい、ひいっ! なんだあんなのがここにいるんすか!？」

「すみません、私のミスです……!」

「いいから、今はキングさんの言う通り全力で走るんだっ!」

走る、走る、走る。

居る筈のない亜竜級——この世界におけるベテランでもない対処できない危険なモンスター^{モンスター}の存在。

そして、それを中核とした数多の魔蟲^{モンスター}達の集団——

それらの異常事態に直面し、今、俺達はいく分前まで己の狩り場としていた砂漠をほうほうの体で逃げ出す事になっていた。

日差しが強く照り付け、砂漠に足を取られながらも必死にあの魔蟲達から逃れようと走り続けているのだ――

「くそっ！ おい、ここにはあいつは居ないんじゃないのか!？」

「も、申し訳ありません。その筈です、その筈だったのですが……！ 何か想定外な事が起こってしまったようです」

「……ちっ！ 金は後で返して貰うからな！」

意外とナムルさんの話を確りと聞いていた、〈マスター〉の中で一番体力とAGIに余裕がある「剣士」の彼が喰ってかかる。

それはそうだろう。確かに道中の話ではちゃんと強力なモンスターが出る範囲から離れて狩りをする――という話になっていた筈なのだ。

それが、この始末である。

“案内人”であるナムルさんを責めるのも仕方のない事、なのであろう。

だが、それと同時に。

俺はこの世界に――〈Infinite Dendrogram〉に来てからの数日間の経験や今まで培ってきた雑学の覚えもあり、ナムルさんが溢した想定外の内容についても、ある程度予想が付いてしまっていた。

公式サイトや、現地人^{テイアン}の人等からの説明を聞く限り、この世界におけるモンスターと言うのも、〈神造ダンジョン〉等の一部の例外を除けばこの世界における生態系に完全に組み込まれている。

食物連鎖が成り立ち、天敵が現れば駆逐され絶滅する事すらあり、時にはテイアンの人の手によつて有用な種は保護、養殖される事すらある、力こそあれ俺達の世界における“動物”と何ら変わらない存在だ。

モンスターに携わる職業^{ジョブ}の人曰く、それぞれが相応の感情すら持ち、〔ゴブリン〕種などは時には拙い共用語で命乞いをしてくる事すらあるという話もある。

世界中に広がるその生息域や、テイアンでは立ち向かうのが難しい高位のモンスターの存在や、例外である〈UBM〉等の存在もあるが、概ねその様な認識で間違いはない筈だ。

——で、あれば、だ。

この世界に来たばかりでありながらも、テイアンと比べ多くの例外を兼ね備え、ゲム感覚その物で己が糧とする為に凄まじい勢いで初期スタート地点の周囲のモンスターを狩り尽くす存在——〈マスター〉。

そんな存在が、各国に数万単位で現れ、そして者によつては既にエンブリオを第二形態に進化させているのだからか。

第一形態のエンブリオですら、それを持たない者からすれば凄まじい力を有するのだ。

それを進化させ、更に増した勢いで、より広い範囲で“狩り”を行えば――

……現時点で、〈Infinite Dendrogram〉が始まってから、この世界の時間にして一週間弱が経過しようとしている今現在。

……そう、一週間弱も、経過しているのだ。

それだけの時間があれば、特に初心者へマスターの狩りの影響をもろに受ける初心者狩場と、その周辺のモンスターの分布域が大幅に変わっていたとしても、何ら不思議ではない。そういう事だ。

……尤も。

恐らくは、一流以上の“案内人”と言うのはそういったモンスターの生息域の変動要素まで頭に叩き込んで予測計算した上でやらねばならない物なのだろう。

ナムルさんも、咄嗟に所持していた衝撃を発する魔法が籠められた宝石（「ジェム」という奴らしい）を使って一時的に完全に包囲されていた窮地を脱しさせてくれたが……

未だベテランとは言えないナムルさんの経験値の少なさや、今回のそれが世間の想定以上に大規模な物である事も合わさって今回の事になったと思われるし、それに今は

それらの事を説明している余裕は無いから黙っているべきか。

そして、何より今は――

「――くっ！　いかん、このままじゃ追い付かれる！　ナムルさん、何か策はないかっ!?」

走る、駆け、疾駆して――尚、距離は一向に離れない。

それ所か、徐々に、徐々にではあるがその距離は縮まってきたのだ。

AGI――素早さは、確かに「修道士」の彼女や全身鎧を着ている俺が居る分高くはない。

だが、それは動きの鈍い魔蟲を主とした今俺達を追っているモンスター達とて同じ事だ。

むしろ、若干ではあるがAGIの数値自体は大体は勝っているものと思われた。

――しかし、場所が悪い。

ここは炎天下の砂漠であり、そしてあのモンスターの――魔蟲達のホームグラウンドでもあるのだ。

照り付ける日光に体力を奪われ、一步毎に砂丘に足を取られ速度も体力もロスしている俺達と比べ、魔蟲達はそれらを全く障害にせず獲物である俺達を追ってきているのだから、それも当然の事であった。

「煙幕や閃光を発するのならありますが、あのタイプのモンスターには効果がありません！ 魔蟲除けの香も一応あるのですが——」

ナムルさんは懐に入れたポーチに、「アイテムボックス」に手をつ込みながらも、悲壮な声で否を告げる。

……そりゃあ、あれほどに興奮している相手に今更香が効果がある訳もなし。

事前に使っておけば効果はあったのだろうが、俺達の目的がモンスター狩りであった以上、それを使う選択肢なんて在り得る筈もなく。

そして、そんな問答をしている間にも——限界は近付いてくる。

この世界には生命力^H_P、魔力^M_P、技力^S_Pと言った数値はあつても、体力は数値化されていない。

ならばこの世界に居る者は体力が無尽蔵なのかと言えば——そんな訳がない。

どの様な計算をしているのかは分からないし、少なくとも現実世界のそれよりは遙かにマシではあつても、激しく動けば段々疲れて来るし、疲労が溜まれば動きは鈍り、最後には動けなくなる物だ。

ゲームであるからか、それとも別の理由からか、個人差や精神論による差がかなり大きいみたいだが——少なくとも【修道士】の彼女や【狩人】の彼女は既に限界が近い様だと、察してしまう。

そしてそれはパーティ全体の焦りに繋がるが、だからと言って限界を越えて動けたステータスり、打開のアイディアが出たりする訳でもない。

土壇場の修羅場に名案が思い浮かぶ、なんてフィクションでは良くある事ではあるが、現実になんか出来る者は非常に少ない。

実際に手札も少ない新人である俺達に出来る事も当然——

「——皆さん。一つ提案があるのですが、よろしいでしょうか？」

そうして焦っている中で振り返り、声を出したのは俺達を先導していたナムルさんであつた。

現地人テイアンとして十分にこのカルデイナの自然に耐性があり、「案内人」として合計レベルも最も高い事もあり、一番余裕がある筈だった人。

AGIも俺達よりは二回り以上高く、一人逃げ出すだけであれば簡単に出来る筈の人。

——そのナムルさんが、今悲壮な決意と覚悟を表情に貼り付け、言葉を投げかけて来た。

「……今回の事は『案内人』である私のミスです。どうにか私がああ群れの注意を引いて時間を稼ぎますので——」

「よおしそこまでだ。それはなしだなし！ 却下だ！」

「——その内に、つてえええつ!？」

ある意味予想できないでもなかった論外な提案を一刀両断に即答する。

……恐らく、この提案とその表情から俺がさつき気付いていた事にも辿り着いたのであろう。

これを事前に予測できなかった、対策できなかった自身の責任である——と。
なるほど、確かに一理あるかもしれない。

俺達は金銭^{リル}を支払ってナームルさんを雇用しているのだから、その働きに不備があつたのならそれこそ先の「剣士」の彼の様に返金を求めたり、彼女の様に命を懸けてでも……と言うのも、この世界であれば、それほど不思議ではないのかもしれない。

——だからと言ってそれが許容できるかどうかはまた別の話だが。

勿論、ミスをしたならば何らかの形でパーティに補償をするべきであろうというのは間違いではないが、それはこの様な形ではない筈だ。

ナームルさんはまだ若輩だ。

年の頃はまだ20にも行っておらず、「案内人」としてもまだベテランではなくとも、己が職務を己の全力で真つ当しようとする様には好感が覚えられるし、何よりもこの程度の失敗で命を以て償わせるのは絶対に違うだろう。

そして……俺は、心の中でニヤリと笑いながらも、更に内心でこう続けるのだ。

それをするならば、もつと適役が居るだろう。

そう、例えば。

——パーティの防御役であり、装備によつて最も防御力が高く、そして動きも遅く殿を務めていて……そして、死んでも死なない不死身の〈マスター〉である誰かさんの事だ！

「そういう訳で、それは、この俺の役目だ。——コール君、そちらは任せた！　ここは俺に任せて貰おうッ！」

「えっちよつ、キングさん!?!」

そうして、俺は一瞬狼狽したコール君——【弓手】の彼に後を託し、何時になく格好付けながら向きを一八〇度変え、盾を掲げて砂埃を上げて近付いてくる魔蟲達へと向き直る。

あからさまに猛毒を持っているであろう毒々しい色の器官を携えた魔蟲に、この砂漠にどう適応しているのか触手の様な物を生やしたグロテスクな魔蟲。

まるで感情という物を感じさせない無機質な動きで獲物を逃さぬと追い縋る中型の魔蟲達に——人間他達を余裕で越える様な大きさの魔蟲である【亜竜地蟲】までより取り見取りだ。

いくらジョブレベルがかなり上がり、それに応じてステータスが上がっていたとしても勝ち目がある相手ではない。

完全に防御に専念したとしても俺の実力では一分も時間を稼げれば御の字という所だろう。

……あるいは、AGIがありモンスターの特性を熟知しているナームルさんの方が適していて、生き延びる目もあるかもしれない。

だが、それでも――

「ふっ、ここが俺の死に場所か……じゃあな、アデュー――！」
さよならだ

「うわあの人本当に行っちゃったツスよ!？」

「おっさん! そんなのそこのNPCに――」

「キングさん!? それは私の――」

「なっ!? 英雄気取りでもしているんですか貴方は――っ!」

そんな言葉を背に受けながら――スルースキルを全力で発動させ、俺はモンスターの群れに向かっていくのだった。



「やはりちよつと格好つけすぎたか？ ……いや、まあ別にそうでもなかったな！」

そうして、俺は魔蟲の軍団と対峙する。

……やはり、遠目であつたり自分達の戦力が整っている時と比べて、その迫力たるや凄まじいものだ。

一歩間違えれば、俺らよりもいくらかステータスが高いナームルさんでもまず死ぬであらう凶暴性と能力を秘めた蟲の群れ。

見ろよ、あの先頭の丸っこい、人によつては可愛いと言うかもしれないような蟲だつてどう見ても俺を獲物としか見てないような顔（？）してるぜ。

……ああ、やはり流石にこれはナームルさんに押し付けるのは嫌だな。全く。

そうすれば俺も生き残れたかもしれないが——間違ひなく凄く後悔していた事だろう。

「それにしても、『英雄気取り』か……くくく」

英雄気取り——つまり、彼女から見れば俺の行動は英雄らしい、気取った物に見えた

という事だ。

意識してそうしなかったと言えばウソになるが、ああいった事をやるのも昔取った杵柄で珍しくない事だった為そこまで気にしていなかったが――

――悪くない。

この世界、^{ゲーム}へ Infinite Dendrogram^{ゲーム}はVRMMORPGである。そう、ヴァーチャルリアリティで行われるマツシブリーマルチプレイヤーオンライン^{演じて行われる遊戯}の、ロールプレイングゲームなのだ。

皆が皆、^{リアル}現実ではやれない“自分”を演じて楽しむ。それがRPGという奴だ。

時代が移り進もうとも、それが正に第二の現実とでも言える程の完成度を持った仮想現実内でもそれは同じ。

――いや、それほどに、現実と見紛う程のモノだからこそ皆は……否、私は自分が望む自分を^{演じられる}やるのだ。

誰の目にも憚る事無く、誰の思惑も受ける事無く、誰の意見に左右される事もなく。格好付け過ぎ？ ああ良いだろう？ 誰だって格好良くなりたい、当たり前だ。

英雄気取り？ ああ、最高だろう!? MMOたるこの世界でそう簡単にやれるとは思っていないが――なんと良い響きか。男なら目指すなど言われる程^{演じたく}目指したくなるものだ！

むしろ、目標として丁度良いというものだ。この第二の世界で俺は——最高の自分になりたいたと、そう思っているのだから！

自ら投じたヒロイツク^英な状況^謙にテンションを上げながら、らしくもなく内心でそう考える。

だが——自分で考えたそれを自分で否定する程俺は馬鹿ではないし若くもない。

——なあに、リアルじゃもう50を過ぎて仕事も引退した身なんだ。最早何も怖くない！

——目指そうじゃないか、最高の自分を…… “英雄” っつて奴をな！

心の中だけで己に対する宣誓を終え——一時は忘れていた眼前に迫る魔蟲を目にする。

——まあどの道今はこれが精一杯だ。なら……

——宣誓を心の中だけで留めておくなんて、らしくないよな。

「——聞け！ 我が名はザ・キング！ 今は見習い戦士なれど、仲間を守る盾となる者!!
そして——いつかは “英雄” となる者だ！ その名を恐れぬ者は掛かってくるが良
い！」

『——あら、私のマスターは随分と暑苦しいですね。——でも、私はそういうの、とても良いと思いますわ!』

宣誓の直後に、一瞬で左手の甲に熱が生まれ——“それ”の音が聞こえてきた。

「……おお!」

直後、左手から俺の胸の辺りにその“何か”は独りでに移動していく。そこにあるのが自然とでも言う様に。

まさか、これが噂のエンブリオ。

孵化がちよつと遅いとは思っていたが実に良いタイミングで——

『SYEYAAAAA!!』

「——つて、あぶねえ?!」

呆けている内に既に射程圏内にまで近づいてきていた【軍隊蟻】の一撃を受け止め、そ

のまま盾で叩き潰す。

——嬉しいのは分かるが今は緊急時だ。しっかりしろ俺!!

その一幕と一連の攻防の間に——既に魔蟲達は逃れられない程の近距離にまで歩みを進めていた。

ぎぢぎぢ、ぎぢやぎぢやと耳障りな音が、驚異の相貌が眼前に現れる。

……どうやら、ようやく孵化したエンブリオの詳細を確認し喜びに浮かれる間を待つてくれるつもりは全く無さそうだ。

——つまりはぶつつけ本番って事だ。なあに、一昔前ならこれくらい余裕だった!

全く問題は、ない……!

『流石は私のマスターですわね!』
即興劇は英雄の必須技能ですものねっ!』

「うおお?!」

——やっぱり幻聴じゃなかったじゃねーか!?

【レッサー・ポイズンタラテクト】の攻撃を受け流しながらも内心で驚愕しつつそう考える。

……やっぱり今のが俺のエンブリオの声、なのか?

そういったエンブリオもあるとは聞いていたが、既に孵化していたのを見たのではそういうタイプは無かったから驚くのも無理はないと思う。

そして——ついさつきから、今までと比べて身体が良く動くのももしかして——
『も、もしかして私、幻聴扱いされてましたの!? 心外ですわっ。ていーびーおーを考
て直ぐに戦闘形態になっておりましたのに!』

お、おう。それは凄くありがたい事だ。しかし、やっぱりお前（?）が俺のエンブリ
オだったんだな。

とりあえず自然に心の声に反応しているのは後で言及するとして、まずは——

「よくぞ躰つてくれたな我が相棒よ! 色々と言つてやりたい事はあるが、最初はこれ
だな——お前の名前を聞かせて貰おうッ!」

戦闘中にも関わらず、大声を張り上げて格好付ける俺——に、俺のエンブリオはにっ
こりとした感情の様な物を感じさせながら

『——グッドです! さすがは私のマスターですわっ! そうと聞かれたならば私も応
えない訳がありませんもの!』

——私の名前は「真紡譚姫 レジエンダリー」、わたくし「レジエンダリー」ですわ!

……さあ、ここから私達の物語の一幕目が始まりますわよ、同調者!』マスター

よし、良い返事だ! 流石は俺のエンブリオと言つた所だろう!

〈マスター〉が〈マスター〉である所以であり、一人一人のパーソナリティを反映し、
ユニーク唯の能力、進化をする、まさに自分だけの相棒。

既に仲間たちのエンブリオも見えていたが、どれもこれも非常に強力な固有スキルを持つすごい物であったが――

『マスター！ 戦いながらで結構ですわ！ ウィンドウに出せば私の能力や固有スキルに関しては確認できましてよ？ 私のマスターであれば造作もない事の筈です！』

『レジェンダリー』にそう言われ、（センススキル任せではあるが）思考操作でステータスウィンドウを開き、自分のエンブリオの能力を確認する。

ふっ。言われずともゲーマーならこれくらいは必修技能だぜ！

さて、どれどれ――

【真紡譚姫 レジェンダリー】

TYPE：メイデンウィثمアームズ

到達形態：I

装備補正：なし

ステータス補正

HP補正：G

MP補正：G

SP補正：G

STR補正：G

END補正：G

DEX補正：G

AGI補正：G

LUC補正：G

『保有スキル』

《貴方テイルズ・オブ・エビックが紡いだ英雄譚》Lv1：パッシブスキル

自身が世界中の人々から呼ばれた「称号」を「レジエンダリー」に保存し、固有スキルとして顕現させる。

また、「称号」を一つ選択し、自身の名前の前か後に表示させる事が出来る。

《異邦人マスタールの物語・序章ローグ》：パッシブスキル

自身の全ステータスに＋1%の補正を得る。また、自身が獲得する経験値量に＋1%の補正を得る。

《私ザだけの同調者ンキ》：パッシブスキル

自身が習得しているジョブスキルの効果に＋10%の補正を得る。

《見習い戦士》：パッシブスキル

《戦技》スキルのスキルレベルに＋1する。

……
……
……あれっ。

なんか他の仲間達のエンブリオと比べて、何と言うか……即物性がないと言いますか

……

いやでも実際戦闘が凄い楽に――

……凄い楽に……？

楽に、楽に……なつてはいるが、うんでも良く考えてみればそこまで――

『マスター!? 英雄とは、英雄だから行動するんじゃないよ! ——行動した

からこそ、英雄と呼ばれる様になるんですわ!』

はっ!

なるほど……つまり――この程度の苦境は、自力で跳ね除けられないと“英雄”には

なれない……そういう事だな!』

『ちよつと違う気がいたしますが、概ねその通りですわね!』

ならば仕方がないな!

何、どうせ今ないものをねだった所で状況が好転する訳もなし。

むしろ、今というかこの狩りの最中一番渴望していた戦闘技術——センススキルを補強してくれたのはとてもありがたい事だ。

元より戦闘経験なんて欠片もない俺では、いくらジョブやステータスによる身体能力があつたとしてもセンススキルに頼る事でしか戦う術を持たない。

しかし、そこに「レジェンダリー」の「称号」が、少なくとも《私^ザだけの同調者^キ》
“《と》《見習い戦士》《があれば話は変わる》”

【戦士】系統のセンススキルである《戦技》、そのスキルレベル6——！

実質的に上級職のものに等しいセンススキルに、更にそれに補正が入れば——確かに今までとは比べ物にならない程に、効率良く動いているのだから！

即ち——お膳立てはもう十分に整えられていると言つても過言ではない。

「それじゃあ——後は俺の仕事、という事だ」

——よし。それじゃ一丁気合いを入れて行くしかないな——!!!





「——くっつ！ 《マグナムブレイク》ッ!! つらあアッ!!」

【戦士】が持つ唯一の範囲攻撃スキル。

炎が如き闘志を炸裂させ周囲の敵を攻撃するアクティブスキルを用い、群がってくる
フォルミカ・ソルジャー
 【蟻人兵士】や【強顎蟻】アンドレを薙ぎ払う。

……しかし、下級モンスター相手でも、俺の下級の範囲攻撃スキルでは吹き飛ばし仰
 け反らせる事はできて倒すには至らない。

——虫なら地属性で炎が弱点、というのが定石だが、やつぱり砂漠の虫は無理かつ！
 だが、それで良い。倒せばモンスターは光の塵になり戦利品を残して消失するが、倒
 せなくてもそれはそれでそのまま他のモンスターに対する壁にできるのだから。

『K I S S Y A A A A A A A A A!!』

「ちいつー！」

間髪入れずに数匹の手下を引き連れた【フオルミカ・チーフ蟻人兵長】がその手（？）に持ったボロ槍で突き刺そうとしてくる。

ボロボロの盾で受け止め、逆に槍を押し折り体勢を崩し、全力を込めて首を刎ね、絶命させる。

——即座に、息つく暇もなく三匹の【ボイズン・スコープオン】がその毒針で突き刺そうとしてくるのを寸でのところで避け、なんとか距離を取る。

「って、多すぎるだろうがッ！ 何処からこんなに湧いて来るんだ!」

『もしかしたらマスターのさっきの口上を聞いてやってきたのかもしれないわね！』

流石私のマスターは人気者ですわ!』

「こんな状況で人気でも嬉しくないんだがあ!」

しかも大声のせいという可能性は普通にあり得そうなのが困った所だつ。

戦闘が始まってから数分……既に10体以上の魔蟲を倒してきているが、状況は一向に改善されない。

減った先からそれ以上の数の魔蟲が何処からともなく現れそのまま俺を攻撃しにきたり魔蟲同士で喰らい合ったりしていた。

……全てがこっちに向かつてきている訳ではないのは不幸中の幸いだ、それでも敵

しいのは変わらない。

それにー

『GULUEEEEEEEEE!!!』

「ーぐっ!?!」

来て欲しくなかった、真正面からの【垂竜地蟲】ーこの場において最強の存在の突撃。

——速く、重い。

この数分の間、三度目の突撃。

それまでのたった二回で、全財産5000リルをはたいて買った大丸盾はその役目を全うし歪にひしゃげた。

衝撃は逃しきれず、【HP回復ポーション】で回復したものの低くないダメージを負い、貫通してきた威力によって数値には問題なくともそれは間違いなく疲労として蓄積されているだろう。

そして、脅威なのはその怪力STRだけではない。

他の魔蟲達とは一線を画す程の、盾を構えるのが精一杯のその速度AGIも。

渾身の力を込めて長剣を振り下ろしても、甲殻に僅かな傷を付ける事しかできない程

の防^E御^N力^Dもー

これだけ数が居ても、俺に対処でき、倒す事の出来る他の魔蟲達——下級モンスターとは、まさしく桁が違う。

——一応話には聞いていたが、こんなに厄介なのか、亜竜級というのは——!

全く、戦^セ術^スの未熟を補えたとは言つても……この地力の差は、ちよつと俺に埋める事は出来そうにない。

今まで持ち堪えられて居たのも、こいつが周りの同族に配慮でもしているのか、そこまで頻繁に突撃してこなかったというそれだけに過ぎない。

……正直に言つて、この盾すら良くて後2、3発程度しか耐えられないだろう。

その後の事は——まあ、想像に難くないという物。

「くつ、はあッ! ちなみに一応聞いておくが、何か秘策があつたりするかな!」

『実は、システムウインドウに記載されていない真の力が——あつたら良いなって私も思いますわ! だって——』

『——その方が格好良いからだな!』^{ですわ}

『……まあ、残念ながら私にはそういうのはないのですけど……』

「はっはっはあ! 知つてた!」

良い感じに漫談しながら——割り込んで襲つて来た「レッサー・タラテクト」を斬り

捨てる。

……口では、そう明るく振舞ってはいるが、状況は悪くなっていくばかりだ。

一向に減らないモンスター。

まともにダメージの通らない、太刀打ちできない強敵亜竜級の存在。

戦闘経験の殆どなく、年のせいもあるのか集中力もヤバそうだ。今は精神力を主に使って戦っているような物だろう。

装備は限界寸前の盾だけでなく、多方向からの下級モンスターの攻撃を受け続けて鎧だつて傷が目立ってきており。

防タンク御役だから一応、とナムルさんに渡されていた「HP回復ポーション」も尽きかけ。

その上で重篤な状態異常にこそなっていない物のHPは既に半分程度しか残っていない——

まさに、誇張なしで詰みの一歩手前、と言った所だ。

戦闘が始まってからの数分がもう一度経つその前に、間違いなく俺は死ぬ——デスペナルティになる事だろう。

他者から見れば、先のような漫才をしている場合か、と突っ込まれるかもしれない。

だが——

「どうしたどうしたあ！ 俺一人——つてうおお!? 煽りの途中に攻撃とは！」

『珍しいナイス回避クリティカルですわ！ あと、それはある意味では様式美ですよっ』

「確かに、なあ——!!」

詰みを自覚して尚——全力で、魔蟲達との戦闘を繰り広げ続ける。

下級の魔蟲が心なしか少なくなってきたからか、頻度の上がった【亜竜地蟲】の突撃を寸での所で避け、反撃をするも当然ながら甲殻で弾かれる。

状況は、確かに全く良い所はない。辛うじて経験値と拾う余裕のない戦ドロップアイテム利品が多少あるくらいか。

……しかし、だからと言って諦める理由も、テンションを下げる理由だって一つもない。

「そら、もう一体——ッ！」

『流石マスターですわ！ もう一体、もう一体っ！』

「よっしや任せろお——!!」

——以前、俺が知る限り最も才能があるように見えた、とある知り合いにこんな話を聞いた事がある。

「諦めなければ、それを続けていればどんな小さな可能性だつて在る」のだと。
ある意味では、それは当たり前の事だ。

言い換えれば、諦めれば、それをやめれば、その可能性は零になる——そんな当然の
摂理の話だ。

当然の話であると同時に——それはとても、とても辛い道の話でもある。

誰だつて現在の状況や己の立場、能力、リスクをデメリットを他者との関係を己の未
来を鑑みて、その可能性が低いと考えたなら——これまた「当然」の如く、妥協せざる
を得ないのだから。

それで尚低いその可能性を信じて、それを成せる者なんて、本当に一握りしか居ない
だろう。

本物の「狂人」か、本物の「天才」か、本物の「強者」か、あるいは……本物の、持
つている者ぐらいだろう。

俺は確かにその話を聞いてそう思っていたし、恐らく世の中の人に問いかければその
反応こそが過半数を越える事だろう。

しかし。

……それを言い放ち、そして実践していたあいつの何と輝かしい事か！

そして……こうも思うのだ。

——叶う事なら、俺も「ああやって」生きてみたかったのだと！

己が望み、願った事を最後まで諦めずに。ずつと、ずつとだ。

漫画や小説の主人公の様に、どんな困難でも、どんな強敵を相手に一歩も引かずに、こ
うやって！

そういう——格好良い自分という物を夢想する。

年甲斐もなく、少年の頃から本当はそうやって生きていたかったのだ！

だから。

「へっへ……ほら、この程度じゃ倒れてやれないぜえー！」

『その意気ですわ。ファイトですわ、マスターー！』

『レジェンダリー』の声援を確りと受け止め——戦闘を継続する。

……本当の「英雄」って奴なら、どうやってかはともかく既に危機的状況を脱するく
らい出来ているのだろうが、まだ英雄志望を自称する程度の俺ではこれが限界だ。

まあ、「英雄」という肩書は軽くない。

この新たな世界、新たな俺の「死」が終わりではない以上、ここで死ぬからと言って
悲観する意味は全くない。

それに——俺は、既に勝利条件を満たしているのだから。

……そう。

エンブリオの孵化とその後のハイテンションで意識から外していたが——本来の目的、つまり勝利条件は、他の仲間達が逃げ切れる時間を稼ぐという事だったのだ。

戦闘開始してから今までに経った時間を考えれば、むしろ完全勝利と言つても過言ではない！

「そういう訳で既に俺はお前達に勝っているからな。ふははは——！」

『謎論理を打ち立ててからの勝利宣言は小物っぽい気がしますね、マスター——』

「ぐぬう!？」

い、今のは挑発だしと、「レジエ——微妙に長いし、レジエンダリアと被るからレンで良いか。レンに言い返そうとする。

『『『KYSYGLUEUOAAAAA!!!』』』

「——うおおお!!？」

挑発が聞いた訳でもないだろうが——タイミング良く（俺にとっては悪いが）残りの魔蟲達の大半が——【亜竜地蟲】が含む大勢の蟲達がその飛翔能力や身体の小ささすらも活かし、同時攻撃を仕掛けてくる——

(——こいつは不味い！)

回避——方向、速度、密度。あらゆる意味で無理だ！

迎撃——数が多すぎる上に【亜竜地蟲】がどうしようもない！

盾による防御——半分以上取り逃すし、もう厳しいかもしれないが、これしかねえ！

『——マスター——！』

「分かってる！——ファイトオオオオ——！！」

レンの激励を受け、気合いを入れて大丸盾を眼前に突き出し、踏ん張って耐える姿勢を作る。

——ギリギリの所で【亜竜地蟲】の突撃をこれで受け止め逸らせ……：られたとしても、無数の小型の魔蟲達が足や腕に喰らい付き、そのままHPがゼロになるだろう、というセンススキルの予感を感じていても、だ。

それでも。

それでも、最後まで全力で凌ぎ切ってやるのだと。

俺自身の為にも、俺から生まれ、こんな俺を精一杯応援してくれているレンの為にも。

……そして、最初の目的通りに。

“まだ数分しか経っていないから”

……仲間達が、少しでも遠くに、無事に帰れる様に。

諦める必要なんて何処にもないのだと——そう何処までも信じ切つて。

——諦めなければ、可能性はいつだってそこにある。そうだろうか？ ——

……そう、心の中で呟き、【亜竜地蟲】の激突に備えようとして。

「つたく。おっさんがらしくない事してんじゃねーよ！」

——その時、つい最近聞き慣れていた声が聞こえた気がした。

いや、声だけではない。

俺よりも高い——エンブリオのステータス補正のお陰だ——AGIで砂漠を掛け、俺

に駆け寄り、追いついたその彼は己のエンブリオである長剣を掲げる。
そして。

「——《絶対切断剣》 ツ!!」

そのエンブリオ——【デュランダル】の固有スキルを発動させ、【亜竜地蟲】に斬りかかった。

突然の乱入者に、俺よりも若干早いその動きに、亜竜級としては動きの速^Aが低^Gかった【亜竜地蟲】はそれを甲殻で受け止め。

——られる筈がなかった。

それもその筈。【剣士】の彼——ライザックのエンブリオ、【デュランダル】の能力特性は切断。

あらゆる物理防御力を無為と化するその名の如く絶対切断を可能とするその固有スキルは。

その狙い変わらず、今まで俺が掠り傷しか付けられていなかった【亜竜地蟲】を左右に両断し、絶命せしめた——

「びゅーていふおー……じゃなかった。何か一気に見せ場取られた気がする—— ツ!」

「おい、ボロボロの癖に余裕じゃねーかこのおっさん。何処が满身創痕なんだ!？」

「——いえ、私のエンブリオで見た所、間違いなく满身創痕だった筈なのですが……」

漫談しながら彼が来た方をふと見ると——いつの間にか、他のパーティメンバー達も此方へ向けて走り寄ってきており、戦闘態勢に入ってきている。

……あるえー? 俺、皆を守る為にここに一人で残ってた筈なんだけどもな?

見た所全員無事な様でそこは何よりなんだが、何故戻ってきたのか——

「すいませんっ、キングさん。これには少し事情が——」

走り寄り、「HP回復ポーション」を渡してくれながらも説明してくれるのはナームルさんだった。

というか、他の皆は最早出し惜しみせずに魔蟲達モンスターの群れを仕留める事に夢中でそんな余裕はないというのが正解だが。

（【修道士】の彼女はともかく）

——回復して、戦闘に再び参戦する僅かな間に聞いた説明では、こうだ。

俺が離脱し、敵の足止めに向かってから少しの間は、俺が言った通りに皆最寄りの都市、コルタナに向けて全力疾走をしていたのだが——俺と魔蟲達の姿が見えなくなる

らい遠くに移動してから、一連のやり取りの後から漸く冷静さを取り戻した【弓手】のコール君が待ったを掛ける。

〈マスター〉であり、死が終わりではない自分達が命惜しさに仲間を見捨てるのは如何な物かと、ここは一見無謀であつても共に戦つた方が良いのではないかと。

テイアン——NPCであるナームルさんに後の報告を任せて突撃して華を咲かせてみないか、と。

……そこから発生したのは、パーティを二分しての激しい言い合いだったらしい。

【剣士】のライザック君と【狩人】の彼女はリアル時間24時間の強制ログアウトという、普通の他のゲームと比べても重過ぎるデスペナルティを厭い、それに反対し。

コール君は先の意見を覆さず、テイアンでありこの世界の命に間違いなく限りのある筈のナームルさんは職業倫理か罪悪感からか彼に積極的に賛成し。

【修道士】の彼女はどちらとも言えず中立——^Nテイアン^Pであると扱われ、立場の弱かつたナームルさんを含めて二人だった賛成派の方が若干分が悪かつたくらいだった、と。

状況はそこで暫し膠着していたのだが——そこに、【修道士】の彼女のエンブリオの孵化が趨勢を覆した。

彼女のエンブリオは奇しくも疑似的な遠視の効果を持つ固有スキルを所持していた様で、それで現状の俺の様子を確認してみた所——【亜竜地蟲】はともかく、他の大多

数の魔蟲からは今も尚耐え続けているという事が分かったのだ。

——未だに自己犠牲の献身を全力で続けている、と。

……別に俺はそういうつもりではなかったのだが、それで議論の趨勢は大きく変わる事になった。

流石のライザック君や「狩人」の彼女も微妙に罪悪感を刺激させられ、また足を止めて結構な時間が経っていた事もあり体力も回復していた事から結局は出し惜しみもない全力での窮地を切り抜けるという事になった様だ。

最大の攻撃能力を持つ「デュランダル」をそれ以外で攻略が無理であろう「亜竜地蟲」に宛がい、そうして作戦は実行され——そのまま上手く行った、という事だ。

簡単に話を聞いた後は俺は簡単に謝意を伝え、また、残りの大量に残っている下級の魔蟲達を掃討する為に、前衛を慣れないワントップで苦労させていたライザックに続いて参陣する。

……口元に、小さく今までとは少し違う笑みを浮かべながら。

『ふふふ、良かったですわねマスター！ 頑張った甲斐がありましたよっ』

——ああ、全くだ。どうやら幸運の女神様という奴は俺に微笑んでいてくれるらしい。

これは幸先が良い、という奴かもしれないな。

『——いいえ、マスター。それは違いますわ』

——うん？ それはつまり？

戦鬪を再開しながらも心念話の中でレンと続ける。

……俺としては、運が良かったと言うしかない物なのだが。

確かに頑張った甲斐はあったし、助けに来てくれたのもとても嬉しかったが——

『そこですわよ！ 皆様の援軍は、マスターが “諦めずに、ずっと最善を尽くして戦っていた” からこそ、戻って来てくれたのだし間に合ったのですわ！ それを唯 “運が良かった” で済ましては駄目ですわよ？』

——なるほど、確かに万理ある。

確かに、運が——運命の賽子の目が良かったというだけではない。それだけの事ではないのだと。

その可能性を掴み取れたのは、俺の努力が、行動があつての物なのだ——

『そういう事ですわねつ。——ええ、とてもよかったと思いますわ。やはり、あれは間違っていないかったですわ!』

ああ——確かに良かった。年甲斐も無く熱くなつた甲斐があつたという物だ。

……しかし、努力が必ず報われるとは限らないし、むしろ現実では、そして現実限りなく等しいこの世界では猶更の事だ。

実際に運が良かったという面がないとは言えないが——むしろ、ここは俺ならば……いや、『俺達』ならばこう言い換えるべきなのだろう。

——これで俺も、持っている者の仲間入り、つて事だ!

ならば、やはりこれは諦める必要なんか全く無かつたのだと。——誰に憚る事無く誇りを持って目指せばいいのだ。

——『英雄』への道という奴を。

「そうと決まれば……これからもよろしく頼むぜ、相棒よ!」

『勿論ですわ! 此方こそ、どうか末永くよろしく願いますね♪』

「おっさんが苦難からついに壊れて独り言言い始めやがった……!」

……まあ、そんなこんなで色々あった、へInfinite Dendrogramでの初めての狩り／臨公は、終わり良ければ全て良し、という感じで終わったのだった。まあこれからも暫くは同じパーティーで組んだり、ナムルさんにも絡んだり教えを請うたり、クエストをしたりする、毎日が違うカルディナでの日々が続くのだが——それはまた別の話。

つまり、一言でまとめるとこういう事だ。

——俺達の戦いはこれからだ！

……打ち切りではない！

E p i s o d e E n d ……

ザ・キングの場合／彼は《 〃■■■、 》：前編

□〈商業都市コルタナ〉【守護者】^{ガーディアン} “メイン盾” ザ・キング

「お疲れさまでしたーつとおー！」『お疲れさまでしたわ、マスターー！』

時は初冬。

この〈Infinite Dendrogram〉内時間では、既にサービス開始から一年近くが経過し、そして即ちログイン時間が廃人レベルである俺も相応の時間が経っていたその時。

冒険者ギルドから一人の人間が——〈マスター〉が退出してきた。

敵つい風貌の全身鎧に、威圧感を振り撒く撒く鬼を模した一角を携えたフルフェイスヘルム【戦鬼の兜】を被った、ヴィラン悪役風味の戦士だ。

その鎧も兜もかつてとは違い正しく歴戦の貫禄を持つに相応しい逸品であり、実際日常の如く亜竜級モンスターとの衝突にも耐え得る高い防御力を秘める代物だ。

だが、そんな風貌には似合わぬ軽快な退店時の挨拶から、そしてやはりその特徴的な“兜”から……周囲の人は直ぐに納得する。

——ああ、“兜の人”か、と。

……非常に残念な事だが、〈ヘマスター〉に兜を、とりわけフルフェイスヘルムを装備する人は少ない。

致命部位である頸部と頭部を守る非常に重要な防具であるのだが……まあ、〈ヘマスター〉が活躍する様な戦闘、〈エンブリオ〉や〈UBM〉の固有スキルのぶつかり合いには特典武器でもない防具なんて大した防御力を発揮できないのだ。

そうでなくとも〈ヘマスター〉は不死身であるし……そして何より、兜を被る事によるメリットよりも圧倒的に多いデメリットが勝るからだ。

まず金属製の兜は非常に重く、慣れないと装備したまま戦闘機動を行うのは困難であるし、視界も大幅に制限されると言う実利的な面。

そして、この世界を遊戯として遊びに来ている面々からは……頭部の装備と言う、フアッシュオンセンスの見せ所、自キャラの明確な着せ替え要素の基点に無骨な兜なんてありえない、と言うのだ。

……この世界には兜以外にも頭装備は無数にあり、作る事もでき、そして基本的に形状の違いによる防御力の差異こそあれ、それはゲーム的な優位とは一概に言い切れないものがある。

視界系の装備スキルを付与しやすしい眼鏡型頭装備に耐性や多様な装備スキルを両立しやすしい帽子や髪飾り型の頭装備。

被り物の類の頭装備などは素材や付与された装備スキル次第では普通に金属製の兜と同等以上の防御力も発揮する事もあり、そして何より——ネタになったり、格好良かったりするのが多数である。

気合を入れて美男美女にキラクリしたのに顔面を全面覆ってしまったって台無しになる兜とは大違いなのだ！

……非常に遺憾であるが、この〈Infinitive Dendrogram〉における〈マスター〉の兜に対する評価と言うのは、〃色々と不便なのに十把一絡げになりぎ倒されるモブみたいになってヤだ〃というのが大多数なのだ！

そして、だからこそ——初期から兜を常用している〈マスター〉と言うのは目立つ。それも、ある程度特徴的な兜を装備しているのなら尚更——それを元にあだ名で呼ばれる程度には、目立つ事ができるのだ。

そう、つまりはこの俺、〈エンブリオ〉によって〃称号〃コンプ(!?)の業を背負う羽目になった〈マスター〉であるザ・キングこそが〃兜の人〃なのであった——！

さて、そんな俺は今日も今日とて他の〈マスター〉達と臨広パーティを組み、割とよ

く見かける危険指定モンスターの討伐クエストを受注。

そしてその討伐クエストも終え、つい先程冒険者ギルドでパーティを解散してきたばかりという訳だ。

いつも通りの変わりない日常の一日。

——では、その日はなかったのだ！

「——よおおおおおっし！ やったぜレン！ 今日はお祝いダー！」

『ええ。やりましたわね、マスター！ この時をどれだけ待ち侘びた事かつ！』

冒険者ギルドからある程度離れた所で、レンと——俺のへエンブリオ、〔真紡譚姫レジェンダリー〕とその日の喜びを分かち合うのだった。

それと言うのも——

その変化は——恐らく、全へマスターが待ち望んでいるモノ。

〔レジェンダリー〕のアームズ形態——否、カリキュレーター形態のバッジの豪華さは数割増しになり、それから得られる力も今までとは比べ物にならない程に大きい（気がする）。

新たに得た力、新たに得たハイエンドカテゴリーへの進化、変わらぬステータス補正に新たに得た“称号”。

即ち——

——よし、それじゃ改めて……へ上級エンブリオへへの進化おめでとうだ、レン!!
『ありがとうございませすわ♪ これもマスターの日頃の活動の賜物ですわね!!』

そう!

苦節一年。数多のクエストと冒険の果てに俺のへエンブリオであるレンが第四形態、上級へマスターへの証とも言われるへ上級エンブリオへへの進化を果たしたのであった
——!!



——とは言え、だ。

「まあ分かっていた事ではあるが……やっぱりへ上級エンブリオへに進化しても、称号の許容量以外殆ど変わってないみたいだなあ」

「二応、進化する毎に“称号”の効果に僅かではありますがボーナスは付いている筈なのですけどねっ」

その後。

冒険者ギルドから出た俺達は場所を少しお高いカフェテラスで俺とメイデン体になったレンは顔を突き合わせ——「上級エンブリオ」に進化したレンの力を確認していた。

尤も、ある程度の概略はクエスト中、進化した直後に確認していたので今やっているのは進化した能力の確認と言うよりは……今後の為の作戦会議なのだが。

ちなみに、進化おめでどう会も兼ねている為、テーブルの上には「SPとろける黒蜜バナラアイスケーキ」のホールが鎮座している。

ふっ。レンと俺ならこれくらい合間にぺろりなのだ。……リアルでぺろりしたら後々猛烈に後悔する事になるがな！

「進化と同時に新たな称号が二個、そして連鎖してもう一個……最近はあまり増えて無かったから嬉しいもんだ」

「マスターは良くやっていると幸いですわよ？ でも、人々にどれだけ響くかはどうしても運否天賦ですものねえ……」

そうなのだ。

俺はこう見えて……と言う程でもないが、「英雄」を目指す為、そして「レジエンダー」の固有スキルによる「称号」獲得の為にこの一年まあ色々やってきた。

その多くはクエストを介した人助け。（時と場合を考えて）見返りを求めず、可能な限り力を尽くし他の人を巻き込んででも色々やらかし人々の助けになってきたつもりだ。

それと同時に〈マスター〉間での臨公パーティーにも参加し、レベル上げを行うと同時に積極的に自分を売り込んでいった。

戦闘能力としては高い部類ではないが、〈マスター〉は防御特化ビルド、所謂タンク型は人氣がなく供給が少ない為、こんな俺でも役に立つ所はあるのだ。

最初に組んだ彼らを始め、仲良くなった相手はティアン〈マスター〉を問わず相当な数になっていると自負している。

だが……

俺は「レジエンダリー」の詳細ウィンドウを確認し……最初の戦い以降で取得する事が出来た「称号」を再確認する。

《「兜の人」》：パッシブスキル

自身が「兜」に属する頭装備品を装備時、その兜の装備性能を二倍にする。

《「便利屋」》：パッシブスキル

自身が習得している汎用スキル・センススキルの効果に＋１０％の補正を得る。

《「煽り屋」》：アクティブスキル

“挑発”と同時に使用する。対象に「逆上」の状態異常を付与する。

《“ちよつと頭のおかしい人”》：パッシブスキル

自身の精神系状態異常耐性に＋50%の補正を得る。

《“廃人”》：パッシブスキル

自身のHPと【気絶】【睡眠】【強制睡眠】に対する耐性に＋30%の補正を得る。

《“不死身”》：パッシブスキル

自身のHPが0になっても30秒間【死亡】せずに活動する事ができる。

《“チャブ異邦人の物語・メジャ上章”》：パッシブスキル

自身の全ステータスに＋20%の補正を得る。また、自身が獲得する経験値量に＋5

%の補正を得る。

《“名誉欲”》：パッシブスキル

《テイルス・オブ・エピック貴方が紡いだ英雄譚》が他者から呼ばれる“称号”を認める閾値が低下する。

《“メイン盾”》：パッシブスキル

自身のENDに＋50%の補正を得る。また、攻撃を受ける際の衝撃を50%軽減する。

……以上！

《 〃異邦人の物語・序章〃 》 《 〃私だけの同調者〃 》 《 〃見習い戦士〃 》 を入れて、合計で〃称号〃が12個。

しかもその内何個かはレンガリソースを使って名付けている様だし。

それを考慮すると——やはり、少ない、と言わざるを得ないだろう。

……いや、勿論。へエンブリオの固有スキルの数としては十分に多いのは分かっている。

しかし、事は実質ラーニング特化型エンブリオだという事や、単体の性能として見ると下級職のジョブスキル程度の物も幾つかある事を考え。

更にステータス補正やアームズとしての装備補正がほぼ無いに等しい事を含め、その上でWikiやインターネットで見ると他の人達のへエンブリオと比較すると——

「やだ、俺の〃称号〃取得数少な過ぎ……？」

「どうやらこの国の人達にはマスターの良さがあまり伝わらない様ですわね！ 銭ゲバばかりですからねっ」

おっと事実だがそれを言っちゃあ御終いだ！ ついでにこの会話を誰かに聞かれてた場合の俺の評価も御終いだ!!

……事実だが！

だが、それでも俺の事を、俺の活動を評価し感謝してくれている人達ティアンも確かに居ると言うのも事実だ。

最初の冒険編で出会ったナムルさんとか、いつも他の人が請けない依頼を請けてから仲良くなった冒険者ギルドの受付さんとか、門番の衛兵さんとか気風が良い武具屋の店主殿とか、道具屋の婆さんとか、他にも他にも――

「……だが、レンの言葉にも一理はある。別に蔑ろにする気は全くないが、同じ人達とばかり関わっても既に呼ばれている『称号』で呼ばれるだけで、新たな『称号』には繋がりにくいからな」

「『英雄』への道は長く険しく、ままならない物ですわ……我ながら不甲斐なくて申し訳ないです」

いや、レンがちゃんとやってくれている事は知っている。

正しく俺の『半身』として、ログイン時間の割に大した成果を上げられていない俺をずっと、変わらず応援し支え続けてくれている。

今でこそ現状を確認して若干凹んでいるが、それでも常日頃から俺念話の中で明るく声を出して俺の……『俺達』の夢に向かって声援を送り続けてくれた。

現金なものだが、そんな心からの声援があるだけで人は、俺はいつだって全力で目標に向かって進み続けられるという物なのだ。

「そ、そうですもの？ それなら嬉しいのですけど……！」

「うむ。勿論だ。俺は心の中で嘘を吐ける程器用じゃないからな！」

——だが、それはそれとして！

やはり、新たな“称号”を獲得する為には何らかの抜本的な改革が必要な時が来たのではないかと思うのもまた事実だ。

〈上級エンブリオ〉になって新たに得た“称号”——《“名誉欲”》のお陰で敷居が下がっている（筈だ）とは言え、先程の懸念の通り同じ様な事を繰り返しても新たな“称号”を手に入れる可能性は低いのだから。

だが。

「どうすれば有名になれるんだらでしようなあ……！」

勿論。

俺のリアル職業——元、ではあるが——の経歴からすれば、ある程度は思いつくが……それは、リアル側のコネと伝手があるが故に出来る事だ。

誰か有力者にスポンサーについて貰ったり、広告を打ち出して宣伝したり、自分から〔吟遊詩人〕や〔語り部〕（ストーリーテラー）の人らに売り込みに行ったり。

まず現時点でそんな有力者にコネも伝手もなければ売り込みに行ったり宣伝したりする程の財力もないという点を除けばそれらが一番なんだろうけどなあ!

「以前やった様な、『語り部』でまた私達の活躍を語り弾きするのはどうでしょうか?

一度だけでしたけど、前回は結構ウケましたし、またやれば『称号』が手に入るかもしれませんわ!」

「やっぱそれしかないかー。あれは有効な時と場所を探すので割と時間が潰れるんだが……うむ、致し方ないな」

元芸能人としてのリアルスキル此処に極まれりと言うべきか、昔取った杵柄と言うべきか。

下級職である【語り部】のジョブ一つでまあそこそこ見れる即興劇に出来るというのは戦闘能力がそこまででもない俺の数少ない得意技の一つだ。

他の〈マスター〉と違い、〈エンブリオ〉を頼ってより強い力を発揮するのではなく〈エンブリオ〉の力を発揮する為に自らが事を成し遂げなければならぬ俺としては、やはり生来の職を活かすのが最もやり易いのは確実なのだ。

問題は、只でさえ伝手や繋がりのないのにそつちの界限の人に話も通さずに実行したら益々その系統のティアン現地人に煙たがられるという点だ。

……まあ、ぶつちやけ最悪『悪名』でも『称号』に成り得るだろうから究極的には問

題ないが、個人的にはそんな積極的に波風を立てたくはないのだが——

「おや、キングさん。どうやら名を上げる方法を求めているようでは？——もしよろし

ければ私にも協力させて貰っても良いでしょうか？ 悪い様には致しませんよ」

「おお、これは奇遇だな、エフさん！ 何やら妙案がある様だが——是非にお聞かせ頂きたい！」

『わあ胡散臭い人が来ましたわっ！』

「ここら、エフさんは俺的には（多分）良い人だぞ——……胡散臭いのは俺共々あまり否定できないが。

ハイ・セクレタリー
——【高位書記】エフ。

彼はそのジョブと言動で示している様に……この〈Infinite Dendrogram〉の世界に非日常体験の突撃取材を行う為にログインしていると言う奇特な〈マスター〉だ。

俺と彼の接点は彼が以前出していた『質の良い非日常体験についての取材を受けてくれる〈マスター〉を募集します』という冒険者ギルドに貼りだされていた他の依頼クエストと比べても異質な依頼がきつかけだった。

当然の如くそれに応募し、酸いも甘いも混ぜ合わせたログイン時間廃人としてこの世

界に長くいる事で体験した様々な経験について熱演してみせたのだ。

それでエフさんの心を揺さぶれて新たな「称号」獲得の礎になればよし、ならなくて
もこういった他の人があまり請けない様な依頼を請けるのも俺のこの世界でのライフ
ワークの一つだし、何より前述の通りそれは得意分野の一つでもあったからだ。

……結果として、俺の演技のクオリティかそれとも語った体験の内容か、あるいはそ
の両方のお陰かそれとも普通に依頼を請けてくれる「マスター」が殆ど居なかつたせい
か、エフさんは俺の話を大層気に入ってくれて以来、数度に渡つてまた同じ様な依頼を
請け続けている——そんな仲であつた。

さて、そんなエフさんであるが——勿論、リアルで作家であると語るのに申し分ない
程の見識や様々な手段で得たこの「Infinite Dendrogram」での体
験も併せれば、確かに俺達が考えるよりも尚良い案を思い浮かんでいても全く不思議は
ない。

彼には例の取材の際に兼ねてより有名になりたい旨や——「英雄」を目指している
という事を明かしていた。

ならば、それを叶える為に俺の背中を押す事は彼にとってのより良い「取材」になる
のだから。

むしろ、その為に全力で踊る俺を特等席で眺められるという彼にとっては上質の報酬

まであるのだから、彼としては本気で助力してくれる筈だと思いたい。

取材としては俺が成功しようが失敗しようがどちらでも良いだろうが——コケる事が確定している事を眺めるのはそれはそれで詰まらないとか言うだろうからな。

……これまた昔取った杵柄と言うか、普通に体験談だが——作家と言うのは大体そういうものである（偏見）。

「さて、そんな訳で俺としては割と手詰まりに近かったから余程でない限りエフさんの提案に乗る用意はあるが——如何に！」

「私は読心できないのでどういう訳か分からないのですが……何、事は簡単ですし、そう難しい事ではありませんよ。——少なくとも、このカルディナでなら、ね」

そう言い、エフさんは若干溜めて——言い放つ。

金色の眼光を観察と興味の色に輝かせて。隠してはいてもレンが言う様に胡散臭い表情を隠し切れずに——

「キングさん。——奴隷を買ってみませんか——？」



奴隷。

それは——このへ Infinite Dendrogram の世界において認められたシステムの一つ。

実にシンプルに、奴隷契約によつて公的にも法的にも魔法的にも縛られ主人の命令を真つ当させられる——人間。

……システム的には、従属モンスターの対象がモンスターではなく人間であると言

う、ただそれだけの物だ。

【ジュエル】に入れられるという点も、一部のジョブによって配下として強化できると言う点も、従えるのにキャパシティやパーティ枠と言う一応の制限があるという点も同じ。

言葉にすれば、ただそれだけの存在だ。

なるほど、確かに。

自分の言う事を聞く人間が……奴隷が居れば、確かに俺の目的は……有名になると言う事は達成しやすくなるだろう。間違いなく、だ。

直接「称号」を呼んで貰い定着させるのも、広報活動を行う際のサクラ偽客等にも使えるし、他にも他にも……使いだはいくらでもあるだろう。

俺はそれを知っていた。……確かにその存在を知っていたし、それでいて殊更自分から関わっていかうとは思わなかった。

有用性もその存在を示されただけで幾らでも思い付ける程ではあっても、それでも自分から考える様な事はなかった。

……このカルディナならば。

金と欲に支配されたこのカルディナならば——そこまで忌避すらされず、当然の如く多少の金銭によって許されていると、知りながら。

——逃げていたのだ。

ああ、認めよう。その存在を認めたくなかったという事を、認めざるを得ないだろう。

これでも多少のモラルと良心を持つ身として…… “英雄” を目指す者として。

それを認めたからには、知ってしまったからには——何もせずに放置など出来る訳がない。

そうその場を見て、その想いを更に強くする。

カルディナの中も有数の商業都市コルタナ。

一応は気を使っているのか、そのバザールの中でも片隅に位置する様々な他国であれば違法ストレスの物品が集められた闇市。

このコルタナで長く過ごしてきた私も、今まで一度も足を踏み入れなかった場所。

日光を遮る布と、砂漠の上に申し訳程度にござが敷かれたその上に——彼らは居た。

憔悴し切った顔で項垂れる青年が。

困惑した表情で辺りを見る巫人の子が。

覚悟を決めた様に瞳を閉じ耐える少女が。

自らの未来を悲観し物言わず抱き合い温もりを求める二人が。

手足を喪う等と言った障碍すら持つ老人が。

恐怖に震える子供が――

皆一様に、ぼろ布を纏い何らかの束縛効果があるのであろう紋様に加え首輪と鎖で逃げられない様に繋がれ、そしてその前に……彼らの命の値段である値札を掲げさせられ、佇んでいた。

値札には判明している分のジョブ適正の情報や才能、経歴についてもある程度記載されている。

……
……
……
……
……
……
……
……

「――さて。如何でしょうかキングさん。此れならば、此処のラインナップであれば貴方の目的に叶う奴隷も見つけられるでしょうが……如何しますか？」

無言で――無言で考え込む俺に、エフ氏が僅かに楽しげな声音を覗かせながら語り掛ける。

恐らく、俺が何か仕出かすのを期待しているのだろうし、予想していたのだろう。

彼には今までの依頼もあつて俺が所謂「世界派」である事も、どちらかと言えば良識派であるという事も識っているのだから。

一昔二昔前の小説の主人公の様に此処で暴れて奴隷達を華麗に助け出すかあるいは失敗するか——そんな光景を内心で望んでいるのかもしれない。

だが。

(甘いぜ。全然甘いぜエフ氏よ——俺はそんな短絡的に行動する程若くはないんだぜ?)

値札を見て、そして……自らの所持金の総額も頭の中で確認する。

売り出されている奴隷一人一人の状態を確認し——内心で、手順についても繰り返し思考を続ける。

(……俺が買^救えるのは一人だけ、か)

何を選ぶにしても、選ばないにしても……その選択は慎重にしなければならぬ。

こんな大事なところで間違えたくはないし……後悔もしたくないからな。

間違わなかつたが後悔しなかつたが——そう決断したからには後戻りなんて出来ないのだが。

(そういう訳だ。すまんレン。多分大分面倒を掛ける事になりそうだ)

『そんな面倒であれば望む所ですわよ。だって——マスター、凄^い派^手な事をやらかすつもりでしょう?』

その通りだ。

上手く行っても上手く行かなくてもこの国からは出る必要があるかもしれないだろう。

良い事とも悪い事も言い切れる事のできない——“英雄”にはほど遠い行為かもしれない。

それがプラスになるのかマイナスになるか、博打でしかなく——

『——博打、上等ではありませんか。マスターは、私のマスターですよ? 恐れるものなど何もありませんわ!』

……頼もしい奴だ。とても有難く、嬉しくもある。

だが、それで決意は固まった。

後は……この中から、誰を選ぶかだが——

「……キングさん? 如何されるかお決まりになりましたか?」

「おおっと。すまんすまん。少し考え込んでいてな」

無言で、レンとの念話と思索の内に耽っていた俺を呼び戻したのはエフ氏の声だっ

た。

焦れたのか、それとも普通に待たせてしまっていたのか……これは多分後者だな！

だが俺は謝らない！ エフ氏もこの先を見たくて待っていたのだから。

ならば、見せないなんて意地悪は言わないさ。

むしろ――

「なあエフさん――ちよおーつとばかり手を貸して貰って良いかな？　なあに、エフさんにとっては悪い様にはならないだろうさ――」

僅かに驚愕した様な顔のエフ氏は――にやりと顔を綻ばせ、頷く。

当然そう来るだろうし――俺もきつと、相当に悪い顔をしているだろう。

そうと決まれば善は急げだ。

数は力、俺はこう見えてへマスターのコネもティアンのコネもまあそこそこある方だからな。

だが、まずは――

「時間を取らせて悪かったな店主。早速で悪いが、奴隷を一人買わせて貰おう。選ぶのは――」



□〈商業都市コルタナ〉冒険者ギルド・個室【生贄】エメル
今日も今日とて、都市国家群カルディナを選択した〈マスター〉達の初期スタート地点であるコルタナ——その多くが利用する冒険者ギルドは活気が途切れぬ満員御礼状態であった。

しかし、そんな時でさえもその冒険者ギルド内に休める箇所と言うのは幾つも存在する。

一つは当然、冒険者ギルドの従業員達が作業する作業場。

受付とは違い、主に書類仕事や手続きの確認等を主とするそこは受付程ではないが相応に修羅場であり……それでも「マスター」が増加し始めた直後と比べれば天国と地獄と言う程に、今は環境が整っている。

空調を整えるマジックアイテムやBGMを流すマジックアイテムなどがふんだんに使われ、快適な仕事環境になっているのは一度現場が潰れかけて市長が大損を喰らいかけたからだと言う噂がまことしやかに囁かれたり囁かれなかったりするが、それはさておき。

もう一つは——冒険者ギルドの個室だ。

防音や対スキルの防備も整った標準的な個室であり、ロビーや受付で対応するのが失礼に当たる相手や密談目的で使用されたり、秘密の依頼をされる時等に主に使われる事もある。

また、ギルドからの評価が高い個人などからは多少の金銭によつて貸し出される事もあり——そして今、その役目の通りにとある一人の冒険者……「マスター」に借り出されていた。

尤も、今現在この個室を借りた「マスター」はこの一室には居ない。

一人の少女を、つい半刻前に購入した「奴隷」の少女をこの部屋に残し、暫く此処で待つ様に告げて退室してしまったからだ……

（私、これからどうなるんでしょう……死にたく、ないです……）

その境遇故か生来の物か、くすんだ灰色の髪に金色の瞳をした小柄な少女——ここに連れてこられた少女、〔生贄〕エメルはそう心の中で呟く。

口に出して呟けば、何らかの形で自身の主であるあの人に自分の発言が聞かれば、何が切つ掛けで苛め抜かれ、殺されるか分からない。

何せ、自分は「奴隷」なのだ。

もはや誰に助けを求める事も出来ず、他者に生殺与奪の一切を握られた身。

その手綱の握り手である主人に媚び諂うしか生きる道のない……人型範疇生物としての、最底辺。

そんな存在に、自分はなってしまったのだ——

（こんな事なら、お母さんの言う事、もっとちゃんと聞いておくべきでした……）

ひと月前までは、まさか自分が奴隷になるだなんて想像もしていなかった。

両親共に健在で、周り比べて裕福ではない物の、貧困という訳でもない——どちらかと言えば余裕がある家庭であったのだと今更に回想する。

そして、そんな家庭ではだからこそか、何度も何度も忠告されたのに……結局彼女は欲をかき、慢心し——挙句の果てにこの結果だ。

本当に、口が酸っぱくなる程に言われていたと言うのに。

——「カルディナでは、他者の事を信じちゃいけないよ」、と——
その言葉を、懐かしい声音を思い出し、目尻に涙が浮かび……慌てて纏っていたぼろ布で拭い去る。

何度自戒したってし過ぎるという事はないだろうから。……何が原因で主人に——
人外魔境の怪物である「マスター」の癪に障るか、分からないから。

(……怖い、です……)

自らの境遇を、将来を恐れ案じ縮こまるエメルであつたが——それも無理のない事
だつた。

何せ、彼女を買つた主人——「マスター」、ザ・キングは全身を敵つい威圧感を放つ全
身甲冑と兜で覆つた大柄の鎧騎士姿だつたのだ。

それも、道中は何か考え事でもしていたのか口数少なく、それでも知つてか知らずか
その相貌からエメルに対する恐怖だけは与え続けていたのだから。

そんな、エメルにとつて恐怖の人となつた主人に、「奴隷」としてこれから何をさせ
られるのか——考えるだけで恐怖を呼び起こすと言う物だ。

愛玩奴隷としてなら、そんなに問題はない。

問題がない訳ではないけれど——奴隷としてはまだマシな方だ。

年齢や容姿からしてその可能性が高い事は彼女を売った【スレイブディーラー 奴隷商】から聞いている。労働奴隷だったら……体力はそんなにない為、家事程度であればともかく重肉体労働をさせられたら満足に働けないかもしれない。

それは困ると言うよりは……怖い。

罰を与えられるかもしれないし、捨てられるか、あるいは——最悪の可能性すら過ぎる事になる。

戦闘奴隷であれば……彼女程度の戦力がへマスターの望む戦力になれるとは思えない。肉壁にさせられるのはできれば勘弁したい所だった。

彼女とて、両親以上の才能を——上級職になれる程の才能があり、それで慢心したとは言え、その程度の才能しかないのだ。

伝説に謳われるへマスターの戦いに巻き込まれては、命が幾らあっても足りないだろう……

でも、しかし……それですら、最悪の可能性と比べれば、全然マシだと思っている。

そう、カルデイナの奴隷の間でまことしやかに囁かれる『改造人源』エラリスの材料に——

「よおおおつしできたあーっ!! 待たせたな、エメルさんっ!!!」

「きやああああっ!!?!」

「うおおおっ!?!」

突如扉を開き部屋に入ってきた鎧騎士——ザ・キングのその声に驚愕しつつ悲鳴が上がり——直後に蒼褪めて口を抑える。

——やっってしまった。

主の来訪に驚いて悲鳴を上げるなんて、奴隷としてあらゆる意味であつてはならない失態だ。

——駄目だ。いけない。不味い。すぐに謝らないと……！

「も、申し訳ありませんご主人様！　これは違……違うんです、私が勝手に驚いてしまつたせいで——」

「む、うむ。あー、俺もちよつと急だったな」

「いえっ！　ご主人様に落ち度はありませんっ！　私が——！」

恐怖と、混乱。

彼女の境遇と状況に先の驚愕と合わせて、最悪の可能性まで想像してしまい恐怖に震え謝罪を繰り返す事しかできないのも、致し方ない事だろう。

相対する主であるザ・キングも全身甲冑に兜と言う、表情も何も見えない姿だと言うのもそれに拍車掛けていたのだが、それはともかく——

『マスターマスターっ。わたくし私、今になつて気付いたのですが恐怖の悪感情はあまり口に合
われないみたいですよ……』

「ええい、今言う事がそれかっ!? ほらエメルさん? 見ての通り俺は全然気にしてないから顔を上げてくれー」

『マスターマスターっ。マスターの装備的には見ても何も分かりませんわっ。むしろ【戦鬼の兜】が威圧感マシマシですわよっ』

「えっ……か、格好良いだろう? 角だぞ角つてああすまん怖がらないでくれ!」

『マスター、私が思うにとりあえずまず例のお願い——“命令”をしましょうっ。彼女みたいな子の場合それで落ち着けられると思いますわ』

「だが、あれは^{命令}きちんと説明してからと——」

分からない。

彼女は、エメルは眼前で独り言で会話をしている自分の主の事が——何も分からない。い。

だが、それでもこれ以上失態を犯さない為^にその言葉を一語一句漏らさぬ様湧き上がる不安と恐怖に抗いながらも聞き続け——彼女に何らかの“命令”をしようとしているという事は、何とか理解する事が出来た。

命令されるという事は——彼女が何かしらに必要とされている、という事の証左に他ならない。

——必要とされている……まだ、私は必要とされている！

必要とされているなら、命令されてやるべき仕事があるのなら——その間は最悪の可能性から逃れられるし、先の失敗を取り戻す機会チャンスになるかもしれない。

そう考えたのは彼女の混乱したままの思考か、それとも素の思考か……だがどちらでも関係ない事だ。

眼前の「ヘマスター」、ザ・キングの「奴隷」であるエメルに、それ以外の選択肢なんて元よりないのだから。

故に。

「——エメルさん。早速ですまないが君に「命令」させて貰おう」

「——はい、ご主人様。何なりとお申し付けください……」

そう、例えばどんな非道で過酷な内容であっても……「奴隷」は「主」の「命令」に逆らってはいけない。

だから、エメルは頭を下げつつも目を固く瞑り、その為の覚悟を——

「良かった！ じゃあ——これを」

——覚悟をしていた彼女に差し出されたのは……分厚い、何らかが書き殴られた紙束だ。

……何らかの書類と言う風でもない、台詞の様な物が掛かっているだけの、紙束だ
 ……

分からない。やはりへマスターの……ご主人様の求めている事が分からない！

もしや自分は奴隷としてもダメダメなダメ人間なのは、と一瞬だけ自問しつつも、
 新たな失態、恥だと自認しつつもその「命令」を達成する為に、聞かねばならない……

！

「……あの、ご主人様。これは一体なんでしょうか？」

「うむ。良くぞ聞いてくれたな！ それは俺とレンが小一時間掛けて書き上げた逸品——
 」

——彼女は知らない。分からない。

鎧騎士の姿をした彼女の主、ザ・キングは実の所彼の奴隷であるエメルを酷い目に合わせる気なんて毛頭ないと言う事も。

彼女を購入した目的も奴隷として酷使させる為ではなく、可能な限り便宜を図り救済する為と——そしてもう一つ、ある大きな目的の為であると言う事も。

そして、彼自身がTYPE：メイデンのへマスターの世界派であり——その中でも突拍子もない事を仕出かす所謂変人の一人であるという事も——

「これは、この後やって貰う仕事の——台本だ!!」

「……
??????」

尤も……仮にそれを理解していた所で。

奴隷である彼女に、既に万全に準備を整えてある、この後に彼が起こす“事件”を止める術はないのだが——

T o b e c o n t i n u e d ……

ザ・キングの場合／彼は《 〃■■■■〃 》：後編

□〈商業都市コルタナ〉【生贄】エメル

(いやいやいやいや——やっぱり、これはどう見ても普通じゃないですよねっ!?)

〈商業都市コルタナ〉、その巨大オアシス前に位置する大広場。

オアシスの冷の恩恵を授かりこの砂漠の中でも快適に過ごせる為日中はほぼ毎日人で賑わっている所だが——今日は何時にも増して、倍以上の人が押し掛けていた。

人人人人人——その人波の最前列に台があった。

お立ち台だ。地属性魔法で即興で作られた簡易舞台。ステージ

この場集まっている人々が注目しているそこに——一組の主と奴隸、即ちザ・キングとエメルは立っているのであった。

常の鎧兜の姿のままに、あるいは“兜の人”の知名度も漏らさず使う為に。

【拡声の指輪】で集まった全ての人に、否さ此処に居ない人にも聞こえる様に——ザ・キングは声を上げる。

「——諸君！ 今日は急な呼び出しにお集まり頂き感謝する！ 俺は今回皆を集めさせて貰った首魁のザ・キングだ！ どうぞよろしく!!」

そして、その言葉の通りに——この場に集まった多くは彼や、彼の知り合いの伝手で呼び集められた〈ハマスター〉を中心とした者達であった。

臨公パーティで組んだ者、依頼クエストを共に達成クリアする為に組んだ者、ただ純粹に助力された者、ただ純粹に気が合った者等、理由は様々だ。

そして、そんな彼の伝手の中でも金満な者であったり更にコネや伝手を持っている者であったり通信系の〈エンブリオ〉を所有している者に概要だけ説明しお願いし人を集めて貰った結果が——この大賑わいであった。

おそらく、此処に来てはいる多くの者が一体今から何が始まるのか、言われるのかも分からないままに集まってきているのであった。

……それ自体に別に問題は何かもない。

何せ彼らは〈ハマスター〉なのだから——仮にそこまで呼び寄せていなくとも、イベントの気配があれば何も言わずとも寄ってくる、そういうモノだからだ。

「さて、長々と挨拶できない事もないがきつと誰も求めていないだろうから手短に行か

せて貰おう。——議題は、〃このカルディナと言う国家における人権意識の希薄さ〃だッ!!」

だが、初っ端から飛び出た言葉は——そんなへマスター〜達の大半が困惑するものだった。

それはそうだろう。考えるまでもなく——このカルディナと言う国は、彼らが来る前からこうなのだ。

そこに疑問を挟み込む意味も必要もなく、公式サイトにすらそう記載されている〃設定〃だ。

〃中央大陸の中心に坐する、金で全てが決まる商業都市国家群〃である、と——

「なるほど確かに！ 確かにこの国は以前から、ずっと前からこうだったらしいな。金が無ければ人非人で、金さえあれば全てが許される。借金を返せなければ即奴隷に落とされても誰一人も擁護しない——そんな国が今俺達が居る国だ！」

そして、続く事実その物である言葉に——事実その物であるからこそ、苦い表情をするへマスター〜も多少は出てくる。

それでもまだ多数は平静の顔であったり嘲笑しながらその喜劇を見てはいても——この広い国なのだ、当然キングの他にもそういった「マスター」は居た。

見て見ぬ振りをしようと、「己の手の届く範囲」で善行を成していようと——変わらない。

この国はそういう国であると言う現実には。

——少なくとも、今現在は。

「故に、敢えて言おう！——お前達、それでいいのか!？」

そして、次の言葉は逆に全く抽象的であり、聞く方の「マスター」達にも困惑の色が強まる。

何を指して言っているのか、どんな目的の発言なのかの真意を読み取れず。

その真意を読み取れた者は僅かしか居らず……キングはその困惑に追撃する様に続ける。

「お前達も、この世界に来る直前に言われただろう。——この世界で、俺達「マスター」は何を、どんな事をやるのも自由なのだ！」

公式サイトにも書いてあっただろうし今までの生活で十分分かっていよう。――俺達（マスター）は（エンブリオ）に選ばれた者でこの世界でも特別扱いされている者なのだ！」

――それは、この場に居るほぼ全てのティアンには理解できず、されど（マスター）であればこそ理解できる台詞だ。

自分達は特別なのだ、一種の特別階級なのだ、何をしても良いのだと言うある種傲慢な台詞――

だが、それは間違いなく真実なのだ。……多重の意味で。

彼らはその行動の自由を遊戯ゲームとして管理者たる管理AI達にも保証されていて、それどころかそんな自由を推奨されている立場。

そして、彼らが持つ（エンブリオ）を含む（マスター）としての多くの特権もまた、この世界の本来の住人たるティアンは持ち得ない特別その物の証。

ならば――

「それなら――俺が、俺達が “主人公” なんだ!! MMORPG するのはそういうもんなんだぜ!!」

そんな子供みたいな事を臆面もなく言い切った。

こいつマジかよ、とかうわあ……という視線も大分混じってきたが、それでも話の注目度は間違いなく高まってきているのを肌で感じる。

だから——ここで本命を投入する。

「勿論。だからこそ俺も自由にやらせて貰っている!! 横のこの子は俺が買った奴隷の子だ。どうだ可愛いだろう!!!」

そう言い——傍らで直立しずっと黙っていたままだったエメルへ手を向け注目を集める。自身には若干の煽りと罵声を集めながら。

……台本通りに。

——もう直ぐ私の出番だ。

出番を前にして、瞑目し集中して精神を整える。

彼女自身が行う役割自体は大した事ではない、と自身の主^{キング}から言われているし、奴隷の彼女にそれを疑う余地はない。

事実……既に此処まで公権力からの妨害が入っていない時点で、彼の目論見は既に達成されているも同然だった。

自分一人の力で出来る事なんて高が知れている。金、コネ、その他あらゆる力を使つて尚改革だなんてそう簡単に果たせる訳がないとキングは理解していた。

だが、その為の「芽」は打ち込める。

この演説を聞いた彼らが、そういう状況に直面した時に、ふとこの時の事を一瞬でも思い出し——そして、行動を起こす可能性が出来るのだと。

その程度の助力であれば、ある程度注目を集め耳目を集めたこの時点で達成できるのだと、俺程度が持つ力でもできるのだと、彼は語っていた。

故に……厭うのであればその時点で拒絶してくれても構わない。何なら最初から失敗したつて構わない、と。

それで怒る者など誰も居ない——少なくとも、奴隷の主としての自身は絶対に怒り叱るつもりはないのだと断言された。

そもそもその場に連れていかれ、衆人環視の中晒されると言うだけで普通であれば苦痛であるのだから、そうなって当たり前なのだと始める前から慰めてくれていた。

それは、その計略は、「マスター」としての、ある程度の年長者としての視点であり、ティアンティアンの若輩者であるエメルには全ては理解できなかつた。

—— だけど ——

—— 失敗したくは、ないですわね……！ ——

親身に案じ、世話をしてくれた彼の足を引つ張りたくはない。そう思い、無言のままに決意を固めていた。

「だが、先に言った様に俺としては金で命を買う様な事はそう簡単に賛成したくはない。故に——こんな物を用意させて貰った！」

そして取り出されたるは——一枚の「中級契約書」。

——先刻、エメルが差し出された台本の紙束と共に差し出された紙片の一枚と同じ物だ。

その「契約書」には以下の様な事が記載されていた。

——この後にザ・キングはエメルの衣・食・住と労働に応じた給料を保証し、エメルはそれに応えた労働を行う事。

——但し、エメルはザ・キングの「命令」を拒否する権利を有するものとする。

——例外事項として、「奴隷」である間はエメルの生存を優先する為に「ジュエル」への格納は許可を取らずザ・キングの判断で行う物とする。

——両名は同文が書かれたこの「中級契約書」を一枚ずつ所持し、自由にこの契約と同時に《奴隷契約》を解除できるものとする。

——エメルとザ・キングは“奴隸”と“主”でありながら対等な関係を築く事とする。

……あからさまに、奴隸であるエメルが有利な契約を為されている【契約書】に、既にサインされているのが見えた他の「ヘマスター」達の心情は如何程の物か。

だがそんな物関係無いとばかりに。

「俺がこの子を買ったのは同情と憐憫と多少の打算だ。知っているか、売られている奴隷って言うのはプライバシーなんてあつたもんじゃない。そのプライドを折る為か、俺みたいなから同情で買わせる為かは分からないが、奴隷となった経緯まで詳らかに明かされているもんだ。……奴隷になる様な不幸な経緯が、所狭しと並べられているだ。勿論、この子みたいな子も含めてだ。……この子の場合——」

そこで一旦区切り——エメルの方へちらり、と兜で隠れている筈の視線を向けた。

——この状況で話せるだろうか、話せてくれるだろうか。

——いや、やはり即興だったし無茶があつたか。概略程度であれば俺が——

そんな一瞬の思索の先に、一步前に出て注目を集め再度語り始めようとしたキング——を制し、顔を上げる。

顔を上げた先に見えるのは、驚愕の雰囲気を感じさせる視線を向けるキングと、数多

の興味と多少の同情の視線を向けるへマスターへ達。

——大丈夫。これくらい……あの時に比べたら、全然怖くないです。

——それに、この程度でできなきや——ご主人様の献身に応えるなんてできっこない

……！

「——ご紹介に預かりました。私はご主人様——ザ・キング様の「奴隸」となったエメル、と申します——」



エメルは、カルテイナを構成する都市国家の一つ、へ迷宮都市エルトバウルへのとある【魔術師^{メイジ}】の夫婦の一人娘として生まれた。

下級職と言えど複数の属性の魔術が使える【魔術師】の需要は高く、彼女も富裕層でこそなくとも不自由する事なく育つ事が出来た。

そして、幸いな事に彼女自身も両親の才能を色濃く継ぎ、齢12歳にして【魔術師】のジョブを得て未熟ながらも両親の薫陶を受け順調にレベルを上げる事が出来た。

正に順風満帆……とまで言えるかはさておき、幸せな、安定した未来が拓かれていますと信じられていた生活の日々。

それに罅が入ったのはエメルのジョブレベル50に達し、「魔術師」のジョブをカンストした後の事。

——エメルに、両親が持っていないなかった、「上級職」に就ける程の才能があると判明したからだ……

それも、詳細に調べてみればカルディナにおける一流の壁——合計レベル300を突破できるかもしれないと言う程の才を、彼女はその身に秘めていたのだ。

それが判明した時、両親は我が事のように祝してくれた。

だが、エメル自身は、カルディナのテイアンの多くがそうである様に——欲を出してしまつた。

——それ程の才能があるのなら、もつと良い師匠に鍛えて貰つた方がより強くなれるのでは——？

……実際、それは事実なのであった。

両親は「魔術師」の他は毒にも薬にもならない多少の内職くらいしかできない下級職を一つ、それもレベルカンストできない程度の才能しかなく、合計レベルの限界は100に満たない程度なのだから。

【魔術師】から派生した上級職に就けるその時点で、上級職に就きたてで覚えられる上級魔法一つだけで二人同時に戦っても勝てる程度の實力差。

それが、下級職と上級職の差なのだから。……尤も、上級職と超級職の差はそれにも増して酷い物であるが今は関係ないので置いておく。

結局、両親とは喧嘩別れに近い形で別れてしまい——同じエルトバウルに居た一人の【大魔術師^{ウイザード}】を師匠とし頼る様になった。

合計レベルにして400越えであり、エルトバウルの上層部からの信頼も厚い人物だった。

エルトバウルで過ごす【魔術師】一家の娘として知っている顔でもあり、彼ならば適任だろうと考えたのだ。

——結局、その彼には騙され欺かれ、奴隷に落とされる事になったのだが。

より【魔術師】としての實力を高める為の近道とは何か……それを体現するジョブを勧められ……深く考えもせずに、就いてしまったのだ。

いや、深くはなくても確かに考えはした。

その上で——そのジョブ、そして構成はエルトバウルに滞在する術師系統の「ハマスター」でも就いている者が多い有効なジョブだったのだ。

事実それは後に「最強ビルド論」の中にも言及される程の物であるのだから、その誘

い文句は間違っていないのだ。

間違っているのは——一言で言えば安全マージン、ただそれだけだった。

それが無ければ、あるいは前提としてそれを持っている（マスター）でなければできない様な物ではなかったのだ——「〔生贄〕MP特化理論」と言うのは……………

そして、この欲の坩堝であるカルディナで、〔生贄〕と言う——あらゆる抵抗ができない、文字通り生贄のジョブに就いたエメルは本性を現した彼によって奴隷として売り払われた。

上級職に就ける才能に浮かれた程度で迂闊にも〔生贄〕なんぞに就く、愚かな小娘として……………

あるいは〔奴隷商〕全体がそうなのかも分からないが、少なくとも彼女を買い取った〔奴隷商〕の環境は、劣悪の一言だった。

日除けも十分に出来ず、飲食も碌に与えられず、粗悪なサンダルによってただじつとしているだけで砂漠の熱で足裏が焼けそうだった。

常日頃から罵声を浴びせられ自尊心を折り奴隷に相応しい様に躡けられ、満足に休む

事すら簡単には許されない。

特にエメルの場合は、【生贄】に就いていたせいでMP以外の全ステータスに大幅なマインナスを掛けられていた為に……辛かった。

恐らく、あの時のエメルの身体の貧弱さはジョブに就いていない子供と同程度だっただろうから。

……それでも死なずに済んでいるのは「奴隷商」の采配なのだが、決して「おかげ」とは言いたくない程には、あの状況は辛かった。

そんな奴隷達がプライベートも何もあつたものではない値札を付けさせられ、スペースを取らない様に固まって愛想笑いを強制させられるのだ。……そんな状況で愛想笑いを作れる子なんて、殆ど居ないのに。

身体的にも、精神的にも、限界だった。

それでも、自業自得なのだとか自戒して、耐えて耐えて耐えて耐えて——そして、エメルは、主^{キング}に出会った。

——救ってもらった。助けてもらった。

だから、私は——



「——奴隷には、そんな私よりも軽い理由でなつていた人も、重い理由でなつていた人も、どちらも多数居ます。そんな私達を少しでも憐れに思うのであれば……どうか、私のご主人様の話を聞いて下されば嬉しいと、そう思います——」

「お、おう。……ありがとう、良く言ってくれた。はい、拍手。皆この勇氣に拍手——」
 ぱちぱちぱちぱちぱち……とキングがするのと同時に疎らな、そして次第にノリと冷やかしの意味が込められた大量の拍手が送られる。

若干キングが想定していたノリとはズレてしまつて居たが——何、即興劇で修正を入れる程度は楽勝だと考え、更に続ける。

追撃する。彼らの良心に、自尊心に、彼女の話に心打たれたその意識に——

「——改めてだが、もう一度言わせて貰おう！ 俺達は、君達は自由だ！ 運営管理が言う様に何をしてもしなくても良い。己の心のままに動いて良いんだ！」

「俺がやった様に奴隷の子を救つてやつても、抜本的な改革をへマスターの方で企画し

たつて良い！ 逆に奴隷を集め良からぬ事にしたり奴隷を増やしたりする事だつて俺が止められる事じゃない」

「だが、それでももし、この話になしでも感銘を受けてくれたのなら——」『貴様ら——ッ！——そこで何をやっておる、今すぐこの危険な集会を止めんか——!!!』

「……ちいっ！ 良いタイミングで！」

キングの話に被せる様に……より高性能な「拡声の指輪」による特大の怒声がある場に掛けられる。

それは、この場に集まってきた「マスター」よりも遙か後方に、幾人もの暴力的な気配を醸し出す私兵に守られた人物が放った物。

不健康な相貌に相当な肥満体を誇る男性——この「商業都市国家コルタナ」の市長、ダグラス・コインの物だった。

コイン市長は肩を怒らせ私兵達と共に集会を解散させようと——

「——まだまだ話途中で悪いが、皆集まってくれてサンキューな！ そんな訳で前科が着く前に皆解散だ解散！ 「マスター」バンザイ！」

『何を勝手な事を——ッ!?!』

その言葉を聞くが早いか——多くの「マスター」達は一目散にその場を離脱……解散する。

別にその様な段取りをしていたと言う訳ではなく、ただ単にイベントがそれで終わり、そして追われる身になりそうであるのだからキングが言う様にその前にとんずらする。

多くの遊戯派の「マスター」達はそうして——僅かではあるが先の話の影響か、コイン市長とその私兵に敵意を向ける「マスター」を……キングは壇上より降りて牽制する。キング自身は……当然ながら、この事は想定済みとして今回の事件を計画していたのだ。

そう——己を主犯として。

なればこそ、いやそうでなくとも、体制に抗う心を持った「マスター」が力を発揮するのはこんな所ではなく、もっと相応しい場面がいつか来るはずだと信じている。

だから、咎を受けるのは自分だけで良いし——だからこそ、エメルとの先の「契約書」にも一計案じてあったのだから。

「そういう訳で。……ごめんな、少し窮屈な思いをさせるかもしれん」

「いえ。私こそお手を掛けます。……後は、よろしくお願いします——ご主人様」

「ああ、任せろ。《送還》」

多くのヘマスターも気付かなかつたであろう【契約書】に仕組んだ穴——それは【契約書】の効力が発揮されるのを“この後に”——即ち、この集會に纏わる騒動が終わった後に先送りすると言う物だった。

故に、今現在は未だその最中であり——エメルとキングは通常の奴隸と主人の關係と何も変わらず、エメルはキングの出すあらゆる“命令”に逆らえない。

——ザ・キングの所有物に過ぎない存在のままだ。

……今は、そうでなくてはならないのだから。

【契約書】の効果が有効であり、エメルとキングの關係が実質的に対等の状態であれば……そこを市長に突かれ、エメルが、或いは後々にも続く何らかの責を負わされる可能性があつたかもしれない。

だが……【契約書】はまだ効果を發揮していない。

エメルは命令に抗えない被害者という立場のまま。……そうでなければこんな無茶な場に立たせられない。立たせられる筈がない。

それでも、傍にずっと立っていた彼女と言う存在が、かの【契約書】の存在がなければ彼の言葉の説得力は大きく変わってきていただろう。

或いは、彼女に奴隸として強制なんかせず、ただ一人で立ち演説するだけでも十分に効果があつたかもしれない。

もしくは、こんな事を企画せず彼のコネで、伝手で、金で、叶う限りの奴隷を解放してあげた方がより多くの人々を救えたのかもしれない。

それでも……キングは最もヘマスター達に訴えかけられるであろう方法を、自分が出る中で最も効果的であろう方法を選んだ。

結果として、キングは逃げも隠れもせずにコイン市長に連れていかれ……予想通りにコルタナから追放される事となり、カルディナ全体としても準指名手配の様な扱いを受ける事となった。

当然、カルディナで最も栄えている都市であるコルタナに入れないとなればカルディナでの活動はほぼ不可能となり、他国へ出奔する羽目になり、今まで築いてきた多くの伝手やコネを喪う事となる。

その旅路に付いていくのは、彼のヘエンブリオンである【真紡譚姫 レジエンダリー】……レンと——“奴隷”として、付き人として付き従う事を選択したエメルだけであった。

もはや約一年も掛けて培った多くの繋がりを残しカルディナを去り、それ以上あの国の奴隷を救う事も関わる事も難しくなり。

そして一時ではあれど真正正銘の“奴隷”として活動させてしまったエメルを従え。

果たして。その選択が、その旅路が、その未来が……より善いモノになるのか——
それはまだ、誰にも分からない——



——全て遍く未来を見通す力を持つ、 “魔女” 以外は。

「ええ、使い物にならない愚者であれど……その程度には正確に動いて貰わないと、駒としての価値すらない。……それも長く使える物ではないのだけれど」

「あの演説によつて、カルディナの〈マスター〉は僅かに活性能度が上がる。だから、止めるのは話がある程度済んでから。後に手に入る手札（超絶）からすれば、その方向がどうである問題は無い」

「それ以上に後の愚者の肅清の手間が幾つも省けるし、カルディナの……他の他国の世界損害も僅かでも増える」

「あれは……これ以上はカルディナにいてもプラスにはならない。結果としては最善だったわね」

「——誰にとつても。そうでしょう——未来の ナイト・オブ・フォートレス 砦 騎 士 ——」

その者がかの場における顛末に大して暗躍していた事を知る者は少ない。

その者が口に出すその言葉、その単語の意味を知る者は少ない。

まだ〈超級〉と言う概念すらへマスター〉の中で生まれてすら居らず、世界損害と言う単語の意味を知る者すらこの世界にどれだけいる事か。

そして、彼女が口に出すその超級職——条件のロストしたそのジョブに誰かが就く等という未来も、予想できる筈がない。

だが、それできるが故に——“魔女”。この業と欲の渦巻くカルディナを支配する者であるのだから——

そして、それでありながら……彼女の言う通り、最早彼にとつては関係のない蛇足。彼の新たな旅路は、新たな未来は始まったばかりなのだから——





□ Result……

【《^{ティルス、オプ・エビツク}貴方が紡いだ英雄譚》が発動】

【“称号”を確認。“称号”の指向性を解析】

【対象にリソースの増強、固定化を付与——】

【称号、《“偽善者”》を獲得しました】

【データを開示します】

《“偽善者”》：パッシブスキル

自身の全ステータスに＋「今まで助けた人数×0.5」の補正を得る。

【《^{ティルス、オプ・エビツク}貴方が紡いだ英雄譚》が発動】

【“称号”を確認。“称号”の指向性を解析】

【対象にリソースの増強、固定化を付与——】

【称号、《リベレイター解放者》を獲得しました】

【データを開示します】

《リベレイター解放者》：アクティブスキル

パーティメンバーが一人以上存在し、パーティメンバー一人のHPが半分以下の時のみHP・SP・MPの最大値の10%を消費して発動可能。

自身が受けているあらゆる制限系状態異常の効果が無視し行動が可能になり、自身のSTR・AGI・ENDが2倍になる。

このスキルを使用中、毎秒HPを最大値の3%消費し続ける。

このスキルはスキルの発動条件が満たせなくなった時、自動的に解除される。

ザ・キング彼の冒険は、まだ終わらない——

E p i s o d e E n d ……

コールの場合／天は二物を与える：前編

□ ■ ????
〔グレイト・ハンター〕
「大狩人」コール

夢を見る。

過去の……我武者羅にそれと対峙し足掻いていた頃の——無駄な足掻きをしていた頃の、自分の夢を見る。

才タレント持つ者。

天性ジニアスの才格。

才キフ与えられし者ド。

あるいは——最高ハイエンドの才。

破格の——桁違いの才を持って生まれた者が、者達が、この世界には居る。

天に愛されたかのように、世界に愛されたかのように、並の才を持つ者の努力を鼻で嘲笑うかのような才能を幾つも幾つも持っている様な……才能の怪物が。

例えば、幼少期には天才子役、少年期には格闘技の世界チャンピオンとなり、大学の研究室でも多大な成果を上げ頭一つ抜きんでて教授の助手となり、そして運命にも愛さ

れ宝くじを当て億万長者となる——そんな人物。

そんなフイクション染みた人間が居て——しかもそんな人物と轡を並べる事となつたならば……果たして、如何するのが正解だろうか？

その才を恐れ畏怖し、自らから遠ざけんとするか？

……ある意味では、とても正常だ。人は理解できない物を恐怖するものなのだから……ただ情報として知つていただけでなく、実際にあれ程の経歴を為したその本人と才を目の当たりにすれば、そうなる者が出るのも然もありませんと言つた所だ。

才能と言う物は良くも悪くも劇薬だ。過剰に過ぎる才は容易く人を傷付けるのだから。

媚び諂い、その才覚による恩恵を受けんとするか？

……あり得ない。あいつは——埒外の才能を持つ者は凡人の演技程度であれば即座に見抜き突き放すだろう。

仮に慈悲を与えられたとしても……その程度の自尊心プライドすらないのであれば、どうせ長くは持たないが。

縁を結び、共に協力し高め合わんと切磋琢磨するか？

……あり得ない。神に愛された才覚を前にそれが出来るとすれば——きつとその総量は違えど、同じく神に愛された者だけ。

最低でも、その行いを理解できる程度の才能を持つていなければ、蠟の翼で太陽に向かつて飛んだイカロスの如く、惨めに落ちて寄生者の如くなるだけだろう。

だが、もしかしたら――

ならばその存在成果諸々全てを無視し己のペースのまま己の歩みの速度を維持し続けるのが良いか？

……それが出来るのであれば、恐らくそれが最適解なのであろう。

傍にいながらにして過剰に過ぎる存在感と才の輝きを見せるあいつの一挙手一投足を無視し続けられるのであれば、それはそれで別種の才能がありそうだが。

そして……本来あり得ない選択肢の筈だが――それと、その破格の才の持ち主と、敵対したら――

結果として。

自分はいいつの絶対的な敵対者には成り得なかった。

全力を出させられずしなかつただろう。

当然だろう、自分程度の才能ではあいつの物語の中では端役の雑魚的ぐらいが精々であつただろうから。

自分が必死にやっていた足掻きなど、かの才能を前にすれば子犬のじゃれつきにも等しかったであろう。

だが、それで良い。

自分の分は分かっている。自分はそのまでの人物でしかなかったのだと。

きつと、あいつにはもつと相応しき宿敵が——かの才能に匹敵する力を持った巨悪や大敵がお似合いだろうから。

それだって、あいつならば乗り越えるだろうし——どちらにせよ、既に研究室も抜け脱落した自分には、きつと、いや間違いない関係のない話だ。

なのに——自分が見る夢は何時だってあいつのままだ。

ああ、自分でも分かっている。

どう言い繕おうが——自分の脳裏にはどうしようもない程にあの輝かしすぎる才能が焼き付いているのだと。

あれ以来……研究室を抜け身軽な身になった後も、関わる者を見る目には、その基準が“才能”に大きく左右される様になってしまった。

自分の中で、相手を“持っている者”か、“持っていない者”か分別する癖がついてしまった。

これだから破格に過ぎる才能と言うのは劇薬だと言うのだ。

勿論……それが自分勝手な八つ当たりだと、嫉妬、憧憬であると理解している。

だが、それを止めるつもりはない。

止める理由も義理もなければ必要もないし——止める方法もないだろう。

既にそれが自分を構成する大きな個性パーソナリティなのだ——自分の〈エンブリオ〉も示しているのだから。

そう、自分は——





□ ■ 〈ヴァルデイラ大砂漠〉 【大狩人】 コール

——そして、自分は覚醒する。

「——状況はっ!?!」

「あ、コール君起きたあー! あつぶなかつたあ。全滅だと思ったよっ!?!」

どうやら岩陰に寝かされていたらしい。

身体を起こし、パーティメンバーの女性——【高位従魔師】^{ハイ・テイマー}の†聖天使猫姫†^{ホーリーエンジェルみゃー}が、

そして彼女の従属モンスター達が小声で喜びながら無事を案ずる様に自分の顔を覗き込む。

……自身の身体に、どうやら支障は残っていないらしい。

最後の記憶では、あれの攻撃の余波を受け、衝撃と損傷で【気絶】していた筈なのだが……どうやら彼女の従属モンスターに回収され、治療も行ってくれた様だ。

そして、この場に居るパーティメンバーは……彼女一人。

本来は後二人、前衛が居た筈だったのだが――

「……うん。アルファちゃんも、リタ君も、あの一撃で死亡デスベナになっしちゃった」

↑聖天使猫姫↑は自分の考えを肯定し、手鏡を取り出し、そこに今も上空で警戒し見張り続けているであろう彼女の「ラスタ光エレメンタル彩」が自分達を一瞬で半壊させた怪物の姿を映し出した。

そう、それは非人間範疇生物モンスターの中でも驚異的な能力と特異な才を――固有スキルを持つ埒外の魔物。

竜としての強大にしてしなやかな体躯と赤銅色の鱗を持ち、鋭い眼光で慢心もせず
辺りを見回し逃した獲物を探している一匹のドラゴン――竜王。

（U B M）――【炸竜王 ドラグマイン】の姿が映し出されていた――





そもそも、コールや彼女らのパーティがこのカルディナ北部の〈ヴァルディラ大砂漠〉に来ていたのは、依頼クエストを受けた為だった。

最近、このカルディナ中央北部の周辺のモンスターに今までは見慣れなかった種が増え、それにより若干の生態系の混乱とモンスターの全体的な活性化が生じていた。

最寄りの都市と〈厳冬山脈〉の境に当たるこの付近はカルディナにとっても主要交易路ではない為、利益には直結しない物の——カルディナの国の者達は未だに恐れているのだ。

かつての“地竜王事変”の事を……

故に、流石の彼らとて今までその地帯で“オイタ”をする事は殆どなかったし——そこで何らかの異常が起きているかもしれないというただそれだけで気が気ではなくなる程。

だからこそ、このカルディナのティアン達は実力持つ〈マスター〉を募集し——そしてコール達の臨時パーティがそれを請けた。

『周囲の異常の原因の調査、及び可能であればその異常の解決』を請われて。

臨時パーティに集まったのは皆合計レベルもカンストし、カルディナのティアンとは比べ物にならない程の力を持った4人の上級〈マスター〉。

騎兵、前衛系統に特化したビルドをした全身を包む武器防具と鉄馬の〈エンブリオ〉を持ち、物理的攻防両面において秀でた力を発揮できるモヒカン・RTA。

斥候系統職の他速度型に特化したビルドをし、その上で触れればどんな相手でも殺せると嘯く〈エンブリオ〉を持つ少女、アルファ。

ジョブ構成も〈エンブリオ〉の固有スキルも従属モンスター強化に特化しているビルド一致型の↑ホリーエンジェルみゃーし聖天使猫姫↑。

そして……〈エンブリオ〉を使わないうながらも卓越した戦術眼とティアンに匹敵するリアルスキルを獲得している遠隔特化型の「大狩人」コール。

以上、4人に↑聖天使猫姫↑が従える亜竜級上位……〈エンブリオ〉とジョブスキルによつて伝説級モンスター並みのステータスを誇る従属モンスターが4体と、コールが従える「狩人」系統のオトモである狼系モンスター「サンドウルフ」等も含めた、大戦力。

純竜級モンスターの群れですら労なく倒せる程の戦力。

それで居てカンストまで鍛え上げた「斥候」系統や「狩人」系統、また従属モンスター達によつて調査能力も高く、このパーティであれば問題なく依頼を果たせるだろうと、

そう考えられていた。

それは間違っていないのだろう。

……そして、同時に——甘い考えでもあったのだろう。

何故なら、この世界において先に例として上げた純竜級モンスターの群れとは確かに稀で、非常に脅威度が高い存在であるが——それでも、劣るからだ。

それ以上に珍しい〈UBM〉を持つ理不尽な固有スキルと戦闘能力と比べれば——純竜級程度は大した事ないのだから——！

「——情報を再確認しよう」

岩陰に潜みながら、二人とその従属モンスター達で頭を突き合わせて会議を始める。

いつの間に出したのか、コールは羊皮紙に現在位置の地理と共に要点を書き出し、書記も兼任していた。

「えー……逃げちゃダメ？ どう見てもアレが原因なんだから、それを確認したって事で良いと思うんだけどお……」

「そうだな。……こちらの被害も考えれば、嘘偽りなく報告すればそれでも問題ないだろうな」

実際に、この〈ヴァルディラ大砂漠〉で起こっていたモンスターの移動や活性化は「炸竜王 ドラグマイン」が原因だ。

〈UBM〉となり、伝説級となり、力をつけたと確信した「ドラグマイン」がより餌にありつく為に、〈厳冬山脈〉から降りてきた。

追い立てられるように浅層に居た他のモンスター達も〈ヴァルディラ大砂漠〉へ姿を現し、生態系も混乱した――

まあ〈UBM〉が関わる事件としては非常にありきたりな、そんな推移だろうとアタリを付けられるし納得もされるだろうし、事実それが正解だ。

被害の方も遭遇戦で二人が死デスベナルティ亡に、従えられていた前衛の「オーガ・パラディン」が犠牲になり、なんとか二人だけが生き残っている現状……これ以上の無茶は要求されな
いだろう。

だが――

「それで済むつもりならそもそも最初に挑戦だつてしないさ。――何せ、相手は〈UBM〉なんだからな」

「ですよね……まあ、あまり無茶をしないなら私も付き合つてあげるけどお……」

そう……相手は〈UBM〉。このカルディナの隣国黄河であれば――宝物獣と呼ばれる、文字通り特大のお宝なのだから。

倒せば貢献度が最も高い者に固有スキル有する非常に強力な唯一無二の特典武器を授ける、このゲームとしてのエンドコンテンツの一つ。

だからこそ、特典武器を求めて最初に皆意気揚々と呐喊し——そして玉砕したのだから。

おそらく、依頼クエストによつて見つけた自分達が最初に発見したのだからと——他のプレイヤーに取られる前に全力で挑戦したいというのは、ある種当然の思考なのだから。

「でもさあ——勝ち目あるかな、これ？」

そして、だからこそ、エンドコンテンツだからこそその難易度は——極大なのだが。

二人の優秀な「マスター」を、そして伝説級のステータスを持つ鬼をも殺してのけた【竜王】が相手なのだ。

更に戦力が減じたこの二人で討伐する目が見えないと言うのが、†聖天使猫姫†の正直な感想だった。

「二応、相手の能力はもうほぼ割れているんだ。だから——やりようによつては十分可能性があると見ている。どうかかな？」

「えっ、本当!？」

戦っていた時間は一分にも満たない時間だったと言うのに、良く考察できたなあ……
と思う↑聖天使猫姫↑を尻目に、コールは羊皮紙に「炸竜王 ドラグマイン」の能力について記載していく。

【ドラグマイン】は推定で伝説級である事。そして、伝説級の中でもレベル自体は低く、ステータスの数値自体はHP等を除いて純竜級と同程度しかないであろう事。

ただし、それを補って余りある程の固有スキルと——それを運用する技術を兼ね揃えている事も。

一つ目は、【竜王】としての共通の固有スキル、《竜王気》。

シンプリーズベストと言うに相応しい攻防両面において非常に強い力を発揮するそのオーラを持つ【ドラグマイン】はステータス以上の攻防力を発揮する。

ただそれを突破しダメージを与えるだけで伝説級程度の能力値は必要になるであろうと思われる。

……だが、それだけであれば当然、↑聖天使猫姫↑の従属モンスターの攻撃でも有効打を与えられたし、それ以前に亜音速機動で接近するアルファの〈エンブリオ〉の一撃を持つて倒せていただろう。

故に、それ以上に【ドラグマイン】を象徴している強力な固有スキルがある。それが

——《炸竜爆雷》。

変質した《竜王気》を——「ドラグマイン」が自由に扱う事ができる不可視の炸薬の特性を持つオーラを操る固有スキルだった。

設置展開すれば高威力の地雷に、移動に噴出推進力として超加速を行い、攻撃に用いても中距離に爆裂の衝撃を届かせ、当然直接接触れられでもすれば余程にENDが高くなければ体内から爆散させられるだろう。

防御に使っても炸裂装リアクティブアーマー甲の如き働きによつて威力を大幅に減衰されるばかりか手痛い反撃を強い事になる、《竜王気》と同種にしてそれ以上攻性を誇る万能オーラ——それが「炸竜王 ドラグマイン」が誇る最大の固有スキルだ。

罨として、飛び道具として、緊急移動手段として、鎧として——数多の使い道があるそれを正確無比に、無慈悲に運用し敵対者を抹殺する爆裂の化身。

総じて——多少のステータスの低さなど全く問題にならない程に強力で応用性にも富む固有スキルを主力として暴れ回る怪物である、とコールは締める。

それに勝利するのであれば、最低でもあの高出力の《炸竜爆雷》を攻略しなければどうにもならないだろうと付け加えて……………

「……………いやいや、どう見ても無理ゲーじゃないかしらこれは……………」

「そうでもないさ。確かに見た限りあの固有スキルはとても強力だけれど……恐らく、その分消費SPは高い部類だ。クールタイムやチャージタイムの類がある様には見えなかったし、仮に大した消費もなく連発できるのであれば自分達がこうやって逃げ果せている筈がないからな」

故に、「ボス」として見た場合、某狩りゲーの様に長期戦を挑んで息切れした所を叩けば良いだけだ——とは、言うが。

（連発しないだろうからとは言え……ゴブちゃん死んじやつたからあまり無茶させたくないんだけどなあ）

↑聖天使猫姫↑の残りの戦力と成り得る従属モンスターは残り3体。

索敵と攪乱、そして光属性魔法による攻撃を得手とする「ラスターエレメンタル」のランプ。

回復と支援、そして聖属性魔法による攻撃を得手とする「アルケー・ブレス」のテン。防御特化型の天竜にして《人化の術》も使える護衛役である「フェイス・デミドラゴン」のカルーア。

……↑聖天使猫姫↑の《エンブリオ》である「莊厳美麗 ティファレット」による超強化も計算に入れば、確かに耐久に特化した従属モンスター達だ。

コールの使う罨や「サンドウルフ」、弓による牽制も考慮すれば確かに耐久戦をする素地は整っている様に見える。

だが――

「でもコール君。私思うんだけど――あのUBM（ドラグマイン）、多分だけどかなり賢いよ。」

「ああ、ドラゴンだから、ね。動物並みとは言わないし、「竜王」であれば人間並みの知能があつても不思議ではないな」

少なくとも自身の力の効率的な使い方を解し、賢しらに自身の固有スキルの行使に必要なりソース配分までして温存。

先程の戦闘でも的確に防御の薄い方に狙いを定め、弱点を突き、若干浮足立った所を蹂躪される形となった。

今も、このだだっ広い大砂漠に隠れられる場所はそう多くないからか、獲物に逃げられたにも関わらず悠々と歩みを進めていて……むしろ、逃げられる事よりも奇襲を警戒している風にはすら感じられる程。

〈マスター〉について……〈エンブリオ〉について、〈UBM〉の持つ固有スキルと同様の埒外な力を持つ固有スキルの事を知識として知り、そして警戒しているのだ――
そんな相手に、今の面子で相手が精魂尽きるまで持久戦と言うのは……できないだろ

う、まず間違いなく。

それは耐久力が足りないと言う訳ではなく——倒しきる前に、逃げられてしまうであろうから。

退路を塞げる様な数も能力もなく、この遮蔽物の殆ど無いだっ広い砂漠では「ドラグマイン」の《炸竜爆雷》による超加速が無くてすら、逃走を防ぐ事は難しい。

……それこそ、鉄馬による機動力のあったモヒカン・RTAか速度特化型構成と一撃で倒せたかもしれない能力を持つアルファが居れば何とかなつたかもしれないが……

少なくとも、現状の手札では倒し切るのは難しいというか、無理筋なのではないか、と
 †聖天使猫姫†は思うのだが——

「——大丈夫だ。あれを倒す算段はもうついているからな。……〈UBM〉と戦うのはこれが初めてだから、机上の空論ではあったのだが」

「えっ、本当？ ……本当お!?! ど、どうやって……」

「本当だとも。流石に意味もなく嘘は付かないさ。そして、方法は——」

そこで言葉を切り、「狩人」系統の視覚系ジョブスキルによって岩陰の向こうで自分達を探している「ドラグマイン」の姿を見やる。

自身に敵う相手など居る訳がないと威風堂々たる佇まいで周囲を睥睨する様は、「竜

王」の名に恥じぬ威厳を醸し出す様で。

先に推測した通り、本来は未だレベルもステータスも高くない身であろうにその己固有スキルのみの力で、己の才で——全てを蹴散らさんとする「庄」を感じさせる。

そして、それは慢心でも騙りでもなく、只の事実でもあるのだ。

己の力で、己の才で——遍く敵を屠ってきたからこそその自負。それ故の、〈厳冬山脈〉からの下山。

自身に絶対の自信を持つ「強者」の姿がそこにあつた。

だから。

コールは素直に「妬ましい」と感想を抱くと同時に、■■■てやりたいと思うのだ。

故に、相対するのであれば当然コールも——自分の使える全てを使って、獲りに行くつもりだった。

「——作戦は、自分の〈エンブリオ〉をメインで行かせて貰う。それで——勝てる筈だ」

——パーティメンバーにすら秘していた……否、使えない筈だった己の〈エンブリオ〉を使用を決意して——

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:
:
:

コールの場合／天は二物を与える：後編

「炸竜王 ドラグマイン」——〈厳冬山脈〉から降りてきたその「竜王」にとって、
 狩りとは相対的強者にのみ許された遊びだった。

所詮この世は弱肉強食。特に食料の足らず常に他種族との、そして仲間内での争いが
 絶えない〈厳冬山脈〉では猶更その様に世界は構築される。

弱ければ食料を奪われ、命を狙われ……強ければ逆に他者の糧を奪い尽くし、敵者の
 命すらも喰い尽くす事を許される。

人の介在する余地のない自然の最中であるが故の、原始的なその摂理を「ドラグマイ
 ン」も兄者達との暮らしの中で学んでいった。

「ドラグマイン」は「竜王」として、それ以前に一匹の竜として、若輩者だったからだ。
 年若く、ステータス力も弱く、経験も浅く……外敵から身を守る術すら覚束なかった。

故に、いつも兄者等の力を借りて地竜達の群れの中で暮らしていた。

兄弟達と怪鳥種を始めとした外敵と生存競争を繰り返し、そして兄弟達とも熾烈に多
 くない食料を巡って相争った。

別に、それは後に「ドラグマイン」となる彼だけの事でも、地竜だけの事でも、勿論〈厳冬山脈〉でだけ起きている事でもない。

非人間範疇生物
モンスターであれば極々当たり前の光景だ。

特段彼らだけが厳しい状況を生き抜いてきたという訳ですらない。

だが、それでも彼は——「ドラグマイン」は、違った。

知能があつた。

モンスター全体の中でもドラゴンは知能が高い方ではあつたが、それにも増して周囲より抜きん出た知能を有していた。

ステータスこそ変わらなくとも他の兄弟達よりもより効率的に戦う術を編み出し、
経験値リソースを蓄えていった。

自信があつた。

己はこんな所で燻っているべきではないと、もつと強くならねばと、なれる筈だと確信していた。

他の兄弟達よりも貪欲に命を賭して戦い、全身全霊で戦い、知略を尽くして戦い、敵を選ばず戦い——己の力を、経験を、リソースを、全てを研ぎ澄ませていった。

そして何より——才能があつた。

成体になつてそう時も経たずに同種の中でも頂点に——〈UBM〉に、【竜王】に——
 【炸竜王 ドラグマイン】の名を手に入れられる程に！

その力の使い方も自然と己の賢才で以て把握した。

そして——彼は群れを飛び出し、〈嚴冬山脈〉を飛び出し、外界に降り立ち、目につく敵全てを自らの糧リソースとせんが為^にに狩りを続けていた。

より強くなつて、いつか〈嚴冬山脈〉の兄者達にも太刀打ち出来る様になる為^に。

敵を屠り、腹を満たし、心身共に充足を得る為^に。

——己の才覚を、己の力を示し、優越を得る為^に——



■ 〈ヴァルデイラ大砂漠〉 【炸竜王 ドラグマイン】

日が照り付ける〈ヴァルデイラ大砂漠〉の中で、……【ドラグマイン】は警戒しながら

らも、迷っていた。

それは——先程己と戦った〈マスター〉の残党を追い掛け殺すか、否か。

一度戦った時の感覚からしてみれば、確かに彼奴等の従属モンスターの力は——それを与えた〈エンブリオ〉の力は大した物ではあつた。

——己には全く届かない程度の物であつたが。

故に、再度戦闘に突入したとしても屠る事自体は簡単だ。

己を相手に逃げ果せられたのは些か頭に來たし、常の彼であればいつも通り奇襲を警戒しながら追撃し殺しに行く所であるのだが。

彼は知識として……そして先程体感し、経験としてもそれを知り得る事となつた。

——〈マスター〉と戦うのは、余りにも旨味が無さすぎる、と。

それは〈エンブリオ〉を有するが故に戦闘力が高いから、と言う意味ではない。

〈エンブリオ〉を抜きにしてすら、それと相對し、打ち倒し……そして得られる報酬が他のモンスターやティアンと比べて非常に少ないのだ。

経験値は同レベルのティアンと比べ一割も入らず、モンスターと違って腹を満たす為の肉となる事もない。

全くどんな生態をしていればそんな不可思議な事になるのか全く分からないが……いかな「ドラグマイン」がモンスター、ドラゴンの中では賢い方だと言つてもいくら考

えてもその答えに辿り着ける筈もなく。

だが、その原因については……一先ずは関係のない事だ。

重要なのは——その様な戦つてもメリツトも殆どなく、むしろ「エンブリオ」を持つ強敵である「マスター」を相手にこれ以上追撃する必要があるのかという事だ。

相対する事に益はなく、撤退する事も見逃して違う実入りの大きな獲物を探しに行く事も容易。

故に……賢しらに効率を求めるのであれば無視するのが正解だ。間違いなく。

だが——

——逃げる？ 【竜王】となったこの我が？ あの程度の相手に、逃げる為の言い訳までして？

その選択肢は——今となつては認められる筈がない。

且つてとは違うのだ。まだ力も弱かった幼竜だった頃とは。

力を得た。自負を得た。経験を得た。戦い方を覚えた。成長し——【竜王】の誉れを戴いた。

一族の力を象徴する昇華された力を——固有スキルとなったこの力を持っていながら、我にまともに相対する事すら出来なかつた弱者を相手に尻尾を巻く？

それだけはあり得ない。

そもそも己は何故同族達地竜が多くいる〈巖冬山脈〉から降りこの地へ来た？

この「炸竜王」としての力を、種の誇りである己の力を、才覚を示す為だ。

安穩巖冬山脈と親のお膝元巖冬山脈でぬくぬくとしていたあいつ等とは違うのだ。己は——戦いに来たのだ!!

己の中でそう考えを纏め、戦意荒く、気炎を上げていた「ドラグマイン」の前に——
 「フエイ能無しス・デミしうすドラゴン」と「サすばしつこいだけの雑魚ンドウルフ」が飛び出してきた。

どうやら——相手も同じ気持る気ちらしいと僅かながらに口角を上げる。

残りの面子は確か後衛だった筈、どうやら先の様な遭遇戦ではなく——まともまともに戦うつもりなのであろう。

「ドラグマイン」としてもそれは望む所だ。

一方的な蹂躪を悪いとは言わないが——それでも、彼はより良い戦いを、敵手を求め
 ていた。

弱者を喰らい殺すのは強者の特権なれど、弱者を甚振るのは強者の行いに非ず。

そして——強者と戦う事こそが己の強者としての「格」を上げる為に必要なのだと——
 本能で感じていたから。

——さあ掛かってくるが良い化外共。^{〈マスター〉} 諸共全て、己の糧となるが良い——!!



『GRRRRRRRWWWWWWツ!!』

『ぐつ、くう——!?!』

砂漠に竜王が、亜竜が、砂狼が駆ける。

そのどれもが亜音速機動を超越し、この砂漠にも適応した機動力を有し、常人には目にも止まらぬ速さで攻防が繰り返される。

勿論、その中で攻勢に転じているのは——【炸竜王 ドラグマイン】だ。

AGIに特化し、【ティファレット^エ】の援護を受けてすら亜音速域、AGI以外のステータスに至っては3000程度にまでしか強化されない【サンドウルフ】は論外。

弾除けにすらならず、《炸竜爆雷》を数度使って追い込めばそれだけで狩れる雑魚だ。

そして、それよりも種族としてもレベルも上であるにも関わらず同程度のAGIしか持ち得ていない「フェイス・デミドラゴン」は、只の案山子も同然だ。

耐久力しか見る所はなく、竜種としては余りにも貧弱な攻撃力しか持たない。まともに見える有益なスキルも取得しない為……「ドラグマイン」の様に多少以上の知能を持つ相手には壁にすらならない。

〈エンブリオ〉による強化によって幾度か《炸竜爆雷》による攻撃を耐える程度の力はある……が、障害としては余りにも非力に過ぎた。

それでも、素の「ドラグマイン」と同等の亜音速機動が行えるのであるのだからまだマシなのだが——《炸竜爆雷》によって距離の概念を容易く覆されなければの話だが。

故に、「ドラグマイン」として問題なのは——残る従属モンスター。それも魔法系に属する二体だった。

——何時だ？ 何時撃ってくる？

彼奴等が先程逃げた時には姿を現し、逃走の援護を行っていた天使と、光の精^{エレメンタル}に属する二体。

それを警戒しているのは今姿を現している二体が相手にならないからと言うだけではなく——彼にとって魔法攻撃というのは弱点とも言える物だからだ。

尤も、弱点とは言ってもそれは常以上の効果を期待出来る様な物ではなく、ただ単に

彼は物理防御力よりも幾段か魔法防御力が低いと言うだけの事だ。

眼前の二体や弓矢による物理攻撃とは違い、《炸竜爆雷》による防御、反撃も出来ないのだが……それですら、《竜王気》による減衰は可能であり、《竜王気》がなくとも攻撃が専門ではないであろうあの二体の魔法攻撃では数十発喰らった所で致命傷には程遠い。傷痕系状態異常に至る重傷にすらならないであろう。

その有り様であつて尚……今「ドラグマイン」が相對している「マスター」のパーティの戦力の中では、最も脅威度が高いと判断される程度の「弱者」であるのだ。

それが、嚴然たる彼我の実力差。それが——「UBM」の、「竜王」の力と言う物だ。まだ相手の後衛達が姿を隠しているからと言うのもあるが……そんな戦いは、「ドラグマイン」としては酷く退屈な物であつた。

点在する岩陰か、傾斜の影を塹壕代わりにしているのか……それとも砂中や砂塵舞う空中にでも姿を隠しているのか。

それならそれで、こんなくだらない戦いをする為にか挑んできた彼奴等に本当の闘いという物を——「力」という物を教えてやる為に辺りの障害物を諸共爆破し尽くしてくれようか、それともまずはこの二体を血祭りに上げようかと思ひ。

その時。

——何らかの「力場」が【ドラグマイン】を、辺り一帯を包み込んだ。

『GR……………!』

【ドラグマイン】は、それが彼らモンスターを強化している力場——【ティファレット】の固有スキルと別種にして同質の物だと看破した。

即ち——TYPE：テリトリ。結界型にして、周囲に影響を及ぼす無形の固有スキルを有する「エンブリオ」であると。

そして、図ったかのように——実際、タイミングを図っていたのだろう——二体の前衛と、ジョブスキルによって放たれたであろう今までの物とは違う強矢が【ドラグマイン】に——亜音速に届かぬ速さで、迫る。

しかし、それでも双方共にAGIにして2000には届く程度の速度——【ドラグマイン】がこの「力場」について思索を整える前に激突の時は来る。

ならばと先ずは——その無謀の代償を支払わせるのが先だ。

《炸竜爆雷》と《竜王気》の全力同時行使。

威力を増した《炸竜爆雷》による炸裂装甲の壁は、直撃すれば【サンドウルフ】は勿論、【フェイス・デミドラゴン】であつても痛手を負わせられると確信している。

そして一瞬後、「ドラグマイン」の狙い通りに《炸竜爆雷》に接触した二体が爆発四散。

——せずに、「ぼふん！」と情けない音が響くだけに終わった。

『GGGRYAUUUUッ?!?!』

当然の様に、弓矢も、二体の突撃も——《炸竜爆雷》を頼りに待ち構えていた「ドラグマイン」に命中し、その身体に僅かな傷を負わせる。

特に弓矢はストロング・アーチャー【剛 弓 手】のスキル、《ダイレクトヒット》による防御力の一部無視攻

撃——その一矢は油断していた「ドラグマイン」の前脚に確かに突き刺さっていた。

傷痕系状態異常を発する程の傷ではない。

しかし……《マスタ―》と違って痛覚を無視できないモンスターの身である彼の機動力を奪うには十分な程の痛撃がその身に刻まれていた。

そして、間を置かずして岩陰から、空中から——聖属性魔法と光属性魔法が「ドラグマイン」に向けて放たれる。

咄嗟に飛び退いて聖属性魔法は避ける物の、不意の痛撃に驚き一瞬の意識の空白が生

じていた「ドラグマイン」に光速の光属性魔法は避けられず。

——そして、またもや《竜王気》は僅か程度しかその威力を減衰する事は出来ず、何故だか相手の魔法の威力も減衰していた為更に傷が増える事となる。

事此処に至れば……流石に「ドラグマイン」もこの「力場」の正体に、その効果に思い至る。

——まさか、これはスキルの封印……否、スキルの効果の大幅な減弱か!?

風の噂でしか聞いた事のないそのスキルを——固有スキルを主力にして戦う自身に對する天敵となるその存在と出会った事不幸を呪うのだった——





しかし。

実際にはその予想は僅かにだが外れている。

少し冷静になって考えてみれば〔ドラグマイン〕も気付いていただろう。

今しがた彼に傷を負わせた〔剛弓手〕のスキルには、何の変化もなく、確かな効果を発揮していた事を。

それは、そのスキルが〈エンブリオ〉を展開した〈マスター〉であるコール自身の物だったから……ではない。

敵味方や自身の主を見分ける程度に制御できるスキルであれば、そのスキルは此処までの……〈UBM〉の固有スキルにさえも絶対的な減弱が出来る程の出力を発揮していない。

コールが展開した〈エンブリオ〉は、ほぼ完全なる“無制御型”のTYPE：テリト

リーの〈エンブリオ〉。

それも、その〈エンブリオ〉自身以外の全てに——それこそ、自身の〈マスター〉であるコールにすらも躊躇いなく効果を及ぼす暴れ馬が如き〈エンブリオ〉。

そして、その対象もスキル全てではなく、『制限』が掛かった物となっている。

彼が己のパーソナリティの発露として、何よりも何よりも何よりも何よりも意識していた物。

それは即ち——特別な才能……固有唯一特別な力スキルに他ならない。

余人が真似できぬ特別な力。他と隔絶せし圧倒的な力。誰も届き得ぬ頂点の力——超級職、〈エンブリオ〉、特典武器、そして——〈UBM〉。

それらが保有する、象徴するその力を、羨ましくも妬ましくその力を……最早見る影もない程に減弱させる。

アクティブスキルも、パッシブスキルも、奥義も、必殺スキルも、最終奥義すらも全てそのコストまで含めて——どうしようもない程に貧弱な物へと変える。

それがコールの〈エンブリオ〉、「重枷才魔　ヘーラー」の固有スキル、《ジェラシック・アビリティ》の効果だった。

（だが、今回の戦いで漸く得心した。この固有スキルは過剰だとも思っていたが、そう

ではない。……ここまで出力を跳ね上げなければ、抗しえない物なのだ、固有スキルを扱う者と言うのは——)

思い返すのは、つい先程の「ドラグマイン」との遭遇戦。

「ヘーラー」の固有スキルの関係上、どうしても味方まで巻き込んでしまう為使えなかったというのもあるが、それでも自分達のパーティは何があるかと……それこそへU B M」との戦いになっても打倒出来る程の総戦力を誇っていると思っていた。

↑聖天使猫姫↑が従える複数の強力な従属モンスターに、アルファとモヒカン・RT Aもへマスター」の基準で言っても最上位には及ばないにしても間違いない上位クラスの実力者であったのだ。

それを、相性もあつたとはいえ鎧袖一触に屠つて見せたあの実力を思えば——やはり、固有スキルの力と言うのは非常に大きい。

いや……正確には——固有スキルを扱う者の力、と言うべきか。

〈U B M〉とは遭遇したのは今回が初めてであり、そしてカルディナを根城にしているから知識では知ってはいても、今まで実感してこなかったのだ。

——この世界には、特別な人が、人に限らず非人間範疇生物も含めて多いのだと。

……だが、あゝ。

本当は何処かで理解していたのだろう。経験として実感する前から。

それこそ——この世界に来て、初めてパーティを組んだあの時から。

——俺の剣なら斬れないモノは殆どないっ！

——まるで甲虫の甲殻がクツキーみたいツスねえ！

——私の〈エンブリオ〉は相手が何処に居てもその様子が把握できるんです。だから

——コール君、そちらは任せました！　ここは俺に任せて貰おうツ！

——俺が、俺達が“主人公”なんだ！！

内心で羨ましく思う程の“特別な力”を持っていた皆と——そして、それほどの力を持っていないかつたにも関わらず、あの中で最も輝いている様に見えた、僅かにあいつを彷彿とさせた彼の様に。

〈エンブリオ〉を持つ——〈エンブリオ〉だけに限らない多くの特権を持つ〈マスター〉。その力で、特権で……それは、本来は凡人である自分達をすら特別に限りなく近づけてくれる魔法の様な物だろう。

だが、それでもその中の本物の席は限られている。超級職然り、特典武器然り。

ならば、それを手に入れられるのはやはりそれもまた〈マスター〉の中での特別な者だろう。

そして今、自分はその特別に王手を掛けているのだ……！

緊張で、弓を握る手にも力が入る。

蓋を開ける時間も煩わしく思い「SP回復ポーション」を割り振り撒く様に自身の身体に掛けて回復を図る。

まだ……まだ、王手だけだ。

此処から一手間違えれば逆転を許す可能性は十分に残っている——否、致命の一撃を誘導するのに此方が足りていない。

†聖天使猫姫†の「テイファレット」の固有スキルも減弱を受け、その超強化の恩恵は殆ど失われている。

……残る彼女の従属モンスターの攻撃力では、討伐は不可能だ。十中八九その前にもこの中の誰よりも高いAGIで以て逃げられてしまう。

この先はあれを決める為に、間隙を縫う様に正確に自分の意図を通さなければならぬ。

合図はもう†聖天使猫姫†には伝えてある。

後は……自分がやり遂げるだけだ。

——いいか■。どんなにか細く険しい先にある道だとしても……お前が諦め

ない限り可能性は消えはしない。

——
—— 持てる全てを使って、諦めずにその可能性を追っていけば……お前ならきつ
と——

——……ああ、全くその通りだな。憎らしい程に。……本当に、妬ましい。

心の中で、誰にともなくそう呟く。

一瞬の瞑想回想の後に——緊張は嘘の様に消え去っていた。

故に……先の通り、後は自分で——自分の才覚で、やり遂げるだけ。

そう改めて自分に言い聞かせて、コールは静かに弓を弾き絞った——



《魔物強化》によってENDだけは「ドラグマイン」を越えたその亜竜が——組み付き拘束せんと突進してくる。

退路を塞ぐ様に聖属性魔法の光熱が周囲の砂を焼き飛ばし、一瞬でも足を止めれば連続して放たれる光速の光属性魔法がその身体を焼き焦がさんと迫る。

反対側の足を、脳天を、喉を貫かんと今度は三本の矢が狙いを定め飛んでくる——！

『GRRGWUOOOONNNN!!!!』

足の痛みを一時的に無視し走り続け、それらの全てを回避しきり誘導されるがままに懐に飛び込みその爪牙で敵手の命を奪わんと迫る。

が——岩陰に見つけた二人と一体に襲い掛かる寸前で直観に従い全力で横に飛び——その隙に放たれた魔法と、超音速に至る真正面からの《クイックショット》を回避する為に再度大きく後退る。

当然とも言うべきか……その直線には「大狩人」「畏狩人」謹製の簡易罠が仕掛けられていた。

今の自分は固有スキルもまともに使えない、ただの純竜級程度の力を持っただけの竜でしかない事は己自身が承知している。

……罨に引っかけかり、大きな隙を晒せばそれだけで命取りになるであろう事も「ドラグマイン」は重々承知だ。

最短の道は選べない。……いや、もしかしたらそれ以外にも罨を仕掛けられている可能性が高い。

そうと疑って見てみれば——確かに、彼らの周囲を覆う様に罨が仕掛けられているのを把握できた。

一瞬だけ歯噛みし……直後また相手の魔法を回避する為に足を動かし始める。

——どうする？ 岩を跳び越すか？ それともかの岩毎碎STRいてしまうか？

……いや、それは難しいな。己の力では楽々碎けると言う程ではないし——《炸竜爆雷》が使えない今滞空中を狙われたらどうしようもない。

そう思考し、再度眼球に向かって放たれた《クイックショット》をイラつきながら回避する。

射速を大幅に増す《クイックショット》は速さだけなら「ドラグマイン」を越え、ダメージは僅かながらも、それを防ぐ手段のない今部位によつては軽視する事はできる筈がない。

完全に回避する事は出来ず、頬に僅かな、それこそ自然回復でそう時間を掛けずに治る程度の傷ができた。

……その程度の傷であつても、傷は傷。【ドラグマイン】の焦りを加速させるのには十分過ぎる物であつた。

どうする、どうする、どうする、どうするどうするどうするどうする——
退けば魔法、前には罨が。中空からは光速の魔法、そして不規則な弓矢の雨——
足の怪我もあり、時間を掛ける事はできない。

相手が此方を詰ませようとしているのを自覚して尚、即座に有効な対処法を思いつかぬ己への怒りが過ぎ去り。

——待て。……別に、使えない訳ではないな。

ふと思ひ至り。……《竜王気》を展開してみる。

……出力は常とは比べ物にならない程に低い物ではあるが……確かに、スキルは発動するのだ。

そうだ、彼奴がやっているのはスキルの封印ではなく——減弱。

——それなら………減弱してすら威力を發揮する程の出力で放てば良いのだ——

そして、気付きを得た。

それは、本来の「炸竜王 ドラグマイン」としての必殺……切り札と言えるモノ。

自身に若干反動が来る程の出力で、生命^H力^Pすらも消費して真に全力全開の全周炸裂爆破。

半径数百メートル程度の周囲全てを更地と化す程の奥義であり、彼としても消耗が大きすぎる為使った事は殆ど無い大技。

それでも、今この時であれば。

大幅な減弱を受けているこの時であれば——丁度良く畏も亜竜の突進も吹き飛ばせる程度の威力になる筈だ。

全力を込める為数瞬の間こそできるが——数瞬耐えるだけであれば、問題はない……！

即断即決。

元より余裕のなくなった「ドラグマイン」は、そうして相手にも見せていない初見殺しの切り札で強敵と認めた敵手を屠らんと踵を返し突進する。

光属性魔法の一発や二発喰らってやると言わんばかりの方向転換に亜竜も対応する事はできない。

ただ一直線に進み、罨に掛かったその直後に《真・炸竜爆雷》とも言うべきそれによつて全てを吹き飛ばし、体勢を崩した彼奴等を順番に、迅速に殺していくだけ——

「——今！」

「う、うん！ 《絶対なりし黄金比》——！！」

一言の宣言の後に——相手のほぼ全員が、黄金のオーラを纏う。

あれは、先の戦いの際にかの鬼にも掛かっていた——短時間だけダメージを無効化する固有スキルだ。

しかし、それでも衝撃は無効化できず——減弱が掛かるであろう現時点ではどれほどに効果があるか分かった物ではない。

ならば、考えるまでもなく一旦他の相手を——あの射手を狙い直後に効果が切れているのであろう他の者達を殺せば良い。

それだけだ。

一瞬の——まるで走馬灯の如く一瞬の間にそれを思考し——【ドラグマイン】は罨を踏み抜く。

それは、巧みなカモフラージュの施された【ミスリル】製の原始的なトラバサミ。

それを理解するが早いか反射の如く【ドラグマイン】は全力で。



「——『才ある者よ、才に狂え』」

その瞬間。

〔ドラグマイン〕が使えるであろう《炸竜爆雷》の全力展開の瞬間に——反転する。

それは、コールの〈エンブリオ〉である「重枷才魔　ヘーラー」の必殺スキル。

その効果は固有スキルへの対策であるという点は通常スキルの《ジェラシック・アビリティ》と同様であるが……実際の効果は、全くの真逆。

範囲内の固有スキルの効果を超減弱させるのではなく、出力を信じられない程爆発的に超強化する物だ。……それも、制御できない程に。

相手の固有スキルの強制無制御化。

それは、今まで《ジェラシック・アビリティ》によつて己の強みを殺され続けてきた者からしてすら救いの一手になる訳がなく……尋常ではない「災厄」として顕現する。

何故なら、《ジェラシック・アビリティ》の最中でも行使しようとする程に出力が高い

固有スキルを使用しようとしているのだから——それ程の威力の固有スキルが、発動直前にその減弱が反転させられたら——

そう、その結果は今この瞬間の「炸竜王 ドラグマイン」を見ればどうなるのか分かるという物だろう。

周囲一帯どころか、数十キロメートルを、自身の身体ごと爆発四散させる程の最終奥義が如し超爆発を見せた「ドラグマイン」を見れば——

岩も、僅かに点在する草木も、遠くに居た野生モンスターも全てを巻き込み吹き飛ばし——

——そして、そこには↑聖天使猫姫↑とその従属モンスターを除く全てがモノが跡形もなく消し飛ばされる事となった。

世界にその功績の軌跡だけを残して——

〔へUBM〕〔炸竜王 ドラグマイン〕が討伐されました

〔MVPを選出します〕

〔「コール」がMVPに選出されました〕

【「コール」にMVP特典【伏竜炸雷 ドラグマイน์】を贈与します】

………E n d

アウエラ・フランソワーズの場合／書を開き、頁を捲り、物語を読もう

□■霊都アムニール 【書痴】 ビブリオマニア アウエラ・フランソワーズ

幻想と魔法、そして神秘の国、妖精境レジエンダリア。

その首都であり「アムニール」のお膝元でもある霊都アムニール。

多民族の入り混じる他では見る事のできないファンタジーさを感じさせるが……それは何も、人間範疇生物だけに限った事でもない。

そこに住まう動物も、非人間範疇生物モンスターも……そして、そこで生き抜いている植物も、数え切れないくらいに多種多様な様相を示しているモノだ。

他の国とは比較にならない程の数多の動物やモンスターが居るのは勿論、世界最大の植物である「アムニール」の影に隠れる様に、庇護下に置かれる様に、その広々とした枝葉の下にはこれまたファンタジーな植物が多様に植わっている。

魔力を糧に成長する物魔法的な特性を有する植物は勿論、辺りの水源を糧に独自に成長する物やこれまた多様な一部の亜種族の人間範疇生物によってその植生を助けられ

る事を前提として在る物も居ればアムニールの発する特殊な魔力のみを糧にして生まれ生育する物もあり、他にも、他にも、数え切れない種類の植物がレジエンダリアには存在していた。

……そして、その様な中でも一等特異な物も、当然ある。

人食い植物ならぬ、魂喰い植物であつたり、へUBMへ化したり、そもそも植物人間だつたり。

あるいは——植物型のへエンブリオであつたり。

武器防具や従属モンスターであつたり、空飛ぶ植物であつたりと様々だが、植物のへエンブリオとして一番多いのはやはり——キャツスルだ。

ツリーハウス型の一般的な物があれば、大量の食物を、植物を育てるビニールハウスのへエンブリオもあり、更には非常に規模の大きな「森」、あるいは「山」その物のへエンブリオまで多種多様だ。

そして、今回ピントを当てるのはそんな植物型のキャツスルの一つ。

とある少女の——或る【書痴】の願いにより生まれたへエンブリオ——



本。

本本。

本本本本本本本本本本本本——

大樹型のキャツスルの——その地下室。

キャツスルとしてはありふれた内部空間拡張のスキルによつて外部からは想像できない程に拡張されたその場所には——数え切れない程の本と、それを収める本棚で埋め尽くされていた。

このこの（ハマスター）の性格なのか、本棚の上部にはどのような種類の書籍が収められているのか確りと記入されている。

だが——その内容については、本当に雑多な物だ。

遙かな過去を事細かに記された古文書があった。

とある流派の超級職の秘奥を記した秘伝書があった。

入門用の魔法スキルの構成の分解式を記した魔術書があった。

且つての災厄すらも記された凄惨な過去を記す歴史書があった。

〔レシピ〕にする前の、メモ書きの束にしか思えない様な手引書があった。

幼子にこの世界における基本的な知識を授ける為の教科書があった。

秘境や魔境、そして極限地帯で生き抜き戦い抜く為の術が記された実用書があった。聖書が、英雄譚が、悲劇の喜劇の短編集が、恋物語が、冒険活劇が、空想書籍が、娯楽書籍が——

数多の種類の書物が、そこには収められていた。中には、既に失われた……ある筈のない物まで。

だが、それが……それこそがこの〈ヘンブリオ〉の能力特性なのであった。

書物の探索と蒐集——現実リアルでも正しく書痴である〈マスター〉の願いによつて生まれたその特性は、既に失われた本総版となつたであつても、いやむしろそうであるからこそ或いは強く発揮されるのかもしれない。

だが、その本質はそちらではなく——当然、この空間に所狭しと並べられた本にある。一度失われた物すらも再現すると言うのはその為の副次的な機能でしかないのだから。

「~~~~~♪」

だから、今も。

この〈ヘンブリオ〉の〈マスター〉である少女——アウエラ・フランソワーズは付属物として敷設されている机に向かい——その上に魔法によつて本を浮かべながら優雅

に読書を楽しんでいた。

《高速思考》《並列思考》《分割思考》《マルチタスク》《速読》《乱読》《トランスレイト》文
字
理
解

数多のスキルを使用してまで、本に——物語に夢中になっているのだ。

最低限の生きる糧を得る為の書類仕事ジョブクエストを《マルチタスク》のながら作業で気持ちゆつくりめに進め、残る自身のリソースの全てを——目の前の本に注ぎ込んでいる。

他の《マスター》の様に、強くなる事にも、戦いにも、テイアンN P Cとの関りにも興味は持たず……否、興味しか持たず。

ただそれは——本の中の世界、物語としてのそれらにのみ向けられた興味だ。

何故なら……この世界は、現実世界側にはなかった数多の本で、物語で満ちているから。

ファンタジーそのものの世界に来て、そしてその世界で書かれた書物の何と魅力的な事か——!!

初期からの側近が書いた【キング・オブ・キングス覇王】の破竹の勢いの進撃を描いた英雄伝が。

天地の修羅超級職が書いた残すつもりなどなかったのである。当時の超級職達の使う固有スキルも含めた攻略本が。

且つての【キング・オブ・セイクリッド聖剣王】の英雄譚の原典が。

先々期文明時代と呼ばれる遙か過去に書かれた数多の書物が——
他にも。

この世界には心躍る物語が——その素となる物が多いのだと、彼女は喜ぶ。
特に今は彼女自身を含む多くの「ヘマスター」が現れた時代。

「エンブリオ」の特性によって、その意味について若干の考察は行えるけれども——重要なのはそこではない。

そう、重要なのは……新たな時代へと変遷しつつあるこの現在いまを、どう過するのが彼女の欲を満たせるのかという事。

戦闘能力の殆ど無い彼女とは違い——「エンブリオ」持つ「ヘマスター」の力は比べるべくもなく、非常に大きな物だ。

そしてその行動指針も——遊戯ゲームであるからこそ、そしてこの世界であるからこそ……多種多様に彩られる事だろう。

ならば、それによって紡がれる新たな物語が……きつとある。

それを思うだけで胸が躍るといふ物だ。
だけど。

「うーん……物語はできれば間近で見たいけど——残念ながらこの世界は基本的に
弱肉強食の理なんですよね」

そう独り言ちて——詳細ウインドウを開き、己のステータスを確認する。

当然ではあるが……多少の魔法が使える程度で、大半は読書に関連した非戦闘職で埋められたステータスがそこに記載されている。

戦闘力はないに等しく——物語が紡がれる様な激戦地帯に行ける様な実力はまるでないのが現状だった。

仕事も……今しがたやっていた様な書類仕事以外は書庫の整理や写経……辛うじて

事務仕事なら出来るだろうが、ティアンでも変わらずに出来る様な事をさせる為に「ハマスター」を使う所が果たしてどれだけあるのだろうか。

そもそも、今までの行動からして専門ギルド以外にコネクションがないのも問題だ。

協力者も居なければ、自分自身の力はこの「ヘエンブリオ」——【書詩譚蒐集 ■■■】だけである。

こんな有り様だと……良い物語があれば、円滑にそれを拝みに行きたい物だけど、それだつてそう簡単には叶いそうにない。

何度考えても前途は多難だ。だが、新聞やニュースサイトで済ませるのは余りにも勿体なさすぎる。

ならば、どうするか。

本の中にその答えがあれば良いのだけど、現実的に力のない登場人物が現状を打破す

る方法なんて——仲間の、信頼できる誰かの力を借りる以外にないだろう。

「まあ、私とかそんな相手が居ないから此処で独りで居るんですけどね。あははは——っ……はあ」

虚しい。だけど……その考えは強ち間違いでもないと思っっている。

今の読書特化ジョブ構成を変える気はないのだから、結局は誰かに頼る事になる、のだけれど——

「……何処かに居ないものですかね。そんな都合の良い人が」

思い描くのは——可能であれば、克蘭のオーナーとなる人。

お人好しでトラブル物語の種類を放っておけず、知恵と本への情熱しか出せない私をも変わらずメンバーに入れてくれてそして、可能であれば物語の如く刺激的な事を為せる——出来ればTYPE：メイデンの「マスター」が良い。

既に私達「マスター」がこの世界に来てそう長くない期間だけど、それでもTYPE：メイデンの物語性は素晴らしい物があると私は思っているからだ。

メイデンを形成するパーソナリティも、強者打破のその能力も——やつぱりこの世界で描かれるとしたら物語の主人公はメイデンが一番でしょう！　と思うくらいには。

「——ま、見つからないにしても探す努力は惜しむ必要はありませんね」

一息置いて。

……そう呟き、この地下室の中央に坐する眼前の机に意識を集中させ——己の〈エンブリオ〉の必殺スキルを発動する準備を整える。

望む物が得られる確率は高くなくても……彼女の〈エンブリオ〉は書物に関する探索を行う物。

それであるいはそんな都合の良い人を探し出せるのではないかと、そんな希望を抱き今日もその必殺スキルを行使するのだ。

——見つかる気配が無かったら、あまり気は進まないけど現実側リアルの知人を当たってみるのも良いかもしれないですね。

——協力してくれるかはともかく、幾人かは〈Infinite Dendrogram〉をしていた筈……それでもダメだったら新たに知り合いをこの世界に誘いましょうか。

——それはそれで、きっと相応に刺激的な物語になるでしょう——

頭の中でそんな取り留めのない事を考えながらも——検索語句の設定が終わり、必殺スキルの発動準備が整った。

何はともあれ。まずは此処から。

彼女の——新たな物語を求める読み手にして一人の紡ぎ手でもある（ハマスター）は、
願いを込めて世界ワールドに向けて己の必殺個性の発露スキルを、（エンブリオ）に刻まれたその銘を宣言す
る。

「——《書を開き、頁を捲り、物語を読もう》——」



数多の本が、物語が、そこには積み上げられる。
ノベラ

楽しき物語が、悲しき物語が。

誰かが描いた物語が、誰かが願った物語が。

素晴らしき物語が、感情を揺さぶる物語が。

今も、今までも、そしてこれからも。

あるいは……これから彼女が行動し紡ぎ出す物語もその中に記されるべき一節とな
るのかも知れない。

しかし、【書詩譚蒐集 ノベラ】には当然ではあるが——未来の書物を探す機能は付い

ていない。

未来に書かれる事を予め知るのに必要なリソースと言う問題ではなく——物語と言
うのは、結末^未だけでは紡がれない物であるからか。

過去と現在
過程が描写されてこそその物語だと——私は思うから。

故に、彼女のこれから^未がどの様な過程と結末となるのか。

……きつと、それはまた別の話^{物語}で——

……………E n d

御劍刹那の場合／嗚呼修羅道

□■天地・功刀家近郊　　【閻魔】御劍刹那

「ええー！　【勇者】——草薙さん居ないのー!？」

「うむ。あやつは今武者修行の旅に出ており、この天地には居らぬ。何時戻ってくるとも知れぬ故、残念だがお引き取り願おう」

此処は修羅の島国とも呼ばれる国、天地。

その中でも功刀家という大名が統治していた領地……その外れにある村の一軒家。

大名が統治する領地の一部とはいえ、その端にある村の一つでしかない此処に見えるべき物はない……筈であったのだが。

今、そこで二人の人物が押し合い問答をしているのであった。

一人は、天地が誇る武芸者達の頂点の一人。

超級職、【閻魔】に就く壮年の男性、御劍刹那だ。

一軒家を背に問答をしているもう一人を宥めすかし確りと説明し、穩便にこの場を取

めようとしている所だ。

【閻魔】——【岡引】系統の超級職であり、西の【審判王】キング・オブ・ジャッジメントと対を為す対罪人への断罪に特化したジョブに就く彼は今でこそこの功刀領に居を構えているが、その所属としては【征夷大將軍】コンフエスト・ジェネラルの直属の配下の者だ。

だが、この功刀領はここ最近起こった「事件」……とあるへUBMの集団が巻き起こした動乱によって壊滅的な被害を受けた。

それこそ、大名本人すらも決して軽くない傷を負う事となり、現在も尚その統治機能には大きなダメージを受けたままとっている。

それ故に治安の悪化を予期し彼が此処に派遣されているのだった。

そして——もう一つ。

ジョブ特性の影響もあり、天地の超級職の中でも穩健派であった彼の強敵ともだったかの【勇者】——草薙刀理がかつて滞在していたこの一軒家を見回っていた。

かの【勇者】が居た頃は引つ切り無しに挑戦者が奇襲夜討ち朝駆けも上等とばかりに殺到していたのだが、流石に当人が居ない今となつてはそれもなくなる………

……筈だが、それを知らない者や興味関心で見物しに来る者はそれでも定期的に表れて来るし、その相手の道徳心次第ではそんな空き家の一軒家が荒らされる事も考え得る。

故にこうして定期的に見回りを行い——そして、今そんな輩の一人であろう、家の前で困惑している少年を見つけたのだった。

そう、少年。

問答をしていたもう一人は、このかつて【勇者】が居た地を訪ねてきた一人の少年だった。

〈マスター〉としてはそう珍しくもない美麗な中性的な容姿をしており、この天地では物珍しい金髪碧眼に——そして、チグハグな衣服が目立つ者。

衣服の基調は純白なれど、外套は全く合わない地味な色の物を、手には邪気を発するが如く鬼面の籠手を着け、そして靴と掛けている片眼鏡も統一感がないながらも——非常に強い力を感じられる逸品。

刹那は、その様な装いをする者がどうという者か……知っていた。いや、彼自身もそうなのだ。

天地では、その様な者が非常に多いのだから。

容姿に気を配ったり統一感を出し魅力を増すのではなく——ただの装備品として自身の戦力に見合う有用な装備でその総身を固めた者。

即ち——武芸者である、と。

まだ齢にして10にも届かないであろうその少年。

言葉遣いや態度はそこらに居る武芸者を志望している少年少女らと変わらぬ小生意気な物ではない。

だが、その装備から感じる力が、隙のなさが、そして何より——その総身より感じ取れる圧倒的なリソース合計レベルの総量が……彼をただの子供だなどと思わせてはくれなかった。

(確か……〈マスター〉は性別も年齢も関係ないのだったか。羨ましい事だ)

それにしても彼の場合はその振る舞いから、外見と内面の乖離は見られないが——だとしても、そうでないとしても、刹那のやる事は変わらない。

「そも、貴殿は何用で此処に、【勇者】の居所へ来たのだ？ 内容次第では拙僧が承るが

——」

「えっ本当っ!? それなら——当然、【勇者】の下を訪ねる理由なんて一つしかないよねっ!」

そう——例え相手が誰だったとしても、それは変わらない。

即ち——

「僕、【勇者】様と一度全力で戦ってみたかったんだよね! でも居ないのなら仕方ないから……おじさん——僕と野試合しようか!!」

【勇者】の不在を狙う不屈き者に、武芸者の頂点の力を見せてやる事だ——



◆◆
そして、二人は一軒家から離れ、人里から離れ……人気のなければ障害物もない平原に出る。

向かい合って立ち、戦意を高め——その時を今か今かと待ちかねていた。

「おじさん、『棺桶』の用意は出来てる？」

「ふっ、ほざけよ。当然だ、使うつもりはないがな」

言葉と共に、刹那は黒い「アイテムボックス」を、対する少年は左手の甲を——へまスターの証たるへエンブリオの紋章を見せた。

真円の中に描かれた十字架の紋章。それが彼のへエンブリオを象徴する物だった。

「ふふーん、どうかなー？ こう見えて僕、かなり強いよ？」

「ああ、そうであろうな。——その靴、先の動乱のへUBMの特典武器であろうが。油断なぞできる筈もなし」

「おおー、やっぱり分かるもんなんだね……でも、それくらいは出来てくれないと、僕

も楽しめない、かな」

準備は整い、用意は整い、言葉の応酬も交わして——どちらともなく、武器を。それぞれ長刀と直剣を構える。

それと同時に、大気が荒れる程に二人の魔力がその場に露わにされる——何方も、上級職の域に収まらぬ超超級職の魔力量に相応しい暴力的な魔力の高まり。

最後の言葉に——

「——天地で野試合をするのは最後かもしれないからね。快勝させて貰うよ！」

「言つたな小童。ちいとばかり骨まで溶かす御灸を据えてやろうぞ」

そして、立場も、年齢も何もかも違う二人がその相手の戦意ににやりと笑い。

「——【征夷大將軍】様が傍勤め、決闘ランキング10位、【閻魔】御剣剎那。いぎ——

「今は何処にも所属していない風来のへマスター〜！ 【剣鬼】のジーニアス！ いぎ——

「尋常に——勝負!!」



□ ■ 【閻魔】 御劍刹那

(こやつ、この力は——ッ！)

辺り一面を数百枚もの【符】が舞い踊る。

火炎が巻き起こる。

銃弾が、刃が交差し接近し敵手の胴体を切り捨て——分身が光の塵と変わる。

戦いは激化し、しかし……何も状況は好転しない。

《影分身の術》の分身を斬り捨てた所で再度使用すればいくらでも復活するそれと相對するのが何と不毛な事か——しかし、それを無視する事も叶わない。

敵手の少年——ジーニアスの、四体の分身。

剣を構えた本体と、〔ヘビイテリンジャー〕拳銃を構えた分身達の連携が、風に乗り不定期に周囲に舞い

散る【符】から放たれる光線の魔法が——刹那の貼った障壁を抜き僅かずつでもダメージを通していく。

それを理解してか本体は防御や回避に専念し、こちらに消耗を強いていく構えだ。

「言葉の割にツ、随分消極的じゃないか……!」

「あつはつは、おじさんの一撃が直撃したら僕なんか一撃で吹っ飛んじやうかもしれないからね——!」

——耐久力だつてEND型超級職並にはある癖に、良く言う!

刹那は——既にジーニアスのステータスをジョブ構成を完全に見切っていた。

それを為すのは彼が所持する特典武器の一つ、〔天眼鏡 カイケガン〕。

相手のジョブやステータス等を看破し、幻覚すらも見通し真実の姿を映し出す魔力

と、不壊の力の込められた小盾代わりにも使える手鏡の特典武具だ。

しかし——それを見てから今更ながらに思う。

——殆ど見る意味が無かったな、と。

そして、ある意味納得したのだ。——あの既視感はこのせいか、と。

話には、他の武芸者達との噂話程度には……彼の存在を知っていた。

だが実際に見ればそれは——

ジーニアス

職業：[剣鬼]（剣武者）

職業：[影]（隠密） [大陰陽師]（陰陽師） [高位従魔師]（従魔師） [閃光術師]（光

術師） [翠風術師]（風術師） [高位結界術師]（結界術師） [開拓巧者]（開拓者） [求

道者]（修行者） [祓魔師]（退魔師） [] []

レベル：100（合計レベル：1000）

異常——この世界の常識からすれば、異常に過ぎるジョブ欄。

そしてステータスも、常識には合わず、ジョブに見合った物……話に聞くへエンブリオによるステータス補正もあるのか、非常に高い物となっていた。

生命力^Hは七万強、魔力^Mに至っては二十万強、他にもSTR、AGI、ENDと言った物理ステータスの、全てが一万越え——戦闘系超級職の基準に達している程。

超級職にも至らずにそれだけのステータスを得ると言うのはそれだけ脅威であった。そもそも、上級職が——それも、下級職を内包したそれが10個と言うのは、見るだけである者を思い出させるという物だ。

——やはり……似ている——！

全く違うジョブスキル同士を組み合わせ相乗効果^{シナジー}を發揮させているその姿が。

四体の影分身に分割された五分の一のステータス——それですらも、カンストした武芸者と同等以上の実力を發揮するその異能も。

白兵戦闘に当然の様に魔法を組み合わせ、意識外から真正面から望外の一撃を放つその力も。

分身達との連携、それ以前に分身同士が合体魔法^{ユニオンマジック}を繰り出してくる規格外さも。

そして何より、あり得ない筈の数多のジョブ達——外部増設されたジョブの器も——

それと相対した天地の上位武芸者であれば、誰もが思うだろう。記憶に新しく、そして鮮明に残っている彼らが誇る強敵の事を。

そう、眼前の少年、ジーニアスが持つ力は彼らが知るそれとほぼ同一の物なのだ。

——【勇者】^{ヒーロー}。草薙刀理の物と！

「さながら——『小勇者』って所か……!」

「此処天地の人にはそう呼ばれる事もあるね！ 僕は会った事ないから釈然としないんだけど……それ以上に僕は初見殺ししているつもりなのに全く初見殺せなくて勝率が低くなるのが困りものだよっ！」

これにそう簡単に勝てる奴なんぞそんなに居る訳無からう——と、刹那は思うが、それも致し方ない事だった。

何せ、ジーニアスが頻繁に野試合をしていたのは今から大分前……例の〈UBM〉の動乱が起こるよりも前の事。

彼の〈エンブリオ〉の——【至光天 アダムカドモン】の必殺スキルを習得するよりも前の事だったからだ。

当時はそれこそステータスも今と比べ半分程度しかなくスキルも比べようがない程に貧弱な有り様。

むしろ、その様な状況であっても【勇者】を想起させ噂話として話題になる程度には善戦していたのは偏に——彼の才能なのだろうが。

だが、そもそもからして……確かに相似点こそ幾つもあるとは言え、彼の【アダムカ

ドモン」の持つ固有スキルと「勇者」の固有スキルは全くの別物だ。

【勇者】の固有スキル《オールドマイティ万能》は下級職、上級職共に適正に関わらず百個ずつ就く事が出来るという効果なのに対し、「アダムカドモン」のジョブ枠拡張の固有スキル、《オールドグレイス全主恩寵》は第六形態である現時点で下級職を四つ就かせるので精一杯。

それを必殺スキル——《アダムカド天上の意を叶える者》によって自身が取得している全ての下級職を上級職に「昇華」しているのだ。

奇しくも「アダムカドモン」の能力特性は全能と……そして、昇華。

後者の方に——ジョブの昇華の方にリソースを傾けて発現させた結果として、「勇者」の物にはまるで敵わない物となっている。

それでも、上級職が最大12個も取れて、更に全能の能力特性からなる全ステータスに対する高い補正と固有スキルによる全種強化が合わされば、まだその上級職のジョブ枠を殆ど埋めていない【勇者】に比肩し得るステータスとなるのだが。

しかし、だからと言って「アダムカドモン」が全ての枠を埋めきった【勇者】の下位互換なのかと言えば——そうではない。

その〈エンブリオ〉が持つスキル制限解除の固有スキル、《オールド・オーダー全主権限》は【勇者】の《フルリンク全連結》よりもより無法で凶悪な物であるし。

そして何より——神の似姿を冠する名を持つ〈エンブリオ〉それ自体が、その銘、特

性の最大の発露が現れる必殺スキルの為の物。

《天上先代願いの意を叶える者》——下級職を上級職に昇華するだけではなく、超級職をへ
 ▼へと昇華し至る為の器なのだから——

だが、それも今戦っている二人にとっては関係のない事。

今重要なのは、かの少年がステータスも、物理も、魔法も、そしてそれら全てを扱い勝利を得る為の技術も才能も持ち合わせた超万能型であると言う点だ。

風属性魔法によって撒き散らされた数多の【符】からは数多の【符】の存在その物によつて多くの欠点が相殺された、光速の光属性魔法が——不可避のレーザーが連射され。

分身達は隙を見せれば合体魔法によつて分身とは思えぬ程の超威力の魔法を用い、隙を見せなくても己の才覚で造り出したオリジナルスキルによる銃撃——《ハイブリッド・バレット》による痛撃が絶え間無く放たれる。

そもそも本体が剣だけではなく、蛇腹剣に槌に双剣にと手を変え品を変え、そのどれもが達人級の技量で挑みにかかってくるし、かと思えば【高位結界術師】による多重防御結界によつて一度の直撃も許しはしない構えだ。

勿論、刹那も——天地にその名を馳せる超級職、【閻魔】もただそれを座して放置して

いた訳ではない。

【閻魔】は物理系、魔法系のステータスが共に伸びるタイプ——所謂物魔両刀型の超級職だ。

直接罪人と対峙するからか物理戦闘にも適性があり、そして罪人を焼き尽くす火属性と閻魔性の複合属性魔法も使用できる。

更に、【審判王】と同様に罪人に対して有効な固有スキルを複数持つ、こちらも万能型と言える超級職だった。

しかし……【閻魔】は相応に複雑ではあれど、当然ではあるが【勇者】程に埒外なりソースを保有している訳ではない。

多くのスキルを習得し、適正も有する代わりに平均的に伸びるそのステータスの上昇値は高くなく、壮年に達し高めに高めたそのジョブレベルは天地の超級職の中でも上位に位置する——が、それでもそのステータスはジーニアスのそれに比べ若干劣る程度。

特に——特典武器で強化されていると思われる超威力の回避不可能な光速を誇る光属性魔法が厄介だ。

周囲を舞う【符】から放たれるそれは僅かな前兆しかなく、常に全力の魔法障壁を張り巡らさなければ対処できない。

それを欠かせば一瞬後には肌が焼け溶け、次の瞬間には全身を貫通している事だろう

から……

「そもそも、【符】から放つのは【陰陽師】の魔法で分身が行えるのは影者の技スキルだけだろうに……！」

「それが僕の方だからね——つと隙ありい！」

「——チイツ！」

突出した影分身が移動スキルを——《縮地》の類を使用して突っ込んでくる。

と思えば、本体がふと腕を振り——刹那が直上に飛び上がって回避した直後、分身が真つ二つになった。

そこには何もなかった筈だったのだが……【カイケガン】を通してみれば、そうではないと理解できる。

隠蔽スキルによって隠された鋼線ワイヤーの存在を——！

「——霸ア!!」

空中での防衛代わりに、全周に黒炎を放射。

滞空中での一瞬の静止に——その間隙に、首から下げたアミュレットを、アクセサリリーを握り潰す。

そのアクセサリリーの名は——【紫竜玉 ドラグリーラ】。

装備者に多大な魔力補正と自然回復力の強化を与え——そして、今の様に碎き破壊す

れば、数十秒という極短期間だけ爆発的な魔力^{M P}を得る事が出来る特典武器だった。

——これを相手に長期戦は出来んな。ならばこのまま——仕留める！

己の技量で再現した、「魔法剣士」系統の《魔力放出》にも似た魔力噴出による超推進力。

それにより中空から直接ジーニアス目掛けて突撃を慣行し、その命を——

「——くっ!？」

前面に集中させた多重防御結界。

それにより一度目の突撃が受け切られる。

【閻魔】の固有スキル《地獄の主》——相手の総討伐カウント数が高ければ高い程与えるダメージに補正を与えるパッシブスキル——の効果により強化されたその一撃は、ただの一振りですごいアスの展開した防御結界の殆どを破り捨てる。

続く次撃によってその身体をも——

「させない——よっ！ イグニスッ！」

『応とも。——確りと使いこなして見せてくれ』

しかし、その次撃が放たれる前に——声が聞こえた。

二人しか居ないこの場所で、他に声を発する物など……………居た。

その声の発生源は——ジーニアスの右手の甲。

〈エンブリオ〉のある左手ではなく——【ジュエル】のある右手の甲が僅かに光を放つていて——

『《簡易喚起》——《ブレイズ・ジェット》お！』

【ジュエル】が光輝いたかと思つた次の瞬間——ジーニアスが空を飛んだ。

背部には刹那の放つ黒炎と対を為すかの如く白炎が吹き出し推進力となり——その推進力全てを制御し、超高速で自在で空中で動き回る術を得ていた。

優に超音速に達している速度で持つて飛び上がり……そのまま空中で弧を描き、今後は自分から刹那の方へ——突貫してくる！

——いやいや、炎属性魔法を使えるジョブなんて無かつたであろうに——しかし、此方に来るのならば願つたり叶つたりというもの……！

長刀を正眼に構え、……刀身に黒炎を凝縮して集中させて纏わせ、次こそは一撃を以て斬り捨てると言う意気を放つていた。

それを阻止せんと周囲の【符】から数多の光線が部位を集中させて突き刺さるが……【ドラグリーラ】の力によって高められた魔力による障壁を打ち破るには至らない。

ただ全身に魔力を漲らせ、その時の為に精神を集中——

「——なあんて、ただで攻略させるつもりは毛頭ないんだよっ！」

——閃光。虚を突いて放たれたそれはフラッシュユマンサー【閃光術師】の名に恥じぬ程に見事に一瞬

だけ刹那の視界を光で染め上げた。

だが、刹那も然る者。数瞬の後に常通りの視界を取り戻し——舌打ちする。

——やってくれる……！

取り戻した視界には——上空に数十を超える程に数を増やしたジーニアスの姿が映し出されていた。

同じ顔をして、同じ武器を持ち、同じ様に刹那の方を見やり——同時に落下してきていた。

更にはそれぞれが霊紙で作られた新たな【符】を——【陰陽師】の式神を顕現させ、式神をも用いた追撃の構えを取る。

——《幻惑》——だけじゃない。式神を媒介に光属性魔法で幻像を作りだしたただけなものも混ざっているのか！

一瞬だけ【カイケガン】で幻術の確認を行い、そして直ぐに無意味さに気付く。

ただそこに光が像を結んでいるだけで視覚に移るそれは、システマ的には幻覚とは判定されない。

「偽・多重影分身の術ってね！　いっくよ——！」

——式神が作りだしているだけの幻を黒炎で焼き払うか？

——否、あれは【陰陽頭】も使っていたねちっこい復讐呪詛が含まれた呪毒の【符】の式神だろう。纏めて焼き払えばダメージと弱体^{デバフ}を諸に喰らうだけだ。

一瞬の自身の中での問答。

数多に増殖したジーニアスの幻像への対処にその一瞬だけ思考を割き——不要と断じる。

そして一瞬の後。

——追突。

数多のジーニアスの幻像と一体の実像と、そして刹那とが激突。

——そして、当然の様に刹那はジーニアスの本体を斬り捨てた。

天地で長年過ごす修羅の一人である刹那にとって、何のヒントもなく本体と分身を見分ける事など造作もない事だった。

【カイケガン】がなくとも、その前から彼は【閻魔】。天地の修羅だったのだから。

そして。

「その手も——知っている！」

姿を消し、時間差で攻撃してきたジーニアスの刃との鏖迫り合いを行う。

確かに先程斬り捨てた——直前に転移……式神との《キャスリング》で逃げられたジーニアスの次善の攻撃を斬り返す刃で受け切った。

その手は——【勇者】草薙刀理も使っていた緊急手段。

当然、天地の上位武芸者……所謂修羅勢には既知の一手。予見できない訳がなく。

「くう——《降魔》あー！」

「《煉獄の業火》よ——!!」

鏖迫り合いの状態のまま——魔法をぶつけ合う。

だが、しかし……ジーニアスは「祓魔師」の奥義ではあれ、放っているのはただの強化されただけの純粹魔力であるのに対し、刹那のそれは超級職【閻魔】の奥義たる炎獄。それも【ドラグリーラ】によって強化された全身から放たれる闇を孕んだ魔炎は、ジーニアスに耐えられる物ではなく……

……数秒と経たずにそのHPを全損させ、その身体を光の塵に変えるのだった——



衝撃。

……次の瞬間。

衝撃と共に刹那は——背後から隠密して近づいてきたジーニアスに斬りかかれ倒されて。

流れる様な動きで、対応できない程の速さ^{A G I}で首元に直剣を突き付きられ、そして——
【救命のブローチ】が砕かれた。

「——ッ！……ふう」

咄嗟に反応しようとするが……それは叶わず。

それも当然。直前まで確かに鏢迫り合いをしながら全力で奥義である魔法を行使し
終えた直後なのだ——例え分かつていたとしても、身体は反応できない。

ああそうだ。この結末も分かっていたのだ——閃光による目潰しをされたその時だ
ろう、との予想も立てて。

何故なら、この手は——やはりかつて【勇者】も使っていた手の一つ。それを更に悪
辣に改造した物であろうから。

「……本当に、貴殿らはこういう事ばかり覚えやがって。相対する拙僧らの事も考えて
欲しい物だ」

「名付けて裏・影分身の術、なんてね……兎も角、僕の大勝利い、だね！ 超級職の人
に勝てた、やったー！」

刹那の愚痴も何処吹く風とばかりに喜びはしゃぐジーニアスに、再度ため息をつく。

“小勇者”とは言うが、戦闘面以外は本当にあの【勇者】とは大違いだ、と。

だが、己は敗者であり……ジーンアスが勝者、即ち強者だったのだ。

【勇者】と同様に——或いは、まだ上級職を殆ど埋めれていない刀理であれば良い勝負が出来るかもしれない程に。

そういうえば——噂によれば、ジーンアスはこの後天地を出て旅をする予定なのだという事を聞いた事があつた。

ならば、もしかしたら……その「勝負」が実現される時が来るかもしれないと考え、僅かに苦笑する。

きつと、その戦いは他ではもう見られない程に珍しい物になる筈だから。

——或いは、それを勘案して敗者としての勝者への供物を提供するのも良いかもしれない。あやつ刀理の驚く顔が見れないのが残念であるが。

負けたからには——思考を切り替え晴々とした面持ちで内心でそう呟く。

……自身が若人であるジーンアスに負けたという事に思う事が無い訳ではない。だが……しかし、それも一つの時代なのだろう。

思えば、彼だけではなく【■神】を始め他にも天地で名を馳せ始めている（マスター）は増え続けている。

ならば……

——この“小勇者”に自身の戦いを預けてみても良いかもしれないな。
御剣刹那は敗北の味を噛みしめながら……旅に出た且つての強敵ともの事を回想し夢想
して。

そう思ったのだった——

………E n d

無限の世界と交錯する世界

狼劍誅す緑の害竜

■ 天地南部 開拓村

開拓村。

それは読んで字の如く。自然を、環境を開拓し人の領域を拡げ新たなる利益を得る為に作られるモノだ。

即ちそれは必然的に人里離れた自然豊かな僻地に展開される事となり、常の村落と比べて尚不便な点が多い。

人材物資双方の流入の少なさは言うに及ばず、物理的距離はあらゆるモノを届ける事に時間を要求し、特に緊急時等には早急な救援は最期待できない。

勿論、それだけのデメリットがありながら人々は開拓を続け、版図を拡げて来た確かな歴史がある。

開拓という物にはそれ程のメリットがあり、人の根源に根付く探究心から来る抗えない魅力と言う物があるのだろう。

そして実際にそれを成し遂げた結果として、人類は霊長類としての座を手に入れたのだから、それが誤りだったという事はないのだ。

——〈マスター〉達の、リアルの世界では。

だが、悲しいかな。その理屈はこの〈Infinite Dendrogram〉の世界では通用しない。

人里を離れる程に、〈セーブポイント〉から離れる程に、モンスターの脅威は増し環境は狂い危険度はかの世界と比べるべくもない程に跳ね上がるのだから。

勿論、それと同様に開拓を行う事によるメリットも跳ね上がるだろう。

主要都市近郊で採れる素材と比べ、価値も有用度も比べ物にならない素材を手に入れる可能性は飛躍的に高まるだろう。

また、希少モンスターや強力なモンスターとの戦いを望む上位の武芸者や〈マスター〉の中継地点としての役割もある事から開拓村には確かな価値があるのだ。

だが。……やはり、リアルの世界とは比べ物にならないその難易度から、この世界では未開拓領域に人を住まわせる事は難しい。

只一人、超越^超越^越的な実力者が秘境に籠もりそこに暮らすというだけなら可能だろう。

あるいは、レジエンダリアやグランバロアのように亜人族ならば違うのかもしれないが

……人族範疇生物の大半である人類にとつて、強力なモンスター蔓延る地域に、多数の人数による「村」を形成するのは非常に困難を極めるのだ。

何故ならば、この世界の人類の力とは即ちジヨブ。

戦闘職に就いていない者が行う戦闘行動。生産職に就いていない者が行う生産行動——それらが完全に無為であるとは言わないまでも、そこには間違いなく圧倒的な差が存在する故に。

そして村を、開拓村を興すと言うのはその何方かだけでは成立しない事であり、非戦闘要員も相当数の人員を動員しなければ村を運営する事は叶わない。

その様な状況でも開拓を成し遂げるのであれば——厳しい環境の最中で村を支える非戦闘要員も、彼らを守り切る戦闘職も最精鋭の人員で形成する必要がある。

だが、前述の通りメリツトも大きいのであれば、これ程の多少のリスクでもあつても呑み込んで開拓村がもつと有つても良い様に感じる。

しかし、現実ではこの世界全体の人口や環境を鑑みても、開拓村という存在はそう多くない。

それは何故か。一つはそれが可能な程の人員は国としても非常に有用であり幾らでも任せたい仕事があるという事。

そしてもう一つ。

— この世界では、特に人里離れたモンスター領域では、不意の特異なる強力な怪物——
 — 〈UBM〉が現れ、その精鋭達が失われる確率が非常に高いからだ——



パッ　　パッ

パッ　　パッ　　パアッ

パッパッ　　パア……

パッパッ　　パッ

パッ　　パッパッパッパッ

『GRYYYYYYYYNNNNNN……』

光が、数多の光が——緑の光が開拓村を襲う。

島国天地の南端、〈千踏山脈〉に程近い武芸者達が主に住まう開拓村。

山脈の大自然の恩寵と〈千踏山脈〉での狩りを行う武芸者に利用され利益を上げていた村だ。

その村民は一人残らず合計レベル500の猛者であり、彼らが暮らす建物一つ一つも上質な素材と優秀な「棟梁」に作成された、並の純竜級の突撃を受けても一撃は耐えられる代物であった。

開拓村にそれだけの精鋭を費やせるのは天地ならではの離れ業だ。

500レベルの一流が数十人——もし一昔前であれば、この小規模な開拓村の人員だけで、他国の都市一つを落とせるかもしれない程の大戦力。

——それだけの戦力を誇っていた開拓村が、今、壊滅しかけていた。

家屋は余さず蔓で覆われ大木に貫かれ、家従属モンスター畜は干からび果てて、頼みの綱の武芸者達は勝機薄と見るな否や迅速に非戦闘員を連れ離脱し終えていた。

舞う、舞う、舞う、舞う……緑の光が、緑の種が開拓村だったモノに舞い落ちる。

何時もと同じ日々を過ごしていた開拓村がただそれだけで、十数分と経たずにこの惨状に陥ってしまったのだ。

その下手人は当然へ千踏山脈へのUBM。古代伝説級の【竜王】——【緑竜王 ドラググリューン】。

茸と蔦と苔と花々に全身を覆われた巨大陸亀の様な姿をした地竜の【竜王】だ。

しかし、【竜王】としての高い知性は殆どなく、むしろ他の竜よりも知能は低く、並の魔獣に毛が生えた程度しか持ち合わせていない。

そんな【ドラググリューン】をへUBMへ足らしめている能力とは一体何か。

《竜王気》？ 否。其れは彼の竜が【竜王】になったが由縁の副産物。ただ反応も遅く他の【竜王】と比べても使いこなせているとは全く言えない粗略物。

地竜種としての高いステータス？ 否。確かに伝説級モンスター領域を超え、水準こそ高い物のステータスの傾向は平凡的なEND型にSPを足し込んだ程度の物。

むしろAGIなどは1000にすら到達しておらず、五体満足で逃げ切るだけであれば戦闘職でなくともレベルが高ければ容易な程だ。

では、その巨体と質量による暴威か？ 否。確かに20メートルを超える巨体であろうともその程度、竜種全体のみならず地竜種の【竜王】として見れば小さい物だ。

特に【漂竜王 ドラグノマド】【山竜王 ドラグマウンテン】【居竜王 ドラグキャツスル】【大竜王 ドラググレイト】らとは比する事すら烏滸がましいまでに小さな【竜王】とも言える。

では、「ドラググリューン」の特異なる能力とは。

そう、勿論。かの緑の光。緑の種の固有スキル、《百任逸種》ただそれのみで彼の竜は古代伝説級の〈UBM〉になっているのである——！

《百任逸種》。「ドラググリューン」が無数に生み出し、放出し、行使する種子はその固有スキルとしてのスキル名に違わず、百を超える任を果たす異常の種子だ。

敵に触れては各種ステータスの大幅なデバフや【猛毒】【麻痺】【火傷】等の超多重状態異常に強力なドレイン効果を有し。

寄生し発芽し悪化して行き、そう遠くなく全身が草に根に蔓に覆われた「ドラググリューン」の為だけに動く植物生物と化し。

大地やオブジェクトに触れては木々が植物性トラップが森林が、そして忠実な配下たる植物型モンスターが生まれ出て。

自ら貪れば各種回復やバフ等の効果が盛り沢山——そんな、たった一つのスキルで万事を為す「ドラググリューン」最大の特徴。それがこの《百任逸種》だ。

種子と一言に言っても種自体の耐久力、適応力、変異性も高く、そして「ドラググリューン」本竜が使うそれは一つ当たりのコストも少ない。

辺り一面——それこそ、全周の周囲数キロメートルをこの《百任逸種》の種子が数万単

位で飛散・浮遊・付着する無意識ながら自動的な防衛機構の如く。

地形を自らの領域に書き換えながらゆつくりと、遮る事叶わず前進しその進行上の都市の、動植物の、そして人々のリソースを貪り喰らう暴虐な様は、紛れもなく古代伝説級の〈UBM〉として相応しい猛威であった。

知性が低い、動きが鈍い、応用もしないできない——だが、強い。

少なくとも、天地の武芸者では超級職ならぬ身では太刀打ちできない程には。

雨粒の如く戦場を飛散する種子を全て避け切る事も撃ち落とす事も敵わず、一度《百任逸種》が付着すれば——それだけで戦力としては喪失されたも同然なのだから。

勿論、数十人規模の戦力を以てすれば多少は抗えはするものの、だからと言って「ドラググリューン」を倒せるとは限らない。

何せ、仮に《百任逸種》がなくても「ドラググリューン」はその位に相応しい耐久力と《竜王気》を所持しているのだ。

特典武器も《エンブリオ》もないティアンの武芸者では、攻撃特化型が奥義を撃つてやっとなかに傷が付くか付かないか。

そうこうしている間に《百任逸種》を捌き切れなくなるか、配下の植物モンスターの
大群に呑み込まれ果てるか、その未来しかないだろう。

その点……天地の開拓村の武芸者達の動きは最善に近かった。

予めへ千踏山脈に住む、「ドラググリューン」を含むへUBMの特性を熟知していたのも大きいだろう。

遠目に《百任逸種》の飛散を確認するや即座に村中の人間を集め、武芸者達を分け非戦闘員を護衛する人員と「ドラググリューン」に挑戦、足止めする人員に分かれた。

後に互いを互いに庇い合いながら「ドラググリューン」に挑みかかり、しかし深追いはせず確実に時間を稼ぎ——結果として非戦闘員だけではなく村からの多くの貴重な物資や資材を避難させる事に成功した。

そして、武芸者達も頃合いを見計らって辛くも離脱したのであった。

……逃げる事が叶わなかった、二人の武芸者を除いては。

如何な練達魔技、人智を超える技量を誇る天地の武芸者として完璧とは、流石に言い難かったのだ。

しかしそれは本来「ミス」と言える様な物ですらなかったであろう。

……まさか、戦闘中、何の前兆もなく、直下大地のその下、地下から——一瞬で根が伸び種子が発生し……脚に付着するとは。

僅かな驚愕、その隙に捌き切れなかった片手にもう一粒。

あるいは、かの武芸者が超越の域にあれば、僅かなりソースの動きからそのトラップを見切れて居たのかもしれない。

……己の未熟の負債は、即座に自らの手足一本ずつ切り落とす事で贖う事となった。

だが、当然ながら片手片足、その様な状況で先程までと同じ様に動ける筈もなく。

次に種子の毒牙に掛かったのは、彼女と親しかつた軽装の武芸者——当然の様に、種子を捌くのが遅れたかの武芸者を庇ってしまったからだ。

彼は右肩からその先を失い、激痛と多量の「出血」に意識を朦朧とさせながらも、互いに庇い合いながら生き残っていたのだ。

——GRYUUUUUUUN!!

だが——それも、此処までだ。

最早仲間の武芸者達は皆撤退した。それも当然、彼らだって体力気力集中力は有限故に。

既に残っているのは二人だけ。もう後がない背水の陣だ。

あるいはそれ故にか、極限状態の集中力を発揮し、二人は互いの死角を補いつつ《百任逸種》を捌き続けていた。

——生き残るために、捌き続ける事しか、出来なくなっていた。

負傷した彼らでは後ろへ下がる余裕すらなく、足を止め終わりと少しでも後回しにする事しかできずに——そして、終わりがやって来る。

それは、数多の植物型モンスターを引き連れた「緑竜王 ドラッグリユーン」その本体であつた。

人も、物も……開拓村を襲撃して尚得られたリソースが想像よりも少なく、気が立っているのだろうか。

それは定かではない物の、これだけははつきりと分かっていた。

——合計レベル500のテイアン、最もリソース効率が良い御馳走である自分達を捕食する為に自ら此処にまで出向いたのだ、と。

それに気付いたとしても……二人にできる事は、もう何も無い。

周囲に味方はおらず、種子を捌くだけで手一杯。二人の儚き命の命運はここに尽きるだろう——

——そして、二人のそんなドラマなど特に関係もなく。種子の範囲外から超音速に倍する速度で、一人の「個」が超速の突撃と共に参戦の意を告げた。

「リベンジだ【緑竜王】オラア《テストラクト》お！」

超速度と超威力。

過剰威力が重なった双剣の連撃が「ドラググリユーン」の眉間に突き刺さった。





□ 【特攻隊^{デッドライオン}】 サンラク

「なっ——!?!」

「クソかてえッ!」

しかし、その強襲は。

確かに【ドラググリューン】の眉間に傷を作った物の……成果はそこで止まっており、小動もしない【ドラググリューン】の身体と——反動で腕からHPが多量に減少した結果だけが残った。

「やっぱりこの耐久力でこの能力はクソゲーだろうが——よッ!」

即座に双剣を引き抜き離脱。同時に宙を薙ぎ払い種子がこれ以上付着するのを防ぎ、着地。そしてすかさず強引に後退し撒き散らされた種子の嵐より距離を取る

想像以上の強敵である事を自覚しつつ、乱入した瘦身に天狗の面を付けた「マスター」——サンラクは今回のクエストの難度を改めて自覚する。

クエスト【討伐——【緑竜王 ドラググリューン】 難易度：九】

クエスト【救出——黄奉頼人 巴木葉 難易度：九】

それは、適当に狩りの為に立ち寄った村落で受けた依頼クエストの項目。

不意に頼まれたそれを見て——そこに、一度負けた名前を見つけ、且つてのリベンジのノリで乗り込んで来た一人の「マスター」……それが彼、サンラクだ。

（——硬いだけじゃない。傷がもう完全に塞がってやがる。再生能力……と言うよりこれもあの種子の力なんだろうな。どの道火力があと三回りは必要になりそうだ）

状況の難易度を再認識しながらも、根っからのゲーマーである彼は思考と行動を止めはしない。

更に助走距離として救助対象であるNPCティアンの傍まで後退しながら、上級の範囲回復魔法の込められた「ジエム」を碎き発動させつつも両手の双剣で周囲の種子を弾き飛ばす事を忘れはしない。

そして――

「すまない、助かった！　だが君、それでは無理だ――！」

「……むお？」

そこに救助対象であった手負いの武芸者の声が掛かる。

サンラクが行使した範囲回復魔法の【ジエム】により十分な止血と生命^H力の賦活^Pを行え、あるいはサンラクを含む三人で協力すれば全員が生還できる目もあつたかもしれない実力を持つ声だ。

――最も、それは相手が【緑竜王】でなければの話だが。

武芸者達とサンラクを共に回復できた高位の範囲回復魔法の【ジエム】は……あるいは、そうであるからこそ、彼らに牙を剥いた。

ボコッ

ボコボコボコボコボコ――

回復魔法……生命力の活性化により、周囲の種子が、地面に付着した《百任逸種》が芽吹く音だ。

数秒も経たない間に数十匹の簡易な植物モンスターが生成成長し……彼らの周囲を何重にも取り囲む厚い壁となった。

(遅かったか！)

更なる窮地に陥った状況に、武芸者——黄奉頼人はしかし、仕方ないとも思う。

そもそもいくらスキルによる存在であつても、回復魔法が掛けられただけで異常に反応し萌芽する等と言つた事はありえないのだ。

通常であれば植物操作に特化した魔法による成長促進等を行わなければ見られない現象だ……そのありえない事が起こるからこそ、古代伝説級〈UBM〉の持つ最大の固有スキルなのだが。

それを知らなかった事は仕方ない事ではあるし……範囲回復を行つてくれたのは自分達に慮つての事であろうし、そうでなくともどの道、回復する必要はあつたのだから。

それは、天地の武芸者である彼らには既知の事。——【特攻隊】^{デッドライン}の特性による物だ。

そのジョブの特性は、ジョブの名称にもある通り、特攻。

天地の武芸者でも就く者が稀にいるこの職は、西方の【血戦騎】^{ブラッド・キャバリア}と同等とされる、実

質的にHPをコストに高い効果を上げるスキル群を持った上級職である。

だが、【血戦騎】と【特攻隊】のスキルには大きな違いがある。

それは——スキルのコストとしてHPを消費するか、スキルの結果としてHPを損耗するか、だ。

例を挙げるとするならば、先程サンラクが使用した自身の限界を超えた速度で直進す

るスキル、《神速》。

そして、STRと攻撃力に見合わぬ超威力で「緑竜王」を攻撃した攻撃スキル《テストラクト》。

この二つは「特攻隊」の数少ないスキルの内の二つであるが、スキルのメカニズムとしては非常に似通っている。

——自身のAGI、そしてSTRでは耐えられない程に身体を強制行使する事でその効果を結実させると言う一点においては、だ。

足も砕けよとばかりに踏み込み、実際に耐えられず脚部に傷痕系状態異常を発する事を代償とした超加速を行うが、ステータスの恩寵から外れた加速により思考速度の増加も風圧の軽減も行えない《神速》。

身体の膂力、耐久力の限界も、そして武器の限界をも超えた超力で腕部に傷痕系状態異常を発する事と武器の耐久値の大幅な減少を代償に、代償に見合った威力で攻撃する《テストラクト》。

更に、それらスキルの額面だけではなく自らのステータスを超えた力を制御する能力がなければただ自滅するだけであるこのジョブを持つ者は……天地であつても多くはない。

確かに、一般的には「特攻隊」のスキルで得られる速度と威力は上級職の範疇では頂

点に近い物があるが……それ以外は何もないのが「特攻隊」と言う職でもあるのだ。

ステータスはHPとSTR、そしてAGI以外は上がらず、「特攻隊」のスキルも他のジョブをメインジョブにしていれば使用できない汎用性のない物。

スキルはこれ以外には生命^H力^Pを全力放出して全周攻撃を行う《ダイハード》くらいしかない。

【死兵】の様に決死の際のみの使用とするには上級職である事やスキルの汎用性が低い事が欠点として大きすぎる。

それでも……それでも、その圧倒的な力を必要とする機会はこの世界では少なくはない。

そう、〈UBM〉の事だ。

【特攻隊】が使い辛いジョブであろうとも、その発揮できる力の高さは、上級職の範疇“という区分の中の物であっても、その力の需要は確かにあるのだ。

それを求めて【特攻隊】に就いた者は天地ならば確かに存在するし、歴史の中に名の残る程の者も確かに居た程だ。

……故に。今この場で重要なのは。

命を捨てる程に特化した存在であっても、上級職一人の命と覚悟程度で討てる程、古伝説級と言う存在は軽くはないという事だ——！

超音速に倍する加速、意識の外から放たれた速度と威力を重ねて乗せた【特攻隊】最大の一撃。

十分な威力だ。仮に相手が標準的な純竜級のモンスターであれば致命部位から外れていたとしても一撃の下に葬り去れる程の攻撃だっただろう。

しかし。……耐久型にして、『竜王気』を持つ古代伝説級の〈UBM〉に対して、その一撃の威力は軽過ぎた。

否。これがティアンの武芸者であれば、【特攻隊】であつても傷を負わせるのは難しかったであろう。

僅かな外傷と出血であつても、上級職の身でそれを為せたのは間違いなく〈マスター〉のステータス補正による賜物であろう。

土台、不可能なのだ。数百万を超える生命力に四万を超えるEND、そして絶えずあらゆる生命体からの吸収を行える『百任逸種』を持つかの【緑竜王】を斃すのには明らかに火力が足りない。

それこそ、森一つを焼け野原にする程度の力が必要になるだろう。そうして、【緑竜王】の『百任逸種』による領域をリセットする手段がないと、スタート地点にすら立てない――

そもそもが、白兵系の武芸者では圧倒的に相性が悪い【緑竜王】が相手なのだ。

仮に今までの自分達の様に、相手を只の餌としか思っていないなかつたような状況ならばともかく……現時点では、既に「緑竜王」の姿が見えない程に《百任逸種》の種子が覆い尽くす様に舞い飛んでいる今ならば、もうどうしようもないだろう。

あれこそが攻撃を加えられ、敵手を認めた「緑竜王」の戦闘形態。〃雨の様に〃種子が降つていた頃とは段違いの種子の密度は……最早突破する事は叶わないだろう。

カウンターの様にばら撒かれた大量の種子。それを全て捌く事は回復の恩恵があつたとしても二人だけでは不可能であろう。

そして——そのカウンターを至近で喰らつた《ハムスター》にも、当然不可能な事であつた。

既に2、3個もの種子がその身体に付着してしまつているのが見て取る事ができ——その生命力も魔力も、回復した傍から減少していく事を知覚してしまう。

それだけではなく、彼に絡みつく数多の状態異常が今尚深度を増している事だろう。……最早、三人の命脈は風前の灯火であると察する事が出来る。

（助けをくれた者まで死地に誘うとは、何たる無様——）

助けの《ハムスター》が来ても、状況は全く変わらなかつた。

回復魔法を受けたとて、手負いなのは変わらぬ武芸者二人と《百任逸種》を受け長くは持たない《ハムスター》一人。

対するは、古代伝説級の「竜王」である「緑竜王 ドラググリューン」と彼が出す舞い飛ぶ《百任逸種》、《百任逸種》によつて生み出された数多の植物モンスター——《百任逸種》とそれに生み出された物を焼き払う最善手はここには無く、物理系の武者三人では前へも後ろへも往く事はできない。

僅かな時の先に、《百任逸種》に呑み込まれる未来しか彼の脳裏には浮かべられようもない。

伝説級を超えた、古代伝説級の《UBM》とは——そ・う・い・う・も・の・な・の・だ。

絶望的な逆境だ。どうしようもない状況だ。

この世界を、遊戯として来ている《マスター》であれば、この様な理不尽な敵にはこうも言いたくなるだろう。

クソゲーである、と。

「……何か勘違いされてるっぽいがまあいいか。とりあえずお前達は少しの間でいいから自分の身を守つててくれよな」

「……!?!」

なお、この際に当の《マスター》が考えていた事は「天地のNPC、実力があつて有

能なのは良いけど合わせてRPするの疲れるんだよなあ」であった。

その思考が示す様に、武芸者の脳裏に思い浮かんだ未来と「マスター」が考えていた未来は大きく異なる。

「あれを斃せば固有スキルの種子は無効化できるだろ？ それまで付き合って貰うぜ——」

当然の様に「緑竜王」を討伐する未来絵図を隠しもせず、双剣を——己の「エンブリオ」である「逆討狼剣 ナポレオン」を構える。

ちなみにではあるが、かの「マスター」——「特攻隊」サンラクは、一部の界限ではこうも呼ばれている。

「クソゲーハンター」サンラク、と。

そして勿論、そんな彼の「パーソナリティ」により形作られた「エンブリオ」である「ナポレオン」の固有スキル、能力特性は。

「逆境踏破に特化しているのだ——」



では、果たして。

未だ超越の領域……スペリオルクラスにはないサンラクに、埒外の耐久力を持つ「緑竜王」を討伐するに足る攻撃力を得る事が出来るのか？

その答えは——“YES”だ。

「30秒で十分だぜ。《真鬼の怪力》——起動！」

それは、彼が最近手に入れた鬼の籠手の特典武器、「剛力鬼手 スートラヴァン」の固有スキル。
有スキル。

逸話級特典武器である「スートラヴァン」の固有スキル、《真鬼の怪力》の効果は——

任意の割合のHP・SP・MPを消費する事で消費した割合に等しい数字だけ一定時間の間STRを強化すると言う至極単純な物。

この効果を起動し、STRを水増しする為に先程回復の【ジエム】を使用したと言っても過言ではない。

……なのだが、はつきり言って攻撃強化としての効率は決して高くない。

HP・SP・MP……基本的に【特攻隊】として、速度型戦士としてHPとSPを無駄に消費できないサンラクにとって気軽に消費できるコストはMPしか存在しない。

逸話級である限界とも言えるが、現時点では強化する元の数値が上級職でしかないサンラクの物であるという事を鑑みればSTRに数千の数値を足し込めれば御の字と言った所だろう。

追加効果もあるとは言え、これでは自己強化に特化した上級職のジョブスキルであればもつと使いやすく上等な強化を行う事が可能であろう。

特典武具を使つてまでやる事ではない。

——勿論、特典武具はMVP獲得者にアジャストする物であるのだから。

それは、このサンラクが使う物である以上、そこに確かな意味があるのだが。

さて、因みにであるが。

先の発言にもあつた30秒、と言うのは【ストトラヴァン】のSTR強化の持続時間

の話ではない。

サンラクの残りの命の時間の事だ。

「むっ!? あれは——」

——GRYAAAAAAAAAN?!!

赤色が舞う。

赤色の粒子が、サンラクの総身から放出され——両手の籠手に、「ストトラヴァン」に喰らわれていく。

サンラクに残っていた全ての魔力^M_P、そして生命^H_P力が——全て《真鬼の怪力》の力となつていくのだ。

当然ながら、サンラクの残りHPは0——サンラクがサブジョブに持つ「死兵」の《ラストコマンド》による猶予時間で死に延びているだけである状況だ。

無謀な、自滅が如し所業。……それを行ったとしても、総STRは一万を少し超えた程度だ。

とてもではないが、それでは先程の様な超速度と超威力を用いても勝てる物ではない。

だが。

こういう状況でこそ奮い立つ者は確かに居るのだ。

こういう逆境にこそ効果を発揮するそのスキルは、実の所デンドロが出るより遙か昔。古の時代のゲームよりずっとゲーマー達に慣れ親しまれてきた概念なのだから。

そのスキル、「ナポレオン」の固有スキルの最大の特性でもあるその概念、能力、スキルは俗にこう呼ばれる。

火事場スキル、と。

「おいおい緑亀野郎。

重複状態異常敵多数種死状態護衛対象有

これだけの悪条件を重ねても「ウオルヤファ」の時に強化倍率が遠く及ばないとか「竜王」を名乗っておいて情けなくないんですか——ねえ！」

言葉と共に双剣より放たれるのは剣圧の衝撃波。

斬風を飛ばす東方のごく普通の遠距離用の剣用アクティブスキル。

——その斬風は「緑竜王」までの直線距離と「緑竜王」を取り巻き舞い飛ぶ《百任逸種》の殆どを吹き飛ばす激風となって襲い掛かる。

GRYAAAAAAAAA!!??

そればかりか、僅かな——と言うには余りにも過小であるサイズの傷を、「緑竜王」本体に刻み込んですらいいた。

スキルの動作の関係上、当人の速度も威力に影響を与えるスキルであるとは言え、上級職の出す力とは考えられない程の力だ。

それも、その筈だろう。

数多の悪状況、自身の損耗、そして古代伝説級の〈UBM〉であり、本人の戦法はともかくその性質としては貯蔵型である「緑竜王」と、彼我のリソース差による判定——必殺スキル、《我に不可能はなし》を発動したサンラクの〈エンブリオ〉による多重強化は……もはや上級職と呼べるレベルでは全くないのだから。

果たして、その状態で……上級職の中でも頂点に位置する超速度と超威力を叩き出せる【特攻隊】のスキルを使用した時、どうなると言うのか——

……参考までに。かの特典武器、「スートラヴァン」を手に入れる、それよりも一か月前に達成した彼の最大速度は。

超々音速を超えた神速であった。

そして今は——その時より、遙かに高いSTRと攻撃力を実現させる「スートラヴァ

ン」がある！

相手のステータスを、その強化を察する様な能は「緑竜王」にはない。

しかし、知能が低いからこそその野生の直感として、「アレはヤバイ」と察していた。

だからこそ、プライドも狙っていた獲物も何もかも投げ捨て逃げの一手を打とうと頭を反転させる。

……しかし、AGIにして1000にも満たない、余りにも低すぎる速度では、逃げ始める事すら出来る訳もなく。

野生の本能を全開にした《百任逸種》の遠隔マニユアル操作……必死の思いで其れを為したとて、彼の死神は止まらない。

まともに動く事すら叶わない筈の呪毒と精神汚染は天狗面——且つて倒したへUBMの特典武器に完全に防がれて。

全身を縛り伸びる蔦の拘束は超強化された筋力^{STR}を前に僅かな足止めにしかならず容易く引き千切られた。

最早サンラクを止める術は「緑竜王」には一つもない——

「じゃあな、【緑竜王】——《神速》《デストラクト》」

!!

音の壁を何枚もぶち破った轟音と衝撃と共に、【緑竜王】の眉間に、再度《テストラクト》が叩き込まれた。

今後は僅かな傷を作るに留まらず、その頭骨、脳漿、コアを破壊の衝撃が余す事なく蹂躪していき……

……ENDにより数秒のみを持ちこたえ、【緑竜王】はその身を大地に伏せて、——光の粒子へと変わりだした。

討伐、完了したのだ——！





□ 天地南部 元開拓村 【特攻隊】デッドドライヴ サンラク

〈UBM〉【緑竜王 ドラググリユーン】が討伐されました

【MVPを選出します】

【サンラク】がMVPに選出されました

【サンラク】にMVP特典【緑種外装 ドラググリユーン】を贈与します

.....

「よっしゃ勝ったあ！ リベンジ達成だぜクソ亀ア！」

〈UBM〉討伐のシステムログが流れていくのを確認しながらも俺は勝利に沸きながら啖呵を切る。

それと同時に且つてあの【緑竜王】の《百任逸種》で殺された時の雪辱が果たせた事

を再確認して勝利に浸る。

あの時はまだ必殺スキルも、「ストトラヴァン」も無かった時でどうしても火力が圧倒的に足りなかったのだが……やはり成長と装備更新によるリベンジはMMOの常識だよなあ！

死亡が確定している？ バツカヘマスターなら死亡を前提とした作戦も可能なんだからデスペナ受けても大勝利だわ。

【クエスト【討伐——【緑竜王 ドラッググリューン】を達成しました】

【クエストリストを更新しました】

「……あれっそういえばあのNPC二人生きてる……よな？ 少なくとも最後に話しかけた時はまだ元気そうだったんだがこれ救出クエの方大丈夫か!？」

更に更新されるシステムログ、討伐クエ達成のログを見てふと最初の依頼の対象だったNPCテイアンの事を思い出すが、流石にもう手も足も出ない。

文字通りの意味で。

先程の過剰ステータスから繰り出された【特攻隊】のスキルは【竜王】をほぼ一撃の下で屠る事の代償にサンラクの手足を根こそぎ吹き飛ばす程の反動ダメージを与えて

いたのだから。

まあ、最も。仮に手足がまだ使えたとしても——《ラスト・コマンド》の残り時間は既に10秒を切っている。どちらにせよどうしようもない事だ。

元の実力はある筈なのだから脅威が排除された時点で達成扱いにならねえかなあ……と期待しているが、その結果はきつと、24時間のデスペナルティの後に分かる事だろう。

救出依頼の方のクエストのログが出ないのは、未だに生存も死亡も確定していないからなのだから。

【自傷ダメージを伴う速度に由来した攻撃力による与ダメージが一億を突破しました】

【条件解放により、【神風】への転職クエストが解放されました】

【詳細は特攻隊系統への転職可能なクリスタルでご確認ください】

「まああの二人も普通にカンストクラスだったつばいし後は天に祈って……………なんて??」

時間は無慈悲に進み、何か爆弾発表を行った様な気がしたシステムログを確認する間

もなく思索する時間もなく、《ラスト・コモンド》の効果時間は終了した。

そして当然ながら、それと同時に——^{アバダ}身体の大幅な欠損とHPを全て捧げた後の《百任逸種》の継続ダメージの結果も相まって即座に蘇生可能時間は過ぎ去って。

【緑竜王】が死すると同時に多量の光の粒子となって消え去ってゆく《百任逸種》と同様に——サンラクの身体もまた、光の粒子となってこの世界を去った。

……………この後、デスペナルテイの時間を悶々としながら過ごしたり、万全整えてやはり自傷過剰速度で転職クエストを突破するゲームマーの姿があったりするのだが。

それはまた、別の話。

……………E n d

退役勇者板 「かがくのちからってすげー！」

□■勇者互助組合 組合掲示板

1. 勇者しちやった学生さん（地球国家↓無限系統樹）
なんとたつてゲームで異世界旅行をしている様な体験が出来るんだもんね☆
落ち着いたのでスレ立て！
2. 勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）
いやそれはもう科学の力を超越しているのではって
召喚されていませんか!?
3. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）
……やっぱりされていますよね!? これって
身体は、こっちの世界に残っているんですけども……!!
4. 勇者しちやった狩人さん（オプツール）
かがくって凄いですよね! 最近ウチの世界でも皆さんに聞いていた銃が流行りだ
したんですけど皆褒めてました!

俺は弓と剣の方が使いやすかったんですけどね！

5. 勇者しちやつた村長さん（タ・バタ）

そりや弓使いの勇者（剣ランクSS）である狩人が使えばそうなるだろうよ……で、学生、はどうなっているんだ？

女子高生の言い様からして召喚ではない……んだよな？

6. 勇者しちやつた冒険者さん（テイラ）

また学生が何か変な事を仕出かした……って事でもなさそうだな

女子高生を見る限り

7. 勇者している妖精剣士さん（ラクシア）

いや、でも学生だしな……

学生だしな……

8. 勇者しちやつた学生さん（地球国家↓無限系統樹）

ちよつとちよつとー。ぶーぶー

別に今回は僕のせいじゃないんだよ！

ゲームを遊ぼうとしたらなんか知らないけど異世界に来てただけなんだよ！

だからちよつと対処を相談したいなって思っただけなんだよ☆

9. 勇者しているフリーターさん（ラースⅡフェリア↓マジアロア）

日頃の行いって重要だよな。なあ学生

でも普通に異世界に来てるってのはそれだけで超大事なんだぞ

普通に大事なんだぞ

10. 勇者しちやった巫女姫さん（サレンダリア）

フリーターさんは実感が籠っていますね……

しかし、実際その通りだと思いますが、学生さんは大丈夫なのでしょいか？

落ち着いたとあるので早急の危機ではないと思いますが……

11. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

先程は大丈夫だった筈なんですけど……すみません、学生さん。もう一度戻って見て

貰って良いでしょうか？

12. 勇者しちやった学生さん（地球国家↓無限系統樹）

はいはい☆

13. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

ログアウトと

戻れてる？ 戻れてるよねー？

14. 勇者しちやった村長さん（タ・バタ）

ああ。元の世界に戻ってるぞ

俺達には何がどうなっているのか分からないけどな（笑）

いやマジで。すまんが最初から説明して貰えるか？

後一応術式の面々も呼んどこうぜ

15. 勇者しちやった冒険者さん（テイラ）
だな

普通に割と異常事態なんだよなあ……いたり表記のままだし、勇者召喚されたって訳じゃ、ないんだよな？

16. 勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）

召喚でもないのに異世界に渡る事なんてあるんですか

と思いましたが、普通に異世界を移動できる方が勇者の中にはいらっしやるのですよね

流石の私でも慣れてきました

17. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

探偵さんの反応が慣れてきたら物足りないなー

まあでも実際に僕達もこれがどれほどの物なのかは分からないんだけどね☆

ゲームを起動したらこうなっただけだし。物語である様なデスゲームの類ではないみたいだけどー

18. 勇者しちやった狩人さん（オプツール）

ゲーム？の世界に召喚されちやったなら俺と同じですね！

デスゲーム？っていうのはちよつとよく分かりませんが

19. 勇者している魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）

分かってたけど学生に任せていると話が進まないから、もし良ければ女子高生さんに

進行頼めるか（笑）

同じ世界でどうなっているのか部分的には分かっているんだよな

20. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

分かりました。少し纏めるのでお待ちください……！

21. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

僕にだって話を進める事は出来る……けど折角だから女子高生さんの補足に回るよ

☆

僕にだって話を進める事は出来るけどね！

22. 勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）

学生さん……

23. 勇者しちやった巫女姫さん（サレンダリア）

学生さん……

24. 勇者しちやった村長さん（タ・バタ）

学生……

……うん。日頃の行いだな

25. 勇者しちやった法術メイドさん（サレンダリア）

学生さんに何か困った事が起きたと聞きました！

私で良ければ相談に乗りますよー♪

26. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

呼んでないんだよいや術式能力がある人は呼んでるけども！

少なくともお前は呼んでないんだよ!?

27. 勇者しちやったフリーターさん（ラースⅡフェリア↓マギアロア）

……日頃の行いって重要だよな。なあ学生？

28. 勇者しちやった妖精剣士さん（ラクシア）

まあ、学生だからな……

29. 勇者しちやった賢者さん（空中庭園）

呼ばれてきたら学生がいつも通りだった

学生だからなあ

30. 勇者しちやった会社員さん（平行世界8群）

無限系統樹……は、確かに割と常駐してるけどこの掲示板で見た記憶はないなあ
学生はいつも通りだけど

31. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

スレ主なのに味方が居ない（笑）

勇者板を楽しく盛り上げる会会長のこの僕があー！

32. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

ま、まあ私は味方……ですの！

ええと、それでは……事の始まりは、ある日突然、私達の世界で一つのゲームが発売された事でした

そのゲームは少なくとも私達の世界の今の技術では考えられない程のオーバーテクノロジーを謳われたVRMMORPGだったんですけど

って、VRMMORPGって通じますか……？

33. 勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）

地球国家ではもうVRMMORPGが実用的なのですか、ってオーバーテクノロジーなのですよ

地球国家の造語、ではありませんけど確か機械的なゲームに関してはある程度知られていましたよね？

34. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

そうだねー

VR、即ちバーチャルリアリティ……というだけで、とりあえず狩人さんが勇者し

ちやった世界のより出来が良い世界、だと思ってくればよいと思うよ☆

まあ僕達の世界だと他のゲームでも割と発達したAI使ってるからー、ああいう事にはならない筈だけでも

つ【退役勇者板「俺の心折れる冒険の話をしたい」

35. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

MMORPGっていうのはゲームの種類の一つだね！

RPGっていうのは狩人さんが迷い込んだ「ダークネス・クエスト」みたいな冒険が出来るゲームでー

MMORPGになると、それを複数人で一緒に遊ぶ奴、みたいな感じ！

複数人で遊ぶからこそその協力要素とか対戦要素とかあったりするのー

36. 勇者しちやった巫女姫さん（サレンドリア）

協力……対戦……RPG……

ああ、分かりましたわ！ ポケ○ンの事ですのね！

37. 勇者しちやった法術メイドさん（サレンドリア）

あつポケ○ンの事だったんですね！ 得心が行了きましたです☆

以前の親睦会で貰ったのは巫女姫さんと一緒にすつごく楽しませて貰いました♪

38. 勇者している魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）

（笑）

39. 勇者しちやった会社員さん（平行世界8群）

（笑）

40. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

んっんー!!

楽しんでくれてたのは良いけどびみよーに、本当に微妙に違うっかなあつ！

MMOだと、一つのゲームの世界に同時に云千人とか云万人とかが同時に遊べるみた

いな奴ねっ

41. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

ポケモンに関連したMMORPGも、あるんですけどね……（笑）

42. 勇者しているフリーターさん（ラースIIフェアア↓マガアロア）

へえ、そういえば地球国家は他の地球系列世界の平均よりも若干時代と科学の発展が

進んでいるんだっただか？

俺が居た頃の位相軸地球ではVRMMOもAIもまだまだな感じだったと思うが

43. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

VR世界に関しては、地球国家でもまだまだハードルが一杯ある感じだけどー

AIに関しては、少数ではあるけどもう人間に近い受け答えが出来る人工知能が開発されてるんだよね。えっへん☆

総合的には平行世界5群にはまだまだ及ばないけど、一部分野は比肩し得るくらいかなー？

これでもまだまだ4群とか3群と比べれば凄く☆フツーなんだよー？

44. 勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）

……もう諦めました……

いえ、話を戻しましょう

つまり、その発売されたゲームは、発展著しい地球国家の中でさえオーバーテクノロジー
ジー——超技術が使われた代物だったんです、ね？

45. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

はい

発売まで一切の情報が無かったにも関わらず、その発売されたVRMMORPGはあり得ない程の超技術が用いられた……俗に、〃夢のVRゲーム〃が結実した物でした
まるで現実世界と全く変わらない程のリァリテイ溢れる仮想現実世界

重要なNPCだけでなく、その世界に住む全ての生物が現実世界のそれと同等の思考や受け答えが出来る超高性能AI

更に、現実世界とVRの仮想現実世界では流れる時間も違い、現実世界の三倍の時間を仮想現実世界で遊ぶ事が出来る事

46. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

そして、一番の目玉として……プレイヤー各々の経験や人格と言ったパーソナリティに応じて全く個別の進化、成長を遂げる「エンブリオ」

どれ一つとっても他のゲームでは実現できないそれらを宣伝し発売されたそのゲームは、当然最初は全く信じられないままだったのですが……

47. 勇者しちやった冒険者さん（テイラ）

……なあ？

時間の流れまで違う現実感溢れる世界ってそれ……

48. 勇者しちやった会社員さん（平行世界8群）

冒険者の、まだ話は途中だけ

で……それでも、それらは本当だったんだらう？

49. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

ピンポーン☆大正解だよ！

現実と同じリアリティと言うだけなら狩人さんが行ったゲームの世界もそうだったかもしれないけど、あれは多分バグで逆に色々補正が掛かってたんだろうしねー

少なくとも、三世代か四世代は時代を先取りしたかの様なすっごいゲームだったんだよ！

50. 勇者しちやった法術メイドさん（サレンダリア）

ほえー……

私なんかはポケオンでも凄い技術だと思ったりしたんですけど地球系列世界ってそんな凄い技術まで地続きにあるんですね!?

51. 勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）

ポケオンは地球系列世界全体での普及率も桁違いですので例外としても良いと思いますが……

……しかし、このスレの本題からして、まだ続くのでしょうか？

52. 勇者しちやった巫女姫さん（サレンダリア）

あつ

53. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

そうです……

前述しただけであれば、不世出の天才が開発していただだけの凄いゲーム、で解決だったのですが

私も学生さんも、年頃の若者ですので、そんなに凄いゲームならと興味を惹かれて遊んでみたのですが……

54. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

まあね

実際に異世界に行った事のある僕達みたいなのだからこそ感じる空気とか違和感とか、そういうのがね

それで勇者板を確認した結果が、あの結果だよ☆

55. 勇者しているフリーターさん（ラースIIフェアリア↓マジアロア）

どう見ても異世界召喚です本当にありがとうございました

いや、笑い話に出来る話かなこれ……？

56. 勇者しちやった村長さん（タ・バタ）

まあ、出来ないだろう……

ところで、俺はゲームと言うのにそこまで詳しい訳じゃないんだが、異世界召喚をゲーム、という事にして問題はないのか？

特に安全面とか。無限系統樹の世界がどんな世界か知らないが全く危険がない世界

なんてそうはないだろう

57. 勇者している魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）

そりゃ、全く失敗する要素がないゲームなんてあり得ないだろうし、MMORPGならやっぱりファンタジー世界的な奴……か？

58. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

はい。人間が居て亜人も居て様々なモンスターも居る、剣と魔法のファンタジー世界的な奴です

59. 勇者しちやった狩人さん（オプツール）

えーと、俺が行ったゲームの世界では普通に傷が付くし

死んだらそれで終わりでお前も死ぬから気を付けろって組合の人に言われたんですけど……まさか

60. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

あつ、それは流石に大丈夫みたいです

他のMMORPGにもある様に、そっちの世界で死んだらデスペナルティ、と言うのを受けて普通に現実世界……地球国家に意識が戻ります

発売から数日経っていますが、特に騒ぎにもなっていないのでそこは問題ない、と思います

61. 勇者しちやった妖精剣士さん（ラクシア）

……ん？

それなら、それはそれで、特に問題はないんじゃないか？

狩人の時みたいにバグなのかは分からないけど、実害はないし別に勇者認定される人が居る訳でもないし

スレタイにある通り凄い事ではあるがそれだけ、なのか？

62. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

いや、それが結構な問題があると思うんだけどねー

特にこれがVRのMMORPGとして世に出ちやつてるからー

63. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

学生に呼ばれて来ました

が、どうやら珍しい事態の様ですね？

64. 勇者しちやった賢者さん（空中庭園）

同じく呼ばれてやって来たぜー

ログも観ただけ……なるほど聞き覚えの無い世界だ

65. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

あ、来た来たー

66. 勇者しちやった会社員さん（平行世界8群）

知識の宝物殿来たこれで勝つる！

……と、なれば良いのだが

学者さんはあの世界について何か知っているのかい？

長年勇者板に居た賢者や学生が知らない時点で普通の世界ではない、と思うが

67. 勇者しちやった狩人さん（オプツール）

よく分からない部分も多いですけど、俺が勇者やってた時みたいな心折れる事にはならないすよね？

それでバグでもなくていつでも戻れるなら、何の問題もないんじゃないですか？

68. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

ふむ……ふむ

学生に呼ばれた時は、また何か面倒事が起きたのかと思いましたが

これは、想像以上に複雑な事態に巻き込まれているみたいですね

フリーターさんの時程切羽詰まっている訳ではありませんが

69. 勇者している魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）

学生の事だからそう大事になる様な物じゃないって思ったかったが

もしかして結構なヤバイ案件なのか？

70. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

えっ

あの

その

私達の世界、ヤバい面倒事に巻き込まれてるんですか!?

71. 勇者しちやった法術メイドさん（サレンドリア）

そんな!

平和な地球系列世界でそんなのダメダメです!

学生さんも女子高生さんも、何かあったら絶対私を頼ってくださいですよ!

巫女姫さんを説得して絶対に助けに行きますですよー!

72. 勇者しているフリーターさん（ラースIIフェリア↓マギアロア）

世界の危機はそんな頻繁にある訳じゃ……ある訳じゃ……

……まあ、俺の体感時間だと結構あるんだけども

73. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

いやまだ何かあるとは決まった訳じゃないし仮に何かあったとしてもお前に助けを
求める訳でもないからね!?

ほら学者さんの話を清聴、しよう!

74. 勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）

何と言いますか

不謹慎極まりないのですが……その

75. 勇者しちやった村長さん（タ・バタ）

まあ言いたい事は分かるぞ（笑）

とりあえずここはいつも清聴せずに茶々入れる学生の言う様に清聴しておこうぜ

（笑）

76. 勇者しちやった巫女姫さん（サレンドリア）

あの

私は別に説得されなくとも助力しますからね!?

ああ、気付け薬が必要ですわ……!!

77. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

ここは詳細な解説をする前に不安を払拭、してあげたいのは山々なのですが

……ほぼ、ないと思いますが、全くあり得ない話ではないので、まずは順を追って話していきましよう

と言うより、地球国家で発売されたその「ゲーム」を語るのに際して、多少長くはなりますが無限系統樹の世界の成り立ち……創世の事から話す必要があるのです

78. 勇者しちやった妖精剣士さん（ラクシア）
創世って、またかなり話が壮大になって来たな

物語に伝え聞く神話の世界、神話の時代って奴だな

79. 勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）

異世界の創世神話、となると確かに興味深いですね

基本的に地球系列世界では神の類は実在を確認されて居ませんし

……基本的には！

80. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

探偵さん（笑）

81. 勇者しちやった冒険者さん（テイラ）

まあ……平行世界4群だけでも、退魔師の話からすればその類のは居そうだからなあ

82. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

ええ、神話と言っても色々ありますからね

……尤も、無限系統樹の世界の創世はがつつりの神話、と言うよりも神の話なのです

が

まず初めに、その世界が作られるきっかけとなったのは、複数……それも十数柱もの神が、新たな同種の神を作り上げ、育て上げる為に作られたのがその無限系統樹の世

界なのです

その為の方策も、器も、糧も、そして試練も全て用意された、神が作り上げた世界
その世界が生んだ者、世界が生まれた目的、世界を運営していた者、全てが神に纏わ
る、神の為の世界なのです

83. 勇者しちやった学生さん（地球国家）
えっ

84. 勇者している魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）
えっ

それは……神を名乗る高レベルの存在、という訳ではなく、か？

85. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

はい。十数柱全てが認定レベル10の真正正銘の神です

とは言え、それだけの数の神が集まったからと言って直ぐに新たな神が生まれる訳で
はありません

いえ、神の誕生方法はそれこそ千差万別なので直ぐに生まれる神も在りますが、無限
系統樹の世界で生み出そうとしていた神はそうではありませんでした

かの世界の神達が採ったのは、該当世界の人類に与えた器を成長させ、最終的に神へ
と至らせる方策の様ですね

86. 勇者しちやった巫女姫さん（サレンダリア）

やはり神にも、新たな神の成り方にも色々あるんですね

私達が仕える神の事でもありますので、やはりそこには興味を惹かれますわね

87. 勇者しちやった賢者さん（空中庭園）

えっ

巫女姫さんの場合、神様から賜った不老不死それ自体が神へ至る道の第一歩的なアレ

……だよな？

88. 勇者しているフリーターさん（ラースⅡフェリア↓マギアロア）

あー、そういうのは多いみたいっすね

正しく恩寵と言うか

俺は貰った事ないんですけどね!!!

89. 勇者しちやった巫女姫さん（サレンダリア）

そ、そうだったんですの!?

私は、日頃の祈りへの報いと期待の賜物だと思っていたのですけども……!:

90. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

いや、巫女姫さんのその解釈で間違いはないでしょう

人やそれに類する存在が神に至る例は非常に多くありますが、その障害の最たる物と

しては寿命、時間が上げられますから

お気に入りや同種の神になる事を期待される勇者に不老不死や類似の恩寵を与えてその下地を用意されるのはよくある事です

91. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

うんうん。勇者していた程の実績持ちなら色々信頼も置けるだろうしね☆

それも、全く問題がない訳じゃないんだけどねー

確か、合法ロリさんと神殺者さんの殺し合いの原因の割合のいくらかはそれなんだっけ？

92. 勇者しちやった賢者さん（空中庭園）

そうそう

みだりに不老不死を人々に与えて自身の勢力を強化しようとする神が居たり

年と力だけ重ねて増長した神が生まれたりする事があるらしいからな

まあ、巫女姫さんの場合そんな心配は無用だと思うし、不老不死だからって必ず神に至る訳でもないんだし

そこまで気にする必要はないと思うぜ

不老不死だからって必ず神に至る訳でもないんだし！

93. 勇者している魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）

あー

そうか、神からすればお気に入りに睡つけた的な感覚でもあるんだな

94. 勇者しちやった妖精剣士さん（ラクシア）

へえ

俺の世界も神様は複数居るけど不老不死を賜るタイプじゃない

って事は無限系統樹の世界と同じ様な感じなのかねえ

しっかしそうになると、学生や女子高生達がやったゲームってのは外部からの干渉で刺激を与えて成長を促す、みたいなお題目なのか？

95. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

器……糧……成長……

あつレベル制の事ですわね!?

そういえば件のゲーム……無限系統樹の世界もレベル制の世界でした

そうなると私達プレイヤーも糧の一種、という事なのでしょうか？

96. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

……いいえ。違います

そうだったら話は幾分単純だったんですけどね

続きを話していきます

神に至らせる為の様々な要素を全て含んだ世界、無限系統樹ですが

その運営が幾千年も続き、世界は少しずつ発展成長を遂げていきます

しかし、未だ新たな神は生まれません

……運が悪かった。それしか言える事はないですね

当時の世界の人々の努力が足らなかつたとは言い難く、ただ運悪く、様々な要因を合わせて……尚、神に至る為には足りていなかったのです

97・勇者しちやつた探偵さん（平行世界4群）

そうですね……一般的に土地神や崇り神の様に人々に伝えられる様な神ではなく

望まれているのはこの組合の人の認定の中における最上位の位を戴く神、ですからね
やはりそう簡単にはいかないのですね

98・勇者しちやつた学者さん（時空図書館）

そういう事です

その様な時が長く、永く続き……

……非常に言い辛い事ですが、無限系統樹の世界を作り上げた神々は、かの世界を見切り、離れていってしまいました

99・勇者しちやつた狩人さん（オプツール）

え!?

神が居なくなるって、その世界は大丈夫なんですか!?

100. 勇者しているフリーターさん（ラースIIフェリア↓マギアロア）

そこらへんは世界によつて様々で、神が居なくなつた時点で崩壊する世界もあれば神が居なくても全く問題ない世界もある、が……

残っている神が居たとかでなければ無限系統樹は後者だった、という事なのかな？

101. 勇者しちやつた巫女姫さん（サレンダリア）

神が世界を見捨ちえるにやんて!!!

102. 勇者しちやつた村長さん（タ・バタ）

まあまあ、続きを聞こうぜ

……想像以上に真面目に壮大で少しびっくりしたけどな

103. 勇者しちやつた学者さん（時空図書館）

かの世界にとつては幸運な事に、無限系統樹の世界は神の存在に依存しなくても世界を保つ事が出来た為、即座に問題が起こるはありませんでした

勿論、世界内で多少の混乱こそありましたが、人々は変わらず無限系統樹の世界で研

鑽と成長を続けていました

……ある時を迎えるまでは

104. 勇者しちやつた学生さん（地球国家）

ある時……

あつこれ普通に長い話だ!?

105. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

学生……

いえ、確かに長く、そして複雑になる話でもあるので構いませんが

そう、ある時を境にして無限系統樹の世界は激変の時を迎えます

……別の世界から、十数柱の“神”が侵略して来たのです

106. 勇者しちやった狩人さん（オプツール）

えっ

新たな神が生まれたとかじゃなくて、侵略つて

えっ

107. 勇者しちやった会社員さん（平行世界8群）

なにつ

同じ言い方という事はもしかして

……その神達も、レベル10、なのか？

108. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

はい。先の神々と似通った実力を持つ、認定レベル10の神々が十数柱

神の守りがない無限系統樹の世界に攻め込んできたのです

分かりやすいように、無限系統樹を作った神々を旧神々、侵略してきた神々を新神々と表記させて貰います

そして、想像に難くないと思いますが……世界を守護、運営する神なき無限系統樹に住まう人々に、新神々に勝利できる要素はありませんでした

新神々は自らの目的の為に無限系統樹の世界に攻め入り、築かれていた文明と人々を含む多くの生命を奪い滅ぼす事となります

これが、現時点よりかの世界の時間で約2000年前の出来事です

109・勇者しちやった法术メイドさん（サレンダリア）

そんなの、ダメダメですー！

違う世界なのであろうと、神様が人々を滅ぼすなんて、救いが無すぎます……

110・勇者しちやった冒険者さん（テイラ）

粛清の日……って奴か

やっぱり胸糞悪いな。無限系統樹の世界の人類が何か悪い事したって訳でもないだろうに

111・勇者しちやった会社員さん（平行世界8群）

そう……だな

……いや、神々の理屈なら、旧神々の眼鏡に叶わなかった時点で、悪なのかもな
旧神々の期待に応えられていけば、きっと旧神々も無限系統樹の世界に残っていて、
そんな事にはならなかっただろうからな

112. 勇者している魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）

神と名乗る奴はどいつもこいつも身勝手だからなあ……どうだか、って奴だ

自分達で抵抗できるだけの力があれば……つてのも無理筋な話だしな

113. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

勿論、無限系統樹の世界の人々は世界全体で一丸となり纏まって、新神々の襲来に抵抗しました

しかし、認定レベル10の神々が数多集った相手を前に勝機は存在しなかったでしょう
う

そうして、世界を一度まっさらにし、数少ない生き残りしか居なくなつたその世界で
新神々は自らの目的の為に、行動を開始しました

世界の理に干渉し、生き残つた人々に情報操作を行い自らが都合の良い様に世界を書き換え始めたのです

114. 勇者しているフリーターさん（ラースIIフェリア↓マギアロア）

うわあ……神殺者さんが見つけたら嬉々として襲い掛かりに行きそうな神々だあ

……

115. 勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）

ええ、邪神と呼ぶに相応しい非道な行いですね……

116. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

だねー

……でもさー。最終的にそれってさー

117. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

時空の流れの調整にモンスタードロップアイテムの戦利品の付与、ボスモンスターの作成

安全地帯であるセーブポイントの作成、特色豊かで魅力的な国家の形成、新たな特別

な人類の流布……

そして自身の実力や状態が一目で分かるウィンドウの作成や旧神々去りし後に世界を脅かす程の存在の排除など、多くの干渉を新神々に行ってきました

唯一つ自分達の目的の為に

118. 勇者しているフリーターさん（ラースIIフェリア↓マギアロア）

あれっ!?

119. 勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）

あれっ!?

120. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

フリーターさん達ってばー（笑）

この世界はー、今ではとても出来が良いゲームとして発表されてるんだよー？

121. 勇者しちやった会社員さん（平行世界8群）

いや、まあそうなんだが

……神話が普通に神話として壮大で、そこに帰結するって事が思考から抜け落ちてたな

でも、新神々の目的がゲームを作るってだけな訳ではないんだろ？

122. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

そ、そういうえぼそうなんですよね

公式のゲームの説明でも、モンスターの脅威はあるけど普通に人々が繁栄している世界ってありました……

123. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

はい、新神々の目的はゲームを作る事ではなく、それは目的の為の手段に過ぎません
ゲームを介して地球国家の人々の魂を、無限系統樹の世界で新神々が作ったヒトガタ
に入れ込み活動させ

——そうしてヒトガタに付属した新神々の卵、へエンブリオをクオリティの高いゲー

ムと言う演出を通して成長、進化させる

そうして新たな同種の神を作り出す。その目的の為に、満を持して新神々からお出しされたのがその「ゲーム」という訳です

124. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

まさかの

目的の天井☆なんだよ！

125. 勇者しているフリーターさん（ラースⅡフェリア↓マジアロア）

そこまでやっておいて目的は同じなのかー!?

ズコーってする所だったよ！

126. 勇者しちやった村長さん（タ・バタ）

まあ、その。なんだ

やっぱり神であろうと種の繁栄は急務なんだなって……

127. 勇者しちやった冒険者さん（テイラ）

あー

……そうだよな。もう約2000年前、って記録でしか残ってない様なもんなだよ

な

今は人々も無限系統樹の世界で繁栄してるならそれはそれで……良い事、なのか？

128. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

えっ

あの

その、つまりゲームをする上では特に問題はない……のでしょうか？

安全性とか、異世界に行く事による後遺症とか……

129. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

地球国家の人々の安全性については、新神々も特別な配慮をしているので大丈夫でしよう

先も言った通り、魂のみを一時的にヒトガタに移している為肉体的には全く問題なく、魂についても新神々が直々にとても強力な保護を掛けています

あれを突破して魂にダメージを与えるにはレベル10に匹敵する実力が必要になるでしょうが、新神々は自ら招いた地球国家以外からの外的な干渉を完全に遮断しています

これは旧神々も同様の事をしていましたが、自らの目的、計画の障害になり得る者が闖入しない様に十分な注意を行っているのでしょうかね

地球国家からの無限系統樹世界への魂の召喚は地球系列世界特有の召喚誘因特性を利用している様なので、新神々にとっても地球国家での目的を失敗したくないのですよ

130. 勇者しちやった賢者さん（空中庭園）

ああ、やっぱりかあ……

無限系統樹世界、観察は出来てもこれ以上できそうにないわ

多分新神々が出張ってきそうな雰囲気かぶんぶんする

131. 勇者しちやった会社員（平行世界8群）

ちよ、賢者さん何やってるの（笑）

流石に神に喧嘩売るのは厳しくない？

132. 勇者しちやった賢者さん（空中庭園）

うん、無理無理。だからこれ以上手は出さないよー

観察もここから先は厳しそうだから何かあってもこの板と勇チャ頼りになりそう

133. 勇者しちやった賢者さん（空中庭園）

あ、術式の観察の副産物だけど

無限系統樹世界への召喚はゲームを起動したら自動的に発動する奴だけど

女子高生さんは組合の召喚拒否権を持っているから、そういう拒絶的な意思だけで起

動しても自動的な召喚の拒否と帰還が行える筈だぜー

134. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

えっあつ

ありがとうございます

……って、もしかして、あの時暴発した〈自害〉での強制ログアウト、召喚拒否権のせいだったんじゃないですか!?

135・勇者しちやった学生さん（地球国家）

あつ

……ドンマイ☆

136・勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）

自害……ゲーム的な、デスペナルティの代わりに行う安全装置ですかね
M M O R P Gなら確かに、そういう物も必要になりますか

137・勇者しちやった法術メイドさん（サレンダリア）

何はともあれ、無限系統樹の世界の人達も地球国家の人達も大過ないみたいで良かったです☆
神を育成する為に整えた世界、整えたゲームと言っても、ゲームとして楽しむ事に罪

はないと思うですし！

138・勇者しちやった学生さん（地球国家）

あー

でも、ゲームはゲーム遊戯でちよつと問題はなくはないんだけどねー

139. 勇者している勇者さん（無限系統樹）

何と……先々期文明時代の“化身”との戦いは真実神との戦いだったのですか
それに、こんな神話の如し歴史があつたなんて……驚きました

140. 勇者しちやつた女子高生さん（地球国家）

えっ

141. 勇者している魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）

えっ

142. 勇者しちやつた探偵さん（平行世界4群）

えっ

143. 勇者しちやつた会社員さん（平行世界8群）

えっ

144. 勇者している勇者さん（無限系統樹）

ああ、これは失礼しました

この勇者板とやらに困惑しつつも世界名で検索を行い、こちらに辿り着きました

この世界……無限系統樹、でいいのでしょうか

私はそちらで【勇者】^{ヒーロー}をやっている者です

先達の皆様、どうかよろしくお願いします

145. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

……言うのが遅くなってしまいました。無限系統樹の世界にもれつきとした生誕勇者がいます

世界の上、少しばかり勇者としては特殊な立ち位置となりますが

これもまた、説明すると長くなりそうですね……

146. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

うわちゃあ

ともかく

勇者さん、よろよろー☆なんだよ！

退役勇者板 「かがくのちからってすげー！」：後半

□ ■ 勇者互助組合 組合掲示板

170. 勇者している修羅の勇者さん（無限系統樹）
名前を付けてみたけど、これで良いのかな？

171. 勇者しちゃった学生さん（地球国家）

うん、ちゃんと変わってるよー☆

修羅の勇者さんだね、よっろしくう！

……修羅？（笑）

172. 勇者しちやった狂科学者さん (平行世界5群)

何か伸びているスレがあると聞いて

173. 勇者している魔法少女さん (位相軸地球)

修羅の勇者さんですね。よろしくお願いします

…: こうして掲示板越しの会話だけだと、普通に物腰穏やかなので、ちよつとイメー

ジしにくいですけども

174. 勇者しちやった狩人さん (オプツール)

修羅ってる人なんですね。よろしくお願いします!

戦闘能力が高い事は良い事だと思います!

175. 勇者している魔剣使いさん (ファー・ジ・アース)

一理ある

176. 勇者しちやった妖精剣士さん (ラクシア)

一理ある

177. 勇者しちやった冒険者さん (デイラ)

一理ある

178. 勇者しちやった探偵さん (平行世界4群)

いやいや、勇者の方々の中では確かに一理…: はあるのかも、しれませんが!

もつと違う反応があるのでありませんか!?

179. 勇者しちやった女子高生さん(地球国家)

そ、そうですよね

やっぱりそういう反応の方が正常でしたよね……!?

180. 勇者しちやった会社員さん(平行世界8群)

いや、これは上の人達と価値観が違うだけ(笑)

彼らはほら、仮に敵対してたとしても事情があれば戦い合った後に分かり合って仲間になるとか普通にやる人達だから

もつと言うと脳筋組だから……

181. 勇者している魔剣使いさん(フアー・ジ・アース)

絶望した! 同じ地球系列世界なのに意識の断絶が激し過ぎて絶望した!

いや、そういうの普通にあるよな!?

182. 勇者しちやった学生さん(地球国家)

なかったかなー(笑)

183. 勇者しちやった狂科学者さん(平行世界5群)

まあないだろう……

184. 勇者しちやった探偵さん(平行世界4群)

ないですよ!

普通はないですよ!?

普通は地球系列世界ではそういう事はないですよ!?

185. 勇者しているフリーターさん(ラースIIフェリア↓マギアロア)

まあ俺はあつたし召喚勇者なら普通にある人はあると思うけど(笑)

修羅の勇者さんも……無限系統樹の世界は普通に剣も魔法もあつてモンスターも居るつていうし、そういう人なんですよ

186. 勇者している修羅の勇者さん(無限系統樹)

ああ、申し訳ない

私はまだ何事かを為したと言う訳でもないので、最も特徴として表せるであろう祖国の特徴を勇者名に入れたのです

そこまで深い意味はないです

187. 勇者しちやつたフリーターさん(ラースIIフェリア↓マギアロア)

そういう人では、なかった!

いけない、俺の価値観が異世界の価値観に染まり始めている気がして来た!

188. 勇者しちやつた村長さん(タ・バタ)

フリーターさん(笑)

189. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

そっか、なるほどー

僕で言うならさながら「黄金の勇者」あるいは「黄金の国の勇者」って所だね☆
それにしても何処だろ。えーと……

190. 勇者しちやった妖精剣士さん（ラクシア）

黄金の……勇者？

黄金の………国!?

そっちの方が修羅の勇者よりよっぽど興味を惹かれるんだが!?

金満なのか!?

191. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

妖精剣士さん……

黄金の国と言うのは事実ですが、ちよつと語弊があると言いますか

192. 勇者しちやった会社員さん（平行世界8群）

あー

確かに間違いではないんだろうが……なあ？

193. 勇者している魔法少女さん（位相軸地球）

他に納得できる様な適当な特徴もそうないですし、確かにそうなります……かね？

194. 勇者しちやった冒険者さん(デイラ)

また地球系列世界特有の言葉遊び的なのだなこれは……なるほどなと思っただぜ

195. 勇者している修羅の勇者さん(無限系統樹)

聊か混乱させてしまった様で申し訳ないですな

ところで、話は変わりますが折角の機会ですので、少し質問をよろしいでしょうか？特に私が居るこの世界にも詳しい学者さんにお答え頂きたいのですが……

196. 勇者しちやった狩人さん(オプツール)

あれ、そういえば修羅の勇者さんは生誕勇者……なんですよね？

今まで掲示板には書き込みしてこなかったんですかね？

197. 勇者しちやった狂科学者さん(平行世界5群)

掲示板には古来よりROM勢と言う言葉が存在する

実際に掲示板機能を使って書き込んでいる者より遥かに多い閲覧者数となるのはその為なんだぞ狩人

そうじゃなくてもこんな掲示板怪し過ぎてて普通の感性をしていたら使おうとは思わんからな

198. 勇者している魔剣使いさん(ファー・ジ・アース)

えっ

199. 勇者している村長さん（タ・バタ）

えっ

200. 勇者している探偵さん（平行世界4群）

本当にそうですよ……私がこの掲示板を使いだすまでどれだけ警戒した事か……っ
！

とは言え、これも地球系列世界特有の警戒だと思いますが、やはり他の世界ではそうでもないのでは、ないでしょうか

201. 勇者している魔法少女さん（位相軸地球）

まあ……よつぽど切羽詰まった時とか、嘆きたい時とかはその心情が警戒を上回る事もあります

ありましたからね……

202. 勇者しちゃった女子高生さん（地球国家）

魔法少女さん……

そういうえば私の時もそうでしたね……

203. 勇者しちゃった学生さん（地球国家）

えー、僕なんて勇者板を楽しく盛り上げる会の会長として日夜頑張ってるのにー

皆もつと気軽に書き込んで一杯楽しんで良いと思うんだよ!

204. 勇者しちやった学者さん(時空図書館)

私がお答えできる問題であれば謹んでお答えいたしましょう

ちなみに、修羅の勇者さんは今まで書き込んでいなかった訳ではなく、勇者認定が至極最近

具体的に言う例のゲームが始まったその瞬間に、初めて「勇者」であると認知されたのではないのでしょうか?

205. 勇者しちやった学生さん(地球国家)

うん? あー!

そっか、新神々の干涉遮断で組合の術式も弾かれてちやつてたんだ!?

206. 勇者しちやった賢者さん(空中庭園)

ああ、そうだろうなあ

数も多くて準備万端整えてるんだから、これくらいできるよな

で、ゲームが始まった瞬間外部との道、地球国家への召喚経路を開いたからこそ勇者になった、という事か

207. 勇者している修羅の勇者さん(無限系統樹)

ありがとうございます。……ええ、確かに

私が「勇者」としてではなく、勇者として認定を受けたのは大体一週間前

話の流れからすると、地球国家の人々が「エンブリオ^神」を持つ者としてこの世界に呼び出される様になった正にその時です

208・勇者している修羅の勇者さん（無限系統樹）

……なるほど

他の世界の人の話や有識者の方の話を通じるだけで自分が居る世界の事が色々と詳らかにになると言うのは中々に楽しいですね

話の内容に連なる世界の秘密が一つ二つと判明していきます

209・勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）

それを喜べるなら……何よりです……

210・勇者しちやった狂科学者さん（平行世界5群）

探偵（笑）

211・勇者しちやった冒険者さん（テイラ）

探偵さん（笑）

212・勇者している魔法少女さん（位相軸地球）

自分が居る世界……仙人さん……うっあたまが

そ、それはともかく。質問は勇者認定のタイミング、の事だけではないんですよね？

213. 勇者している修羅の勇者さん(無限系統樹)

はい。すいません、脱線してしまっていました

質問したい事とは、この世界、無限系統樹においての「勇者」の役割、意味……即ち、私の為すべき使命の在処

個々の世界の成り立ちまで知っている学者さんであれば、それを教えて頂けるだろう
と思ひまして質問させて頂きました

——如何でしょうか?

214. 勇者しちやった狩人さん(オプツール)

あー……難しい話、ですネ!

215. 勇者しちやった村長さん(タ・バタ)

普通に考えたら世界を平和に導く事、みたいな感じなんだが……

216. 勇者しちやった狂科学者さん(平行世界5群)

……MMORPGとして、新神々は地球国家の人を招いているのだろう

通常のRPGと違い、MMOであるならば勇者が打倒すべき魔王、という様な存在があるとも思えないが

むしろ、世界を脅かす様な不都合は新神々が直々に対処していた様だし

217. 勇者しているフリーターさん(ラースIIフェリア↓マジアロア)

勇者の役割、勇者の意味は本当に世界によつて様々だから確かに、学者さんみたいなでもないとちよつと分からないなあ

ただ在るだけで良い、みたいな世界もあるつて聞くし

218・勇者しちやつた学生さん（地球国家）

あれ、確か無限系統樹世界はレベル制、それもライラ・スミス世界とも近しい役割毎ジョブにレベルがあるタイプだったよね？

それで修羅の勇者さんが勇者さんなら、ジョブ自体が「勇者」なんだよね

それならジョブの方に何か意味があると思うんだけどもー

219・勇者しちやつた法术メイドさん（サレンダリア）

巫女姫さんを寝かし付けてきましたです☆

と思つたらライラ・スミス世界の話でした!?

でもあの世界での私はジョブも普通でしたし、成果勇者だったから関係ないですよね??

220・勇者しちやつた賢者さん（空中庭園）

関係な……い事もないんだよなあ

多分だけど、そもそもライラ・スミス世界の神と無限系統樹世界の旧神々、かなり根が近いというか近縁関係みたいな奴じゃないか？

その世界で暮らす人々はともかく、基礎となる理が結構似通っている
勿論役割毎のレベル制という部分も含めてな

221. 勇者しちやった女子高生さん(地球国家)

えっ

222. 勇者しちやった法術メイドさん(サレンダリア)

え——っ!!

そうだったんですか!?

すっごい偶然です☆

223. 勇者しちやった狩人さん(オプトール)

俺が勇者してた世界では確か自分のレベルがあるだけで、割とそういうのがメジャー
だって言うのは聞いた事がある気がします!

224. 勇者しちやった学者さん(時空図書館)

勇者としての使命、ですか

狂科学者さんの言葉の通り、世界の脅威の多くが新神々によつて対処されている状況
です

現状ではこれと言つて使命と言える物はなく、今まで通りの活動が続けて行くのが良
いと思います

225. 勇者している修羅の勇者さん（無限系統樹）

——嘘、ですぬ

この掲示板の思念入力には《真偽判定》は有効な様で何よりでした

そしてその発言が嘘なら矢張り何かしらの使命があるのでしようか……？

226. 勇者しちやった妖精剣士さん（ラクシア）

おお。そういう事も出来るのか！

割と特殊な能力……スキルな気はする

227. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

口述筆記限定は流石に難しいからってこれぎりぎりじゃないかなー

228. 勇者している魔法少女さん

えっそれ大丈夫なんですか!?

怒られちゃったりしませんか!?

229. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

まあ最初に嘘を吐いたのは私だしだいじょ……大丈夫ですかねえ（笑）

それでも、完全に嘘という訳ではないのですが、確かに使命、と言える様な物はあります

230. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

為すべき大命、使命はあるのですが……それは何も「勇者」である修羅の勇者さんでなければならぬ、という物ではないのです

その世界の役割の中で「勇者」や「聖女」等、一部は確かにそれらの使命を果たす上で特に有効であったり大きな意味を持ちます

しかし、それはそれらの特別な存在が「必須」である事を意味しません

勿論、修羅の勇者さんがそれらを為せるのならそれが一番なのですが

……ただ、それにも限度はあると思いますが

231. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

あつ、それってもしかして

旧神々の期待……神へと至る事、だったりするんでしょうか

今まで誰も達成出来ていないっていう

232. 勇者しちやった会社員さん（平行世界8群）

いやでも……もう旧神々は居ないんだろ？

ならそれが使命っていうのも妙な話じゃないか？

233. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

そういうばライラ・スミス世界でも普通に勇者でもななんでもなかつた筈の御付きのメ
イドが魔王倒してたよね……

234. 勇者しちやつた法術メイドさん（サレンダリア）
えっへん、なのです♪

メイドとして頑張っちやいました☆

235. 勇者しちやつた学生さん（地球国家）

普通は頑張つても出来ないんだよ！

236. 勇者しちやつた学者さん（時空図書館）

そうですね

使命と言うよりも「勇者」に期待されている事と言った方が正しいでしょう

そういう意味では女子高生さんのそれも正解です

糧を手に入れ器を育て、神へと至る事

そこに辿り着くまでに、「勇者」ほどやり易い存在は無いでしょう

237. 勇者しちやつた学者さん（時空図書館）

更に言うのであれば

新神々からの期待は、修羅の勇者さんのみならず、無限系統樹世界の全ての著名人に
対しては（エンブリオ）に対しての外部刺激に他ならないでしょうね

これは当然、修羅の勇者さんのみへの使命とは流石に言えないので別に気にする程の
事ではないと思いますが

238. 勇者しちやった冒険者さん(デイラ)

ふむふむ……ふむ?

つまり、具体的に何をすれば良いんだそれは

239. 勇者しちやった探偵さん(平行世界4群)

……それは、それらは意識して何かを行わなければならない、という様な物の類ではないのでは?

地球国家から来た人々を接待しろとか、そういう訳ではないのでしょうか

完全に無視を決め込むのもなければ、それこそ勇者の様な実力者相手であれば敵対したとしても強い外部刺激になるでしょう

地球国家の人々の安全は新神々が保証しているのですから

240. 勇者しちやった妖精剣士さん(ラクシア)

レベル制で、糧を集めれば良いって言うなら普通に冒険して……まあ普通の流れかな?

241. 勇者している修羅の勇者さん(無限系統樹)

糧を手に入れ器を育て、神へと至る事……

……やはり、そうですか

ならば、この世界ではその器は己ジの役割ブで、糧はレベルと経験値、という事になるん

です
ね

確かに、【勇者】はそれをこの世界の何よりも得意としているでしょう、ね

242. 勇者している魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）

含みのある言い方だな……何か問題があるのか？

243. 勇者しちやった会社員さん（平行世界8群）

レベル上げの方法が何か問題とか

そういう事でもないよな？ 学生や女子高生の様子からして地球系列世界から見た

ファンタジー世界から逸脱した様な感じでもないし

244. 勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）

もしかして……修羅の勇者さん、あまり戦闘が得意ではない、のではないでしうか

？

修羅と言うのは祖国の特徴であって彼本人の特徴ではない様に言っていましたし

役割^{ジョブ}のレベルを上げるといふ世界であるならばそれは戦闘系だけではなく、法術メイド

さんのメイドの様な戦闘には適さない役割もあるでしょう

245. 勇者しちやった修羅の勇者さん（無限系統樹）

いいえ、戦闘は出来ず

【勇者】としての力もありますので、祖国の武芸者としても最上位の実力を持っていると

は自負しております

祖国に問題が無いとは、言えませんが

時に皆さん。レベルを上げる為に行う事……行うべき事は何だと思えますか？

246. 勇者しちやった狩人さん（オプツール）

はい、モンスターを狩る事ですぬ！

247. 勇者しちやった狂科学者さん（平行世界5群）

戦闘系に適さない役割もあると云っていただけだろう

ならば役割に沿ったクエストをこなす……適した行動を行う、とかか？

248. 勇者しちやった会社員さん（平行世界8群）

直接的に糧となるリソース、経験値が詰まったアイテムを使用すると言うのもあるかもしれない

俺が知る限りオマケ程度な感じではあるが

249. 勇者しちやった法術メイドさん（サレンダリア）

ライラ・スミス世界と同じなら多分どれでも大丈夫、ですよー！

直接リソースを奪う様な術もあると思いますです☆

でもでも、自分で全力で頑張って集めた方が身体に良いと思いますよ♪

250. 勇者している魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）

普通に発想がえぐい……レベルダウン、レベルドレインはされた側は凄く悲しくなるからあまりやるもんじゃないぞ！

251. 勇者している修羅の勇者さん（無限系統樹）

確かに、適した行動によるクエスト等でもレベルを上げる事は出来ませんが、やはり「レベルを上げる」という一点のみを考えるなら戦闘により敵者から糧を奪う事が最も効率が良いです

そして、その点において言うのであれば、その果てを指すのが創世の旧神々の望みであると言うのなら、それに最も近いのは間違いない祖国なのでしょう

252. 勇者しちやった村長さん（タ・バタ）

まあ……修羅だからなあ

253. 勇者しちやった妖精剣士さん（ラクシア）

修羅だもんな

それが特徴になる国……とは言え、生存戦略としては当然じゃないか？

俺のいる世界でもそうだけど、モンスターが居て、他国が居て、蛮族も居る

堅実で強大な戦力がなきや国の安寧なんて夢のまた夢って奴だ

254. 勇者しちやった賢者さん（空中庭園）

一理ある

高みを目指す気概とも取れなくはないしね

255. 勇者しちやった女子高生さん(地球国家)

ああ、この国でしょうか

精強な武芸者が多数いる刃の国、と紹介されていました!

256. 勇者している修羅の勇者さん(無限系統樹)

はい、その国で間違いないでしょう

今も昔も変わらず、祖国では強くなる為に、鍛える為に、多くの武芸者達が修練とレベル上げを欠かしません

強くなる為、自らを高める為に最も効率が良い手段を知っていて、実践しているので

す
さて。そして、この世界でレベルを上げる為に、最も効率が良い手段とは、クエストでもなく、モンスター討伐でもなく……人を殺す事です

257. 勇者しちやった探偵さん(平行世界4群)

えっ

258. 勇者しちやった女子高生さん(地球国家)

えっ

259. 勇者している魔剣使いさん(ファー・ジ・アース)

えっ

260. 勇者している魔法少女さん（位相軸地球）

えっ

261. 勇者している修羅の勇者さん（無限系統樹）

人間、特にレベルの高い人間であるほど、それを殺した時に得られる経験値は同等の実力を持つモンスターと比較しても数十倍以上に大きくなります

それ故に、自らのレベルを上げる為に、自らの力を証明する為に人が人を殺す国の中で常に内乱を続け、強くなる為に殺し、強いという理由だけで殺されるそれが最も効率が良いから。それが最も研鑽になるから

……それ故に、祖国は海を隔てた他国から、修羅の国と、そう呼ばれているのです

262. 勇者しているフリーターさん（ラースIIフェリア↓マジアロア）

うーん、これは……

263. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

……なるほど、そうなっていたのですか

国の詳細までは掴んでいませんでしたが、それはある意味では新神々の仕事、と言っても良いかもしれません

一概に悪いと言える事ではありませんが……新神々が行った世界変容にて、モンス

ターの戦利品ドロップアイテムの付与、と言ったと思います

本来であれば、無限系統樹の世界にその様な理はなく、ただ糧となる経験値と骸が残るのみでした……が、それでは地球国家の人を招く際に不都合だったのでしよう

得られる筈の糧を各々のモンスターに合わせた戦利品に変換し、よりゲーム的に遊べる様にする為の工夫という、ただそれだけの筈だったのですが……

264. 勇者している修羅の勇者さん（無限系統樹）

やはりそうでしたか

人にはその戦利品化の理は適用されず、そのままの糧を得る事が出来る、と得心が行了きました。とは言え、祖国がこうなのは変え様がない事なのですが

265. 勇者しちやった冒険者さん（テイラ）

まあ神様の仕業ならどうしようもないし、どの道今更理が変わった所で根付いた思想が直ぐに変わるって事はないだろうから……

266. 勇者しちやった会社員さん（平行世界8群）

招くのが地球系列世界であると決まっていたなら、確かにその理の付与は必要だろうしな

267. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

そう、ですよね……アイテムと言う形じゃなくて、素のままの死体を使える形にしろ

と言うのは……殆どできる人はいないでしょうから

268. 勇者しちやつた狂科学者さん（平行世界5群）

適応できる者ならばそのリアルさはウケるのかもしれないが、圧倒的少数だろうな
そして、神の卵……だったか。それを育てさせたい新神々としてはプレイ人口は多く
なる様に尽力したいだろうさ

269. 勇者しちやつた探偵さん（平行世界4群）

……いいえ、もしかして

強くなる為に殺し、強いという理由だけで殺される、という事は……

……修羅の勇者さんも、祖国の大多数から狙われる立場、という事なのではないで
しょうか？

その国でも有数の実力者で、有名人なのでしょう？

それは……その……

270. 勇者しちやつた法術メイドさん（サレンダリア）

えっ!?

勇者様ですよ!?

271. 勇者している魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）

あー

聞いているだけの印象だと……ありそうだな。確かに

勇者と言うのは世界毎に立場が違うが、その世界、無限系統樹での勇者は学者さんや修羅の勇者さんの発言からするに、絶対的な存在って見られてる訳じゃないんだろ？

272. 勇者している修羅の勇者さん（無限系統樹）

その通りです

【勇者】として格段の力を、糧リソースを持つ私は幾度となく祖国の武芸者に命を狙われ——そして、その悉くを【勇者】としての力で返り討ちにして来ました

その度に私の中に彼らを殺した事による経験値が入って来ますが……それを快いと、そう思った事はありません

273. 勇者している魔法少女さん（位相軸地球）

修羅の勇者さん……

274. 勇者しちやった狩人さん（オプツール）

修羅の勇者さん……

275. 勇者している修羅の勇者さん（無限系統樹）

この世界の【勇者】の力とは、即ち役割ジョブの力の究極系

どの様なジョブも力も、何事をも可能とする素晴らしい力です

しかし、今の様な生き方では選べる役割が余りにも狭く、窮屈でした

それ故に、此度の勇者認定とこの掲示板の勇者の皆様の叡智を以て、【勇者】としての他の道を見出せれば、と思ひまして

276・勇者しちやった妖精剣士さん（ラクシア）

そうか……

安易な慰めは出来ないけど、それならやっぱり此処で相談したのは間違いじゃなかつたんじゃないか？

学者の話では生誕勇者として、絶対に為さねばならない使命があるという訳ではなし——という事は、何なら何をやっても自由なんだぜ？

277・勇者しちやった村長さん（タ・バタ）

そもそもの話、創世の旧神々が居ないのならその【勇者】としての使命を気にする必要もないだろう

それなら、究極的にどうするのかはお前さんが何をしたいか、つて所だ

278・勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

そうですよ！

刃の国——修羅の勇者さんの祖国は島国けど、国に囚われる必要はないと思いますつ何事をも可能とするのが【勇者】の力であるなら、幾らでも他国へ行けると思いますが刺客も居ない他の国でゆつくりと、やりたい事を、自分が選べる役割を選んで良い

んじゃないでしょうかつ

279. 勇者しちやった学生さん(地球国家)

戦闘力は大事だけどー、それだけって言うのはやっぱりそういう人達じゃないとねー
修羅の勇者さん本人がその道が窮屈だっと思って思っているなら飛び出しちゃえばいいんだしね☆

新神々も、「自由な世界」を大々的に謡っているしね!

280. 勇者しちやった修羅の勇者さん(無限系統樹)

はい、ずっとその様な事で悩んでいたのですが……本当に、良い機会でした

皆さん、話に付き合って頂き、色々と教えて頂き、本当にありがとうございました

281. 勇者しちやった妖精剣士さん(ラクシア)

と言っても本当に話に付き合っただけで何が出来る訳でもないんだけどな(笑)

でも、頑張れよー!

282. 勇者しているフリーターさん(ラースIIフェリア↓マギアロア)

今後も何かあったら何時でもここで吐き出して良いんだぜー!

女子高生さんと学生は直接会えもするみたいだしそっちでも良いかもしれないけど

283. 勇者しちやった学者さん(時空図書館)

……本来言う必要がある事ではないかもしれませんが、この流れでの発言はあまりし

たくはないのですが、お答えすると言った以上、今、お教えしたいと思います

先の発言の通り、「勇者」のみに課せられた使命ですらなく、そもそも修羅の勇者さんが行う必要もない事です

その世界に生きる人々への使命、試練として……「本来であれば」為さねばならなかった事が、まだあります

284. 勇者しちやつた探偵さん（平行世界4群）

えっ

285. 勇者しちやつた会社員さん（平行世界8群）

えっ

結局まだあるのかい！

286. 勇者している修羅の勇者さん（無限系統樹）

……いえ、ありがとうございます。是非、教えてください

【勇者】のみに課せられた物でなくとも、【勇者】や、それに関する特別な力を持つていた者の方が良い

それは確実でしょう

287. 勇者しちやつた学者さん（時空図書館）

ええ、それはその通りです。ですが、前言の通りにそれは、少なくとも現時点では修

羅の勇者さんらが関わる必要がない事なのです

それは世界を維持したい新神々によって封じられ続けている、世界を滅ぼす程の力を
持った大敵

……所謂、「魔王」に相当する存在の事です

288・勇者しちやった女子高生さん(地球国家)

魔王、無限系統樹の世界にも居るんですか!?

そんな……

289・勇者しちやった賢者さん(空中庭園)

そりや確かに勇者案件だが……いや、勇者じゃなくても倒せるって言ったって勇者の

力はやっぱりかなり重要じゃないのか?

法術メイドみたいなのは早々居ないんだぞ

290・勇者しちやった法術メイドさん(サレンダリア)

えーそんな事ないですよー☆

でもでも……修羅の勇者さんは、戦った方が良いんでしょうか?

291・勇者しちやった探偵さん(平行世界4群)

いえ、新神々が封じているのなら大丈夫の筈です

……新神々が地球国家を通した目的を達成するまでは、ですが

292. 勇者しちやった狂科学者さん（平行世界5群）

ああ、一度世界の文明をほぼ滅ぼした神々だから、な

目的が達成されたら無限系統樹を直ぐに離れる、という可能性もあるのか

そしてそれが何時になるかは地球国家の人達次第、だと

293. 勇者している修羅の勇者さん（無限系統樹）

【魔王】、ですか。確かこの世界には複数居た筈です

が、【勇者】以外の実力者にも何度も倒されている記録もありますし、伝説ではかなりの大暴れをしたとか

294. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

すみません、紛らわしい事ですが今回の話の「魔王」に相当する相手はどうやら無限系統樹の世界では【邪神】、あるいは〈終焉〉、と。そう呼ばれている様です

その詳細は分かりませんが、特に問題なのはこの【邪神】は旧神々が残したこの世界の人々への試練である、という事です

295. 勇者しちやった冒険者さん（テイラ）

旧神々製なのが問題なのか？

旧神々と新神々は大体同等……なんだよな？

何が問題なんだ？

296. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

一つ目は、システムとしての問題です

この【邪神】は正しく試練として用意された存在であり、ただ生きているだけで数多の魔物を生み、成長し〈終焉〉へと至り——そして、倒されなければ最終的に世界を滅ぼす物として存在しているのです

障害であり、大きな糧であり……無限系統樹の世界に作られた、“足切り装置”でもあるのです

つまり、このハードルを越えられないのであれば神に至る芽はないだろう、と

そして、【邪神】は倒されれば長い時を経て復活し、その度に少しずつ強くなっていく……ハードルが上がっていく、という特性もあります

297. 勇者している魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）
うわ性格悪い！

根本的に【邪神】を根絶するのは出来ないのか!?

298. 勇者しちやった会社員さん（平行世界8群）

旧神々も旧神々でアレだな……

……一つ目？

299. 勇者しちやった学者さん（時空図書館）

【邪神】の存在は世界の根本に根付いている為、その根絶は非常に難しいでしょう

旧神々が用意した器を以て神に至る様な、正当な消去方法ならまだしも

そして、二つ目の問題もあるのですが……新神々が今まで行っていた干渉遮断ですが、似た様な目的で活動していた旧神々も、この干渉遮断を行っていた事です

そしてその干渉遮断は勿論外世界からの干渉遮断がメインですが、特に強く施されていたのは無限系統樹世界の根本部分

神を作る為の器に関する理や……それに根付く【邪神】についても、非情に強い外界干渉遮断が行われているという事です

300. 勇者しちやった法術メイドさん（サレンダリア）

ええーと……すみませんです。その干渉遮断はそんなに不味い事なんですか？

301. 勇者しちやった賢者さん（空中庭園）

ああ……そういう事か。相性の問題なのか違うのかはともかく、確かに問題だ

つまり、新神々が地球国家の人々を招く今この時に、倒して復活までの長い時を稼ぐんじゃないかってそいつを封じ続けている、という点

……外世界からやってきた新神々では外界干渉遮断によって封じる事しか、先送りにする事しかできてない、という訳だ

そして多分、地球国家の人々も、な

302. 勇者しているフリーターさん(ラースIIフェリア↓マジアロア)

あー、俺の天敵みたいな奴だー

まあそういう世界は基本的に勇者召喚しないんだけど

303. 勇者しちやった女子高生さん(地球国家)

そ、そういう事でしたか!

304. 勇者している修羅の勇者さん(無限系統樹)

〈終焉〉……は、分かりませんが、「邪神」は、確かに

数百年前に、多くの仲間達と共に打ち倒したという記録がありました。これは

……すみません、学者さん

もしかして、私と「邪神」の実力について御存知なのでしょうか?

305. 勇者しちやった学者さん(時空図書館)

それでも元勇者なので、多少は……とは言え、双方詳細が分かる訳ではありませんが
しかし、無限系統樹における「魔王」に相当する「邪神」は、世界全体で一丸となつて立ち向かうという前提の存在の様です

その実力は非常に高い域にあるでしょう……仮に新神々が立ち去るその時が来たとしても、逸らない事を薦めたいですね

306. 勇者しちやった狩人さん(オプツール)

はえー

旧神々の思惑と新神々の思惑が入り混じって、凄く複雑ですね！

307. 勇者しちやった会社員さん（平行世界8群）

本当にそうだよな。修羅の勇者さんも大変だ

そうは言っても応援くらいしか出来ないんだが……

308. 勇者しちやった賢者さん（空中庭園）

別に勇者組合は世界内の事は基本的にタツチしないでだけで、個人で助力するのは行き

過ぎなければ不問って事になってるけども……

うん、今は新神々が睨んでるからこれはどちらにしる無理だなあ

309. 勇者している修羅の勇者さん（無限系統樹）

確かに、私自身が居る世界ながら複雑で大変な事情ですが……知らずに居たより、今

ここで知れて僥倖でした

【邪神】に関する事は伝承で聞いた程度の事でしたし、知らずにいつかその時に至るよりは、と思います

310. 勇者している魔法少女さん（位相軸地球）

少しでも助けに慣れたのなら幸いです

それに、他の世界からの助力は出来なくとも、こうして組合掲示板を通しての相談な

ら何時でも出来ませすし

【邪神】との直接干渉は出来なくとも、地球国家の学生さんや女子高生さんなら色々事情も通じていて助力できると思いますよ!

311. 勇者しちやった女子高生さん(地球国家)

あ、はい!

戦闘では、あまり助けにならないかもしれないかもしれませんが……

元々興味を惹かれて始めたゲームです。可能な限りご助力したいと思いますっ

312. 勇者しちやった狩人さん(オプツール)

頑張ってください!!

313. 勇者しているフリーターさん(ラースIIフェアア↓マガアロア)

……あれ、おかしいな

こういう自分にも関係あるスレなら過剰に会話に参加してくると思っただが、発言数が少ないし直近の発言すらないとは

学生にしては珍しい

314. 勇者しちやった賢者さん(空中庭園)

そういえば確かに

いつもはそうじゃないスレでもめっちゃ合いの手入れてノリノリで参加してるのに

315. 勇者しちやった法術メイドさん（サレンダリア）
はっ！

まさか、学生さんの身に何かあったんじゃないでしょうか！
私の出番ですか！？

316. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）
えええっ！？

317. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

飯に何かあったとしてもお前の出番はそんなにならないからな！？

つとごめーん。ちよっと裏でログ探してた……んだけど見つからなくて苦戦してたよー

掲示板だけじゃなくて組合にまで飛び火して大騒ぎになった発端だったから多分どっか行っちゃってるんだと思っただけど見つからなくてねー

318. 勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）

あ、貴方と言う人は……何故この時に……

319. 勇者しちやった村長さん（タ・バタ）

呑気か！

320. 勇者している修羅の勇者さん（無限系統樹）

そういえばこのスレの発端は学生さんでしたか

蔑ろにして申し訳ありませんでした

321. 勇者しちやった学生さん(地球国家)

あーうん。このスレにも……というより無限系統樹にもかなり関係がある事だと思つて、相談したいとも思つてたからちよつと焦つて探しててね

えーと当時見ていた人いないかな？

キーワードは『げえむ』『えーあい』『えぬぴーしー』辺りで！

つて、確か賢者さんとかあのスレいなかつたつけー？

322. 勇者しちやった賢者さん(空中庭園)

えっ

割としよつちゆうログ飛ぶからちよつと分からない

いつかの親睦会の後も大規模な二次会勇者戦闘で一部吹っ飛んだし、『断罪の鉄槌』の時もかな

り吹っ飛んでたし

323. 勇者しちやった探偵さん(平行世界4群)

それらは全て地球系列世界のゲームの用語ですが、ふむ

確かに関係はありそうですが……

324. 勇者しちやった狂科学者(平行世界5群)

いや……なるほど、確かにな

あの時のスレならROMしてたから覚えているぞ

確かに、地球国家のゲームと無限系統樹の関係、新神々の行動からして、至急相談しておきたい案件だろう

さてはこのスレも本来その為のスレだったな？

325・勇者しちやった学生さん（地球国家）

おつ狂科学者さんやるうー☆

実はそうなんだよねー……

326・勇者している修羅の勇者さん（無限系統樹）

すみません、聞きそびれていたのですがROMとは何でしょう？

327・勇者しちやった冒険者さん（テイラ）

多分、いつもの地球系特有の隠語だと思うぜ

328・勇者しちやった妖精剣士さん（ラクシア）

件のスレと大騒ぎについてはちらつとなら聞いた事がある気がする

何かの事態で勇者の存在意義に泥を塗られたとか誇りに傷を付けられたとかそういうのが発端だった、ような……

329・勇者しちやった狂科学者さん（平行世界5群）

その発端が学生が言っているスレという事だ

簡単に纏めると、勇者召喚の術式に綻びがある状態で召喚したせいで本来勇者として呼ばれるべきではない者が召喚され

その者の乱暴狼藉悪行三昧により、送喚された後に綻びが修正された後に召喚された真の勇者までもがその者と同類であるかのようなレッテルを貼られる羽目になった

……そして、その件に関する組合の対応と誇り高き古参勇者の(学生の扇動による)大暴れと続くが、そこは今回の件には関係ないから省略しよう

330. 勇者している賢者さん(空中庭園)

そういえばあつたそんな流れ

めっちゃ学生が密告してた

331. 勇者している魔法少女さん(位相軸地球)

学生さん……

332. 勇者しちやつた学生さん(地球国家)

あの状況だったらしちやうよね☆

つてそれはともかくー!

……あの世界の人達が言っていたらしい言葉からして、その送喚されたのは召喚された世界を『げえむ』であるとして、その世界に生きる人々を『えーあい』で動く『えぬ

ぴーしー』だと思っていたみたいなんだよね

本当はあの世界は現実にある異世界だったのに、ね

333. 勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）

そういう、事ですか……

……そういう、事ですか！

334. 勇者している魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）

なる、ほど……？

335. 勇者しちやった狩人さん（オプツール）

なるほど、つまり

どういう事でしょうか！

336. 勇者しちやった狂科学者さん（平行世界5群）

知ったかぶりは良くない。学者肌からの忠告DA！

だが、多分これは地球系列世界でもゲームやオンラインゲームのある程度の知識がな

いと理解できない事だと思うぞ

337. 勇者しちやった会社員さん（平行世界8群）

いや、一応。俺は何を言いたいかは一応は理解できたが……

……いや、どうなんだ。やはり分からんな。どれくらいヤバくなると思う？

338. 勇者している修羅の勇者さん(無限系統樹)

……ヤバいのですか?

339. 勇者しちやった女子高生さん(地球国家)

えっ

……ど、どれくらい不味いんでしょうか?

340. 勇者しちやった村長さん(タ・バタ)

遊戯^{ゲーム}……げえむだったか

地球系列世界特有のヤバさ、という事かな?

341. 勇者しちやった学生さん(地球国家)

あ、そっか。世界毎に遊戯^{遊戯}に関する認識も違うんだよね

だったらとりあえず……確か、コマとか使う対戦型の盤上遊戯の類なら大抵の世界にあるって聞いた事があるけど

皆自分の世界のそれを頭の中に浮かべて欲しいな

342. 勇者しちやった冒険者さん(テイラ)

対戦型の盤上遊戯……戦盤の事か?

343. 勇者しちやった妖精剣士さん(ラクシア)

確かウチの商会でも以前入荷してた気がするな

344. 勇者しているフリーターさん（ラースIIフェリア↓マジアロア）

地球系列世界だと将棋とかーチェストとかーオセロとかー

345. 勇者しちやった法術メイドさん（サレンダリア）

私の世界だと将神がそれだと思えますう！

346. 勇者しちやった賢者さん（空中庭園）

マナライン楽しいけど一人遊びは疲れるんだよね……

347. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

うんうん、色々あるよねー☆

348. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

で

その盤上遊戯を遊ぶ毎に

あるいは自分一人で練習する毎に

娯楽で、軽い気持ちで遊ぶその盤面が本当は“世界”で、事ある毎に倒されたり消費されたりするコマが本当は“人々”だったりしたら……？

……MMORPGって言うのは、そんなかるーい心持ちで遊ぶ人がいっぱい居るんだよ☆

349. 勇者している魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）

は？

……は!?

350. 勇者しちやった冒険者さん(テイラ)

それは……マジでか？

いや、でもそんな数が居る訳じゃないだろう

件のスレでの勇者だって、超レアケースだったんだろ？

351. 勇者しちやった学生さん(地球国家)

勿論。いくら何でもリアリティあるこの世界でそんな事が出来るのはレアケースもレアケース☆だろうねー

でも、このゲームの運営たる新神々は僕達地球国家の人々には「自由」な行動を欲していて、行動への制約は驚く程少ないんだよ

352. 勇者している修羅の勇者さん(無限系統樹)

そういうえば……犯罪を行った^{地球国家の人間}へ「マスター」が死ねば、〈監獄〉に送られる、とは聞いた事がありますか……

353. 勇者しちやった女子高生さん(地球国家)

逆に言えば……システムの犯罪的に犯罪を行う事への抑止はそれ以外に何も無い……んですか

嘘でしょう……本当にないです……

354. 勇者しちやつた狂科学者さん（平行世界5群）

確か、件の者は勇者としての召喚補正があつて、街一つ皆殺し、だったな
勿論、召喚補正による強力な戦闘力や勇者としての特権があつてこそ

その上で性格としてもそこまでやると言うのはレアケースだとは思う、が……

355. 勇者しちやつた探偵さん（平行世界4群）

リアリティがあるMMOとは言え、どこかリアリティがあるMMOだからこそ、行
動する人も居るでしょう、ね……

件の方だつて、MMOでマナーに悖る行為を行う者だつて、そこに強烈な悪意がある
というのは非常に稀です

ゲームと言う、異世界であると言う非現実は容易に常人のタガを取り払つて極端な行
動をする人も出て来るのです

それこそ現実において何らペナルティがないのであれば、ゲーム内でのペナルティす
ら気にせず刹那的な行いに走る人だつて出て来るでしょう

356. 勇者しちやつた学生さん（地球国家）

勇者程じゃないけど、自分だけの特別な力（エンブリオ）もあればそれを持つ特異な特権もある

しかも、新神々の意向か人数を増やしたいからか色々人を呼び込む施策も行つてるん

だよー

正直、現時点ですらすつごい大盛況で総プレイ人数数十万人じゃとても利かないから
いの人数になりそうだよ

どれほどの行為をする人が、どれくらいの割合で居るのかとかはちよつと僕には分
らないけども……

少なくとも、他のオンラインゲームもある程度知ってるけど、ノーマナー行為を日常
的に行う様な人はまあまあ居る、と思うよ

357・勇者しちやつた会社員さん(平行世界8群)

……下手をしなくとも、容易く例のスレの再来になり得るな

358・勇者している修羅の勇者さん(無限系統樹)

……へエンブリオは神の卵、ならば且つての伝説を参考にするのであれば

最悪の場合、街一つどころか国の一つや二つ滅ぼせるようなへエンブリオが生まれ
るかもしれませんね

過去の伝説で、それほどの力を持つへマスターが言及されているのです

359・勇者しちやつた法術メイドさん(サレンドリア)

それってそれって

すつつつごく

ヤバいんじゃないですか!?

360・勇者しちやった村長さん(タ・バタ)

ヤバイよなあ……

361・勇者しちやった冒険者さん(テイラ)

マジでヤバイ

どうしたらいいんだ……?!

362・勇者している魔法少女さん(位相軸地球)

ほ、本当にヤバイですよ……!!

私はMMORPGは詳しくないんですけど、何か解決策はないんですか!?

363・勇者しちやった狂科学者さん(平行世界5群)

難しいだろうな

地球国家と無限系統樹がMMORPGで繋がったのが偶発的なイレギュラーである
と言うのならばともかく

他でもない神々が主導しているんだ。或いは、そういう諍いも神の卵への刺激だとし
て想定内である可能性の方が高いだろう

364・勇者しちやった探偵さん(平行世界4群)

ええ、そうですね……神が関わっている以上、地球国家の方からゲームの方に仕

掛けをする事も危険があるでしょうし

ゲームのプレイヤー達に一人一人呼び掛けて対応、とするのもいくら何でも不可能でしょう

元々、MMOと言うのはそういう物ですしね

いちプレイヤーができる事はたかが知れている物です……

365. 勇者しているフリーターさん(ラスⅡフェリア↓マジアロア)

そうじゃなくても無限系統樹世界は大変なのに、泣きつ面に蜂つてレベルじゃないな
これは

クソツ地球系列世界出身なのにそこまでゲーム知識がないから案が浮かばない

366. 勇者しちやった賢者さん(空中庭園)

レベル10相手にはちよつと分が悪過ぎるからなあ

367. 勇者しちやった女子高生さん(地球国家)

すみません。私もMORPGはこれが初めてで……!

やつぱり、呼び掛けをするくらいしか出来ないんでしょうか……

368. 勇者しちやった学生さん(地球国家)

まー狂科学者さんの言った通り、それをこのスレで相談出来たらなー、って最初は思ってたんだけど

修羅の勇者さんに協力して貰ったら多少は改善出来るんじゃないかなって

369. 勇者している魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）

えっ

370. 勇者しちやつた法術メイドさん（サレンドリア）

えっ

371. 勇者している修羅の勇者さん（無限系統樹）

聞きましょう

是非教えてください

372. 勇者しちやつた賢者さん（空中庭園）

いや

（学生の事だからとんでもない無茶ぶりなのは……？）

373. 勇者しちやつた村長さん（タ・バタ）

学生だからな……

374. 勇者しちやつた会社員さん（平行世界8群）

いやいやいくら何でも

……学生だからなあ

375. 勇者しているフリーターさん（ラースⅡフェリア↓マギアロア）

学生よ

日頃の行いは大切なんだぞ……?!

376・勇者しちやった学生さん（地球国家）

ぶーぶー！ 僕はまともに勇者板を盛り上げようとしてるだけなのにー！

まあそれはともかくだね

修羅の勇者さんは世界内でも有数の実力者で、様々な能力を持つてる勇者さんな訳で。そして、犯罪者の「マスター」はやられたら「監獄」に行つて出てこれなくなる仕様な訳で

……修羅の勇者さんが積極的に犯罪者の「マスター」を斬る☆キル☆KILLしてどこ「監獄」に送つちやえば良いんだよ！

真偽を判別できる修羅の勇者さんなら冤罪もないし、「勇者」としての地位や発言力もあるから最適だと思うんだよ☆

377・勇者している魔法少女さん（位相軸地球）

学生さんに期待した私が馬鹿でした……

378・勇者しちやった魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）

俺が言うのも何だが

脳筋の極み過ぎる上に他力本願過ぎる……

379. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）
学生さん……

380. 勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）
いえ……

確かに、現状打てる最善策かも、しれませんが

381. 勇者しちやった冒険者さん（テイラ）
えっ

382. 勇者しちやった狩人さん（オプツール）

えっ

修羅の勇者さん、めっちゃ大変になりません!?

383. 勇者しちやった狂科学者さん（平行世界5群）

それはもう大変も大変、超大変だろうな

まだ未熟とは言え、各々が神の卵（エンブリオ）による特殊能力を持ったプレイヤーと積極的に戦っていくんだ

地位があるとは言え名声に傷が付かないとも言いきれないし、修羅の勇者の性根としても消耗するだろう

噂を聞きつけた戦闘狂まで挑みに来るかもしれない

384. 勇者しちやった狂科学者（平行世界5群）

だが、それはどの道なのだ

どの道、無限系統樹で有数実力者にして地位ある【勇者】である修羅の勇者を狙う者は現れるだろう

MMOなのだから、それこそ確実に、な

385. 勇者しちやった探偵さん（平行世界4群）

それこそ、修羅の勇者さんに勝機がある程に自らも神の卵（エンブリオ）も成長させてから暴走行為をされるよりは、という物ですけどね

実力ある修羅の勇者さんがその様な行為を繰り返す事である程度の示威行為にもなる筈です

問題は、それすら承知（コソ）の上で戦（ツ）いに来る者（狙い）との戦いですが……

386. 勇者しちやった学生さん（地球国家）

まあそこは僕が頑張ってこっちの世界の揭示板に張り付いて変な流れにならない様に監視と誘導もしてみるよー

学生さんの揭示板力は凄いからね!

ついでに要注意人物とかもこっちの視点で探して勇ちゃで修羅の勇者さんに共有しとくよ☆

387. 勇者しちやった法術メイドさん（サレンダリア）
学生さん、私は信じてましたですよー♪

388. 勇者しちやった妖精剣士さん（ラクシア）

学生が真面目に頑張ろうとしている、だと……

明日は隕^{メテオ}石^{ストライク}でも降って来るんだろうか

389. 勇者しちやった女子高生さん（地球国家）

あつ

……うう、こういう時に手伝えたらと思ったのですが

何もできない自分が情けなくなりませ……

390. 勇者しちやった法術メイドさん（サレンダリア）

そう思ったのなら！

行動あるのみ、です。何もできないなんて事はないですよっ☆

女子高生さんだからこそ出来る事も、あると思いますっ

391. 勇者している魔剣使いさん（ファー・ジ・アース）

それでも、修羅の勇者は戦わなきゃならないんだよな……

392. 勇者している修羅の勇者さん（無限系統樹）

いえ……事此処まで来たら、これも好機かと思えます

この機に、準備を整えて……祖国を出て旅に出ようと思います

393. 勇者しちやった学生さん(地球国家)

おっ

確かに、島国よりも大陸の方に来て貰った方が行動範囲を、示威範囲を広く出来ると思っけどー

もしかして(笑)

394. 勇者している修羅の勇者さん(無限系統樹)

はい、元々見聞を広げる為にそう遠くない内に国を出て世界を巡る旅をするつもりではあったのです

それが予定よりも少し早まる、それだけの事です

……祖国は心配せずとも狼藉者がそう簡単に暴れられる環境でもありませんしね

それに、私としても祖国の他の武芸者の方々を相手にするよりは(マスター)を相手にした方が幾らか気は楽なので

395. 勇者しているフリーターさん(ラースIIフェリア↓マガアロア)

何なら修羅の国からスタートする地球国家の人が大変かもしれない(笑)

まあ、地球国家の人の安全は新神々が保証してるから!

396. 勇者しちやった狂科学者さん(平行世界5群)

〈監獄〉という最低限のセーフティがあるのは幸いだろうな

抑止力としても、再犯の防止としてもな

新神々の目的と実際の異世界で行われている事を考えれば、完全にセーフティがなかった可能性だつてあつただろうし

だから、後は修羅の勇者や学生達の働き次第になると思うが……

397. 勇者しちやつた女子高生さん（地球国家）

微力ながら、サポートしていきます

頑張りましょうっ

398. 勇者しちやつた学生さん（地球国家）

がんばろうね☆

ところで女子高生さんに問題なんだけどー

今僕達が居る国は何処でしょう（笑）

399. 勇者しちやつた女子高生さん（地球国家）

えっ

初期国家の一つの西の妖精郷です……………け、ど……………

400. 勇者しちやつた村長さん（タ・バタ）

んー？

401. 勇者している魔法少女さん(位相軸地球)

それが一体……?!

402. 勇者している修羅の勇者さん(無限系統樹)

実は、僕が今いる祖国は東の島国でして

……見事に一番遠い国同士でしたね(笑)

403. 勇者しちやった会社員さん(平行世界8群)

あちゃー

404. 勇者しているフリーターさん(ラースIIフェリア↓マギアロア)

うわちゃあ……

405. 勇者しちやった学生さん(地球国家)

これからも勇チャではよろしくね☆

406. 勇者しちやった女子高生さん(地球国家)

こ、こんな筈ではーっ!

407. 勇者しちやった法術メイドさん(サレンダリア)

女子高生さん……

ドンマイです☆

⋮
⋮
⋮
⋮
E
n
d